
東方西風遊戲

ぜろたいむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方西風遊戯

【Zコード】

N1133U

【作者名】

ざろたいむ

【あらすじ】

守矢神社を主体とした東方」一次創作です。オリ主アリ。というかオリ主が守矢組に含まれます。早苗さんと同年代に生まれて、早苗さんは劣るまでも諏訪子や神奈子の声が聞こえる程度の靈感を持つ少年がオリ主です。チート？ 最強？ ハハハ御冗談を。そんなノリですがどうぞ宜しくお願ひします。

それと、独自設定・捏造・妄想成分も含まれる事、ご了承願います。

第一話・プロローグ

それを『昔』と表現するかは人によつて感覚が分かれる話だらう。その事件の当事者である双方にとつては人生の半分以上前の話、即ち『昔』になるのだろうが、その当事者の片割れ 東風谷早苗という名の、とある神社の見習い風祝が仕える一柱の神々からすればつい先日の話と表現出来る。

つまりは十年経つか経たぬかといった程度の過去の話だ。

それは少女 当時は幼女 東風谷早苗にとつて人生初の聖戦であり、宗教戦争だった。

「かみさまはいるもん！ かなこさまも、すわこさまもわたしたちをみまもつてくれるもん！」

始まりは些細な事だった。

小学校に上がつたばかりの早苗が、その教室で初めて出来た学友に自分の家の話をしたのだ。

信仰の廃れた現代。靈感の特別強い彼女以外の人には見えないが、八坂神奈子と洩矢諏訪子の一柱は彼女にとつては両親と同等に或いはそれ以上に敬愛すべき対象だった。

嬉々として自分の家である神社とその信仰について語つた早苗に、しかし学友である少年は致命的な一言を投げ付けてしまつた。

『変なの。神様なんて居るわけないじゃん』、と。

そして大事なものを、自身の信仰とその対象である神々を馬鹿にされた早苗は怒つた。それはもう怒つた。

顔を真っ赤にして涙と鼻水を流しながら、早苗は激情の赴くままに少年の顔面に拳を叩き込んだ。

明確な宣戦布告。彼女にとつての聖戦のスタートだった。

「」の年齢では男女の別などあつてないような物である。すぐさま少年も怒鳴りながら反撃し、しかし早苗もやり返す。

エスカレートする喧嘩。他の学友たちが騒ぎ始め、喧嘩の空気にアテられたのか泣き出す子供も出る始末。

田端のきく何人かが先生を呼びに走り、何人かは止めようとするものの当事者双方の特に早苗の激怒ぶりに手が出せない。

そして結局、学友の連絡により駆け付けた先生が両者を止めるまで、その彼女にとつての聖戦は続いたのだった。

ちなみに彼女はそれを今でも自分の勝利だと語って憚らず、少年は今となつてはそれについて嫌そうに顔を歪めるだけで言及を避けている。

そして東風谷早苗は本来明るい少女である。

その日そんな彼女が学校から家に帰り、風祝としての修行の間も俯いたままであった。

更にはおやつの時間になつても『要らない』と言つて、大好きな箸のクッキーに見向きもしなかつた。

彼女の様子に慌てたのは両親もあるし、彼女を娘同然として見ていた二柱の神もだ。

「どうしたんだい、早苗。学校で何か嫌な事があつたのかい？ 悪い子にいじめられた？」

「ほら、クッキーもあるわ。お茶もある。少し休憩しながら話をしようじゃないか」

そして神々が信者に供え物を差し出すというそんな異常事態を経て、幼い風祝は漸く事情を語り出す。

つまりは学友である少年に言われた言葉と、その後の喧嘩だ。それを聞いた一柱の神はどこか寂しそうに苦笑し、早苗を強く抱きしめる。

「あのね、早苗。早苗が私達の為に怒ってくれたのは嬉しいけど、今の時代じゃそれは仕方ない事なんだよ。人間達は私の事も神奈子の事も忘れてる。その子供の言った事は、悲しいけど今の時代じゃある意味当たり前の認識なんだ」

「私達はそれが原因で早苗が喧嘩をして怪我をしたり、友達を嫌いになってしまの方が悲しいぞ。次からはもっと友達と仲良くしような」

優しくそう言われて、彼女は諭訪子と神奈子の胸の中で泣き出してしまつ。

自分を想ってくれる神々の言葉が嬉しくて、でも彼女達の言い分が悲しくて、彼女達の今の立場をどうにもできない自分が悔しくて。結局その日、早苗は一柱の胸の中で泣き疲れて眠ってしまった。

そんな彼女にとつて予想外の事が起こつたのは翌日。学校が休みである日曜日の朝の事だ。

長い神社を上つた先にあつて交通の便は甚だ悪い守矢神社に、息を切らせながら一人の少年がやつて來たのだ。

箒を手に神社を掃除　　と、本人は思っていたが今にして思えば散らかしていただけだった気がする　をしていた早苗は、参拝客かと思って挨拶をしようとしたところで固まつた。

それは彼女が人生初の聖戦を行い、散々殴り合つた学友の少年だつたのだ。

何を言つべきか分からず固まる早苗に対して、先に動いたのは少

年だった。

彼は早苗の姿を見付けると駆け寄り、頭を下げたのだ。

「「めん！」

「……え？ あの……」

「あんなに怒るなんて、おもってなかつた。さなえちゃんの大事なものをおかにして」「めん」

舌つ足らずで言葉足らずだが、それ故に率直で精一杯の謝罪。自分の前で頭を下げる少年は、その為にわざわざ日曜の朝から神社の階段を上つて来たのだろうか。

そう考えて、早苗は改めて目の前の少年に向かい合ひ。彼の態度に昨日の怒りは既に下火になつてしまつた。すぐさま許しても良いのだが、それもどことなく癪だ。下火と言つだけで、流石に未だ鎮火には至つていない。

そして数秒考えた結果、早苗は手に持つたままだった箒を少年に差し出した。

「これ

「……え？」

「神社のおやうじ、てつだつて。わたしは許すけど、おやうじする事でかみさまにも許してもらわないと駄目なの！」

両手を腰に当てて胸を逸らす。

彼女なりに精一杯の威厳と怒りを表現したポーズ。

そうして言われた言葉に、少年は生真面目な表情で頷いた。

そしてそれから小一時間ほど。

予備の箒を持って来た早苗と、最初の箒を早苗から受け取った少年は一人で掃除 　　といふ名の散らかす作業を終えていた。

別に全然綺麗になつていないので、途中で様子を見に来た早苗の母が用意してくれた冷たい麦茶を手にして縁側に腰掛ける二人の顔には、無駄な充実感が見て取れた。

「……かみさま、許してくれるかなあ」

「……どうだろ?」

そして縁側で冷たい麦茶を飲みながら、少年がぼそりと呟く。横でその言葉を聞いた早苗は、ちらりと目線を誰も居ない『よう』に見える『本殿の方』に向ける。

縁側を見る事が出来る本殿の入り口には、彼女以外の誰にも見えない二柱の神が優しい笑顔で彼女と少年を見守っていた。

途中から気付いて様子を見に来てくれていたのだが、彼女以外には父にも母にも見えない神々だ。

彼女達に話しかけるような事をしては周囲からは変な子にしか見えない為、他の誰も居ない場所以外では彼女達に話しかけられない早苗である。

本来であればどこででも話し掛け、笑いかけたいのだが、それが出来ないほどに　周囲の殆どから認識されないほどに力を失っているのが彼女達二柱であった。

だから早苗は、少年の言葉に対しても直接神奈子と諏訪子に問いかけるような事はしなかった。

次の言動もその後の展開を予想しての事ではなかつたし、故にその後の展開は彼女にも少年にも、それこそ神々ですら思いもよらぬ展開だつた。

「良い。許してつかわす」

「もうウチの早苗を泣かすなよー」

神奈子が威厳を込めて、諏訪子が茶化すように少年に向けて言葉を投げる。

それは少年に聞かせる為の物ではなく、早苗に対しても『少年を許す』という意思表示をする為の言葉だった。

「あれ？」

そう、故にそれは慮外の事態。

早苗に投げた筈の言葉に、少年が確かに反応したのだ。
きょろきょろと周囲を見回す。その動作に対して、驚きに目を剥いたのは早苗と、それ以上に一柱の神々だった。

「許すつて、早苗ちゃんを泣かすなって聞こえた」「……え？」

一柱の神々は言葉も無く。

早苗もどこか呆然と、その言葉を聞いて少年の顔を凝視する。
きょとんとした年相応の顔は、きょろきょろと今の言葉の主を探して目線を彷徨わせていた。

これが始まりだつたと、後に八坂神奈子は笑顔で語る。

あの頃は可愛かつたと、後に洩矢諏訪子はにやけて語る。
あが一つの転機だつたと、後に東風谷早苗は苦笑で語る。

る。

あれで俺は人生踏み外したと、後に少年 西富丈一

は嫌そうな顔で語る。

東方西風遊戯、ともあれこれにて開幕に候。

第一話・プロローグ（後書き）

様々な東方二次創作小説を見ている内に思わず腋上がつてもとい湧き上がって来た妄想を形にしただけの小説です。

ある意味テンプレ。オリ主介入物です。

オリ主は原作知識無し。チート能力も無し。

戦力面ではどう頑張っても早苗さんにも敵いません。ゆかりん？
ゆうかりん？ ハハハ勝負の士俵に上がる以前の問題ですが何か？
才能では神奈子様や諭訪子様曰く、平安の世にでも生まれていれば良い陰陽師になれたそうですが……曰く『千年に一人レベル』の安倍晴明とか、現代において神が見えるレベルの才能を持つ早苗とか、そもそも才能の面で言えば規格外過ぎる靈夢とかには敵いません。

そんな感じで宜しければ、お付き合い願えれば幸いです。

第一話：幻想入り（前書き）

神奈子様の口調が差別化の意味もあってやや男っぽいかもしません。ご了承願います。

あと、幻想入りに関しては『紫が神奈子・諭訪子に勧めた』という解釈で行っております。

第一話：幻想入り

「実際さあ。本体見えなくて声だけ聞こえるってのも妙な話だよな。いや、だからこそ信じ易かつたつてのもあるんだけど」

「何度もですかその話。良いからさっさとしてください、西宮」

「はいはい」

「『はい』は一回！」

「はいはいはい」

「増やすな！」

さて、彼女と彼の最初の聖戦から十年近くが経過した。

信仰は薄れ、最早守矢の神社の者にも早苗のような例外を除けば見えない程に力が衰えていた神奈子と諏訪子。その一柱は自分達の声を聞ける程の靈感を持つ相手が早苗以外に、それもこんな近くに居た事に喜んだ。

彼女達自身がどういうと詠つより、彼女達の姿が見えるほどの飛び抜けた才能を持ち……………しかしそれゆえ、他の子供と比べて浮いていた早苗にとって良い友人になると思つたのだろう。

早苗もまた、自分にしか見えないと思つていた二柱の声を聞ける相手が出来たのが嬉しかったのか。積極的に西宮が守矢神社に来るよう勧めた結果、西宮は守矢神社にしようと出入りする少年時代を送る事となつた。

彼自身としても、神々という神秘に興味があつたのもあるだろう。加えて些か複雑な家庭の事情も加わり、彼は小学校・中学校と守矢神社に入りする日々を送つた。

早苗の両親もまた、変わつた所がある娘と仲の良い友達として、彼を積極的に歓迎した。

諏訪子と神奈子も早苗の良き友人であり、自分達の声を聞ける西

宮に対しては好意的であった。

しかし十年近くの時が経過して今、聖戦当時からずつと変わらず早苗と西富の仲はすこぶる悪かった。

「つたぐ、このぐらい自分でやれよ……わざわざ俺を呼ぶな、『とうふや』」

「私の苗字は『東風谷』です！　『とうふや』じゃなにって書いてるでしょ！」

ある日の夕方、守矢神社の敷地にて。

木の棒の先に白い紙をくくり付けた祭具である大幣おおぬさを手に立腹なのは、学校から帰つて来たばかりで学生服姿の東風谷早苗である。ふんすかという擬音が付きそうな様子で大幣を振り回して指示を出す先には、同じく学生服姿の西富丈一が注連縄を神木にくくりつけて行く。

この十年近くで二人の容姿も随分と変わった。

早苗は緑のかかつた髪を長く伸ばし、自らが仕える一柱を象徴する蛙と蛇の髪飾りを付けている。

姿形は随分と女性らしくなつてきたが、一柱に言わせると『まだまだお転婆』らしい。

ただ、最近は学内外の男子から告白されるなどの事も増えて來たようだ。

一方の西富は、随分と背が伸びたと言つて良いだろう。外見は同じ年にしては大人びて見える。

平たく言えば長身で癖の強い黒髪の糸目いとめの少年だ。一見して温厚おんこうだが、口は悪い。

当人曰く、早苗との言い争いで培われたスキルらしい。

そもそもこの二人の関係たるや、早苗は例の一件以来西富を『自分と一緒に一柱に仕える後輩』として先輩風を吹かしたがるが、西富がそれに対して反発するの繰り返しだ。

西富はあの一件以後は一柱と交流を得るようになり、それを経て一柱を信仰するようになったが、早苗に対しては初対面が初対面だったせいか『守矢の巫女』ではなく『ワガママな学友』として扱つている気が強い。

巫女として指示をしたがる早苗と、学友としての感覚で彼女と接している西富だ。互いの感覚が噛み合わずに衝突するのはショッちゅうであつたし、それこそ小学校の低学年までは殴り合いも多発した。

ちなみに基本的には早苗の全勝であった。後に非想天則なるものが出来た折には神力でその身を強化していたとはいえ、妖怪や鬼と肉弾戦を演ずる風祝である。

単純な身体能力では劣るもの、格闘戦のセンスも並ではなかつた。

その互いに反発しあう関係が破綻しなかつたのは、守矢の一柱が喧嘩の度に仲裁するもあるだろうが、やはり彼ら自身の性質が大きいだろう。

神の存在を信じていなかつたが、自分が軽い気持ちで相手が大事にしているものを蔑ろにしてしまつたと気付いたが故、謝りに行くかねばならないと思い神社に行く。その事例からも分かるように、西富は口こそ悪いが根の部分では相手を気遣うタイプだ。

後述する家庭の事情も関わってくるのだが、些か斜に構えた面が強いが思慮もこの年齢にしては深く、大人びている。

対する早苗は一見すると眞面目で礼儀正しいが、思い込みが激しく暴走すればどこまでも走つて行つてしまふ暴走直情型だ。

しかし暴走癖こそあるが、基本は優しく思いやりがあり眞面目な性質の持ち主だ。故に自分に非があつて西宮を怒らせた時は一柱に諭されて頭さえ冷えれば、自分の非を認める事が出来る。そして非さえ認めれば相手に謝る事が出来る人間だ。

要は互いに何度喧嘩をしても相手を許せる程度には甘い人種だったのである。

互いにぶつかり、非がある方がそれに気付いて謝り、謝られた側は許す。

そしてまた暫くしたら、詰まらない事で喧嘩する。

神奈子や諏訪子が呆れるほどに、早苗と西宮はそれを繰り返して来ていた。

「……ツと、これで良し。確認頼む、東風谷」

「ええ。うん、問題無さそうですね」

そして十年近く繰り返して現在。

神木に西宮が結んだ注連縄を早苗が確認し、OKを出した。

最近になつて一子相伝の秘儀を受け継ぎ、正式に守矢の風祝として認められた早苗。しかしあはり現代女子高生、力仕事は苦手分野であった。

太く長い注連縄を持ち運び結び付けるような、こいつた力仕事主体の神事は西宮がヘルプで呼ばれる事が多い。

神事を部外者に手伝つて貰つて良いのかといつ葛藤も早苗の内には無いでもなかつたが、その神である一柱直々に許可が出るにあたつて、それ以降早苗は力仕事には積極的に西宮を呼び出すようになつていた。

また、その関係が続く中で変わった事と言えば、彼らが互いに苗字で呼び合つようになつた事か。

本当に小さい頃は『早苗ちゃん』『丈一くん』と呼び合つていたのだが、いつの間にやら互いの呼び方は苗字となつていた。幼児期から少年期に移る間に発生した照れが原因だというのは、守矢の一柱の共通見解である。

「しつかし、どうしたんだこの注連縄。なんぞ新しい神事でもやるのか？」

「ええと……神奈子様の『指示です』」

神木に巻いた注連縄を見ながら、巻いた当人である西富が首を傾げる。

神社を囲むように敷地に巻かれた注連縄は、これまで無かつた新しい物だ。

何の意味があるのかと問うた西富に、早苗は僅かに口を濁す。

西富はそれに疑問を覚えたものの、神奈子の名前が出たので追求を取り止める。

早苗が一柱に関して嘘を吐かない事は知っていたし、その程度には彼は声しか聞こえない一柱の神々を信頼していた。

「ふうん。なら良いけど……お前また信仰得ようとして暴走して変な事するなよ？」

「失礼な！ そんな事しません！」

「やりかねないから言つてるんだよ。小学校二年生の給食時間、放送室をジャックして参拝を要求する放送を流したお前を俺は生涯忘れん。お前はあの時英雄だった。負の方向で」

「…………」

そして余つた注連縄を肩に担ぎ、西富は先に立つて守矢神社の本殿へ歩いて行く。

早苗に対して軽く釘を刺した上で、ついでにからかうことも忘れない。過去の黒歴史を掘り返された早苗、反撃の言葉も思い浮かばず、彼の後ろをついて行く。

故に西富は分からなかつた。

からかわれて怒つているかと思われた早苗が、怒りの表情でもやり込められて拗ねた表情でもなく、どこか痛みを堪えるよつた寂しげな表情を浮かべていた事を。

しかしその表情も一瞬。

早苗は軽く頭を振つて、前を歩く西富に声をかけ直す。

「まあその話題はそこで終わりとしまして、戻つたらお茶でも淹れますから休んで行つて下さい」

「ありがたく。ああ、そういうや今日は親父さんに晩酌誘われてるんだよな。お前からも親父さんに言つてやつてくれよ。俺未成年だって」

「お父さんは息子が欲しかつたつて言つてましたからね」

「その場合はお前が俺の姉か妹か。未来が見事なまでに絶望色だな。……ま、実家よかマシだらうけどよ」

どじが本気の香りがする早苗の言葉に西富が苦笑する。

先述した通り、彼の家は些か複雑な家族事情がある。複雑といつかある意味陳腐とも言えるが、母が死に、父が再婚し、再婚相手と父とその間に生まれた子供にとつて彼は邪魔者であるといつ、それだけだ。

良ぐドラマなどで見る展開だと、十にもならぬ年で彼は早苗と一柱の前で苦笑しながら言い放つた。その姿には家族に対する情は見

えず、どこまでも自分が置かれた状況を客観視した上での諦観があつた。

邪魔とはいえど、積極的に排除されるわけではない。

必要な物があれば買って貰えるし、殊更に暴力を振るわれるわけではない。

ただ家族との間に明確な壁があり、まるで同じ家に住んでいるだけの他人のような冷たい関係である。それだけだ。

「ぶっちゃけこっちの方が実家って感じがするわ。親父さんもお袋さんも良くしてくれるしなー」

「……言い切れますね」

「事実だしな」

しかし、からからと笑う彼の表情に暗い影は見られない。
既にそれならそれで仕方ないと、良くも悪くも前向きに割り切つ
ている表情だった。

彼がそんな家庭環境でも、多少斜に構える程度の人格の歪
みで済んでいたのは守矢神社の人々と神々のお陰だろう。

幾度となくぶつかり合いながらも、最も腹を割つて話せる友人で
ある早苗。

深い慈愛を持つて早苗と西宮を見守つてくれた神奈子と諭訪子。
そして両親との関係が冷め切つている彼にとって、まるでもう一
組の両親であるかのように接してくれた早苗の父母。

彼らの存在が無ければ、西宮丈一という人間はもつと暗く鬱屈し、
歪んだ人格を持っていたに違いない。

「西宮」

「ん？」

そして、そんな西富に對して早苗は不意に　しかし、いつになく真面目な声で問いかける。

「私のお父さんとお母さんの事は、好きですか？」

「はあ？　何をいきなり」

「答えて」

唐突過ぎる質問に彼は困惑の声を返すが、その声を断ち切る早苗は真剣そのものだ。

故に西富は困惑しながらも、この質問が何らかの意味を持つていると直感する。それも早苗にとつては大事な意味が、だ。

「……好きだよ。俺にとつちゃウチの両親よりあの二人の方が両親らしこれ」

「そう。……良かつた」

そして彼女の問いかけと同じくらい真剣な声で返された言葉に、早苗は安堵の笑みを浮かべた。

これで懸念は無くなつたと。

さうとでも言ひつつ、安心しきつた笑みを浮かべたのだ。

「……東風谷？」

「さ、早く行きましょ。お父さんつてば、もうお酒を用意して待つてるかも。西富も未成年なんだから、断るときは断るよつにして下さいね？　お父さんが調子に乗らないようにー。」

その様子に漠然と嫌な予感を覚えた西富だが、早苗は彼の横を抜けて追い越し、神社へと歩いて行く。

「あ、おい……つたく、何だつてんだよ」

その様子に面を食らった西宮は、それ以上を追求する機会を失つて彼女を追う。

或いは西宮の靈感がもつと強ければ、一人の様子を離れて見守つていた二柱の神に気付いたかもしない。

しかし神事に関わり早苗の修行に付き合つた結果、多少なりとも能力は磨かれたが、彼の進歩よりも更に速い速度で信仰が薄れ了一柱を見る事は、彼は一度も出来ていない。

即ち彼は彼女達の姿に気付かず、神奈子と諭訪子は神社へ向かう早苗と西宮の背を見送り、二人の姿が完全に見えなくなつたのを確認してから声を出す。

「……大丈夫そうだね。早苗が私達と一緒に幻想郷に行つても、丈一が居れば神社の方はどうにかなる」

「だが、諭訪子。本当にこれで良いのか?」

「なにさ神奈子。もうこの地での信仰は望みようが無い。だから幻想の世界に望みを賭けようと言つたのはアンタじゃないか?」

「そういう意味ではない。早苗を連れて行く事、そして丈一には何も告げずに行く事だ」

「ああ……」

幻想郷　　妖怪の賢者が創つたと言う、人と妖怪が共に生きる一種の理想郷だ。

忘れ去られ幻想となつた存在が辿り着く場所。数ヶ月前、彼女達はその妖怪の賢者から直々にその地へ来ないかと勧誘を受けたのだ。向こうは幻想郷内のパワーバランスを考えて、神奈子と諭訪子は失つた信仰を取り戻す可能性を求めて。

そのような意図から彼女達はこの世界に見切りをつけて、胡散臭い妖怪の賢者の勧誘に乗つて幻想郷へ向かう事としたのだがそこで彼女達にとつて予想外が一つあつた。

『おー柱ふたりが行くなら私も行きます!』

と、別れを告げる心算で幻想入りを伝えたといふ、彼女達の風祝である早苗が力強くそう宣言してしまったのだ。

当初は慌てて早苗の説得を行つた神奈子と諏訪子だが、早苗の熱意と覚悟にまずは神奈子が、そしてやや遅れて諏訪子が折れた。

彼女達としては早苗には人間として幸せに生きて欲しかったのが、そう説いた所で『私の幸せは私が決めます』と胸を張つて言いつられてしまつたのだ。もう何を言つても無駄。小学校にて放送ジヤックまで行つた信仰暴走機関車早苗さんは、彼女達には止められなかつた。

かくして早苗も幻想入りする彼女達について行く事になつたのが、そこで問題となるのが彼女の両親だ。

彼らには認識できない神奈子と諏訪子はともかくとして、早苗が消えてしまつ事は彼らにとつては絶大なショックだろう。

或いは胡散臭い妖怪の賢者ならば何か良いフォローが出来るかも知れないが、その事を妖怪の賢者に聞く前に早苗が告げたのが西富の存在だ。

『西富は私の両親にとつて、もう一人の子供のような存在です。彼も私の両親を好いてくれていますし、神事の知識もある。私達が居なくなつても、彼が居ればきっと大丈夫でしょう』

その言葉の中には信頼と申し訳なさと悲しみと、それ以外にも彼女が理解している物、理解していない物まで含めて多くの感情が含

まれていた。

彼を巻き込むつもりは無いというのが早苗の意見であり、結局は神奈子と諏訪子もそれに同意した形だ。

後事を全て押し付ける形になるのは申し訳ないが、暴走傾向の早苗に比べて神力や靈力はともかくとして世事には格段に長けている西宮だ。どうにかなるだろうというのが早苗の意見だった。

「……丈一にも、早苗にも悪い事をするね」

「そうだな。私は早苗が神社を継ぎ、丈一がその補佐。後は一人の子供が継いでいくかと想像を巡らせていたのだが」

「どうだろねえ。五年十年先でも友人関係で丁々発止とやり合つてる氣もするけどね、あの一人は。……あと十年放つておいたらどうなつたかねえ。ちょっと気になる所だけど、それが見られる可能性も無くなつた……というか、私達が消しちゃつたんだけどね」

「私達の都合でな。我儘なのだ」

「神様失格だね」

「神とは我儘な物だろ?。とはい、信者にこの仕打ちだ。神失格は同感だな」

諏訪子と神奈子は、早苗と西宮が去つて行つた神社の方角を見やつて苦笑する。

守矢神社が丸ごと幻想郷に入る、その数時間前の話だった。

#

その夜遅く、早苗は自らの両親が住む母屋を抜け出した。

目的地は自身が仕える一柱の神が居る本殿。

その周囲には西宮をこき使い もとい、西宮の協力を得て張

り巡らせた注連縄がある。

注連縄に囮まれた範囲を幻想郷に移動させる、神奈子と諏訪子と早苗による「」ちらで起こす最後の奇跡だ。

自らが生まれ育った家に深々と一礼する。

母屋には両親と、そして子供の頃から一番長く深い付き合いであった西宮が居るのだ。

結局父の晩酌相手にされて、そのまま泊まらせられる事になったらしい。これなら自分が居なくても大丈夫だろうと、安堵と一抹の寂しさと共に、早苗は母屋に背を向けた。

「……良いんだね？」

「もう戻れないよ？」

「はい」

そして本殿に待っていたのは、紺色の髪を持つ注連縄を背負った大人の女性

軍神・八坂神奈子。

その隣に座るのは、神奈子とは対照的に小柄な少女の容姿をした祟り神・洩矢諏訪子だ。

最終確認とも言える両者の問いに、早苗はしつかりと頷いた。

「大丈夫です。私はお二人の風祝ですから」

「……そうか」

「ありがとう、早苗」

早苗の言葉に神奈子が、そして諏訪子が頷く。

そして早苗が手にした大幣で印を切り、神奈子と諏訪子が自らに残つた神力でそれを補助する。

彼女達の全ての力を使って起こす奇跡。それはこの神社ごと、彼女達を幻想の世界へ飛ばす物だ。

そう、全ての力である。

故に彼女達は気付かない。全ての力を注力しているが故に、気付かなかつた。

「……東風谷の奴、様子がおかしかったんだよな。神奈子様と諏訪子様なら何か知ってるかもしだねーし……」

家人が寝静まるのを待ち、神奈子と諏訪子に早苗の不自然な様子について聞く為に本殿へ出向こうとしていた西宮に、彼女達はあるで気付かない。

彼が注連縄の範囲を越えて つまりは幻想郷に飛んでしまう範囲に入った事にも、彼女達は気付けない。

「 行きますー！」

そして早苗の声とともに奇跡が発動する。

神社の周りが光に包まれ そして幻想郷、妖怪の山と呼ばれる場所へと移つたのだ。

これを奇跡と呼ばずに何と呼ぶのか。

……ああ、巻き込まれた西宮からすれば『奇跡』と呼ぶより『災難』か。

そして

#

「ようこそ幻想郷へ。そちらの巫女さんははじめましてかしら？」

私は八雲紫。幻想郷と外界を隔てる結界の管理などをしています

わ

「……風祝の東風谷早苗です。巫女ではありませんが、宜しくお願
いします」

そして妖怪の山の頂上に神社が転移したとほぼ同時。

神社の本殿、早苗達三名の前に空間の切れ目が出来、そこから一
人の女性が姿を現した。

リボンだけのドレスに身を包んだ金髪の麗人。同性である早苗
が思わず感嘆の声をあげるような美女だ。

しかし周囲に纏う空気は大層胡散臭く、それ故に早苗は一柱から
聞いていた『胡散臭い妖怪に誘われた』という幻想入りの動機の原
因が目の前の相手に依るものだと即座に理解していた。

「すまないね、八雲紫。これから世話になる」

「あーうー……良い空気だねここ。なんか昔の大和を思い出すよ
「ふふ……気に入つて頂けて何よりですわ。後は貴方達が望んでい
た信仰を得られるかどうかは貴方達次第。幻想郷は全てを受け入れ
ますが、それはある意味でとてもとても残酷な事。ですが、私達は
貴方達四人を歓迎しましょう。改めて、ようこそ幻想郷へ」

「「「四人？」」

「あら、二人と一柱と呼んだ方が良いのかしら。それとも風祝さん、
貴方は信仰を受ける現人神としての立場もあるみたいだから一人と
三柱」

「……いえあの」

にこやかにその女性　　妖怪の賢者・八雲紫が語った言葉に場

が凍りつく。

早苗も諭訪子も神奈子も、別に呼び方に拘つたわけではない。单

純に数がおかしいのだ。

「ハ雲紫。私のこの帽子は別に本体とかそういうのじゃないから、私と別に数える必要は無いよ？ 時々勝手にハエとか捕食するけど、『数えません。……え、つていつかその帽子そんな機能あるんですね？ ゆかりん怖い』

諏訪子が一縷の望みを賭けて言つた言葉に紫が引き、

「ははは、馬鹿だなあハ雲紫。算数は苦手か？ 良ければ私が教えてやるうか」

「要りませんわ。私これでも数字には強い方ですから。といふか、何なんですか貴方達？」

神奈子が頬に汗を流しながら言つた言葉に紫が怒るより先に困惑し、

「あの……まさかとは思いますけど」

「……だからどうしたのよ貴方達。何か変よ？ それとも元からこうなの？」

早苗が顔面蒼白で呟いた言葉に、慇懃な態度を取るのすら止めて紫は問いかけた。

基本的に初対面かそれに近い相手には慇懃　　或いは慇懃無礼なハ雲紫であったが、そんな彼女をして慇懃な態度を忘れさせる程度には田の前の三名は挙動不審だった。

祟り神は頭を抱え、軍神は冷や汗を流し、風祝は顔面が蒼白である。果たして何があつたのかと思う妖怪の賢者に対し、三名を代表して早苗が絞り出すよつに質問した。

「……あの、この場の三名以外にも誰か一緒に来ちゃつてるんですねか？」

「え？ 何かそれなりの靈力纏つた男の子が居たから、貴方達の関係者だと思って藍私の式神にそっちへ向かわせたんだけど」

質問に答えた紫に、しかし返つて来たのは沈黙だつた。

黒い被が頭を抱えて地面に伏し、軍被が溝のよどみに冷や汗を流して風祝の顔色は蒼白を通り越して生物学的に有り得ない色になつてい る。

沈黙が重いを通り越して痛い。藍助けて何かこの人達怖いと、紫も内心で冷や汗を流す。

「…………あの、本廻に迷ったの

沈黙に耐えかねて声をかけた紫。

しかしそれを遮るように、土気色の顔色をした風祝が声を上げた。
そして次の瞬間

「ひー・?」

軍神・祟り神・現人神がムンクの叫び宜しく絶叫する光景に、妖怪の賢者八雲紫は思わず悲鳴を上げてしまったのだつた。

#

「……ゴスプレですか？ 良い尻尾ですね」

「は？ えーと、うん、ありがとう？」

そして同刻。

本殿から少し離れた神社の敷地にて、九尾の狐であるハ雲藍が現状を全く把握していない西宮と間抜けな会話をしていた所だった。

第一話・幻想入り（後書き）

相変わらず自分の書く小説は説明臭い部分が多くなると思つた今
田この頃。

第三話・宗教戦争（打撃）（前書き）

割と今回も捏造設定満載です。

風神録の入りとか、この小説ではじついつ感じで始まるのかー、
などと納得して頂ければ嬉しいです。

第三話・宗教戦争（打撃）

守矢神社の幻想入りからおよそ一時間。

妖怪の山から『何が起こつたのか』と天狗や河童が様子を見に来るも、それらを紫が結界で完全にシャットアウトし、守矢神社の中には何者も立ち入る事が出来ない状況が作られていた。

天狗などは妖怪の賢者が外から連れて来た神と何か陰謀でも企んでいるのかと激しく議論を戦わせながら状況を見守っているが、それを聞けば当の妖怪の賢者　　八雲紫は乾いた笑みを浮かべるしかないだろう。

今現在守矢神社の中で起こっているのは、紫と神による陰謀でもなんでもない。

ただの人間による神様三名（うち一名、現人神なんで半分くらい人間）に対するスーパーお説教タイムだつた。

この状況の始まりは一時間ほど前。

事情をあんまり理解しないまま藍に連れられて本殿にやつて来た西宮と、これまた事情をあんまり理解出来ていなかつた藍。

その二者が本殿で見たのは、ムンクの叫びみたいな勢いで絶叫する神×3と、その光景にビビる妖怪の賢者（涙目）だつた。

阿鼻叫喚の地獄絵図。それは西宮の姿を神×3が視認した事で加速する。

「済まない丈一！ 私達のせいでの、私達のせいでの！」

「ごめんよ丈一いいいい！」

「誰！？ あんたら誰！？ なんで涙流しながら抱き付いて来てんの！？」

巻き込んでしまつたという立場から、西宮に縋り付くようにして

謝罪の言葉を叫ぶ神奈子と諏訪子。

しかし思い返して欲しい。西宮の靈力では彼女達の声を聞く事は出来ても姿は見えなかつたのだ。

幻想の存在が集まるこの地に来た事で、ある程度力を取り戻して視認可能になつた二柱。彼女達の姿が初見である西宮もまた、見知らぬ美女と美少女に名前を呼ばれながら抱きつかれる状況に思う存分に混乱する。

唯一事情を知つておりこの状況を收拾できそうな現人神は、受けたショックが神奈子と諏訪子以上だつた様子で、四肢を地面について落ち込んだポーズからガンガンと頭を地面に打ち付ける反復運動を開始していた。

そして第三者である八雲紫と八雲藍はどうと、

「……藍」
「……なんでしじうか紫様」
「……私怖い。何この状況」
「……そこの一柱は紫様が呼んだんでしょう。私に言われても困りますよ」

などと言いながら、壁際でその阿鼻叫喚を見守つていた。

紫などは理解不能な奇行を繰り返す三柱に腰が引けている。正直言つと今すぐ帰りたいが、幻想郷を愛する彼女の心がこの場からの離脱を押し留めていた。

結局その騒ぎは西宮が声と口調から相手が神奈子と諏訪子だと気付き、両者を宥めるまでの5分の長きに渡つて続く事となつた。

そして正氣を取り戻した神奈子と諏訪子が宥められて正氣を取り戻し、地面に頭を打ち付ける反復運動を行つていた早苗も含めた三

者で西宮に事情を説明 した所で西宮が怒った。

「……成程。つまり俺を除け者にして三人楽しくキャツキヤウフフといじの幻想郷に来る為の計画を練っていたと」

「いやあの、そんなキャツキヤウフフとか楽しそうな要素は何処にも」

「少し黙つて頂けますか諏訪子様」

「アイ・サー」

温厚そうな糸目を見開き、額に青筋を浮かべてガンを飛ばす西宮。対する早苗も含めた三柱は仁王立ちする西宮の前に正座する形だ。そして反論をしようとした諏訪子が即座に白旗を上げる。完全に力関係が今この時限定でどつか可笑しくなつていた。

「ぶっちゃけそれ自体はどうでも良いんですね。それで諏訪子様と神奈子様が平和に暮らせるつてんならむしろ歓迎なんですよ、ええ。でも何が腹立つて、完全に除け者にされた事が腹立ちますね」「し、仕方なかろう。早苗も丈一も人間だ。早苗には幻想郷に私達を送る為に協力して貰わないといけないから事情を話しただけで、本来であれば」

「神奈子様、東風谷に話した時点で俺にも話して欲しかつたって言るのは我儘なんでしょうね。能力的にも東風谷が上なのは分かるし、神奈子様と諏訪子様への縁で見ても東風谷は俺より上だ。東風谷の協力が無いと神奈子様達はここには来れなかつた。俺はぶつちやけ役には立たなかつた。だからそこは俺の力不足。仕方ないつて納得しましょう」

溜息を吐きながら西宮が言つた言葉に、諏訪子と神奈子がほつと息を吐く。

とりあえず黙つていた事に関しては許されたと察したのだらう。

残りの問題は巻き込んでしまった事だが、

「あ、巻き込まれた事に関してはどうでも良いです。むしろ良く巻き込んでくれました。俺だけ残されるとか冗談じゃなかつたんで」

「……そ、そうか……」

「え、えーと……それじゃ丈一、私らどうすれば良い?」

「とりあえずそっちの美人さん一人と一緒に端で座つて下さい。あ、御尊顔は初めて見ましたがお一人も美人ですから安心して下さい」

「…………うん、ついでみたいに言われても全く嬉しくないけどありがとう」

すゞすと壁際に居る美人さん一人 即ち八雲紫と八雲藍の所まで退避する諏訪子と神奈子。

『お疲れ様です』『あ、どうも』と全く中身の無い挨拶をしながら、一柱は一人の横に座る。

そして横に一柱が座ると同時に、紫が器用に正座のまま『すすすす』と移動して一柱のすぐ近くまで近寄り口を手前に居た諏訪子の耳元に寄せた。

「話を聞いてた所によると、あの少年は貴方達がここに来る時予定には入っていなかつたみたいですね」

「うん。……早苗の同級生で西富丈一。たまたま私達の声が聞ける程に靈力が高くて、色々あつて私達の事も信仰してくれてたんだよね」

「外の世界でそれほどの靈力持ちは珍しいですわ。だから幻想郷に来た時に一緒に連れて来た信者かと思ったのですけど」

「確かに私が見た限りでもここ五十年くらいでは、早苗を除けば丈一が一番その辺の素養は高かつたかな」

ぼそぼそと小声で話す祟り神と隙間妖怪。

その二人の目線の先では、早苗が正座で西宮に向かい合っていた。

「さて東風谷。お前が一番腹立つんだよな、俺的に」

「御一柱は良いさ、仕える相手だし、俺の靈力だと声を聞く程度が精々だ。幻想郷だけ？　ここに来るのに俺を置いて行くつ一つ判断も分からんでもない。けどお前にまで除け者にされたのは感情論的に腹立つわな、相棒？」

「……話したら、絶対について来ようとするじゃないですか」

「当然だろ。向こうに未練は　まあ友人関係とお前ん家関係で無いでもないが、実家が実家だしな。あんまり無いし」

「貴方が居たから、私はお父さんとお母さんの心配をしないでこちらに来れると思ったのに！」

「そりやお前、傲慢つてもんだろ。ウチとは違つてお前んとこの御両親はお前の事を大事に思つてる。俺じや代わりにやならねえよ」

「貴方だつて今や似たような物ですよー。貴方まで来てしまつて、どうするんですか向こうの神社！」

「逆切れかよ！？　つーか神社云々言つならお前この神社ごとこっちに飛ばしたんじゃねえのか！？　向こうの神社本殿無しで何をやらせるつもりだつたんだ！」

「……………あ

「かなり考えないと辿り着かないのかお前は！？　ああもう一見優等生だけど相変わらず馬鹿だなあお前はよオーー！」

「馬鹿って言う方が馬鹿なんですよこのド馬鹿　　つーーー」

「ンだとコラアアアアアーーー！」

そして責めるような西宮の言葉に反発する早苗。

そこから始まる彼らにとつてはいつも　　ただし八雲家の二人からすれば非常に見苦しい　　言い争い。

現人神と信者Aが口汚く罵り合ひその様子を見ながら、横でドン引きの隙間妖怪を完全放置で諏訪子がそつと田元を拭う。

「ああ、早苗……」うちに来てもあんなに楽しそうな姿を見せてくれるなんて

「あの、洩矢さん？ アレ凄い激怒中に見えますけど。しかも逆切れで」

「諏訪子で良いよ。いや早苗は昔から優等生である事を自分に課しちゃう子だったからね……こっちに来てもちゃんと友人が出来るかが不安だつたんだよ。けど、丈一が来てくれたんならそれは心配無くなつたなあ、とね。……あ、でも向こうの神社どうしよ」

「……ええと、では諏訪子さんと呼ばせて頂きますわ。っていうか諏訪子さん、なんか貴方のところの信者、現人神へ向けて物凄い勢いで中指立てて挑発キメてますけど。やだ、下品なハンドサイン。ゆかりん怖い」

「歳考えて下さい紫様」

ぼそりと突っ込んだ藍の足元に隙間が開き、悲鳴と共に九尾の狐はその穴に落ちて行つた。

そんな彼女を一顧だにせず、紫は諏訪子との横の神奈子に目を向ける。ちなみに神々も落ちて行つた九尾を氣にもかけずに、自分達の風祝と信者の元気なじやれあい（神々主觀）を見ながら満足げに笑つている辺り肝が太い。

そして紫は神奈子と諏訪子に向けて口を開ぐ。どうやら彼女は罵倒合戦を繰り広げる現人神と信者Aは意識的に気にしない事にしたようだ。彼女達に構つていては話が進まない事に気付いただけとも言つ。

「……ん、ごほん。神奈子さん、諏訪子さん。私から一つ提案がありますわ。貴方達も知つての通り、私は外界とここを行き来出来る。

向こうの神社とあそこの風祝の両親に対する何らかのケアを条件に、

一つやつて欲しい事があるのです」

「やつて欲しい事？」

「なんだい？ それは」

そして居住まいを正した紫からの言葉に、諏訪子と神奈子も真剣な表情でそちらに向き直る。

双方共に気付いたのだろう。彼女達を幻想郷に呼んだハ雲紫の目的が、これから語られる話の内容であると。

「貴方達には幻想郷のルールに従い、異変を起こして欲しいのです。より正確には、異変という分かり易い形で力を示して欲しい。

この妖怪の山の力を示し、パワーバランスを正す為に」

「つまり私達にこの妖怪の山とやらの勢力の一部になれと？」

「そうなりますわ。山の中で貴方達がどういう立場になるか山を統べる事になるかそれ以外かは任せます。とにかく外からの力であろうとも、この山にも今だ巨大な勢力がある事をここらで示すべきなのですわ。紅魔館、永遠亭……………今の幻想郷では外から来た勢力がパワーバランスの一角を担つておりますが、それに対して古参である妖怪の山の勢力がやや落ち目なのです」

口元を隙間から出した扇子で隠しながら、紫は語る。

それは境界の管理者として、幻想郷の現状を憂う本心だ。

ここ最近 スペルカードルールの制定以後に発生した異変を鑑みると、まずは紅魔館、そして白玉楼と永遠亭という順番である。

白玉楼 の一件に関しては西行妖を咲かせようとした時は肝が冷えたが、基本的に白玉楼の主である幽々子は親紫側で幻想郷においても古参だ。ここは良い。

ただ問題となるのは紅魔館と永遠亭。

両者ともにこの幻想郷を破壊するような真似はしないだろうが、外から来た両者が異変を以て力を示し、古参である妖怪の山がノーアクションのままというのは好ましくない。

ある程度の均衡は必要である そう考えて紫が勧誘したのが、外界で力を失いかけていた守矢の一柱だ。

閉鎖的で自分達から異変を起こすなどとはしない天狗に代わって、妖怪の山の中心となつて異変を起こす。それが出来るだけの力と行動力を持つた相手。そう考えて、紫は彼女達を選び 彼女達は幻想郷に来る事を了承したのだ。

「 成程。幻想郷内の均衡を保つために、私らに異変を起こして欲しいと」

「ええ。異変の詳細は任せますわ。余りにも問題があるようでしたら一声かけます」

「どこか好戦的にやりと笑う神奈子に、紫は自分の見立てが間違つていなかつたと確信する。

かつては洩矢の地に攻め込み信仰を奪おうとした行動派の軍神だ。閉鎖的な天狗と違つて、積極的に動いてくれるだろう。

未だに神々への信仰／親交が残る幻想郷に来た事で、それなり以上に力は取り戻している。後は妖怪なり人間なりに自分達を信仰させて行けば、往時の力を取り戻す事も難しくはあるまい。

そんな神奈子の様子に、隣の諭訪子が苦笑する。

「神奈子はやる気みたいだね。それじゃ八雲紫、さつき言つてた幻想郷で異変を起こす為のルールとやらを教えて貰える?」

「ええ、勿論ですわ。それはスペルカードルールと言つて、人間と妖怪、神々などが対等な立場で挑むそれはそれは美しい決闘法で

「表に出なさい西富！ 私は風祝なの！ 平信者の貴方より偉いの！ それを思い知らせてやります！！」

「おいおいやる氣か東風谷？ ガキの頃ならいざ知らず、今となってまで喧嘩で俺に勝てるつもりかよ？」

「ええ、勝てますとも。この地に来てから全身に神力靈力が漲つていますからね。顔面ボコボコにして写メ撮つて笑つてやります！」「言つたなこのやうづー。泣いても知らねえぞ！…」

両手を広げ、芝居のかかつたポーズでスペルカードルールについて語りうとした紫。

しかし横合いから一際強い声で罵声が聞こえて来た。
どうやら沸点が西富よりも幾らか低かつた早苗が、遂に武力決闘を要求したらしい。対する西富も、売られた喧嘩を二割増しで買いつつ了承。

両者は壁際で話し合ひ隙間と神などには田もくれず、ずかずかと本殿を出て表へ向かつ。

ぴしゃりと開け放たれる本殿の戸。

神奈子と諷訪子、そして両手を広げたポーズのままの紫が見ている前で、早苗と西富は本殿前の地面で互いに数歩離れた距離で向かい合つ。

「ルールは！」

「金的、目突き、その他急所攻撃の禁止！ あと凶器攻撃も禁止…」

「ラウンド無制限！」

「… ファイツ…！」

そして打撃戦が始まった。

顔面を中心に狙う早苗と、流石に少女相手に顔面やボディ狙いは不味いと思つてゐるのか関節を取りうと立ち回る西富。

流石にここまで見苦しい争いに発展したのは、神奈子や諭訪子の記憶を遡つても余り無い。

やや呆然と風祝と信者による格闘戦を見ていた。

紫がぼそりと呟いた。

「……まあ、アレに比べれば本当に美しく、穏当なルールですわ」「うん、アレ以下を提示されたら流石に私も引くわー」

「正直それだつたら、私も異変を起こすのを考え直すレベルだな」

三者二様の酷評など露知らず、風祝と信者は打撃戦を繰り広げていた。

早苗の宣言通り早くも顔面をボコボコにされながらも、西宮が早苗の腕を取る。

「つしゃ捕まえた！」から関節極め

「がぶうつー！」

「つづああああー？」 噛んだ、この風祝噛みやがったアアアアア

！ー？

噛まれて思わず手を離した西宮の頸に、腰を落とした早苗のショートアッパーが突き刺さる。

ぐらりと身体が崩れかけた所に、追撃のソバツト。

こめかみを踵で撃ち抜かれて、西宮がどさりと地面に転がつた。

両手を掲げ勝利を叫ぶ風祝。その姿は御両親が見たら泣いちゃいそうなくらい雄々しかつた。

「……彼女達にも後でルールを教えましょう。異変の中であんな事をされたら、私はただ困るしかありませんわ」

「噛みつきは流石に引くわー。年頃の少女としてそれはどうよ早苗

？」

「まあ、軍神としては分からんでもない戦術だつたな。原始的にも程があるが」

かくして雄叫びを上げる風祝を見ながら、一柱と隙間妖怪による異変に関する相談は進んでいく。

この際に早苗に事情の詳しい説明があれば後の悲劇は防げたのかもしれないが 神奈子も諏訪子も、そして妖怪の賢者と呼ばれる紫ですらこの時は知る由もない。

幻想郷のパワーバランスや状況などを詳しく聞かされないままスペルカードルールについてだけを聞かされた早苗が暴走し、博麗神社に突撃をかける数日前の話。

彼女達にとつての幻想入りは、こうして始まつたのだった。

第三話・宗教戦争（打撃）（後書き）

書き溜め分は今回で終了。

ある意味、プロローグ部分でした。

紫様がなんか苦労人チックに。そして神々もドン引く宗教戦争（打撃）。

一応西宮は殴らずに関節技などで対処しようとしていますが、当然敗北。

ちなみに手加減抜きでやつても勝てません。力関係は早苗→西宮なのでした。

第四話・布教活動の前に（前書き）

あんまり話が進まない不具合。とりあえず風神録開始までの数日間を数話使って描く心算です。まずは布教に行く前に。今回は少し短めです。主人公である西宮君の才能や思考、立場についてなどの説明回でもあるかも。

第四話・布教活動の前に

「凄い！ 私飛んできますよ、見てくれてますか神奈子様、諏訪子様！」

幻想入りの翌日。早朝の妖怪の山頂上、守矢神社にて少女の嬉しそうな声が響き渡っていた。

現人神・東風谷早苗。人生初の飛行体験である。

幻想郷に入る前は空を飛ぶ事など出来なかつた彼女だが、幻想郷に入つた事で彼女が元々持つていた靈力・神力が強化された事と相まって飛行が可能となつたのだ。

それを地上、神社の縁側から眺めるのは彼女に飛び方を教えた諏訪子と神奈子、そして八雲紫の三名だ。

紫が何故まだここに居るのかに関しては二つの事情がある。

まず大きな事情として、妖怪の山の住人 特に実質的に山を支配している天狗に対する説明と仲介がある。

いきなり山にやってきた神社と神々。それが巨大な力を持つているとなれば、天狗社会側の混乱は想像に難くない。排除を叫び出すのは目に見えている。

しかし紫としても、ここで天狗に譲歩する心算はない。

妖怪の山が紫の進言を聞き入れて異変を起こせば面倒は無かつたのに、彼らが何の動きも見せないがために、妖怪の山の力を増す為にわざわざ神社と神々を引っ張つて来る羽目になつたのだ。

故に彼女はやや皮肉を込めた物言いと共に天狗達と神社の間に立ち、守矢神社のこの地への居住と布教活動を認めさせた。

境界の管理者にして妖怪の賢者、八雲紫。実質的な幻想郷の管理

者である彼女の仲介と、加えて神奈子と諏訪子が幻想入りした事で復活した神力を見せつけた事が大きかったのだろう。

天狗達は渋々ながら、神社がこの山頂に陣取る事と布教活動を行う事を認める事となつた。

ちなみにその話し合いは基本的に神奈子、諏訪子、紫が行つており、早苗は神社の奥でボコボコになつた西宮の写メを撮つていた。これは別段彼女がサボつたわけではなく、神力靈力ならばまだしも交渉云々に関しては未熟な早苗を天狗達との交渉の場に出せば、交渉の際に付け入られる隙になりかねないという判断があつたからだ。

紫が仲介に立つてゐる以上そつとう無いだろうが、天狗側から神奈子や諏訪子に暴言などが飛び出した場合にはこの風祝は激発しかねない。

幻想郷ならばある程度話が纏まつた後ならば笑い話で済むような事でも、ファーストコンタクトでやつては致命的だ。

結果、早苗はどうせ充電した分が切れれば使う用途も全く無い携帯電話を存分に使い、自分が倒した西宮の姿を写メに収めまくつて時間を潰す事となつた。

ちなみにほぼ同刻。引き籠りのとある鳥天狗が念写を行つた際に、自分のカメラに写つた見知らぬ男のボコボコの顔を見て悲鳴を上げる事になるのだが、本筋には全く関係無いので割愛する。

ともあれそんな天狗達との交渉の翌日である今現在。

早苗は神力や靈力の扱いを脅威的と言つて良い速さで掴み、自由自在に幻想郷の空を飛んでいた。

地上から見上げる神奈子と諏訪子は感無量といった様子で早苗の姿を見上げている。

「いやあ、流石早苗だよ。いつも早く飛行の口ツを掴むなんて」「スペルカードや弾幕勝負も、すぐ出来るようになるだろう。やはり私達の風祝だけの事はあるな」

「親馬鹿ですわね」

そんな両者をジト目で見つつ、紫はぼそりと呟いた。

そしてそのまま視線を横にスライド。神社の本殿でメモ帳を手にしている少年に田を向ける。

西宮丈一。顔面に湿布と包帯を付けた守矢神社の信者へは、先程まで早苗と一緒に飛ぶ練習をしていたのだが、早苗ほどの才能は無いようだった。

早苗が『浮く』ではなく『飛ぶ』の領域に足を踏み入れた所で、ようやつと『浮く』事が出来た程度だ。その辺りで練習に見切りをつけ、早苗の練習を諭訪子と神奈子に任せ、西宮自身は紫に幻想郷内の事について話を請うて来たのだ。

今手にしているメモ帳は、その際に聞いた事がメモされているのだろう。

西宮も決して才が無いわけではないと、紫は思つ。外の世界で多少の修行は積んでいたとはいえ、たかが一、二時間程度の練習で飛行術を覚えて『浮く』事が出来るようになつただけでも大したものだ。

だ。

靈夢と比べるのは愚かだらう。歴代博麗の巫女の中でも頭二つは飛び抜けた鬼才の持ち主だ。驚嘆すべき才能を持つ東風谷早苗ですから、彼女に比べると非才となる。

しかしその早苗とて、紫の見立てでは靈夢を除けば歴代博麗に比べても決して劣らない才がある。

僅かな時間の練習で、既に自由自在に空を飛ぶ感覚を身に付けている。事によれば、弾の撃ち方さえ覚えればそのまま弾幕勝負に出

しても良い動きをするだらう。

要は隣に居る相手が規格外なだけで、西畠とて鍛えれば良い線までは行く筈なのだ。

それが自分から練習を切り上げてしまつたところのは、紫からすれば少々勿体無い。

「何であつちの子は練習止めちゃつたのかしらね。あの風祝さんがあんまりにも才能があるから、拗ねちゃつたのかしら？ だとしたら愚かな話ですわ」

田線を西畠に向けたまま呟いた言葉は、彼に向けた物ではない。音量的にそちらには届かない声で呟いたそれは、隣の諏訪子と神奈子に向けた物だ。

しかし僅かな落胆と多くの揶揄を含んだ紫の言葉に、神奈子と諏訪子は顔を見合させて苦笑を浮かべた。

「そんな子じゃないよ、丈一は。あれは早苗が舞い上がつちゃつてる分、自分はそのフォローに回らうって考えてるだけ。ああ見えてしつかり者だからね」

「早苗はなんどいうか、二つ……香車だからな。良くも悪くも前進しか知らないような子だから、丈一はその分横を固める心算なんだろう。ハ雲紫、先程あいつがお前に聞いたのは幻想郷内の地理や情勢だろ？」「ええ、その通りですわ」

「なら確定だ。早苗が布教活動を効率的に出来るように、あいつは幻想郷内での布教の際のアタリを付けてたのさ」

早苗の事を語ると同様に、誇りしげに胸を張つて神奈子が語る言葉に、しかし紫は僅かに首を傾げる。

田の前の軍神はそう言つてゐるが、あの風祝と信者Aの間にそこまでの信頼関係があるのだろうか。紫脳内には彼らの関係は神々と賢者と狐をガン無視で殴り合いをしていた光景しか残っていない。ファーストコンタクトで見せたインパクトは偉大だつた。

「……まあ、本當かどうかはすぐに分かりますか。飛び方は問題無くなつたみたいですし、私は彼女を人里まで案内して行きますわ。そこから先の布教活動には協力も妨害もしませんけど」

「いや、十分だ。助かつたよハ雲紫」

「うん、いつかお礼はするよ」

「貴方達を呼んだのは私ですもの。これくらいは当然のアフターケアですか」

紫が口元を扇子で隠して嘯いた言葉に、神奈子と諏訪子は苦笑しながらもう一度だけ重ねて礼を言つと、空を飛んでいる早苗と本殿に居る西宮を各自呼んだ。

早苗が気付いて高度を下げ、丈一がメモ帳とペンをポケットに仕舞つて本殿から出て来る。

「お呼びですか、御一柱とも！ もっと私の飛行技術を見たいんですか！？ 良いですとも！ この早苗、御一柱の風祝として恥ずかしくないスタイリッシュな飛行を」

「だったら俺まで呼ばれる道理は無いだろ。ハ雲様が帰るから見送りをしろとかそういう話では？」

そして西宮の言葉に『そうなんですか？』とでも言つよつた目線を向けて来る早苗に対し、紫は口元を隠したまま微笑を返す。

「惜しい、中止解ですわ。送るのは貴方達ではなく私。送り先は人里まで。この幻想郷で最も多くの人間が集まる人間の里、最

初の布教先としては最良でしょう。「う

「あつ、そうか。幾ら飛べても布教に行くのには人里の場所を知らないと駄目ですもんね」

「ええ。本来であればスキマ 私の能力を使えば早いのですけど、それだと道が分からなくなりますから。初回サービスと言ひ事で、人里まで一緒に飛んで行ってあげましょ。ただ……」

「こ」で紫は困ったように西宮に田線を向ける。

浮く程度しか出来ない彼は一体どうする心算なのか、という意図を視線に込めて。

「御一柱は西宮君も呼んでもましたが……浮く程度しか出来ないのに、飛んで行くのについて来れます?」

一柱は彼を東風谷早苗の相方として認めていたのであるが、果たして本当にそれに見合つ器なのか。

それを見極めるような、試すような妖怪の賢者の田線。対して西宮は苦笑と共に覚えたての飛行術で宙に浮き、そのまま横に浮く早苗に手を差し出した。

「東風谷、頼む」

「あ、分かりました」

短いやり取り。それで全てを了承したように、早苗が頷いて差し出された手を掴む。

そのやり取りに首を傾げる紫に、早苗はこいつと笑顔を返した。

「紫さん、大丈夫です。浮きさえしてくれれば速度に関しては私が引っ張つて行きますから」

「早く布教活動を行うんだつたら、俺が東風谷の速度に合わせられ

るようになるまで修行するよりこっちが手早いですからね」

「で、人里……って何があるんでしよう? とりあえず広場とかあれば分社立てれば良いですかね?」

「アホか。まずは稗田家っていう有力者の家に。次は人里を守護している上白沢つて人の所に挨拶に行くのが無難だろうな。有力者に話を通しておけば色々やり易い」

「アホ言つた馬鹿。……まあ、じゃあそれで。その辺りは任せます

そして僅かに目を見開く紫の前で繰り広げられるのは、『打てば響く』と言った具合の打ち合わせだ。

早苗が飛行技術を覚えて移動手段を確保し、西宮が最低限の飛行というか浮き方だけを覚えて、早苗への負担を少なくする。浮き方も分からなければ、早苗が仮に西宮を連れて行く際は彼一人分の重量をずっと支えながら飛ぶ事になる。体力的に厳しかろう。しかし確かに、浮く事さえ出来るならばそれを引っ張つて行くのはさしたる苦ではない。飛行術の初步で浮きさえすれば、体重はほぼゼロ。風船を引っ張る程度の負担しか、早苗には掛かるまい。

そして最低限の修行で早苗の負担を最大限減らし、次に西宮が取つた行動は紫からの情報収集。

これが無くては確かに人里での、そしてそれ以降の布教活動は手探りの形を取る物となり、効率は著しく落ちていただろう。

一人が自然と取つた分業によつて、言われてみれば確かに非常に効率の良い形で布教活動の準備が整つていた。

紫は先程一度西宮への評価を下げるが、こうして結果を見せられて見れば彼は自分の才覚を自覚した上で、拗ねるでもなく冷静に、最も効率良く布教活動が出来る選択をしたのだろうと理解できた。些か暴走するきらいのある早苗の相方として、これ以上の人材は

そつは居まい。

「……成程、確かにこれは私が見誤つてましたわ。謝罪しましょ、

守矢の一柱」

「くへへ。早苗もそうだけど、丈一も私たちの血縁の信者だからね」

紫が微笑と共に諏訪子と神奈子に頭を下げ、諏訪子が胸を張つてそれに答える。

神奈子もその横でどこか誇らしげに笑い、知らぬばかりの早苗と西富は首を傾げるのみ。

その両者に対しても『なんでもありますわ』と首を振り、声をかける。

「それではそろそろ行きましょう。早苗さん、少々男女が逆な気もしますが、ちゃんと西富君をエスコートしてついて来て下さいな」「大丈夫です、昔から基本的に私の方が西富より強かつたですからー。」

「そりだな、お前は昔から人類といつよりゴコロと言つた方が正しい気がするレベルで強かつたな」

「ふんっ！－！」

「オーッ！－？」

余計な事を口走つた西富に対し、早苗が繋いだ手を引っ張る事で彼を引き寄せ、カウンター気味にボディープローを叩き込んだ。

『『『やあ』でも『痛い』でもないマジ悲鳴をあげて、西富が器用に空中で悶絶する。

「……今の早苗さんなら靈力と神力で身体能力を強化すれば、ゴリラくらいなら倒せる気もしますわ」

「凄いね早苗、エイプキラーだよー！」

「嬉しくありません！ 諏訪子様まで西宮みたいな事を言わないで下さ……！」

諦観交じりの呆れた溜息を吐く紫の言葉に、諏訪子が目を輝かせる。

早苗はそれを否定するものの、空中で痛みに身をよじる西宮を見ると否定し切れた物ではないと思つ紫だった。

「……とこつか貴方も挑発するような事を言わなければ良いでしょ」「え？

」……や、八雲様。……お、お言葉ですが東風谷をからかうのは俺のライフワークの一環として、それを怠ると最悪身体が内部から爆発します

「どうこう構造してゐるのよ貴方」

悶絶しながらの西宮の返答に、呆れ果てた声で返すしか無い紫だった。

第四話・布教活動の前に（後書き）

早苗と西富の反発しあいながらの相棒関係が描けてたら良いなあ。
次回は話の中で言つてた通り、人里へ。
あと紫様がちょっと出張り過ぎな気もするけど、この人は元々世
話好きっぽいイメージがあつたりします。

第五話・稗田家と暴雨道具店と（前書き）

紫様マジ世話好き。そして早苗さんがどんどん愉快痛快系に。人里などについては江戸時代レベルの文明だと思ってます。作中でも語られるように、例外要素はそれなり以上にあります。その辺りも含めて、人里は多少独自解釈が含まれていますのでご了承ください。

第五話・稗田家と霧雨道具店と

紫が先導し、それに続く形で早苗が飛び、早苗に引っ張られる形で西富が飛ぶ。

些か情けないが、こと靈力神力云々に關しては早苗に勝負を挑むだけ無駄なのは長年の経験で分かっている西富である。特に気にするでもなく、些か歪なフォーメーションでの三名の飛行は続く。ちなみに早苗は何故か外の世界時代から腋見せだつた青と白の巫女服。西富はジーンズにワイシャツ程度のラフな格好だ。そもそもその格好で転移に巻き込まれたので、彼の場合は他の服が無いのだが。

紫曰く、その手の洋服は確かに目立つが幻想郷には外の世界からの品がしばしば流れ着く為に、洋服主体の人妖も多いから特に気にするほどでも無いとの事である。

また、西富の手には外の世界のお菓子（羊羹）が入った包みがあった。稗田と上白沢という里の有力者に挨拶に行く為の手土産として、持つて行くのを主張した彼が本殿の奥の棚にあつた諏訪子のお菓子箱から奪取して来たものだ。

自分で食べたかつたらしい諏訪子は抵抗したが、挨拶回りを円滑に進めるのに手土産は必要と言つ西富の言葉に神奈子が同調。更には西富に関しては不慮の事故で巻き込んだ負い目がある為、諏訪子が渋々引き下がつた形だ。

結果として諏訪子は拗ねて壁際に座り込んでいたが、そのうち復活すると判断して守矢組 + 紫は華麗に無視した。

「わあ……凄い大自然ですね」

「空氣も違うな。流石は幻想郷とでも言つべきかね」

そして飛行初心者の早苗と西富は、きょろきょろと好奇心丸出しひで周囲の光景を目に焼き付けている。

微笑ましいその様子に紫は苦笑。

「物珍しいのは分かるけど、道を覚えておきなさい。妖怪の山に戾る分には、山そのものが目印になるから良いけど……人間の里には高い建造物が無いからね」

「はーい」

聞こえて来た元気のいい声に苦笑する。

内心で今代の博麗である靈夢もこれくらい素直だつたらと思いながら、飛ぶ事暫し。

紫が居るからか偶然か、ともあれ何事も無く人間の里に到着する。

人里では妖怪は人間を襲わないという取り決めがされている為か、里には結界などは張られていらない代わりに周囲を柵で覆われていて、その入り口には門衛らしき人間が立つていた。

入り口前に降り立つた早苗達は、門衛に挨拶をして里に入る。

多くの家々が軒を連ねる人里。しかしそれは、外界から来た早苗と西富からは馴染みの薄い街並みだった。

「映画のセットみたい……」

「見た感じ江戸時代程度って所か？なんかカフェテラスみたいなものもあるから、一概にどうとは言えないけど」

「ふふつ、驚いてるみたいね。そうね、西富君の言った通り、外界から忘れ去られた物が時々流れ込んで来る関係もあって、一概に世界で言う何時代とは言えない文化をしているわ」

「あつ、向こうに映画とかで見たのと同じような茶屋がある……西富、食べて行きましょう!」

街並みを見て初々しい反応を返す一人に対し、紫は口元を扇子で隠して満足げに笑う。

特に早苗のはしゃぎやつたるや相当な物で、巫女服に縫い付けてある内ポケットから可愛らしい財布を取り出して中から万札を取り出し　　た所で、紫と西宮が動いた。

二人は駆け出そうとした早苗の両手を左右から掴んで止める。

「待て」

「待ちなさい」

「うつ！？　いや、その……信仰を集めるのも大事ですけど、腹が減つては戦は出来ぬといつ名言もありましてですね？」

「別に団子を食べへり止めねーよ。止めねーけどさ、お前それ……」

「貴方、そのお金……」

西宮が頭痛を堪えるように額を抑え、紫が戦慄混ざりに早苗を見る。

早苗はその様子に何を勘違いしたのか誇らしげに胸を張り、

「幻想郷に来た後で困る事が無いように、貯金を下ろして持つて来たんです。西宮、今日は奢つて上げますよ」

しかしその誇らしげな言葉に返つて来たのは、戦慄を深めた紫の沈黙と、心底呆れ果てたような西宮の溜息だった。

西宮はそのまま隣の紫に向き直り、

「……八雲様」

「……なにかしら？」

「……一縷の望みに賭けて聞きますが、この世界で外界の紙幣は使えますか？」

「……残念ながら。そうね、こちらの貨幣について説明してなかつたわ。説明しなくても予想はつくと思つてたんだけど……」

沈痛な二人の反応に焦つたのは当の早苗だ。

お年玉でも貯金していたのだろう。バイトもしていなかつた女子高生としては破格の資産である十枚近い諭吉さんを取り出し、焦つた表情で紫に問い合わせる。

「そんな……！ それじゃあ、この私の諭吉さん達は某世紀末救世主伝説における紙幣価値と同じ程度の価値しか無いんですか！？」

「……西宮君、通訳お願い」

「外の娯楽漫画の台詞で、『ヒヤツハーハーハー、ケツを拭く紙にもなりやしねえー』って奴です」

「あながち間違つてないわね……」

外界のサブカルチャーを引き合つて出しての早苗の言葉に、困惑した紫が西宮に通訳を要請。

西宮が返した言葉に紫が沈痛な言葉を返す。

それを聞いた早苗はブルブルと震えながら俯き、

「そ、それなら外に居た時にもつとお買い物をしていれば……。欲しかつたプラモとか超合金ロボとか色々我慢したのに……」

「そこで服とかアクセサリとか言い出さない辺りがお前だよな」

「……女の子としてその趣味は珍しいわね……つていうか貴方、こどじ」とく私の予想を越えてくれるわ。概ね斜め下に」

妖怪の賢者、そろそろ目の前の少女が自分の常識の範疇では捉えられない存在だと認識し始めていた。

ついでに里の入り口でワイワイ騒いでいる妖怪の賢者+見慣れぬ人間×2という、この不思議な一行に周囲からの視線が集まりつつ

あつた。

これ以上騒いで居れば、口うるさい人里の守護役辺りが出て来かねない。

そう判断した紫は溜息を吐きながら、里の中心部の方を指差した。

「向こうに霧雨道具店という大きな店があるわ。そこに外の世界の物を持って行けば、物によつては多少の値で換金してくれる筈よ。外の世界の物なら本当は魔法の森の近くの道具屋の方が専門なんだけど、ここからじや少し遠いし」

「……とりあえず今持つて来てるボールペンでも売りますか。団子代にはなるでしょ？」

「そうね、使える状態で流れて来てる外の品は珍しいからそれなりの値にはなるでしょう。他には日用品なども切れたらそこで買うと良いわ。いつぞやの半獣　　人里の守護者は寺小屋か自宅か分からないから何とも言えないけど、稗田の当主は家に居る筈だから挨拶をしたいなら方向も同じ。とりあえず中心部へ向かえば間違いは無いわね」

「じゃあ、布教は東風谷に任せるとか見せて人集めて勧誘するなら俺より東風谷が向いてるし、俺は換金と挨拶回りをしておく

「団子はそれが終わつてからですね」

当座の小銭程度はくれてやっても良かつたのだが、生憎と必要な物はその気になれば殆ど自力で入手可能なハ雲紫だ。

「まごました買い出しなども式神に任せている為、銭の持ち合せが生憎無い。まあこれまで十分世話を焼いたし、ここから先は地力で頑張つて貰おう。

そう判断して持ち物を買い取つてくれそうな場所を教えたところ、早苗と西宮はその情報を元に軽く相談し、そして二人同時に紫に向き直り頭を下げる。

「 紫さん、何から何までありがとうございました！」

「 八雲様、御恩は忘れません」

「ふふっ、気にしなくて良いの。私は私の目的があつて守矢を支援してるんですもの。でも礼儀正しい子は幻想郷には少ないから、そういう対応をされると新鮮ね。それじゃあ一人とも、頑張りなさい」

そう告げて、妖怪の賢者は足元に創ったスキマに消える。
それを見た周囲の人々は、妖怪の賢者が連れて来た外来人辺りなのかとアタリを付け、自分の仕事に戻つて行つた。

「さて、それじゃあここからが俺達の仕事か」

「 そうですね、頑張りましょう。私は広場辺りで布教活動を開始しますから、西宮は予定通りに稗田家と上白沢さん.....でしたつけ？そちらの方に挨拶回りをお願いします。後はボールペンの換金ですね。それが終わったら里の中央の方で落ち合いましょう」

「了解。頼むぜ東風谷、頼りにさせて貰う」

そして早苗と西宮は頷き合い、互いに行動を開始する。

神々の庇護下にあつた神社でもなく、ある意味で紫の保護下につたここまでの中とも違う。

彼ら二人からすれば、幻想郷にて彼ら自身の手で生きて行く為の第一歩だ。

「 信仰集めにはとりあえず奇跡を見せるつて事で、手つ取り早く海とか湖とかその他色々割ればいいでしょうか？」

「マニユアルを書いて渡すから5分待て極限馬鹿」

.....第一歩から踏み外しそうになつていた風祝が居たのは、それ

として。

#

色々と不安はあったものの、早苗に布教活動を任せた西宮は、ま
ずは里の中心部にある稗田家に来ていた。

しかし御阿礼の子と幻想郷縁起については紫から聞いていたもの
の、外の世界では高校生だった自分より若い少女が当代という事ま
では考えが至らなかつた西宮である。

当初は稗田の屋敷の入り口で屋敷の者に挨拶をして事情を話し、
当主に取り次いでくれるように頼んだのだが 少々待たされた
後に許可をされ、案内された部屋に居たのは儂げな雰囲気を纏つた
少女。

幻想郷の歴史や妖怪についての資料を纏めている家だと聞き、勝
手に厳格そうな老人を想像していた西宮は見事に呆けた。

「お待たせして申し訳ありません、外来の方。稗田家当主、
稗田阿求と申します」

「……はえ？」

思わず間の抜けた声を漏らした西宮に対し、阿求はその様子が
可笑しかつたのかころころと楽しそうに笑つた。

稗田阿求。赤紫の髪を持つ儂げな少女であり、稗田家の當
代。

『ごく最近に最新の幻想郷縁起を編纂し終えた所で時間があつたと
いう彼女は、屋敷の者から外来人が訪ねて來たという話を聞いて二
つ返事で会う事に決めたらしく、今はひとしきり最初の西宮の様子

を笑つた非礼を詫びた後に彼が持つて来た羊羹を茶菓子に彼の事情を聞いていた。

「成程。八雲紫が招いた外の神社の……」

「はい。かつての大和の時代には建御名方神と崇め奉られた八坂神奈子様、そして祟り神であるミシャグジ様の統括者であらせられる洩矢神、洩矢諏訪子様を祀らせて頂いております」

ちなみに阿求は昔何か嫌な事でもあったのか妖精に対しては些か辛辣なもの、それ以外は基本的には大人しく礼儀正しい少女である。転生と記憶の引き継ぎという要素もあるのだろう。十代の半ばに届くかどうかも怪しい年齢でありながら、大人びた雰囲気を纏つて西宮に対応していた。

対する西宮も早苗相手のぞんざいな対応が素の性格だが、必要であれば礼節に則った対応が出来る程度には世慣れしている。これは相方である早苗が暴走癖の持ち主であった為に培われたスキルだろう。

結果としてこの両者の対話は、非常に穏当かつ礼儀正しい物となつていた。

西宮が語る彼と神社の事情。そして妖怪の賢者である八雲紫がその手引きをした事について、阿求は手元の紙にすらすらと筆でメモを取つて行く。

「外の世界では神々に対する信仰も失われて久しいのですね。嘆かわしい事です」

「私も昔は神を信じていなかつたくらいですからね。当代の風祝相手に『神様なんて居るわけ無い』などと言って殴り合いの喧嘩になつたのが信仰の切つ掛けでしたから」

「あら……ちなみに勝敗は？」
「恥ずかしながら敗戦でした」

おどけて話す西宮の言葉に、阿求がくすくすと笑みを返す。

内心で『ああ、東風谷もこれくらい大人しく可愛かつたらなあ』などと思つ西宮。

ちなみに当の風祝が仮にその内心を聞いた場合、対応は『大人しく可愛くなろう』とするのではなく西宮への制裁のガゼルパンチであろう。気分と機嫌によつてはそこからテンプシーかりバー・ブローが繋がる。

「事情は分かりました。人里での布教活動は、里の人迷惑をかけない範囲でしたら問題無いでしょう。慧音さん 人里を守つて下さつている上白沢慧音さんは今日は少々用事で竹林の方に出向いていますので、彼女には私から言付けしておきます」

「助かります。それではこちらの羊羹も上白沢さんにお渡ししておいて下さい。後日改めて御挨拶伺います」

「分かりました、承りましょう」

そして阿求は西宮が慧音への挨拶の為に持つて来た羊羹（諏訪子秘藏）の包みを受け取り、穏やかに微笑んだ。

一瞬だけ物欲しそうな視線を羊羹に向けた事から察するに、西宮が持つて来た外の世界の高級和菓子店の羊羹は、どうやら阿礼乙女の舌に合つたようだ。

幾ら記憶の受け継ぎなどがあるとも、身体に精神年齢が引っ張られる側面もあるのだろうか。どうやら今代の御阿礼の子は甘党なようであった。

それに気付いた西宮が『うちにはもつありませんが、八雲様に頼めば入手可能かも知れませんよ』と伝えたところ、阿求は頬を僅か

に染める。

はしたない事をしたという自覚があるのだろう。咳払いをして話を本筋に引き戻す。

「ごほん。……えーと、稗田家が編纂している幻想郷縁起に、いざれその守矢神社の事を書かせて頂く事もあるでしょう。その際はまたお話を伺つても宜しいでしょつか？」

「はい。その折は神奈子様と諏訪子様ご自身の話を聞くのも良いかと思います」

「あとは現人神にして風祝であるという方にも話を聞いてみたいですね」

「……イメージがブチ壊れて良いならば止めはしません」

「……はあ。何だか良く分かりませんが……」

早苗についても当人に話を聞きたいと思つた阿求だつたが、西宮が遠い目をして眩いた言葉に首を傾げる。

八雲紫を戦慄させた脅威の総天然風祝だ。現人神という言葉からイメージされるその幻想をブチ殺してくれることは請け合ひだらう。

「ともあれまた伺う事もあるでしょう。その折は宜しくお願ひします。本田はお忙しい中、突然の訪問に快く応じて頂きありがとうございました」

「いえ、こちらこそ御丁寧にありがとうございました」

かくして守矢神社代表としてこの場に来た西宮と今代の御阿礼の子である阿求の初会談は終始和やかに終わつた。

当人達が社交辞令的に交わした再開の約束が果たされる事になるのは、当人達の予想よりも遙かに早い僅か数日後。

総天然風祝・東風谷早苗が守矢神社の他メンバー や紫の思惑の斜め右上に飛び出して、博麗神社にヒヤツハーと言わんばかりの勢い

で宣戦布告をした事に端を発する異変に関連する事となる。

#

そして西富が稗田家を辞してすぐ。

稗田家の近くにある大きな道具店の前 看板に大きく霧雨道具店と書かれた店の前を訪れていた。

成程、紫が日用品などが欲しければここだと推した理由が良く分かる。大きくしっかりした店は年季を感じさせる佇まいで、正しく老舗という雰囲気を醸し出していた。

長く続いた店であると言つことは、それだけで信頼が置けるという意味にも繋がる。流石に幻想郷内の物事を知り編纂するのが仕事の稗田家とは違い、いきなり当主に面会などは出来まいが、いずれ神社の側から挨拶に来るべきかも知れない。

そう考へている西富の後頭部に、不意にコツンと何かが当たったのはその時だ。

「……ん？」

「おこ、そこのアンタ。今後頭部に小石をぶつけられたアンタだ」

何かと思つて振り返つた西富の耳に、声を落としたソプラノボイスが入つて来る。

きょろきょろと見回すと、霧雨道具店からは死角になる家の影から手招きしている少女の姿があつた。

長い金髪に黒と白を基調としたエプロンドレス、そして魔女のような帽子と笄が印象的な快活そうな少女だ。年の頃は西富や早苗とそう変わるまい。

そして前後の言動から察するに、彼の後頭部にぶつかったのは小石で、それをぶつけたのは魔女風の少女 と言つ事だろ。

「糸田の兄さん。聞こえてるだろ？ 悪いがちょっと来てくれないか」

「……いきなり何だ？ 美人局や詐欺の類なら御免だぞ」

「違つての。頼む、少し頼まれてくれ。兄さん今、霧雨道具店に入らうとしてたろ？」

露骨に身を隠している魔女（推定）からの呼び出しに、警戒しながらも西富がそちらに近付く。

無論そのまま路地裏に連れ込まれるような事ががあれば即時離脱する心算で、重心はやや後ろに傾けて逃走準備は完了だ。

しかし少女も、自分が警戒されるような事をしていく直覚はあるのだろう。バツが悪そうに帽子の上から頭を搔き、

「そう警戒してくれるなよ。私は怪しこもんじやないぜ？」

「不審者ほどそう言うと俺は思うんだ」

「……あー、確かに道理だな。実際客観的に見りや今の私はかなり怪しいか。……訂正だ、怪しこけど悪い奴ぢゃないぜ。その証拠にまずは名乗ろう」

そして少女は西富に向けて笑みを向け、自分の名前を高らかに

ただし霧雨道具店の方には聞こえない程度の声音で名乗る。

「私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ」

「……霧雨？」

「……ああ。私がここに隠れている理由もそれだ」

そして西富が鸚鵡返しに返した自分の苗字に苦笑し、少女

霧雨魔理沙は霧雨道具店をちらりと見やる。

「実は私はあそこの家出娘でな。道具屋で換金したい品があるんだが、生憎私はあそこに入れない。アンタは里の人間じやないようにな見えたし、道具屋に行くついでに私の分も換金して来てくれないか？」

照れたようなバツが悪いような、そんな微苦笑を浮かべながら西宮を見上げる魔理沙。

これが幻想郷を代表する異変解決家の片割れ、霧雨魔理沙と西宮の初遭遇だった。

第五話・稗田家と霧雨道具店と（後書き）

と、いうわけで人里タイム。
阿求や魔理沙との初遭遇でした。魔理沙に関しては次回も少し出
張つて来ます。

第六話・ウサ耳フレザー医者見弱い（前書き）

今回は題名通りの人物が出て来ます。
置き薬つて便利なシステムですよね。

第六話・ウサ耳フレザーメン見習い

結局あの後、少々悩んだものの西宮は魔理沙の頼みを了承した。怪しいは怪しいが、彼女の家出少女という立場に対しても親との折り合いが悪かつた彼自身の環境を重ね、心情的に協力したくなつたからといつのが最大の物だろつ。

「……念の為聞くけど、売りたい物つて盗品とかじゃないよな？」
「違うぜ。まあパチュリーの本とかは死ぬまで借りたりしてるけど、これは借り物でもないしな。流石に実家に盗品売りつけるのは気が引けるぜ」

「死ぬまで借りるつてお前……」

死ぬまで借りると云つのは盗品と云つが違つのかと悩んだものの、他人の事情だという事もあるし、下手に突つ込むと藪蛇と判断。

『あまり他人様に迷惑かけるなよ』と一言軽く釘を刺す程度に留めて、魔理沙が持つて来ていた彼女が作つたらしい魔法のアイテム便利な日用品などだつた を受け取り換金に行く西宮。

神社側として人里の有力者に繋ぎを作つておきたい西宮としては不幸な事に、そして家出娘である魔理沙にとつては幸運な事に、道具店の店主 即ち魔理沙の父は不在。

マジックアイテムの出所について何か言われる事も無く、あつさりと換金は終了する。

どうやらボールペン（外の世界価格税込63円）は『便利な筆の一種』と判断されたらしく、それなりの高値となつた。

外の世界の品を持ちこんで売れば、それだけで幻想郷では一財産を作れそつだが……流石にそれは幻想郷のバランスを崩しかねない

行為である。

そもそも安定して行き来する手段が西宮の知る限りではハ雲紫に頼るくらいしか無いし、幻想郷のバランスを崩しかねない行為に彼女が加担するとも思えない。

あんな品が高く売れたならそれだけで儲け物と思つておこう。
そう判断した西宮が道具店から出ると、相変わらず道具店から死角になる位置から手招きをする魔理沙を発見。
そちらに向かう。

「卖れたぞ、家出娘」

「おう、感謝するぜ見知らぬ人。それじゃ悪いが少し移動しよう。
あんまり実家の前に長居はしたくないんでな」

「そして移動途中で路地裏を通りとした所で、俺は家出娘のボディーブローで気絶させられ身ぐるみを剥がされたのでした。ああ無常」

「お前はどんだけ私を信用していないんだ」

「冗談だ」

軽口を叩く西宮に呆れたような突っ込みを返しながら、魔理沙は道具店から少し離れるようにして里を歩く。ちなみに阿求や紫の前では礼儀を弁えて対応していただけで、こうして軽口を吐いている方が西宮としては素の姿だ。

そして奇しくも着いた先は、最初に早苗が諭吉さんを手に突撃しようとした茶屋だった。魔理沙が茶屋の椅子に腰かけた所で、西宮は魔理沙の持ち込んだマジックアイテムが売れた分の金を彼女に渡す。

受け取った魔理沙は簡単に金額の確認をしつつ、唇を尖らせて西宮に苦言を呈した。

「まあ私も最初に声をかけたシチュエーションが怪しかったのは認めるがな。ボディーブローって何だよボディーブローって。怪しく見られるのは百歩譲つて許すが、そんなガサツに見えるか？」

「その男じみた言葉遣いを鑑みると割とガサツな気もするが。まあボディーブロー程度俺からすればまだまだ有情だな。俺の幼馴染はハ雲様公認で『エイプキラー』として認められたぞ。素手でゴリラくらいなら殺せるらしい」

「ハ雲様……ああ、紫か。里の人間には見えなかつたが、お前さん紫が連れて来た外来人だな」

そこまで聞いた所で得心がいったように魔理沙が頷き、そして首を傾げる。

「エイプって何だ？ 動物か妖怪か何かか？」

「幻想郷には居ないのか。いや、居ても困るが。……こちら風に言つてしまえば化け猿の一種で、巨大な身体と強靭な身体能力を誇り、あと糞を投げる」

「それと素手で渡り合うか……お前の幼馴染つてスゲェな」

魔理沙の脳内でまだ見ぬ西宮の幼馴染が某世紀末救世主伝説的な巨漢になつた。

彼女の脳内では剛腕を振るう化け猿をそれを上回る剛腕で叩き潰す西宮の幼馴染が大暴れしている。脳内に浮かんだその光景に、豪胆な彼女にしては珍しく頬に冷や汗が一筋流れた。

実際に戦つたわけでも無く、紫はあくまで神力と靈力で身体能力を強化すれば『理論上は可能』という程度の意味合いで口に出した程度なのだが、それは魔理沙には分からぬ。

更に言つならば幻想郷に生息する非人間型の凶暴な妖怪を元にしたイメージの為、彼女脳内の『エイプ』は四本腕があつたり鋭い牙

で獲物を噛み千切つたりする凶獸モンスターとなつてゐる。

しかし流石は異変解決の専門家。『まあそういう奴も外界には極稀に居るのかもしれない』と思い、氣を取り直して田線を茶屋のお品書きへと向け直す。

「まあ何にせよ、ちよいと手間をかけさせてしまつたわけだしな。茶と団子くらいうら奢るぜ？」この団子は美味いんだ」

「氣持ちと誘いは嬉しいが、後でその幼馴染と来る約束もあるんでな。先に食つたと聞けば拗ねるだらうし、悪いが氣持ちだけ頂いておく」

「……その幼馴染とやらも來てるのか」

「ん？　ああ。來てるぞ」

顔色をさつと青くする魔理沙。彼女脳内では、まさかの世紀末救世主伝説が幻想入りである。

脳内に表示される映像は、巨大な黒い馬にまたがり幻想郷の大地を駆ける巨漢。

凄まじい光景だつた。紫は何を考えてそんなもんを幻想入りさせたのかと、魔理沙は妖怪の賢者の正氣を本氣で疑つた。

完全に勘違ひだつた。

「ちなみに」

そしてその勘違いにトドメを刺す言葉を、西宮が無自覚に呴いた。

「その幼馴染はウチの神社の巫女だ」

「ちょっと紫退治してくる」

遂には血相を変えて、結局何の注文もせずに茶屋から飛び出していく魔理沙。

彼女の脳内宇宙では腋見せ巫女服を纏つた巨漢の幻想入りの完成であった。西宮の説明不足と魔理沙の勘違い、そして二人の認識の相違から起こつた悲劇はかくして頂点クライマックスを迎える事になる。

正気を失つておかしなモノを幻想入りさせた（魔理沙視点。勘違い）妖怪の賢者・ハ雲紫を叩き伏せて正気に戻す為、普通の魔法使い・霧雨魔理沙、マヨヒガへの出陣であった。

「…お前とハ雲様の間で何があつたのかは知らないが、一度座つておきながら注文もせずに店を出るのはマナー悪くないか？」

「お前とその幼馴染の分の茶と団子代を先払い出してやる！ それで文句無いだろ！？ ええと……」

「ああ、名乗つていなかつたつけか」

既に簾に跨りながら、魔理沙がマジックアイテムの売り上げの中から幾許かの小銭を西宮にトスする。

それを受け取りながら、西宮は自分が名乗つていらない事に気付いて頷きを返す。

「西宮丈一。守矢神社の信者だ。良ければウチの神社を信仰してくれよ、魔法使い」

「……なるべく御遠慮させて頂きたいぜ。じゃあな、西宮。幻想郷の為にも私はもう行く。縁があればまた会おう」

本気で嫌そうな顔をしながら飛び去る魔理沙に、果たして何かそこまで信仰を嫌がれる要素があつたかと首を傾げる西宮。

結局この段階では魔理沙の勘違いは欠片も修正される事無く、やれ紫がトチ狂つたかと失礼な事を考えた魔理沙がマヨヒガに特攻をかける事になる。

『正気に戻れ紫！ 何か辛い事でもあつたのか！？ 私でも他の誰かにでも相談すれば良かつたのに！！』と涙ながらに叫ぶ普通の

魔法使いという光景に、八雲一家がいたく混乱するのは数時間後。たまたまマヨヒガに遊びに来ていた天衣無縫の亡靈こと西行寺幽々子が顛末を聞き、危うく成仏しそうなほど笑い転げる事になるエピソードの完成であった。

悲劇／喜劇の種を無意識に撒いた西宮はそんな事など全く気付かず、普通の魔法使いへの布教失敗という彼主觀で分かる唯一の事実を首を一つ振つて頭から追い出して、茶屋の奥へと声をかける。

店の前で注文もせずに騒いでいた魔理沙と西宮に対して、茶屋の店主と思しき男性が迷惑そうな視線を向けて来ていたが、

「すいません、連れが急用が出来たそつなんで帰つてしましました。別の連れを連れてすぐに来ますので、代金を先払いさせて頂いても宜しいですか？」

「毎度あり！ まあ払つて貰えるなら文句無いよ」

西宮が彼的には迷惑料の意味もあつて茶代の先払いを提案すると、茶屋の店主は一変してにこやかな笑みを浮かべて来た。

銭の偉大さは幻想郷の外も中も変わらんなどいう俗な感想と共に苦笑し、店主に世話をかけて申し訳ない旨を伝えて一割ほど多く銭を渡す。

幸いにして魔理沙は雑な勘定で西宮に茶代を放つたらしく、二人分どころか三人が茶と団子を頂いたとしてもお釣りがくるくらいの金額を貰っていたのでこの程度の出費は痛くない。

「……さて、ウチの風祝様はどこに居ますかね……つと

恐らく先の打ち合わせ通り、里の中心部辺りで布教活動をしているのだろう。

そう当たりをつけ、彼はそちらへと歩き出すのだった。

#

そして暫し後。

あの後西宮は風を操る奇跡を人々の前で見せて神奈子と諏訪子の神徳と御利益を説くと言う、西宮作成マニコアルに従つた至極真つ当かつ穩当な布教活動をしていた早苗をあつさり発見した。

どうやら神々への信仰／親交が深い幻想郷での布教活動は、外界での布教活動に比べて格段に色好い反応が返つて来たらしい。西宮が発見した段階から、早苗は大層御機嫌だった。

その後ひと段落がついた所で声をかけ、合流。先の茶屋へ向かつたのだが 現在並んで座つた茶屋の椅子の上で、早苗はそれ以上に御機嫌、といふか御満悦のご様子だつた。

「美味しかつたー。御馳走様でした！」

「太れ。肥える。食い過ぎだ東風谷」

「甘い物は別腹ですよ西宮。あと肥えろ言うな」

餡団子に醤油団子、餡蜜に何故か実験メニューとして茶屋の御品書きに並んでいた杏仁豆腐まで平らげた早苗に、西宮は舌打ちしながら毒を吐いている。

ちなみに杏仁豆腐は湖を越えた先にある屋敷の門番が教えてくれたメニューらしい。外の世界で食べたコンビニ売りの杏仁豆腐の何倍も美味かつた事は、西宮も認める所である。

「つたく、成り行きで貰つた茶代から完全に足が出たじやねえか」「良いじやないですか。ボールペン、高く売れたんでしょう?」

「まあな。当座の活動資金程度にはなるから、着替えが無いんで服程度は買つておきたい。後は 薬だな」

「薬?」

「ああ

西宮は早苗の言葉に頷いて、懐からメモ帳を取りだした。

紫から聞いた幻想郷内の簡単な地理と情勢が書かれたメモ帳だ。売ったのとは別のボールペンを取り出して、今聞いた『杏仁豆腐の作り方を教えてくれた門番』が居る屋敷は推定『紅魔館』と呼ばれる屋敷だろう旨を書き加えた。

そして横に座る早苗に地図の表示されたページを示し、その紅魔館とは別の位置 竹林の奥にある屋敷の図をペンで差す。

「神奈子様や諭訪子様と違つて俺らは脆弱な人間だからな。それも幻想郷では風邪引いたから気軽に病院に…… というわけにもいかないだろう。幸いにしてこの永遠亭なる所には名医が住んでいて、その名医の弟子が置き薬の販売を行つてゐるって話だ。頼んで神社に置き薬を常備させて貰えたらと思つてる」

「まあ確かに。備えあれば嬉しいなとも言いますしね

「嬉しくてじうする、このゆとり世代」

「貴方同年代じゃないですか、このゆとり世代」

丁々発止と会話のアッジボールを交わしながらも、しかし西宮が言った言葉には早苗も賛成らしい。

布教活動が最優先だが、自分達が体調を崩しなどすればその布教活動に遅れが生じる。ならば故にこそ、先んじて憂いは潰しておくべきだろうといふ考え方か。

ともあれ早苗も西宮の言葉に頷き、同意の念を表明して腰を上ぐる。

「それじゃ、広場で一通り御一柱の神徳も説き終わりましたし……今日は後は買い物と、その永遠亭つて所へ行つたら帰りますか」

「いや……一つ問題があつてな。永遠亭の周囲にあるのは迷いの竹林つつて、入る人を惑わす不思議な竹林らしい。俺らが行つて辿り着けるかどうか……」

「何でそんな場所に居を構えてるんですか、医者。不便極まりないでしょう」

「俺に言つなよ」

困つたように言つながらも西富も早苗を追つて腰を上げ、『すいません、お勘定お願ひします』と店の奥の店主に声をかける。

「困りましたね。永遠亭に行かないと薬は手に入らないんでしょうが？」

「何ですか、お密さん。竹林のお医者様にじつ用事ですか？」
「え？　はい。置き薬が欲しくて……」

そして勘定の為に近付いて来た店主が、早苗の言葉を耳にして言葉を挟んで来る。

勘定を先に終わらせると店主は事情を聞き、少し待つていて下さいと言つて店の奥に消えて行つた。

何かあるのかと話しながら、西富と早苗が待つ事少し。店主が『良かつた良かつた』と笑顔で一人の前に戻つて来た。

「お密さん、運が良いですね。うちにも竹林のお医者様の置き薬があるんですが、その置き薬に書いてある集金スケジュールによると、お医者様のお弟子さんが置き薬の集金に来るのが丁度今日ですよ。もう少し待つて頂ければ來るのでないかと思います」

「集金？　えーと、どういう事でしょ？」

「置き薬つてのは薬箱を各家庭に置いておいて貰つて、定期的に業

者が回つて使つた分だけを集金・補充するつてシステムなんだよ

置き薬というシステムを良く分かつていなかつたらしい早苗の言葉に西宮が補足を入れる。

その補足に店主が頷き、早苗と西宮に問いかける。

「どうでしょ? お一方、特にそちらのお嬢さんには随分食べて頂きましたしね。良ければお医者様のお弟子さんが来るまでお待ちになれますか?」

「良いんですか?」

「構いませんとも。その代わり、今後も御贔屓にお願いします」

「ええ、是非とも! それじゃあ店主さん、あの杏仁豆腐もう一つお願ひします!」

早苗の元気の良い宣言。店主が『してやつたり』といつ笑みを浮かべた。
商売上手な事だと内心で思いながら、西宮はその笑みに対しても苦笑。

店主の提案は彼らとしても渡りに船だつたし、こいつは商人らしい嫌いではないので特に悪感情は無い。しかしあつせりと商人の思惑に乗つて追加注文をする早苗に対しては小さく苦言を呴す事にする。

「絶対に太るだらうな」

「太りませんってば」

「やにやと笑みを浮かべながらの彼の言葉に、ぶすっと頬を膨らませた早苗がそっぽを向く。

それを見た店主は『仲の宜しい事で』と西宮と早苗からすればまだ不本意な台詞を残し、注文された品を作りに奥に引っ込んで行つ

た。

「……あー、じゃあ俺は適当な服を買いに行つて来るから、お前はいいで待つてくれ。すぐ戻るけど、もし俺が居ない間に医者の弟子が来たら頼む」

「分かりました。あ、杏仁豆腐と……あとその他にも何か適当に食べれる分だけお金置いて下せよ」

「……まだ食う気が」

その店主の背を見送った後、待ち時間の間に適当な所で服を買おうと西宮が席を立ち、早苗が食費を要求する。呆れながらも小銭を早苗に渡すと、西宮はそのまま場を立ち去った。

#

そして数十分後。

「ぐく適当に服を購入して来た西宮が店に戻ると、早苗の横には団子や杏仁豆腐の器が幾つも積まれていた。

「ぎんなりとする西宮が声をかけると、嬉しそうな笑みと共に早苗が振り返る。

「あ、西宮。間に合いましたね。今丁度そのお医者さんのお弟子さんが、店主さんの家の置き薬を確認に行つてる所です。私達の用事はそれが終わつたら話を聞くとの事でしたよ」

「うわ、ギリギリセーフだつたか」

「ええ。あと、そのお医者さんのお弟子さん 鈴仙さんといつ

方がですね。驚いた事にブレザー姿だったんですよ」

「ブレザー？…………って、外の世界の？」

「ええ。流石にウチの学校の制服とは少し違いましたけど」「はあ……そりやまた、なんとも」

早苗から聞いた言葉に、西富が呆れたような感心したかのような声を上げる。

彼が驚いた様子なのに気を良くしたのだろう。自分の事でも無いのに胸を張り、何故か誇らしげに早苗は追加情報を披露する。

「しかもウサ耳です。バニーちゃんですよ。凄いですね幻想郷」「ウサ耳ブレザー医者見習いか……凄いな幻想郷」

『幻想郷すげえ』といつ線で合意する一人。

そこに店の奥の方から話し声が聞こえて来る。片方は茶屋の店主の声。もう片方は西富には聞き覚えが無い、早苗からすれば先程聞いたばかりの女性の声だ。

「はい。では確かに頂きました。それではまた一ヶ月後に伺います」

「一、二のやり取りの後にそう話を締めくくった女性 西富曰くウサ耳ブレザー医者見習いが、店の奥から早苗達の方に近付いて来る。

長い紫銀色の髪とウサ耳、そしてブレザー姿の人物だ。本当に聞いていた通りの姿だつた事に、西富が僅かに表情に驚きを出し、対する早苗は何故か僅かに誇らしげにする。別に自分が凄いわけでもあるまいに。

「『めんなさい、早苗さんでしたよね。お待たせしました……つて、あれ？ 増える？』

「あ、すいません。コレ私の連れです。用事があつて席を外してたんですけど今戻つてきまして」

「コレ言つた駄風祝。申し訳ありません、俺は西宮丈一と言います。俺達はこの度妖怪の山の上に越して來た外来人ですが、置き薬を頂きたいのでお話を伺いたいのですが、お時間宜しいですか？」

西宮の言葉を聞いたウサ耳ブレザー医者見習いは『妖怪の山に?』と疑問を表情に浮かべたが、彼女　　永遠亭の妖怪兎、鈴仙・優曇華院・イナバは元より他人の事情に深入りするタイプではない。むしろ他人とのコミュニケーションを苦手とするタイプだ。

別に聞くような事でも無いかと氣を取り直し、事務的に目の前の二人に対応を始める。

「場所が少々特殊ですが……薬をお求めなら、師匠に話を通しておきます。置き薬に入れて欲しい薬の種類などでご希望はありますか?」

「私達、外から來たばかりなんですけど……薬の種類つて外の世界と変わらないんですか?」

「師匠は凄いですからね。事によると外の世界で手に入らない薬もあると思いますよ」

事務的ながら、師匠の事を話すときだけは自分の事のよつに誇らしげに語る鈴仙。

さぞやその師匠を尊敬しているのだろうと思いつながら、早苗と西宮は互いに顔を見合わせる。

「うーん……お互い持病持ちでもありませんしねえ」

「特別欲しい薬つても無いよな。他の家庭と同じ感じで基本セツトみたいなのがあれば　　あ、いや待て。外の世界に無い薬つてんなら、俺ずっと欲しかった薬がある」

「あ、奇遇ですね。そう言われてみれば私もずっと欲しかった薬があるんです」

二人の言葉に鈴仙は『あれ？ こいつら同棲してんの？』と僅かに好奇心を覚えるが、突つ込んだ事情を聞くのも憚れたのでスルーした。これが比較的常識的な感性と他人とのコミュニケーションが苦手な性格を持つ鈴仙だったからまだ良いものの、某最速天狗辺りが聞いていたらさぞや大変な事になっていたであろう。

ともあれそんな彼女に対して、早苗と西富は満面の笑顔で互いを指差しながら同時に言った。

「馬鹿まづに付ける薬をください…」
「扱つておりません」

ああ、こいつら馬鹿だ。同レベルで馬鹿だ。
鈴仙・優曇華院・イナバ。彼女がファーストコンタクトで東風谷早苗と西富丈一に抱いた印象は、概ねそのような物だった。

第六話・ウサ耳フレザー医者見習い（後書き）

ちなみに西宮の口調はある程度相手によって変わっています。友達感覚だと早苗や魔理沙を相手にする時のようになり、限界まで礼儀に気を使うと阿求を相手にした時のような口調に。鈴仙相手はその中間くらいですかね？

第七話：“里に最も近い”天狗（前書き）

風神録に入る前に、彼らの立場や天狗の立場などについて。割と独自解釈満載ですね。

特に文の立場と性格についてはその色が強いかもしません。でもプロットを見るに文の出番は今後多くなりそうです。

追記：あ、祓の口調が二次創作界隈で時々見る『～ツス』口調になつたのは、他のキャラとの口調の差別化の為です。

第七話：“里に最も近い”天狗

結局妖怪の山の頂上と場所は流石に鈴仙が置き薬の確認に行くのも一苦労である為、『置き薬としてのシステムで運用するかは確約はできなけれど、師匠に掛け合つてみる』と言う線で鈴仙と早苗・西宮は合意。

仮に鈴仙か他の永遠亭の者が届けに行く場合、天狗や河童と揉める可能性がある為、後日西宮か早苗が永遠亭を訪れる事にして話は終わった。

そして布教の手応えが良かつた事に満足し、余り遅くなる前に神社へ戻る事にした二人。

ちなみに西宮は良い感じにボロボロであり、打撲箇所には早速試供品として鈴仙が提供してくれた湿布が張られていた。

理由は単純。互いを馬鹿と笑顔で表現した上で、寸分の狂いも無く全く同時に『馬鹿に付ける薬』を求めた直後に、第何次とも知れない宗教戦争（物理）が勃発したのだ。

同宗派同士の悲しき宗教戦争は、キリスト教のプロテスタントとカトリックの争いの歴史を 全く想起させる事の無い單なる醜い痴話喧嘩として鈴仙と茶屋の主人に受け入れられた。

その後周囲に出来たギャラリーのトトカルチョを受けながらも、関節を極めようとした西宮の腕を逆に早苗が極めた辺りで西宮がギブアップ。毎度の如く勝者は早苗と相成った。

付き合い良く最後までギャラリーをしていた鈴仙に治療される西宮を前に、勝者として守矢神社の名を喧伝する早苗は布教者の鑑だつたと言えよう。ちなみにトトカルチョの胴元として儲けていた茶屋の主人は商売人の鑑であつた。

ちなみにそんな騒ぎが終わった後、浮くしか出来ない西宮の手を早苗が握つて二人一緒に妖怪の山に帰つて行く光景を見ながら、鈴仙が『あいつらの関係つて結局何なの……？』と真剣に悩んでいたのは別の話。

ともあれ斯様に色々な事があつた幻想入り一日目。

早苗と彼女に腕を引かれた西宮は日が暮れる前に神社に帰りつくが、そこで神奈子や諏訪子と言葉を交わしていた見知らぬ少女二人と顔を合わせる事になる。

「あやややや？ 彼らが先程仰つていた風祝と信者さんですか」

「ども、はじめまして。お邪魔してるツス」

神社の本殿。そこで神奈子と諏訪子の二人に対面していたのは背中に漆黒の翼を生やしたワイスシャツにプリーツスカートといった現代衣装の黒髪の少女と、こちらは和装の犬耳と犬尻尾を生やした銀髪の少女だ。

銀髪犬耳はともかく、黒髪羽根付きの方は強い妖力を纏っているのが早苗や西宮にも感じられる。

そして山の妖怪かと当たりをつけながらも会釈をする早苗と西宮に対し、慇懃な態度で　ただし西宮などに言わせれば、値踏みするかのような視線を存分に乗せた慇懃無礼な態度で挨拶を返したのは黒髪の方の少女である。

「お初にお目にかかります。私、妖怪の山の鳥天狗にして新聞記者。清く正しい射命丸こと、射命丸文と申します。文々。新聞と合わせてどうぞお引き立ての程を宜しくお願ひします」

「白狼天狗の犬走査ツス。宜しくお願ひするツス」

次いで銀髪の少女 犬走桜も一礼する。こちらは実直な性格が前面に出ているが、きょとんとした表情で尻尾をゆっくり左右に振っている様子からは警戒心は見えない。

どうにもチグハグなコンビであった。

「御丁寧にありがとうございます。風祝の東風谷早苗と申します」

「……守矢神社が信者、西富丈一と申します。天狗様達におかれましては御機嫌麗しゅう」

そんな彼女達に対して早苗は明るく笑顔で挨拶を返し、西富は警戒心を殊更に表にして腰の低い挨拶を返す。

その様子に楽しそうに目を細めたのは射命丸だ。

にい、と口元に嫌な笑みを浮かべる姿は、果たして彼女の値踏みが高かつたのか低かつたのか。

「 成程。これはまた随分と面白そうな方々のようですね」

「あー、確かに実直馬鹿そうなのと扱い辛そうなのがセットである意味釣り合い取れて おフツ！？」

そしてシリアルスに口の端を僅かに上げたニヒルな笑みを浮かべた文の横で、桜が笑顔でシリアルスブチ壊しの失言を吐こうとした所、文の右手が物凄い速度でブレると同時に打撃音が桜の脇腹辺りで破裂する。

キヨトンとした表情の早苗と、憮然とした表情の神奈子。そして笑いを堪えている諏訪子と、呆れが顔に出た西富。

四者四様の視線を受けながらも崩れ落ちる桜の身体を支え、文は額の汗を拭う仕草を見せる。

「いやあ、神罰つてあるんですね。八坂様と洩矢様の信者であるお二人に暴言を吐こうとした馬鹿犬に罰が下ったのでしょうか

「……右フックが神罰か、斬新だな」

「はてさて、何の事やら」

責めるよつた神奈子の言葉に羽扇で口元を隠しながら、文は飄々とした様子で立ち上がり、口から泡を吐いている柾の足を掴む。

そのまま一柱と二人に一礼し、

「それでは色々と興味深いお話も聞けた事ですし、お暇しましょう。

今現在、この神社の様子は山の妖怪中の注目の的です。身の

振り方には御気を付け下さい」

「ああ、ああ。分かつてると天狗。其方の忠言ありがたく思つ

と、神奈子と互いにどこか非友好的な視線を交わしながら、ずるずると柾を引き摺つて去つて行く。

本殿から外に出る際に段差から落ちた柾が頭部を地面に打ち、『ヘグゥ』という偶蹄目系の悲鳴を上げたがガン無視。潔いまでの扱いのぞんざいぶりであった。

そして文（+足を掴まれた柾）が妖怪の山、天狗の集落へと飛び去つたのを見送つてから神奈子が溜息を吐く。

「厄介な話だ。天狗は随分と私達が邪魔らしい。河童や他の八百万の神々の反応は悪くないのだがな」

「今のは偵察と警告の意味があつたんだろうね。でも私は今の天狗……射命丸だつけ？　あいつは嫌いじゃないね。取材の名目で乗り込んで来て私と神奈子から直接話を聞こうだなんて、八雲から聞いてた異変を起こしそうともしない天狗達の中では、中々ビデウして肝が据わつてゐるじやないか」

神奈子の溜息に対しても諷訪子が楽しそうに笑い声を返す。

そして本殿入り口に立つたままだつた西宮と早苗に『まあ座りなよ』と声をかけ、彼女はすたすたと社務所に入つて行つた。

早苗と両親が生活していた母屋はこちらに来ていないが、本殿併設の社務所は神社本体と一緒に幻想入りして来ていた。

客間や布団もある為、現在彼ら四人は適当にそちらで暮らしている現状だ。リビングなどは無い為、食事を本殿で取るのはどうにかならないのかと言つ氣もするが。

ともあれ社務所に入つて行つた諏訪子は、程無く盆の上に湯気をあげるカツプラーメンを四つ乗せて戻つて来る。

何を隠そうこのカツプラーメン、幻想入りするにあたつて神々と早苗が知恵を絞つて『必要だろ?』と大人買いして社務所に持ち込んだ物だ。

靈術なり神術なりで火でも起こして湯さえ沸かせれば食べられるので当座の食料としては悪くは無いが、食料より先に考へる事があつたのではと真剣に思う西宮だった。

神奈子は知恵は回るし蛇を象徴とする神らしく狡猾だが、基本的に大雜把である。諏訪子は祟り神らしく本氣で知恵を使えば悪辣とすら言える手腕を發揮するが、生活面などでは駄目駄目だ。早苗に至つては雑事を西宮任せにしていた事もあり、物事を深く考へない悪癖がある。

はつきり言つてしまえば、生活面に関する細々とした雑事が得意な人材が西宮以外に居ないのである。

「……本気で俺、ついて来て良かつたわ……」

「なんだい丈一、唐突に」

「いや、ぶっちゃけ俺が居ないとこの神社、生活面の雑事に向いた人材が居ないなーと思いまして……って言うか何でカツプ麺買い込んでて他何も用意してねえんですか」

「そう言うな丈」。カップ麺は美味かろ?」「

「神奈子様、何で神様がそんなに美味そうにカップ麺食つてるんですか。つていうか何で食い慣れてるんですか」

「私がちょくちょく奉納してましたからねー」

「もう少し奉納するもん考えろよ。神様にカップ麺捧げる風祝なんて聞いた事ねえよ」

「すゞぞぞ」という音と共に、神社の本殿に車座に座った四名はカップ麺をかつ込む。

そのうち三名が軍神、祟り神、現人神だとは誰も思つまい光景だった。

「ともあれ食事がカップ麺のみとはいえ、貴重な団欒の時間である。話題になつたのはやはり一つ。神奈子と諏訪子が居残つた神社側で見た妖怪の山側の反応と、早苗と西宮が行つた人里での布教活動だ。

「妖怪の山は先にも言つた通り、天狗以外は割と良い反応だ。ただ天狗に関しては、やはり山を統べて来たというプライドがあるのだろうな。反発しつつも八雲や私達の力があるから表立つては動いていい……と言う所か。先の天狗は非主流派と考えるべきだろう。というかアレが主流派なら、八雲が私達を呼ばんでも天狗が勝手に異変を起こしている筈だ」

「まあね。基本的に強い相手には媚びへつらうんだよね、天狗って。そういう意味で敵情視察みたいな事をやつてのけたあの天狗は割と変わり者だと思うよ。それに力も相当強い。韜晦しているけど、大天狗格の能力はあると見たね」

「山の方はやはり天狗の存在がネックになるか。神奈子と諏訪子は互いにそう結論付けつつも、先の射命丸という天狗に対して意見を

交わしていた。

その場に居る彼らのいづれも知らない事だが、その意見は概ね正解である。

射命丸文。彼女は御歳千歳を越える山でも古参の大妖怪でありながらも、強い好奇心の赴くままに多くの人妖と接触を持つている、ある意味では閉鎖的な天狗社会における異端児だ。

“里に最も近い天狗”という一つ名は、しかしある意味では“山から最も遠い天狗”という意味と表裏一体である。

並の大天狗を凌駕する実力を持ちながらも山の幹部という立場に興味を示さず、未だに新聞を作つて自由勝手に飛び回る鳥天狗とう立場に甘んじている辺りからも、彼女の性格とスタンスが分かると言つ物だろう。

山の秩序を乱す事は無く山の一員としての役目はきっちりと果たして居るもの、その性格ゆえに上層部受けが悪いのが射命丸文だ。神奈子や諭訪子の推察は正解である。

ちなみにプライドは高く他者を見下す傾向が強く狡猾だが、反面下の者に対しては見下しながらも面倒見は良いといつ不思議な性格なので、後輩受けは割と良い。

些か御脳が花畠傾向があるものの、哨戒天狗としてはこの上無い能力である“千里先まで見通す程度の能力”を持つ犬走査も、文に懷いている一人である。

ちなみに御脳の花畠ぶりに関しては先の本殿での一件を見れば分かるだろう。御覧の有様である。

「大天狗や天魔といった天狗上層部は保守派で消極的敵対傾向。他は概ね友好的。ですが射命丸女史のようなイレギュラーに関しては不明という事ですね」

「そうなるな」

御馳走様ですと箸とカツプ麺を置いた西富が言つた言葉に、神奈子が頷きを返す。

山に関しては以上だと付け加えながら彼女も箸とカツプ麺を置いた所で、話を引き継いこうとしたのは早苗だ。が

「ずぞぞー」

「良いから食つてろ。俺が話す」

まだ食べる方に忙しい彼女、麺を口に入れたままモゴモゴと口を動かすだけであった。

一日前までは花の女子高生だった身としてそれはどうよという視線を三方から受けた早苗だが、怯んだ様子も無く西富の言葉に頷いた。ある意味肝の据わり具合では彼女がこのメンバー中随一かもしれない。

「人里の方の感触は良好ですね。外と違つて幻想が生きているこの世界、人々と神は伝え聞く大和の時代に似た、或いはそれ以上に距離の近い関係を持つています。お一人の力と神徳と御利益を説いて回れば、徐々に信仰を集めるのは可能だと思います」

「八雲が言つてた里の有力者の反応は?」

「稗田の当主の阿求様は大変良くして下さいました。上白沢様に関しては不在でしたので何とも。阿求様が言伝を引き受けて下さいましたが、明日にでも改めて挨拶に伺おうと思つております」

「そうか。そちらは任せる、丈一」

「御意に」

一通り話し終え、神奈子の一任を受けた西富が頭を下げる。

フランクな諭訪子や信仰心こそ比類無いがどこか一本抜けている

早苗が混ざる時と違い、この一人だけで会話をやせると非常に威厳のある神とその信徒っぽく見える。

それ故に神奈子がこの類のやり取りを好んでいるのは、彼女だけの秘密である。この軍神、この手の神様っぽい威厳のあるやり取りが好きなのだ。

「私と諏訪子は明日もこの場に留まり、妖怪や他の神々と面識を得て交流を深める事にする。人里に関しては万事お前の思うようにするが良い。早苗は丈一の言葉を良く聞いて動くよう」

「分かりました、神奈子様」

神奈子から告げられた言葉に早苗も反発しない。

しおりちゅうぶつかり合う彼女と西宮だが、それは早苗が西宮を信用していない事を意味しない。

むしろ長年の付き合い故に、この手の事には西宮の方が自分よりも長けている事を彼女は直感で理解している。

そして神奈子の指示に従い、翌日以降も彼らは人里を中心に信仰を広める為に活動する事になる。

その布教活動は極めて順調に進み　　しかし物事とは得てして

順調に行っている時こそ落とし穴がある物である。

順調に行き過ぎているが故に、早苗がついつい領分を見誤り、自分が侵すべきではない領分　　博麗神社にちよっかいをかけるのは少し後の話である。

「へぐう……何だつたんスかね。何か急に右脇腹にフックを食らつ

#

たような激痛が走つて意識が刈り取られたんスが

「神罰ね。神前でその信者に対して不躾な物言いをしようとしたから罰でも当たつたんでしょ」

「マジっスか。うわあ怖い、神様怖い。信仰しようかなあ

「今は止めておきなさい。上が煩いわよ」

同刻。

神社を辞して天狗の里へ戻る途中で、息を吹き返した柵と文が言葉を交わしていた。

幸い神社と里の延長線上には巨大な靈樹があるので、それを目印に飛べば分かり易い。

そして語る内容は無論、先の神社で聞いた神々の話だ。

「八雲紫が彼女達を呼んだ。それは即ち、八雲紫が私達天狗だけでは妖怪の山は成り立たないと判断したと言う事。全く、上層部も素直に八雲の言う事を聞いてれば良かつたのに……」

「文さんは賢者様の味方なんスか?」

「私は天狗の味方よ、柵。だからこそ 天狗の力を保つ為にも八雲の提案を受けて異変を起こすべきだったと言つてるの。そうすれば天狗は自分達の力を幻想郷に示せる。八雲は幻想郷内のパワーバランスが取れる。WIN・WINの関係で万事丸く収まつてた筈なのよ」

「もうちょい分かり易く頼むツス

「つまり今の天狗は、舵取りを間違つて危ない立場なのよ。このままじゃ外から来たあの神々の下に甘んじる事になりかねない……いえ、ここまで失策した以上それも已む得ないかも知れない。でもその中で可能な限り天狗の立場を高く保つためには……」

ぶつぶつと呟きながら思考に没頭する文に、既に足首を掴まれているのではなく自力で飛行しながら柵は問いかける。

「あの神社の神様をやつつけて追い出すってのは駄目なんスか？」

「現実的じゃないわ。見たでしょ、あの神々。建御名方神と洩矢神。それも神々への信仰が色濃く残る幻想郷に来た事で、往時の力を取り戻しつつある。しかもハ雲も今は向こうの味方。鬼……伊吹の萃香さんや西行寺の亡靈姫も、ハ雲が向こうに付くなら恐らく敵に回るわ」

「あー、言われてみれば。それに風祝でしたつけ。他の人も結構な靈力を感じたツスしねー」

得心したと言う様子の桺の言葉に、文が苦笑する。

頷きながらも、しかし出てきた言葉は否定の色が濃い物だ。

「風祝はそこまで怖くないわ。確かに人間としては破格だろうけど、博麗に比べれば大きく劣る。経験を積めばまだしも、今は同じ人間でも霧雨や十六夜にも劣るでしょうね。一対一ならスペルカード戦でも、スペルカードを用いない原初の殺し合いでも私一人で倒し得る。どちらかつて言うと私は隣に居た人間の方が面倒そうに感じたわね」

「そうツスか？ そつちの子は靈力の感じから察するに、ボクより弱いくらいだつたツスよ？ 特に武芸を齧つてる様子も見受けられなかつたツスし」

「 桃。私達が、天狗が、妖怪が、そして神々が幻想に追いやられたのは誰の力？」

「…………え？ んーと…………」

「人間よ。小賢しく知恵の回る外の世界の下等な人間が、その知恵を以てして私達幻想を追いやつた。そして太古の大和では、人々は力ガクという力を持たずとも私達のような妖怪を退治する力を持つていた」

憎悪のような憧れのような、嫌惡のような恋慕のような。

文が外の人間を語る時に浮かべた表情は斯様に非常に複雑な物であつたが、榊にも分かつ事が一つ。

射命丸文は人間を下等と評しながらも、彼らが持つ知恵と力を決して侮つてはいない。

そしてその彼女が西宮を評して曰く、

「あの子は私を見て警戒しながらも、あの場で私が隠さず出していた妖力に力の差を感じながらも、怯えは見せず見返して来た。あの目はね、榊。太古の大和で妖怪相手に一步も引かずに戦った、諦めが悪く馬鹿で意地つ張りで　　そして妖怪にとつて人間が最も愛おしかつた時代の人々と同じ類の目よ」

第七話：“里に最も近い”天狗（後書き）

今回は射命丸タイムだった気がします。

今作における彼女の立ち位置はご覧の通り。天狗の中では非主流派でありながら、天狗屈指の実力者です。

桜に関してはダブルスポイラーデの設定より、風神錄後の二次創作界隈で多かつた文に懐いている後輩ポジションで。ボクっ子は正義。

ちなみに西宮に関してはこれといって能力を持たせようとは考えていません。文が最後に言っていた通り、知恵と諦めの悪さと意地が最大の武器です。

弾幕とかやる時は、守矢のお札とかを使う劣化早苗さんなスペックになると思われます。

第八話・人里の守護者（前書き）

さて、今回で風神録前準備篇は終了。
次回か次の次辺りから風神録の入りとなります。

けーね先生と藍様、どうにも口調が似てしまいますね。反省。

第八話・人里の守護者

翌日、早朝から早苗は弾道ミサイルよろしく凄まじい勢いで布教活動に飛び出して行つた。

外の世界で失敗続きだった布教が、こちらでは上手く行つてするのが楽しくて仕方ないのだろう。

朝食のカツブ麺（シーフード味）をかき込み終わつてすぐに出撃した満面の笑顔の早苗に手を掴まれて、引っ張られて行く西宮の悲鳴。それをドップラー効果付きで聞きながら、神々は朝早すぎてぐつすり寝ていた。

そしてそんな二人が再び到着した人里前。

着地と言つより着弾と表現した方が良い勢いで到着した彼らに、眠そうな顔で立っていた里の門衛が驚いた表情を向けて来る。

ちなみに綺麗に着地した早苗に対して、着地失敗した西宮は地面に突っ伏すように転がっていた。

「……そのうち泣かす
「出来るもんですか」

転がつたままの西宮の呪詛に対し、ふふんと鼻で笑つた早苗が門衛に挨拶をしつつスタッフと人里に入つて行つた。
彼女が去つて程無く、躊躇いがちに門衛が西宮に近付いて声をかける。

「……喧嘩でもしたのか？」
「……ええ。概ね四六時中喧嘩してゐるようなもんです」

立ち上がつた西宮は服についた土埃を払いながら立ちあがる。

ちなみに今日の服装は里で買ったジーンズとシャツ姿だ。

何故明らかに外の世界らしき服装が売つてゐるのかと驚いた西宮だつたが、魔法の森に住む人形遣いが資金稼ぎの為に時々外の世界の衣装を真似て縫つては売りに来るらしい。外の洋服に慣れていた西宮としてはありがたい事である。

ともあれ彼も里に用事があるので、門衛に挨拶をして里に入る。

今日の彼の目標は一つ。

人里の守護者である上白沢慧音への挨拶と、昨日神社の中を整理して気付いた足りない日用品などの買い足しだ。

ちなみに社務所に軽く三百を越えるカツラーメンが仕舞われていた時には、『こいつらいつの間にこれだけの事を』と思うのと同時に、『これしか買ってねえのかよ…?』と西宮が叫んだのは昨日の事であった。

何にせよ件の上白沢慧音女史の家に一度伺つてみると、里の中央へ向かつて歩き始める西宮。

しかし里の中央にこそ何事も無く到着したものの、商店が立ち並ぶ区画で横合いから声をかけられる事になる。

「む、君は確か守矢神社の」

「あ、八雲様の所の……八雲藍様でしたか」

物珍しそうに周囲を見ながら歩いていた西宮に声をかけてきたのは、八雲紫の式神 西宮視点では早苗と喧嘩している間にいつの間にか居なくなつっていた、美人の九尾さんだ。

豆腐屋の前で何か買い物をしている様子の彼女の名は伝え聞いているので、西宮は名前を呼びつつ頭を下げる。

彼からすれば、仕える神である神奈子と諏訪子に幻想入りという

選択肢を与えてくれた紫は恩人だ。その式神である藍もまた、敬意を払うに足る相手だと判断していた。

しかし頭を下げた彼に、藍は驚いた様子で瞠目する。その様子に西宮は、何かおかしな点でもあったかと首を傾げる。

「……何がありましたか？」

「ああ、いやすまない。失礼な話だが、私が君に抱いている印象と少々そぐわなかつたものでね。風祝相手の喧嘩と昨日の魔理沙の襲撃もあって、君はもう少し天衣無縫な少年だと思っていたのだが」「東風谷との喧嘩はライフワークの一種なのでさて置きますが、魔理沙の襲撃……ですか？ 確かに昨日の別れ際に、八雲様を退治するとか息ましてましたが……」

「……ああ、その様子を見ると本当に勘違いとすれ違ひの産物だったか……」

本気で悩む彼の様子に、藍は疲れたように肩を落とす。

魔理沙の襲撃　　それは一言で言えば以前の魔理沙と西宮の会話が原因による、藍の言つ通りの感違いとすれ違ひの産物だ。

『世紀末巫女王伝説』守矢の拳^{アマミヤ}とでも言つようなブツを紫が幻想入りさせたと勘違いした魔理沙が、紫を正気に戻す為に決死の覚悟でマヨヒガに乗り込んで行つた件であつた。

折しも藍の式神の橙やら白玉楼から来た幽々子と妖夢の主従やらも一緒に団欒中だつたハ雲家、その襲撃にいたく混乱。

突然の襲撃者を反射的に切り捨てよつとする妖夢が相手が魔理沙である事に気付いて、慌てて刀を止めようとしたら止め切れずにハ雲家の襖を綺麗に真つ二つにしたり、驚いた橙が味噌汁を被つて七転八倒したり、幽々子は何事も無かつたかのように食事を続行しておかわりを要求したり、藍がそれらの三者への対応に苦慮したりと、ハ雲家は一時地獄絵図の様相を呈した。

結局涙目で翻意を促す魔理沙を紫が宥めて事情を聞き、『エイプキラー巫女』を西宮から聞いた魔理沙が勘違いをしたという事が判明。

ちなみにエイプを知らない妖夢と橙も、そんな恐ろしそうなモノを素手で引き千切る巫女が出たのかと戦慄に身を震わせたりして、早苗を実際に見知っている藍と紫は余りの勘違いに脱力していた。また、幽々子は顛末を聞いた後に成仏しそうなくらい笑い転げていた。

曰く、あの魔理沙が良いように騙されたのが面白くて仕方なかつたらしい。正確には騙されたと言うよりも擦れ違いと勘違いの産物なのだが、それでも面白い事には変わりが無かつた模様。付き合いの長い紫をして、『あれほど笑った幽々子を見たのはン十年ぶり』との事だった。

魔理沙も魔理沙で、そんな勘違いをさせられた事に怒りと羞恥で顔を赤くしていた。

あれは遠からず何かの報復措置があると考えて良いだろ?と藍は判断している。

ともあれそのエピソードの原因となつた西宮に對して、藍は早苗と口汚い罵り合いをしている光景を見ていた事もあって大層フリーダムな人物という印象を受けていたのだった。

しかし藍が魔理沙襲撃事件の顛末を伝えると、西宮は愕然とした様子で頭を下げた。曰く、『ご迷惑をおかけして申し訳ありません。必要とあらば後日改めて謝罪に伺わせて頂きます』との事。

それには及ばないと返しつつも、西宮のその幻想郷には珍しい対応から、『ああ、幼馴染の風祝が関わらなければ割と常識的な子なんか』と藍は感慨深く頷く。

運命操つてハシャき回る吸血ロリータの率いる紅魔館やら、永遠亭の求婚ブレイカーと宇宙ドクター率いる永遠亭。それらに比べると随分と常識的な対応に見えるのだが、比較対象がその二つの組織である辺り既に末期である。

「……まあ魔理沙襲撃事件に関しては、気になるよつなら紫様や魔理沙には会つたら謝罪すれば良いだろう。ただ、仮にも幼馴染の少女にエイプキラーなどという渾名を付けるのは感心しないな」

「八雲様公認ですよ？ 幻想郷に来た事で神力・靈力が強まって、実際に出来るくらい強くなってるみたいですし。それに、ほら見て下さい俺のこの湿布。これ東風谷の仕業です」

「紫様から君達の間柄を聞いてはいたが、本当に殴り合つてるんだな……」

呆れたように咳きながら、藍は店の奥から戻つて来た豆腐屋の従業員から商品を受け取る。

そのまま買い物袋に入れたのは大判の油揚げだった。

『ああ、狐つて本当に油揚げが好きなんだ』と感心する西富。その視線に気付いたのか、藍が視線を強くして、

「やらんぞ」

「要りませんで」

油揚げの入つた買い物袋を庇つように背後に隠す藍に対し、西富は呆れが混ざつた苦笑を返す。

実際別に油揚げを食いたいわけでもない西富である。むしろ昨日のカツブ麺に入っていたので当分は要らない。

「まあとりあえず通りがかりで挨拶をしただけで用事があつたわけではないので、俺はもう行きますね。それでは藍様 で良いで

すか？ハ雲様だと賢者様の方と被りますし

「ああ、構わないよ。すまんな、こつちも用は無かつたんだ。見かけて挨拶をしただけでな」

「ええ。それでは藍様、失礼致します」

そして藍は買い物を終えて家に帰る為、西宮は人里の守護者である慧音の家へ行く為にと、互いに別方向へ歩き出す。

この邂逅によつてこの段階で西宮が魔理沙によるハ雲家襲撃事件について知つていた事が意味を持つ事になるのは もう少し先の話である。

#

さて、ハ雲藍と別れて程無くして西宮が到着したのは寺小屋だつた。

里の人聞くと『慧音先生ならそこだよ』との事だったので、歩いてやつて来た西宮なのだが

「だれだー。しらないにーちゃん

「めずらしいふくー。えいえい」

「はははガキ共いきなり随分な挨拶じやねーか」「ノヤロウ」

寺小屋とは里の子供に学問の基礎を教える為の場所である。

そして今日は寺小屋で授業があり、即ち里の子供がわらわらと集まっている。

結果としてそんな場所をノーアポイントメントで訪れた西宮は、子供たちに全力で絡まれていた。

小さい子供が西宮の頭にまでよじ登り、服の裾が引っ張られ、木

の枝でペシペシと叩かれる。実にフリーダムであった。

年代としては外の世界で言う小学校程度の年代だろう。上は十代の序盤から、下は一桁の半ばを過ぎた程度の年齢まで。

そんな好奇心旺盛な年齢の彼らからすれば、突然やつて来た見知らぬ、それも妙な服を着た男は興味を大いに引く対象だった。

それも外の世界に居る部屋の中でゲームなどで遊んでいる子供達とは違い、幻想郷の子供は実にバイタリティ豊富であり、既に全力で西宮で遊び始めていた。

「痛い痛い髪引っ張るな頭の上のチビ！　おい誰だ今ローキックくれたの！　木の枝で叩くのは止めるそこの！　叩かなければ良いつて問題じゃねえええ！　お前今鼻に突き刺そうとしたろ！」

八年前に学校の先生の鼻の穴に鉛筆を刺した東風谷と同レベルかお前は！！」

寺小屋に入る事もまかりならず、しかし子供相手にあまり強行手段に出るわけにも行かず、完全な立ち往生である。

べしひしひと叩かれ遊ばれ、頭の上の子供には『すすめー！』などと命令される始末。

「ああもう、何が『すすめー！』だよ！　畜生、昔ロボットアニメを見た東風谷に似たような事をやられた記憶があるな……あの時は俺もあいつも殆ど体格変わらなかつたから、潰れるかと思ったけど。しかも命令が『すすめー』じゃなくて『がつたい！』とか『へんけい！』とか大分無茶だったからそれに比べりや有情か……」「こちやつてなにー？」

「おいしい？」

「美味しくないぞ。コングパンチを必殺技とするエイプキラーだ。お前らも見たら逃げるよ。目を合わせたら食われる

「こわーー」

「あやー」

適当に返す西宮に、周囲の子供たちがわやわやと楽しそうにしゃいでいる。

そんなどうしようもない状況に対し、動きが出たのは寺小屋の奥からだ。

「お前ら何を騒いでいるんだ！ もう授業が始まる時間だぞーー！」

良く響く女性の声で、寺小屋の奥からの一喝。それに対して子供達はビクリと身を竦ませて、慌てて寺小屋の中に駆けこんで行った。ちなみに西宮の頭の上の子供は、『いそげー！ けーねせいせーにおこられちやつー』と、西宮の髪を引っ張りながら必死に前進を促していた。

「痛い痛い分かった分かった！ すいませんお邪魔しますー。」

別段抜け毛を気にする歳でもないが、流石に髪の毛を無駄に引っ抜かれるのは御免被る。

慌てて頭の上の子供の指示に従い寺小屋に駆け込んだ西宮を迎えたのは、

「……誰だ？」

という先程の一喝と同じ声で、しかし先の一喝とは違い困惑した様子で告げられた言葉。

そしてその言葉を言った当人である、弁当箱のよつな帽子を頭の上に乗せた長身の女性だった。

#

「待たせてすまない、君が守矢神社の西宮君だつたか。阿求から話は聞いている」

「いえ、こちらこそ急な来訪で申し訳ありません」

「なんの。昨日は阿求を経て随分と良い羊羹を頂いたからな。友人と一緒に美味しく食べさせて頂いたよ」

結局その後、寺小屋の団行の最初の時間を自彌とした慧音は、寺小屋の中の別室で西宮と向かい合つていた。

言つてしまえば職員室のような役割をしている部屋で、机の上には慧音が作った寺小屋で使う教科書が整然と積まれていた。

その机の横で、慧音と西宮は椅子に座つて向かい合つている形だ。
「散らかつていて済まない。どうか気にしないでくれ
「いえ、お構いなく。急に来たのは私の方ですから」
「そう言つてくれると助かる。阿求から内容は聞いているよ。人里で布教活動を行うに当たつての挨拶回りだつたな。無論構わん、どんどんやつてくれ」

慧音が言つた言葉に西宮が驚く。好感触どこのの話ではない。積極的に推奨している気配すらある。
加えて西宮からすれば、彼女の表情は何故か心なしか興奮しているように見えた。

「……上白沢様は建御名方神か洩矢神を信仰なさつているのですか？」
「慧音で構わんよ。里の皆もそう呼ぶ。そして、まあ、そう

だな。信仰は特にしているが、歴史家として非常に興味がある。建御名方神と洩矢神、外界でこれまで現存していた太古の大和の時代の神々だ。歴史書にすらなっていない神話の時代の大和の歴史、彼女達が幻想郷に来た事で生きたその話を聞く事が可能になるとこう事だらう！？これに歴史家として興奮しないでどうするというのか！あいかんいかん満月でも無いのに角が出そうだ…！」
「満月！？角！？ちょ、上白沢様　じゃなくて慧音先生落ち着いて下さい！！？」

興奮の原因はすぐに知れた。

どうやら歴史家でもある上白沢慧音、生きた外の歴史の証言者とも言える一柱の幻想入りにテンションが鰐登りであつたらしい。頬を赤く染め、自らを抱くように両手を回し、キラーなどと黄色い声を上げる姿はまるで恋する乙女だ。

ただし彼女の場合、恋の対象が歴史である。色気が無い事この上無い。

「……まあ、認めて頂けるなら良いです。今はまだ来たばかりで忙しいですが、御一柱にも慧音先生が話を聞きたがっていた事を伝えおきましょう」

「ああ、是非とも頼む！特に歴史の話を頼むと伝えておいてくれ！それと、まだ幻想郷に来たばかりで色々と不慣れな面もあるだろう。君と風祝の　東風谷君だったか。困った事があればいつでも訪ねて来てくれ

「ありがとうございます。何かあれば頼らせて頂く事があるかもしれません」

歴史さえ絡まなければ、幻想郷でもトップを争つほどの常識人であり良識人である上白沢慧音。

特に人間に対する味方であろうと自らに任じている面もあって

が、西宮と早苗に關して気にかけている部分もあるらしい彼女の言葉に、西宮は素直に感謝の念を言葉にする。

そんな西宮に慧音は満足げに笑い、

「つむ、西宮君は礼儀が出来ているな。いつもいつも元気過ぎる子供ばかりを相手にしているせいもあって、君のような子の相手は新鮮だよ。君がこの調子なら、相方の東風谷君も安心して見てに入れそうだ」

「あー……いや、東風谷は確かに真面目で根は善人なんですけど時々……とか割とショットチャウフ常識の斜め上に飛び出すアホの子なので、期待しない方が」

「……そつなのか？」

西宮が苦みじばつた表情で返した言葉に、慧音がきょとんと首を傾げる。

しかし西宮、その慧音の言葉に領きを返し、

「昔からあいつの暴走に付き合わされて来ましたからね。子供の頃など思い出すと、先程の寺小屋の子供達が大人しく見えますよ」「ははっ、守矢の風祝は大層お転婆だったようだな」

「現在進行形でお転婆ですよ。今日だつて早朝からまだ寝ている俺の部屋に侵入して来て叩き起こして『休んでいる暇はありませんよ西宮！ 出撃です！』とかお前はどこの対地攻撃爆撃機の伝説的パイロットかと

「……ちょっと待て」

「はい？ ええと、何か？」

愚痴に近いノリで西宮が言つた言葉に、慧音が眉根を顰めて待つたをかける。

眉根を顰めつつも僅かに頬を染めた微妙な表情の慧音に西宮は困

惑。しかし慧音はそんな彼に構わず、絞り出すよつに言葉を紡ぐ。

「……もしや君達は未婚の年頃の男女でありながら、同じ屋根の下で眠っているのか？ な、なんというはしたない真似を……」

「え？ まあ、言われてみたらそうなりますけど、別にそんな色気のある話じゃ」

「問答無用」

そして西宮の回答を聞いた慧音が頬の赤みを強くし、彼の両肩をがしりと掴んで身を反らせる。

『え？』と疑問符を浮かべて西宮が身体を硬直させた次の瞬間

「不純異性交遊撲滅クラアアアアアアッシユ！？」

「ぎにやああああああああああああああ！」

轟音と共に寺小屋名物・地獄のけーねヘッドバッドが炸裂する。折から響いた鐘でも鳴らしたかのような轟音に、寺小屋の生徒達は『あれ？ もう授業終了の鐘がなる時間だつけ？』などと自習時間の終わりを嘆いていた。勘違いである。

人里の守護者、上白沢慧音。

幻想郷でも屈指の常識人にして良識人だが、歴史狂いと男女関係に対する潔癖症が玉に瑕であった。

第八話・人里の守護者（後書き）

とりあえず風神録開始前にやらなければならない事・会つておかないと不自然な人やらプロット的に遭遇して欲しい相手との出会いはひとまず終了。

次か、遅くとも次の次から風神録開幕です。

が、明日（既に今日）は忙しいので更新の可否は不明です。ご了承ください。

閑話其の一・彼と彼女の高校生活（前書き）

本編を更新するほど執筆時間が取れなかつたので、友人からネタ出しされた西宮と早苗の高校時代の話を一つ。

両者ともに互いを『ただの幼馴染』と言つて憚つていませんでした。ああ、本編の方でもそつか。

ちなみに早苗や西宮の友人は外見描写も敢えてしていないモブの皆さんと御思い下さい。

それと早苗さんは一般的な一次創作では料理は出来るパターンが多かつたですが、この小説では西宮がその辺をカバーしてしまつた為に全く料理が出来ないまま育つてしましました。ご了承ください。

閑話其の一・彼と彼女の高校生活

これは守矢神社が幻想の存在となる前の話。

つまりは東風谷早苗と西富丈一が未だ普通の いや、かなり変わった高校生と少し変わった高校生だった頃の話である。

「C組の東風谷ってあんだけ美人だから告白とか結構されるらしいんだけどさ」

「もぐ……剛の者も居たもんだな」

場所は学校。昼休みの教室にて、弁当を開いていた糸田の少年
西富丈一。

彼は横でパンを食べている友人からの言葉に、自作の肉詰めピーマンを咀嚼しながら返事を返す。

「幾多の精銳が彼女の寵愛を得ようと告白を試みたものの、全て伝家の宝刀『ごめんなさい』で一刀両断にされたつて話じゃないか。それで、もしかして東風谷つてお前と付き合つてるんじゃないかなーかつて噂も出てるんだけど。小耳に挟んだんだけど幼馴染なんだろ?」「まあ幼馴染なのは事実だが、別段そういう浮いた話に発展した事は一度も無えぞ」

「だったらそれはそれでさ。東風谷が好きなタイプとかって分かる?」

何の事は無い、高校生にはありがちな惚れた何だの恋バナという奴だ。

しかし今話題に挙げられたのは、彼らが通っている高校にて、一年生ながらも『美少女N.O.·1(新聞部調べ)』と評されている東風谷早苗。多少エキセントリックな性格をしているものの、他の追

隨を許さない美少女である。

だが彼女は実家である神社の方に熱心であり、浮いた話が全く浮かばない高嶺の花。すわ攻略不可能かとも噂されている美少女だ。

そんな彼女と西宮丈一が幼馴染だというのは、入学してから然程日が経つていい今は未だに学校内では然程知られていなかつたらしい。

西宮が友人と交わした会話に、『マジでか！？』『あの東風谷さんと！？』という声が教室内のそこかしこから上がる。

「お前ら好きだな、この手の話題。……しかし東風谷の好きなタイプかあ」

そして周囲の声を聞いた西宮は首を傾げる。

付き合いこそ長いが、お互いそういう話題で話をした記憶は殆ど無い。丁々発止とアホな事で喧嘩をしていた記憶の方が圧倒的に多いのだ。

故に彼女の普段の言動から彼女の好みのタイプを想像しようとした所、出て来たキーワードはやはり『信仰』だ。

「……やっぱりあいつの今時珍しいレベルでの信仰っぷりを認めてくれる相手じゃねーの？ まずは大前提で」

「東風谷さんってそんなに熱心なのか？ 信仰とか宗教とか」

「信仰と宗教つて繋げて読むと大分危ない雰囲気になるな。まあ、あいつん家は新興どころか滅茶苦茶古いが。諏訪大戦とか建御名方神とか洩矢神とか、あいつと付き合いたいならその辺程度は抑えておいた方が良い」

いつの間にか周囲に集まつて來た男子生徒達に呆れた視線を向かながら、西宮は教鞭のように弁当の箸を持つ。

意外なまでの早苗の人気ぶりに驚きつつも、まあ外見は相当な美人だしなと納得する。西宮とて男、美人に惹かれる気持ちは当然良く分かる。

だが付き合いが長いと見なくて良い部分まで見えて来るのも事実であり、

「つーかお前ら、あいつの私生活がだらしないの知つたらそんな事も言えなくなるぞ。神社の掃除はしつかりする癖に自分の部屋は掃除出来なくて、お袋さんに怒られて大体俺に泣き付いて来るんだ」「…………待て」「…………」

そして呆れながら言われた言葉に、周囲の男子生徒達が揃つてストップを出す。

寸分の隙も無く同時に告げられた『待て』の声。無駄なコンビネーションに、思わず西宮が椅子ごと引く。

このコンビネーションを普段から發揮できれば、数カ月後に迎えている球技大会でこのクラスは無双の活躍が出来るだろう。

「西宮。その台詞から察するに、お前はよく東風谷さんの家にお邪魔するのか？」

「ん？ まあほほ毎日だな。俺あいつの家の神社でバイトみたいな扱いになつてるし。バイトつか神職見習い？」

「ガツデム！ 神は死んだ！！」

「それ仮にも神社で働いてる人間の前で言ひ言葉か」

友人の一人が頭を抱えて天を仰ぎながら叫んだ言葉に、思わず西宮が突つ込む。

しかし周囲の友人達からすれば彼の先の発言は捨て置ける物ではない。

「おま、それは少し家中を探索すれば東風谷さんの嬉し恥ずかしい下着が置いてある脱衣場へのスニーキングミッションも可能だつて事じやないですかねえ！？」

「発想がそこから入る辺り、立派に変態だな我が友人」「俺は変態じやないよ！ 例え変態だとしても変態と言ひ合ひの変態だよ！」

「自覚がある辺り潔いなお前」

友人は選ぶべきかとやや本氣で悩みながら、しかし西富はその友人たいを更にヒートアップさせる言葉を吐いてしまう。

「つーか下着なんぞ、あいつの場合脱衣場まで行かんでも部屋に脱ぎ捨ててるし」

告げられた言葉に、反応は絶叫。

『幻想壊れた』という叫びから、『そりゃあ東風谷さん誰の告白にも無反応な筈だよ』という叫びまでが聞こえて来る。

「おま、どんだけ仲良いんだよ西富！？」

「いや別に俺と東風谷は仲良くはないぞ。し�ょつちゅう喧嘩するし「それはどうでも良いから今度その下着一セツトくすねて来てくれ！ 十万出す！！！」

「おい、まずは誰かこの馬鹿どつにかしら。具体的にどうするかまでは言わなくて良い。そこまでこいつの行く末に興味無いし」

一人だけ凄いテンションになつてゐる友人がいたので、西富と他の友人達は手を取り合つて紳士的にその友人へんたいを排除した。

亀甲縛りで掃除用具箱に封印された彼は皆から忘れ去られ、封印が解かれるのは放課後の事になるのだが、一切本筋とは関係無いのでその辺りは割愛する。

#

「早苗の弁当、美味しそうだねー」

そして西富の教室でそんな騒動が起こつてゐると同刻。屋上で友人數名と昼食を食べていた早苗は、肉詰めピーマンを頬張つていた所で横合いから声をかけられた。
横を見やると、然程友人が多い方ではない彼女にとつて数少ない友人と言える少女が、少し物欲しそうに早苗の弁当を覗き込んで来ていた。

「まあ美味しいんですけど。どうしたんですか、お弁当忘れたんですか？」

「お母さんが寝坊してさー。今日はコンビニのパンで我慢」

「ふー、と唇を尖らせる友人の様子に、周囲の他の友人達から笑い声が上がる。

そのうち一人が『私は自分で作つてるよ』とカミングアウトすると、周囲から上がつたのは『すげー』だの『私絶対無理ー』だのという歓声だ。

そしてコンビニのパンを頬張つている友人が早苗に視線を向け、問いかけて来る。

「早苗つて神社のお仕事で朝早く起きてるんでしょ？ 早苗も自分で弁当作つてるの？」

「いいえ、早起きなのは事実ですけど料理は得意じゃなくて。いつも西富に作つて貰つてます」

何気なく早苗が返した言葉に、周囲が固まる。

早苗と友人をやっていると、一度は聞く名前。西富

西富丈

一。

彼女達の同級生の男子生徒にして早苗の神社のアルバイトのような事をやっている少年、なのだが

「早苗、彼氏に弁当作つて貰つてるのー?」

「幼馴染ですよ」

周囲で湧きあがる黄色い声に、渋い顔をして早苗は返す。
この場に居るのはいずれも年頃の少女達だ。こうじつ話題には殊更に敏感なのだが、早苗の表情は苦虫を数十匹纏めて噛み潰したようになってしまった。

その様子に周囲の少女達も盛り上がるのを止めて、『はて?』と首を傾げる。

「そーなの?」

「うなんです。そもそも西富は酷いんですよ? 見て下さいこのピーマン。私が嫌いだつてのをずっと前から知ってるのに、健康に良いからとか言って入れ続けて来るんです。信者が風祝に対する態度としてはあり得ません。肉詰めにする工夫は認めますが」

そう苦々しく言いながら、ピーマンの肉詰めを口に放り込む早苗。
『んー美味しい』などと言つてる所、どうやら信者作のピーマンの肉詰めは風祝の舌に合つたようだ。

彼氏の手料理というより、まるで母親が子供にピーマンを食わせる為の工夫だ。周囲の少女達のテンションが一段階下がる。

「じゃあ付き合つてるとかそういう話じゃないんだ?」

「昔から四六時中一緒にいたせいで、そういう話には逆に成り得ませんよ。あの糸目、いつも私を無碍にしやがつて……」

「む、無碍つて……何があったの？」

「ぶつぶつと呪詛のように呟くその言葉に、腰が引けながらも周囲の友人が問いかける。

その友人に對して早苗は大層ご立腹の様子で、箸の先にタコさんワインナーを刺してふんすかと語り始める。

「まず敬意が足りません。私は風祝で、西宮は神職見習いです。私の方が偉いのに……」

「風祝ってなんだっけ？」

「巫女の変異種じやなかつた？　えーと、ほら。ザザミに対するギザミみたいな」

「普通の巫女は赤いからザザミで、風祝の衣装つて青いらしいから早苗はギザミだね」

「モンスターで例えないで下さい」

後にエイプキラーと例えられる少女、東風谷早苗。外の世界での例えはショウグンギザミ（モンスターハンター）であった。どうやら彼女は可愛さとは無縁な物に例えられる運命らしい。

「それにですね。この弁当の件で世話になつてるからと、先日神奈子様と諭訪子様のアドバイスを受けて料理を作つてあげようとしたんですよ！　なのに西宮の奴、全力で逃げたんですよ！？　幾らなんでも失礼でしょう……」

「神奈子様と諭訪子様？」

「あ、え、えーと……ウチの神社の偉い人の名前です」「ふーん」

そして危うく自らが信仰する一柱である神奈子と諏訪子の名前を出した早苗だが、言い逃れに成功。

自分にしか見えず、声も自分と西富以外には聞こえない相手だ。迂闊に名を出すと変な子扱いされるのは幼少時に経験済みである。幸いにして神社云々には興味が無いらしい周囲の少女達はそこには突っ込みます、代わりに突っ込まれたのは別の点だった。

「早苗つて料理できるの?」

「いいえ」

素朴な疑問に対する返答は、『どうだ文句あるか』と言わんばかりに胸を張つて笑顔で告げられた否定の言葉だった。

#

一方の教室では、西富的には『幼馴染だしこんなもんじゃね?』と思つている彼から、彼と早苗の日常を聞かされた男子生徒達が呆れ果てた様子で西富を囲んでいた。

困まれた側の彼は、『どうして俺こんな状況に?』とこう表情である。救いが無い。

「話を整理しよう。西富、お前はほぼ毎日東風谷の神社で神職見習いとして働いている。東風谷の御両親との仲も良く、父君からはよく晩酌や将棋の相手に誘われる」

「うん」

「更に東風谷自身もお前に對しては無防備で、下着が脱ぎ捨ててる部屋の掃除を任せられるレベル。それどころかお前が部屋にいる状況で無防備にベッドで寝る」

「掃除や宿題を俺に押し付けてな。……つたぐ、風祝としての修行が大変なのは分かつてるから良いんだが」

「……お前それは据え膳つて言つか……いや、もう良い。何かお前と話していると俺らが敗北者になつた気になつて来る」

がつくりと頑垂れる友人達。

西富的には愚痴で言つてるつもりなのだが、周囲の友人達からすれば惚気にしか聞こえない。

『リア充爆発しろ』だの『もげる』だの『パルパルパル』だのといつた声が周囲から聞こえてくるが、当の本人である西富の心境は『知らんがな』である。

しかしそんなどうしようもない空氣の中、一人の友人が声を上げた。

「……色々エピソードは聞けたけどさ。結局西富、お前は東風谷の事はどう思つてんだ?」

「あ? ……そうだな。放つておけない幼馴染だよ。危なつかしくて目は離せないし、恩も借りもある相手だ。ああ、それと」

#

Q・以下の文は「スクランブルエッグ」の作り方です。空欄を埋めなさい。

1・(A)をボウルに割り、よくかき混ぜます。この時、箸で(B)を切る様に混ぜると、よく混ざります。

2・薄く(C)をひいた(D)を熱します。蒼白い煙

が消えたら再び（ C ）をひきます。

3 . (D) を弱火にかけ、1で作つた物を入れて熱しながら混ぜます。

A . 東風谷早苗さんの回答：

- A : ジャパニウム鉱石
- B : 光子力エネルギー
- C : 超合金ニコーン
- D : 偉大なる勇者

先生（友人）からの一言：

それで出来るのは「スクランブルダッシュ」です。

「……これは酷い」

「スクランブルダッシュって何？」

「確かに古いロボットアニメ関係のネタだつた気がする……」

屋上も屋上で、ある意味教室以上の悲劇が広がっていた。

料理が出来ないという早苗、果たしてどれくらい出来ないのかと友人が適当に出題した問題にこの回答である。スクランブルエッグを作るつもりが、出来るブツはスクランブルダッシュ。洩矢神とて予想できまい。

不正解を告げられた時の『なん……だと……！？』とでも言いたげな顔から察するに、恐ろしい事ではあるがマジ回答らしい。

「ま、待つて下さい。今のは練習、ノーカウント、ワンモアチャンスです！」

「……いやもう、この回答見るとチャンスとかそういう問題じやない氣もするんだけど……」

「いいえ、大丈夫です！ 私は出来ます。早苗は出来る子だつて神奈子様と諏訪子様も言つてくれてました！！」

そして『大丈夫なの？』といつ視線丸出しの友人たちの前で、早苗は雄々しく立ち上がり、タロさんワインナーの刺さった箸を大幣代わりに九字を切る。

「 建御名方神も洩矢神も御照覧あれ！ ここに奇跡を！ 風祝の早苗、参る！！」

猛々しく吼える姿。しかしこんな事で、しかもタロさんワインナーの刺さった箸を祭具に祈られても、建御名方神とか洩矢神も困るだけであろうと友人達は思う。

しかもこの問題に答える程度で奇跡とかどれだけ料理が苦手なのか。戦慄すら混ざった様子で見る彼女達の前で、早苗が答えをその頭脳で弾き出した。

Q・以下の文は「スクランブルエッグ」の作り方です。空欄を埋めなさい。

- 1・(A)をボウルに割り、よくかき混ぜます。この時、箸で(B)を切る様に混ぜると、よく混ざります。
- 2・薄く(C)を引いた(D)を熱します。蒼白い煙が消えたら再び(C)を引きます。
- 3・(D)を弱火にかけ、1で作った物を入れて熱しながら混ぜます。

A・東風谷早苗さんの回答：

1・（相手が右ストレートを放つたところを左掌で巻き取る
ように受け、すかさず相手の頭を引き込んで後頭部）をボウルに
割り、よくかき混ぜます。この時、箸で（関節の接合）を切る
様に混ぜると、よく混ざります。

2・薄く（右足）を引いた（体重移動により相手のバランスを崩し、引き寄せるように相手の身体全体）を熱します。蒼白い煙が消えたら再び（右足）を引きます。

3・（体重移動により相手のバランスを崩し、引き寄せるよう相手の身体全体）を弱火にかけ、1で作った物を入れて熱しながら混せます。

友人達はその時思つた。

『ああ、奇跡だ。負の方向で』

と。

そして負の奇跡を巻き起こした早苗当人は、『どうだ』と言わんばかりにこの歳にしては実り豊かな胸部を張っているが、何を誇る気か。

この回答では既に風祝かぜはづりというより風屠かぜほづりである。

「……早苗、あんたはこの回答で何と戦う心算なのよ……」

「え？ んーと……西富と？」

「戦つてどうする。料理を作つてあげるんじゃなかつたの？ 何で西富君を料理する方向に進んでるの！？」

「いやあ、つい癖で」

てへつと舌を出して、いけないいけないとでも言わんばかりの表情を見せる早苗。

悪びれないのが彼女の長所であり短所である事を知つていい友人達は諦めたように溜息を吐き、代表して一人が早苗に問いかけた。

「……もつ料理は良いや。実際早苗さ、西富痴の」とどりどり思つて
るの？」

「え？ うーん、生意氣で私に対して全く敬意を払わない、気が合
うようで合わない幼馴染で喧嘩友達ですよ。 ああ、それと」

#

そして奇しくも全く同時に。

教室と屋上の一箇所で、西富と早苗はお互いについての論評をこ
う締めくくつた。

「 あいつ、実は笑うと可愛いんだよな
いつも糸目ですけど、田を開くと実は格好良いんですよ」

IJの瞬間がこの高校内で美少女N。・1（新聞部調べ）である東
風谷早苗が『攻略不可能』と断じられた瞬間であり、同時に早苗の
友人達が生温かい笑顔で『コイツ駄目だ早くなんとかしないと』と
判じた瞬間でもあり、遂に何かが吹っ切れた西富の周囲の男子生徒
達が満面の笑顔で一斉に西富に上靴を投げ付け始めた瞬間でもあつ
た。

西富丈一、思えば人生初の弾幕IJKには友人達が投げ付ける上靴
を避ける事だったと後に語る。

ともあれ。

未だ幻想の地に入る前の、西富丈一と東風谷早苗の学校生活。そ
の一端だった。

関話其の一・彼と彼女の高校生活（後書き）

その頃の諏訪子と神奈子。

「何か凄い電波な信仰が届いた気がする」

「私も届いた気がする。スクランブルエッジで我を呼ぶのはビーンの人ぞ」

そんな感じ。

本編では喧嘩ばかりですが、昔からやつぱり喧嘩ばかりでした。
けど互いに相応には信頼し合っている関係です。

そういうのを表現するのは難しいですね。

第九話・風神録篇・開幕し候（前書き）

今回のラストから風神録の開始です。

……ここに来るまで長かつたなあ。

第九話・風神錄篇・開幕し候

布教活動には西宮よりも早苗の方が向いている。

それは彼ら二人が幻想郷に来てから確認した事実だった。

外の世界では給食時間の放送ジヤックなどのエクストリーム布教行為は逆効果になるばかりだったのだが、幻想郷においては神々の実在が確認されている以上、その神の神徳や力、御利益を見せるのに最も手っ取り早いのが、神々やその信徒が分かり易く何らかの能力を示す事だ。

そういう意味で奇跡を起こす神力・靈力を持つ彼女の方が、里において信仰を集めるのに向いていたと言う事である。自信ありげにハキハキと話す彼女自身、元々演説などに向いている性向があったのもあるだろう。

要は未だ靈力の扱いが下手な西宮が人里について行つた所で、出来るのは早苗のフォローが精々で余り戦力にならなかつたのである。日用品の買い足しや里の有力者への挨拶回りが終わつた後。里に行く意味が微妙に薄れていた彼は、守矢神社に居残る事にした。

最も早苗はそれが不満だつたようで、『西宮、一緒に行つてくれないんですか?』だの『風祝である私の言う事が聞けないんですか!』だと少々ゴネていたが、紫の要請もあつて後々異変を起こす事が内定している守矢神社の一員として、弾幕じっこを練習しておきたいと西宮が押し通した結果である。

ちなみに神々はほのぼのとした様子で「ゴネる早苗を眺めていた。

「いやあ、普段からぞんざいな扱いをしている割には甘えたがりだよねえ、早苗」

「一度は外の神社の為に丈一を置いて行く事を決めた後、図らずも丈一までこっちに来てしまったからな。その反動もあるんじゃないか？」

そんな会話など知る由も無く、結局ぶーたれながらも早苗は布教に向かい、西宮は弾幕ごっこや飛行技術などの練習の為に神社に残つたのだが、その数時間後

「ほらほらほらあ！　どーしたどーしたその程度ツスかーー！？」
「だああああ！　この駄犬調子乗りやがつて！」

「誰が駄犬ツスか負け犬！　しかもボクは犬じやなくて狼ツス！」

場所は守矢神社の境内前。

現在西宮は、何故か先日会つた犬走柵相手に弾幕勝負を行つていた。

それも割と一方的な勝負である。

辛うじて飛行術が形になつてきたものの、慣れない様子でふらふらと飛行する西宮に対しても柵が『の』の字型に生成した弾幕を乱射している状態だ。西宮は守矢の御札や、靈力の扱い方を教えて貰つて辛うじて出せるようになつた弾幕で応戦するが、明らかに柵が圧倒的優勢であった。

更に弾幕で弾幕を相殺し、或いは体捌きで辛うじてグレイズしても柵の攻勢は終わらない。

白狼天狗は盾と剣を手にした外見通り、天狗の中でも近接寄りの能力を持つ種族だ。

弾幕を辛うじて捌いた西宮に向けて一気に接近した柵が、訓練用の木刀で豪快に彼を弾き飛ばす。

「へへへっ！　格闘戦もアリかよー！？」

「先の宴会異変の時にはこっちが主体だつたらしいッスね。まあアクセントつて事で　　つとオー！」

弾き飛ばされた先で辛うじて地面に着地した西宮を追い、急降下した桺が地を這うような低軌道から気合いの声と共に木刀を突き込んで来る。

狙いは鳩尾。防御も回避も間に合わないままに、人体急所の一つを木刀で強打された西宮が打撃の勢いで転がり悶絶する。

「ふはははー！　I - m wiener！」

「winner」な。そつちだとワインナーソーセージだぞ天狗。慣れない外来語を無理に使うな

「似たようなもんツス。ファイトクラブと背徳ラブくらいの差ツスよ」

「大分違うぞ。というか貴様は外来語なんてどこで覚えたんだ」

「文さんの家つて、魔法の森の近くにある外の世界の道具を扱つてる店で買つて来た外の世界の本とかもあって面白いんスよね。意味殆どわかんないんスけど。　　つと、さて。西宮君大丈夫ツスか

？」

「……なんとか……」

そして両手を上げて勝鬨を叫ぶ桺に対し、境内に胡坐をかけて戦いを眺めていた神奈子が突っ込みを入れる。

対する桺は木刀を地面に突き立てからからと笑いながら、倒れた西宮に手を差し出す。

さて、そもそも何故この神社を敵視している筈の天狗である桺が、こうして西宮の練習相手を務めているのか。
その話は少々前に遡る。

#

その日の朝、少しゴネた後に早苗が布教に出掛けた後で、守矢神社に對して天狗側から動きがあつたのだ。

元々が極めて強く守矢神社を警戒している天狗社会。特に上層部は妖怪の山を統べるのは自分達だと言うプライドが強いらしく、機さえあれば守矢神社の排除に動きかねない様子だ。

しかし半面、守矢神社 正確には諏訪子と神奈子に喧嘩を売る度胸は天狗には無いらしく、現状では静観して監視という事となつていて。

そしてその監視の役目も単調な作業であると同時に、守矢神社と言つ天狗側からすれば極めて危険な要素に自分から近付く仕事になる為、殆どの天狗はそれに携わるのを嫌がつた。

そんな中で、天狗社会の中では異端氣味である文によくついて回つている柵に、天狗上層部が白羽の矢を立てたらしい。

要は嫌な仕事は嫌いな奴や爪弾き者にやらせてしまおうという考えだ。加えて柵の持つている『千里先まで見通す程度の能力』は気付かれずに監視をするには最適だと言つ見方もあつたのだろう。

が

「こんにちわー！ おはようございまーっす！ エーと、天狗の里で神社を監視する役目を申しつけられました犬走柵ツスー！ こちらお土産の山菜ツス！」

「む、先日のは狼天狗か。……え、監視？ これが？」

「ういっす。外で監視すると寒いんで、お邪魔して良いツスか？」

「えーと……うむ、どうぞ。……あれ？」

『取材の基本は挨拶と自己紹介』と射命丸に言われていた犬走桺、まさかの監視対象の家にお土産を手にじ」挨拶に上がるという前代未聞の大暴投。

天狗上層部には思いもよらない大惨事だった。

そしてたまたま応対した神奈子、明け透けを通り越してどこか別のベクトルに差し掛かりつつある桺の言動に思わず呆然として頷いてしまったのが運の尽き。

本殿に上がり込んで全力で寛ぐ桺の姿が次の瞬間にはそこにあつた。

『ああー、よく掃除された床ツスー。檜の香りツスー』などと言ひながら「ロロロロ転がる姿は、もはや自分の家はここだと言わんばかりのレベルでリラックスしていた。

八坂神奈子、万を越える歳を神として過ぎしながらも、ここまで神社本殿で寛ぐ部外者を見たのは初めてだつた。

「……まあ良く分からんが、軍神的に肝が太い奴は嫌いではない。天狗、昼餉を食べるか。チャーシューの入つたカップ麺があるぞ」「食べるツスー！」

そしてその非常に好意的に表現すれば『堂々としている』と取れなくもない姿が、何故か軍神である神奈子の御気に召したらしい。

西宮の飛行訓練の為に少し神社から離れていた西宮本人と諏訪子が神社に戻つて来た時に見たのは、差し向かいでカップ麺を啜る軍神と尻尾振りまくりの白狼天狗の姿だった。

「……何がどうなつてるんだコレ」

「んー？ 細かい事を気にしたらハゲるツスよ少年！ しかしこの

『かつぶめん』とやら、少し味が濃いツスけど美味いツスねー！！
「お、話が分かるね白狼天狗。しかも食べ終わつたスープを『飯に
かける事で、お手軽に『ご飯が雑炊もどきになる』というオマケ付きさ
！」

「す、すげー！ カップ麺マジすげーツス！！ よつしゃ弁当に持
つて来たオニギリ入れてみるツス！」

そして西宮が状況を把握し切れず頭を抱える横で、嬉々としてカ
ップ麺の食べ方を指南する祟り神とそれに感銘を受ける白狼天狗。
その彼女に『精進すればすぐにこの領域に至れるよ』と答えたなが
ら、自分の分のカップ麺を準備する諏訪子。彼女を畏敬の篭った視
線で見つめる桺。

「ボク、今日から御一柱を信仰するツス……！」
「カップ麺で！？ 安いなオイあんたの信仰！！」

カップ麺を啜る一柱を見ながらキラキラ輝く尊敬の眼差しで宣言
する桺に、流石に堪え切れずに西宮は突っ込みを入れたのだった。

そしてそんな寸劇から暫し後。

本殿で食休み中の西宮 + 一柱 + 監視役という状況で、しかし監視
など一切気にせず諏訪子が西宮の練習の進展を神奈子に告げた。

「とりあえず、飛び方は一通りどうにかなつたよ。靈弾の撃ち方も
教えたから、後は応用と実践かな
「実践か。……どうする丈一？ 私と一戦してみるか？」
「神奈子様は手加減とか苦手そつなんで遠慮しておきます。何で最
初から難易度がルナティックなんですか。もう少し難易度の低い相
手で練習させて下さいよ」

諏訪子の言葉を受け、神奈子が口元に手をやりつつ呟いた言葉に、西宮が両手を上げて降参のポーズで拒否を示す。

それを受けた神奈子、別に自説に固執するでもなく『確かにそうか』と呟きながら意見を取り下げる。

どうやら手加減が苦手だと言つ自覚はあつたらしい。しかし自説を取り下げたら取り下げたで、神奈子はどうしたものかと首を傾げる。

「しかし丈一、難易度の低い相手と言つが……諏訪子も私よりは多少は手加減が出来るが、ほぼ同等の実力の持ち主だ。早苗は今は布教で忙しい。そもそも私達は幻想入りしたばかりで知り合いも少ない。となると簡単に難易度の低い相手など

「ふつはあー！　いやー御馳走様でしたー！　『かつぶめん』美味

かつたツスー！！」

その瞬間、空気を読まずに高らかに告げられた御馳走様。

一柱と一人の目線が集まつた先に居たのは、カツブ麺に弁当として持つて来たオニギリを投入して作つた雑炊もどきを食し終わり、頬にご飯粒を付けながら満足そうな笑顔で尻尾を振つている監視役だつた。

「天狗」

「あい？」

「夕餉に好きなカツブ麺を選ばせてやるから、我が信者の訓練に少し付き合え」

「チャーシュー入り、豚骨味で手を打つツス」

そして神奈子が告げた言葉に食欲丸出しで
で榎が即答。

しかし安い代価

その日から暫く、西宮の実践訓練の相手兼守矢神社の監視役として犬走柵が神社出入りする事が決まった瞬間だつた。

ちなみに言動のイメージとは異なり、白狼天狗としての彼女の鍛え方は意外とスバルタであつた。

そして布教を終えてその日の夜に帰つて来た早苗は、本殿でさも当然のようにカップ麺の器に顔面を突つ込むようにして食つている柵の姿に驚き、顛末を聞いて呆れながらも『西宮を宜しくお願ひします』と柵に頭を下げた。

自分の事で早苗が誰かに頭を下げた事に驚く西宮に対し、早苗は悪戯つ氣のある笑みを浮かべ、

「だつて西宮が早く一人前になつてくれれば、また一緒に布教活動に行けるじゃないですか。人手も増えて万々歳ですよ」

「俺をこき使いたいだけかこの駄風祝」

「あらやだ。不甲斐ない信者に一人前になつて欲しいと願う現人神兼風祝のありがたい言葉ですよ？ もう少し敬つてくれても罰は当たりませんよ、西宮」

茶目つ氣のある笑みで言つた早苗に対し、柵の訓練でそこはかとなくボロボロな西宮は憎まれ口を返す。

そこから始まる丁々発止の掛け合いを神々は微笑みながら見守りその横で柵はカップ麺の残り汁を啜つていた。

「やべえ美味え。ボクが持つて來た山菜の天ぷらも合つとか反則的ツス」

とは、口の周りをベタベタにしながらの柵の言葉であつた。

完全に餌付けされた柵に射命丸が頭を抱えるのは翌日の話である。

そして

#

「あれ？ こんな所に神社が……」

そして梶が西宮の訓練相手を始めた日から三日。

早苗はその日、布教を終えて妖怪の山へ戻る途中で、見知らぬ神社を見付けていた。

たまたまこの日にこの神社を発見した理由は特に無い。
敢えて言つなら、少しいつもと違うルートで帰りたくなる程度の
気分だった。それに尽きるだろう。

しかし最近布教が上手く行っていた早苗は気が大きくなっていた。
或いは相棒である西宮がついて来ていない事で、本人も気付かぬ
うちにフラストレーションが溜まっていたのかもしれない。

「……随分と寂れているようですし、ここは一つこの神社を分社として使ってあげましょう。そうすればこの神社の参拝客も増えるし、私もより多くの信仰を得られる。御二柱や西宮にも褒めて貢えるでしょうし万々歳ですね！」

そう言いながら、彼女は内ポケットから取り出した筆ペンでメモ用紙につらつらと一方的な宣告を書き立てる、それをその神社の本殿入り口にペタリと張り付けた。

「これで良し、と

満足げに頷き飛び去る早苗。

彼女が残して行つたメモにはこう書かれていた。

『　当方、山の上の神社の者なり。
この神社、余りに寂れ見るに忍びないので、我が神社の分社とする』

或いは西宮がついていれば、或いは早苗がもう少しこの神社についての情報を集めていれば、絶対に行わないであろう悪手。本人的には善意であつたのだろうが、何の慰めにもなりはしないだろう。

よつともよつて彼女は、八雲と並びこの幻想郷の管理者とされる“博麗”　　それも歴代博麗最強と呼ばれる当代の巫女、博麗靈夢に喧嘩を売つたのだ。

「……何よ、このワザけた宣言。山の上の神社？　これは宣戦布告つて事で良いのよね」

翌朝になり起きて来た靈夢がそのメモ帳を見て守矢神社めがけて出撃する事を、未だ早苗は、そして守矢神社の面々も、この段階ではまだ知らなかつた。

かくして守矢の神社は幻想に入り、幻想の地にて調停を司る博麗と相対する。

東方西風遊戯・風神録篇。これにて開幕し候。

第九話・風神録篇・開幕し候（後書き）

これまでにも作中でチラホラ言つてましたが、萃夢想や緋想天、そして非想天則などで人間組が平然と妖怪と殴り合いをやってるのは、この小説では靈力や魔力で身体能力を強化しているからだとう設定で行きます。

つまり西宮も、普通の人間に比べれば身体能力は強化されています。

それでも榊にも勝てませんが。

ともあれ西宮、風神録開幕前に付け焼刃ながらも戦闘訓練。
そして風神録　　今回より開幕です。

第十話・人恋し現人神様（前書き）

色々やつちゃつた感。
でもこれでプロット通り。

第十話・人恋し現人神様

「それでは行つて参ります！」
「今日こそ一本取る……」

博麗の巫女、博麗靈夢が陰陽玉とお祓い棒を手にして自宅を出撃したのと同日。

その日も守矢神社では、最近繰り返された日常が始まろうとしていた。

早苗が大幣を手に元気良く出発の挨拶をし、西宮は監視役兼訓練相手である樅相手に今日こそ一本取ると息巻きながら、早苗も使っている守矢神社特製の御札を手に策を練つていた。

異変を起こす事が八雲との約定だが、それはもう少し神奈子と諭訪子が信仰を集め、力を取り戻してからになるだろう。

それが守矢勢の判断であると同時に、紫の判断でもあった。

二年三年という先の話にはならないだろうし、戦力が整つていな状態で異変を起されても『妖怪の山の力を示す』という紫の目的にはそぐわないでの、それは当然と言えば当然の話である。

その筈であった。

その日、早苗が神社を出る前に、八雲紫がスキマを通つて現れるまでは。

「随分と早く動いて頂けたようね。幻想入りから僅か数日で博麗神社に宣戦布告とは、相当な自信があると見て良いのかしら。流石は古の大和の時代より語り継がれし神々と言わせて頂きますわ」

するりとスキマから出て来て、口元を扇子で隠しながら胡散臭く

笑うスキマ妖怪。

しかし彼女を迎えたのは、博麗神社に宣戦布告をして臨戦態勢で待ち受ける守矢神社。などではなく、『何言つてんのコイツ』的な視線が四対であった。

「……八雲紫、何の話だ？」

「え？あの、神奈子さん？貴方達、博麗神社に宣戦布告を」

「はあ？いや、私も神奈子もまだ往時の力を完全に取り戻したとは言えないんだよ？まだあと最低でも一ヶ月は欲しいんだけど」

「…………え？あの、靈夢が今朝がた凄い勢いで神社から出撃したつて……それでたまたま靈夢を見かけた魔理沙も一緒に異変解決と息巻いてるみたいなんですけど」

囁み合わない話。

さも黒幕的なカリスマと共に登場した紫の前には、話の通じない守矢の一柱が困惑顔で首を傾げている。何事かと視線を向けて来た西宮も、その表情に浮かんでいるのは困惑だ。彼の場合博麗神社の名前が出てきたので些かの焦りも浮かんでいるが、それ以上に困惑が強い。

だが、紫が目とした最後の一人。

守矢神社の風祝である東風谷早苗は顔色を蒼白にして、『神社つて』や『まさか』などといった単語を呟いていた。

明らかに心当たりがある様子だ。

「……東風谷早苗

「は、はいっ！」

その様子に自然と紫の声が低くなる。

理由は一つ。まず、守矢神社を招き入れた件は紫にとつてもかな

りの大事業だつた。

幻想郷のバランスを憂う彼女、バランスを保つ為の大事業を破綻させかねない行動をしたと思しき早苗に対して寛容になろう筈もない。

元々世話焼きの傾向のある彼女だが、しかし幻想郷に仇為す者に容赦はしないのもまた八雲紫という妖怪だ。

第二に博麗の巫女　　特に今代の博麗である靈夢は、紫が幼い頃から見守つて来た娘のような存在である。

元より初代の博麗と共に紫が幻想郷と外とを隔てる博麗大結界を作つてから、紫は全ての代の博麗と大なり小なり交友があつたのだが、その紫をしても今代の靈夢は傑物であり、手のかかる教え子であり、可愛い娘だつた。

その彼女に『異変を起こす』という目的も関係無しに喧嘩を売つた形となる早苗に対して紫の視線が鋭くなり、自然と身体から妖力が漏れる。

しかしその彼女に対して、横合いから待つたがかつた。

「すまない、八雲。私達の監督不行き届きだ」

「私からも謝るよ。まずは少し落ち着いてくれないか

「…………そうね」

神奈子と諏訪子が紫に声をかける。

その声を聞き、紫も些か大人げ無かつたと思つたのだろう。息を吐き、早苗に向けていた鋭い視線を引っ込める。残つたのはいつも通りの胡散臭い表情だ。

しかし早苗は先に向けられた視線と妖力　　即ち彼女がこれまで接して來た優しい『紫さん』ではなく、幻想郷を守る妖怪の賢者『八雲紫』としての姿の片鱗を見た事もあつてか、目の端に涙を浮かべて蒼白なまま崩れ落ちそくなつてゐる。

無理もあるまい。靈力の素養こそ歴代博麗に匹敵するほどの物があるが、所詮は妖怪も神々も殆どが力を失った外の世界から来た少女だ。紫のような存在と本気で相対した事など無いのだろう。幾ら大きなポ力をやらかしたからと言つて、たかが数えで20も生きていらないような童女に本氣で怒りそうになるとは大人げ無かつたか。紫が内心でそう苦笑していると、崩れ落ちかけた早苗を支えるように横に立つ姿が見えた。

西宮だ。

「大丈夫だ、東風谷。落ち着いて深呼吸」

「……は、はい……」

彼の指示通りに早苗は大きく息を吸い、吐く。

その動作を数度繰り返し終わつた所で、彼女は今度は怯える事無くいや、怯えながらも逃げはせず、真正面から大妖怪八雲紫の顔を見据えた。

「紫様、申し訳ありませんでした。恐らく私は取り返しのつかない事をしたのだと思います。今から私の思い当たる心当たりについてお話しします。どうか……可能であればどうか、私のみの責任として、御二柱と西宮を責めないで下さい」

「良いわ。約束しましょ、言つて御覧なさい」

紫はその言葉に胡散臭く笑みを浮かべる。

大妖怪の圧力に怯え、しかしそれでも逃げずに真正面から向かい合つ。

確かに未だ紫からすれば童女ではあるが、その心根は実に幻想郷に見合つた物だ。紫からすれば心地良いと言つても良いだろう。

「ひせ紫が一柱を呼んだのだ。ならばその一柱に仕える多少早苗がミスをした所で、理由を聞く程度はしてやつても良いか。

やつ考えながら、紫は早苗に話を促した。

#

「……やつやつたね」

「……やつやつしたわね」

そしてまつりまつりと話しあす早苗の言葉を聞き終わった所で、諏訪子と紫が溜息を吐いた。

意図せずとはいへ、博麗への明確な宣戦布告だ。

今更靈夢が言い訳など聞く筈があるまい。何かいつ前に弾幕が飛んで来るだら、とほ紫の言だ。

その言葉を聞き、早苗が悲壮な顔でその場に集まっている皆に告げる。

「やはり、私が責任を取つて謝罪して来ます……。弾幕で撃たれようが何を言われようが、何をされても構いません。私のせいで御一柱と西富に迷惑をかけるわけには……」

「黙れ」

それは全てを自分の責任として、この件を無かつた事にじょいといふ言葉。

それに対しても紫が、諏訪子が、神奈子が各自の理由から反論を口にじょいとする。

しかしそれらに先んじて真っ先に早苗の言を断ち切ったのは、紫でも諏訪子でも神奈子でもなく、早苗の横に立つ西富だ。

彼はいつも閉じ気味の糸田を見開き、睨むよつて早苗を見ている。

「お前が一人で責任取る？ 何をされても良い？ フザけんじやねえぞ、本気で言つてんのか」

「そつ……それ以外にこの件を収める手段があるんですか！？ 誰かが責任を取らないといけないなら私が」

「八雲様、一つ提案があります」

「ふうん？ 言つて御覧なさい」

いつもは見せないその表情に怯みながらも反論する早苗。しかし西富はそれを聞かずには彼女を押しのけ、一柱の横にいる紫に向き直り、頭を下げる。

紫としては西富に対しての興味は守矢組の中で最も薄い。神奈子と諏訪子が主であり、早苗が従。西富はその従の従程度の認識だ。たかが人間と、どこかで低く見てている面もあるのだろう。以前のやり取りで評価は上方修正され、『人間にしては興味深い』程度には感じているが、逆に言つてしまえばその程度だ。

特に戦闘能力に関しては、鍛えればある程度は物になるだろうが、現状では見るべき所は無い。異変において戦力になる事は無いだろう。

それ故に紫は西富が発言を求めた事に対して、非常時故にどこか投げ遣りに応答する。が

「この一件を以て異変と為し、我ら守矢神社一同で博麗の巫女を迎撃します。調停者たる博麗神社への宣戦布告は、強弁すれば異変と断じる事も出来るでしょう？」

「

しかし、その告げられた言葉に対して、紫は僅かに驚きを

顔に出す。

考えなかつたわけではない。むしろ、早苗の話を聞いた後に彼女が真つ先に思い浮かべた解決方法だ。驚きの内容は、彼女が然程重要視していなかつた西宮の口からこの意見が出た事。

「……確かに私も同じ事を考えていたわ。妖怪の山の力を示す為に後に異変を起こすのに、この段階で山の神社の風祝たる早苗さんが靈夢に降伏してしまるのは不味い。力を示すどころか却つて侮られる原因になりかねなくなる。けれど良く考えたわね」

「八雲様が先にスキマでいらっしゃった時に現状を見て『異変を起こした』と言つておられましたので、この状況は強弁すれば異変と言える状態だと判断しました。ならば予定を繰り上げて、この状況を異変と称する事も出来ると思つた次第です」

「良い判断だよ、丈一」

「ああ。早苗一人に責任を負わすなどしてたまるか」

そして言葉を交わす紫と西宮の横で、諏訪子が跳ねるように立ち上がり、神奈子が拳と掌を打ち合わせる。

神奈子はそのまま強気な笑みを口に浮かべ、

「八雲紫、丈一の言う通り私達は早苗の宣戦布告を以て異変と為し、博麗の巫女を迎撃する。スペルカードルールに則つた異変だ。問題あるまい?」

「ええ、その形式でやつて頂き、妖怪の山の力を示す事が出来るならば私としては願つたり叶つたりですわ。ですが、力は大丈夫ですか?」

「まだ往時の全力にはやはり劣るな。だが、十分だ。幾ら話に聞く博麗やその相方の霧雨が相手と言えど、人の子一人や二人相手に力を示すならば存分に出来よう」

嘘ではない。しかし本音でもあるまい。

往時程の力は無いとはいって、神奈子とて現状で既に天狗が喧嘩を売るのを控える程の神だ。現状の力でも、弾幕を用いた異変というルールの中で力を示すのは可能だろう。

だがそれで確実かと言われば不安も残る。神奈子は「軍神」。決して戦を軽視はしない。

それが例え、弾幕」といふこというルールの中で行われる『異変』であろうとも、可能ならば万全で挑みたかったと言うのが本音だろう。万全を怠つたが故に万が一の筈の敗戦を喫した戦いと云うのを、彼女は軍神として幾度となく見て来たのだ。

しかしそれでも、神奈子は現状での異変の開始。即ち開戦を選択する。

「そうだね。どの道ここで頭下げても、状況が良い方に転ぶわけでもないだろうし。それにね、早苗は私達の娘も同然だよ。娘に責任取らせて知らんぷりなんて、私は御免だね」

けろけると楽しそうに笑いながら、諏訪子も戦意を主張する。

早苗も西富も知らない事ではあるが、守矢の血族は元々が諏訪子の遠い遠い子孫だ。

幾千もの世代を重ね薄れた血であるが、確かに血族。加えて娘同然と育てて来た早苗の為。予定の繰り上げ如きがどうしたと言うのか。

故に諏訪子は戦意の赴くままに手の中に洩矢の鉄の輪を作り出し、それを弄びながら早苗に声をかける。

「だからさ、早苗。気にしなくて良いんだよ。私ら迷惑だなんて全然考えてない」

「私も諏訪子に同感だな。失敗したと思ったなら、反省して次に生

かせばいい。早苗はそれが出来る子だ」

「諭訪子様、神奈子様……ごめん、なさ……」「めんなさい……」

「そういう時は『ありがとう』だよ」

「そう言つ事だ」

「……ひ、ひつくなっただけだ」

まるで恨む様子も無く、朗らかにとすらり言つて良い様子で笑う一柱。

自分が愛されている事と、自分を愛してくれる一柱にこんなにも迷惑をかけてしまったと言う事が、彼女の涙腺を緩めてその頬に涙を伝わせていく。

思えば外の世界に残してしまった両親も、この一柱と同じくらい自分を愛してくれていた。自分が急に居なくなつた事で、彼らはどんなに心配しているだろうか。西宮が居るなら大丈夫かと思つたけど、彼までこちらに来てしまつた。

大丈夫なのだろうか。心配しているだろうか。心配だ。会いたい。

悲しみ、嬉しさ、一柱への情、両親への情、望郷の念。
それら全てがこの機に一度に溢れ出たかのようだつた。

座り込み童女のように早苗は泣き出し、それを見る一柱は困つたように、しかし優しく彼女の頭を一度ずつ撫で、紫に視線を向け直す。

「八雲紫、そういう事情だ。迷惑をかける結果になつたのは謝るが、その分私達が帳尻を合わせよ。だから早苗を責めないでやつてくれ」

「分かりましたわ。

貴方達を選んだのは間違いでは無かつた
ようですね」

「む？ 何か言つたか？」

「いえ何でも」

了承の言葉の後に呴いた言葉は紛れも無い本音だ。

八雲紫は幻想郷を愛している。

それは彼女がこの幻想郷を創ったというのも大きな理由だが、人と妖怪が隣り合い、時に襲われ時に退治し、それでも互いに友人と言える関係を保っている。この幻想の楽園の厳しくも不思議な温かさを、彼女が誰よりも愛しているからだ。

そんな彼女にとつて外の世界から呼び寄せた守矢神社の面々が見せた家族愛と呼べる物は、非常に好ましい物だった。

ならば、故にこそ

「 気が変わりましたわ。今回の異変、私は完全に傍観する心算でしたけど……少しだけ依怙贔屓をしてしまいましょう」

故にこそ、外では生きていけなくなつた彼女達には、この幻想郷に根付いて欲しい。

この異変の中で力を示し、確固たる信仰を勝ち得て欲しい。

「元より異変は当事者たちだけで起こす物ではありません。紅魔館の時も白玉楼の時も永遠亭の時も、或いはその辺をうろついていた者がたまたま巻き込まれたり、或いは何らかの目的を以て異変の解決に向かう者を妨害したり。それらまで含めて騒ぎを楽しむのが異変の雅というものですね」

紫は内心に芽生えたその喜ぶべき感情のまま、自らの眼前にスキマを開く。

そしてそこから転がり出た人影が一人。

「故に、私が立場上手を出せない現状では、少々派手さが足りません。妖怪の山の麓の方では、八百万の神々や河童などが慌てて靈夢と魔理沙を迎撃してくれるでしょう。ですがそれだけでは派手さに欠ける。この異変をせいぜい派手に優雅に美しく、後に御阿礼の子が編纂するであろう次の幻想郷縁起にて、他の異変に負けない……いえ、凌駕するほどに目立つ物にしてやる為に。」

「ご協力下

さいな、天狗のお二人」

「…………いきなりですね、紫さん。自分に酔った言動と共に唐突な呼び出しありがとうございます」

「あれ？ こ～ど～？ ボクは確かに家を出た所で変なスキマに引き摺り込まれ……って、巫女さん泣いてるううう！？ だ、大丈夫？ 口元を羽扇で隠しながら、にやりとした笑みを紫に向ける。

「スキマからまろび出て来たのは、守矢の面々からすれば見知った顔。

天狗としては非主流派である鳥天狗の射命丸文と、その後輩である犬走樅だった。

樅が泣いている早苗に気付いて大慌てでそちらに駆けて行き、射命丸は周囲の状況 戰意丸出しな様子の一柱と自分をわざわざ呼んだ紫を見て、ある程度の状況は察したようだ。

「口元を羽扇で隠しながら、にやりとした笑みを紫に向ける。

「先程協力して欲しいと仰いましたね、紫さん。謝礼として何が出せますか？」

「天狗の地位を」

しかし紫が口に出した言葉は、射命丸の予想の上。

思わず口元が引き攣る射命丸に対して、紫は訥々と言葉を語る。

「現在、守矢神社は事情があつて予定を前倒しして異変を起こして

いますわ。ですが天狗の上層部はこの件に関して恐らく傍観する心算でしょ？』

「……ええ、間違いなく。」

愚かな事に

「ええ、愚かですわ。そんな事をしては、この幻想郷において天狗の存在感が益々霞んで行く。どのような形でも良い、彼らは積極的にこの異変に関わるべきだと言つに。」故に射命丸文、貴方は『偶然』取材の帰りに山に侵入する巫女と魔法使いに会つて、侵入者を迎撃すると言う。『天狗社会の一員のとしての責務を果たす為已むを得ず』彼女達と戦う そんなストーリーは如何かしら？』

「……その結果として天狗は力の一端を示し、その立場は守られるか。良いでしょう」

商談成立。

そうとも言つよに、文はポケットに文花帳と羽根ペンを仕舞う。

そして守矢神社を出ざま、肩越しに紫に投げかけるのは新聞記者としての慇懃な言葉遣いではない。千年を生きた大妖怪、烏天狗の射命丸として旧知の大妖怪への言葉だ。

「乗つてあげるわ、八雲紫。清く正しい新聞記者としてじゃなく、天狗社会の一員として貴方の謀略に乗つてあげる。 でも一つ聞かせて。こんなに早くに異変を起こしたって事は、何か手違いがあつたんじょ？ その辻褄合わせの為に私に手を借りようだなんて、何で貴方はそこまでこの神社に肩入れをする事にしたの？」

「 そうね。この神社が思いの外、温かく優しかったから……かしら」

「なら仕方ないわね。幻想郷を創つた頃からずっと、貴方つてそういうのに弱かつたし。桜はこのまま神社に置いて行くわ。貴方達の判断でコキ使って」

呆れたよつたその言葉を残し、射命丸は翼を広げて飛び立つて行く。

あとは適当なタイミングで適当に魔理沙と靈夢に勝負を挑み、適当に消耗させて適当に負けてくれるだろ？と紫は判断。

彼女は元来物事の機微には聰い相手だ。既にこの異変を守矢神社が主体となって起こしてしまった以上、天狗の彼女が必要以上に暴れる事は却つて無粋だと分かっている。

故に引き際を見計らつて引いてくれる筈。

そう判断した紫が目線を動かす先は、童女のよつて泣きじゃくる早苗とその周囲を困つたようにぐるぐる回る桜。

そして早苗の横に座り、泣きじゃくる彼女の背を優しく撫でる西富の姿だ。

「ちょつ、巫女さんガン泣き！？ 何したんスか西富君！ アレか！？ 胸でも揉んだんスか！？」

「良い感じに脳味噌腐つてるな駄犬。良いから落ち着け、そこ座れ！？」
「だが断る！ 女の子泣かせるなんて男の風上にも置けねえッスよ！？」
「それでもボクが戦い方を教えた生徒ツスカ！？」
「だから俺じやねえつつってんだろ！？」

桜の言葉に叫び返した西富。

やれ喧嘩かと思われたが、次の瞬間に彼の手を弱々しく引く手がある。

泣きじゃくる早苗が、自分の横にいる彼の手を両手で掴んだのだ。

「ひつぐ……にし、みや……」

「……ンだよ、泣き虫。お前昔つから泣き虫だつたよな」

「……ぐす……えう……つぐ……悔、し……」

「……悔しいんだな。こゝなら信仰が集められると調子に乗つて舞

い上がる、結局神奈子様と諏訪子様に負担かけた馬鹿な自分が悔しいんだな？」

歯に衣着せない言葉。それは容赦の無い言動のようだが、しかしある意味では彼が一番対等の立場として早苗に向き合っているという証左だ。

諏訪子や神奈子のように彼女を庇護すべき対象として見るのはではなく、対等の相棒として見てているが故のその言葉に、早苗が涙を堪えながら大きく頷く。

「そうだな、俺も悔しい。こうなつたのは人里の方での布教を担当していた俺とお前の責任だ。俺が途中から布教をお前に任せて疎かにし、その結果として起こつた出来事でもある」

だから、と。

西宮は自分の手を掴んで泣きじやぐる少女の身体にもう一方の手を添え、抱き寄せる。

抵抗もせずに泣き顔を自分の胸に埋める形となつた早苗に、西宮は苦笑しながら言葉を紡ぐ。

「だから、もう少し泣いたら立ち直れ。射命丸さんが暴れた後、御二柱の前に俺達の出番だ。御二柱の負担を減らす為にも、失敗した分は俺達自身で取り返すぞ。　良いな？　早苗」

「……」

そして告げられた言葉に、ぐすつと鼻を啜りながらも早苗は顔を上げる。

随分と聞いてなかつた呼び方だ。思えば小学校の半ばくらいから、互いの呼び方を学友からからかわれるのが嫌で自然と苗字で呼び合つよくなつたのだった。

先に呼び方を『東風谷』にしたのは西苗で、それが嫌で当てつけのよう自分も『西富』と呼ぶ事にしたのを思い出す。

「……うん」

するいと思う。

勝手に呼び名を変えて、今この時になつて勝手に戻すのだ。
だから自分も今だけはざるくなつてやううと、早苗は自分の幼馴染で相棒である少年に抱きすくめられてここの状況を満喫するよう、彼に体重を預ける。

「……うん、丈一。頑張ろうー。」

そして涙が残る顔で、それでも精一杯の決意を込めて。

後に幻想郷縁起に『風神錄』と記されるこの異変に対し、東風谷早苗は自らの相棒と共に全力で臨む事を決めたのだった。

第十話・人恋し現人神様（後書き）

「……あのー、賢者様。すぐ傍でそんな会話をされてるボクは Bieber すれば」
「とりあえず黙つてしましよう。ビーバーの龍宮の使いみたいに空氣読んで」

さて、始まりました。そしてやつてしましましたとも言いましょう。

敢えて多くは言いません。これがオーリ主である西富と早苗の関係で、これが私の書く『東方西風遊戯』です。

感想などチキンハートでお待ちしております。

第十一話・鳥天狗の射命丸（前書き）

今回も割と捏造設定アリアアリ。

ちなみに普段は西宮 早苗の呼び方は『東風谷』のままです。早苗が拗ねそう。

第十一話・鳥天狗の射命丸

「山の上の神社からの宣戦布告ねえ。そりや最近人里で布教活動してる連中だな」

「そう……うちの素敵な御賽銭箱にずっと何も入つてないのも、人外ばかりしか参拝客が来ないのも、そいつらの陰謀なのね」

「いや、それらは間違いなく山の上の連中が来る前からの事だから、流石に免罪だと思う」

「良いのよ。私的裁判で奴らは全員有罪よ。罪状は全部」「見た事も聞いた事も無い罪状だな。魔女裁判だつてもう少し真つ当な罪状を告げるだろ。閻魔が聞いたら腰を抜かすぜ」

一方、博麗神社を飛び立つた靈夢は適当に勘の赴くまま異変の原因つぽい方向に飛び、それっぽい奴を撃ち落としていくという勘頼みの…………しかし何故か異常に正確な…………異変解決方法を実行しようとしていた。

紅魔館の時は赤い霧が濃い方に、白玉楼の時は春度の流れてくる方向にというおおまかな指針はあったが、永遠亭の件に関しては異変解決に向かつた四組が何故ヒントも無いまま永遠亭のある方向に向かつたのかを聞かれれば、『巫女の勘すげえ』としか答えようがないレベルだつた。

何のヒントも無かるうと正解に辿り着く。恐るべしは博麗の巫女の勘である。

幸い今回は宣戦布告状（靈夢視点）に『山の上』といふヒントがあつたので悩む余地は無い。

この幻想郷で『山』と言えば、大抵は妖怪の山を意味する。或いは『山』が何かの隠語だった場合は分からぬが、多分そういう事は無いと思つといつ勘の下で、靈夢は妖怪の山を目指してい

た。

途中でどうやら山に珍しい薬草や山菜でも採りに行く心算だったらしい魔理沙と遭遇。

まあ見かけたんだしとりあえず撃ち落としてから話を聞けば良いやの精神で先制攻撃を仕掛けようとした靈夢だが、既に妖怪の山の麓に侵入していた為に、横合いから豊穰の神と紅葉の神が魔理沙と靈夢に弾幕で攻撃を仕掛けてきたため、成り行きで協力してこれを撃破。

どうやら今回は敵じゃないらしいと判断した靈夢は魔理沙に事情を話し、魔理沙は博麗神社に喧嘩を売る神社が現れるなんて異変だと息巻いて靈夢に同行を宣言。

そして魔理沙が靈夢から事情を聞いて自らの推論を口にした

というのが現在の状況だ。

一人は妖怪の山から流れる川に沿つよつたコースで山へと飛びつつ言葉を交わす。

「……つーか、山の上の神社なあ。多分西宮の野郎もそこか

「あら、知り合いで居るの？」

「まあな。半分が私の自爆とはいえ、半分は奴のせいで酷い勘違いをさせられてしまった相手だ。畜生今にして思えば何だよ世紀末巫女伝説」守矢の拳一つで。アレを本氣で想像して焦った私の心労を返せ

「言つてる事の一割も分からぬわ。まあ別に良いけど

魔理沙が拳を握つてぶるぶると震えながら言つた言葉に、興味無さげに
　　といふか実際興味無く靈夢が返す。

彼女は『それに』と一拍置いた上で、

「別に知り合いが居ようとも居まいと、どうせ貴方のやる事は変わらないでしょ？」

「まあな。西宮が居ようが居まいが、異変だつてんならブツ飛ばして解決するだけだぜ」

そう告げられた靈夢の言葉に、魔理沙が頷く。

そう、元よりそこはさして重要じやない。会えば重点的に狙う程度はするかもしねが、別に彼がそこに居ようが居まいが目的は変わらない。

異変ならばそれを解決する。赤い霧の異変から先、魔理沙と靈夢はそうやって、スペルカードルールの中を駆け抜けて来たのだ。

そしてそんな彼女達の前に、一人の少女がくるくると飛んで来る。川沿いに佇んでいた緑の髪の少女が、何故か横回転しながら飛んで来たのだ。

「あら、人間じゃない。ここから先は妖怪の山。貴方達のよつな人間には危いわよ」

「おつと、忠告感謝。けれど私達は山の上の神社に用があるんだ」

「見たとこ神力と厄の双方を取り込んでる……祟り神？ いえ、厄神かしら。まあ何でも良いわ。通したくないつて言うなら 弹幕で勝負よ！」

「元気な人間ねえ。負けたら大人しく帰りなさいね？」

そして緑の髪の少女 厄神・鍵山雛の言葉に対し、魔理沙と靈夢が突破を宣言。

雛もこれが幻想郷での決闘ルール、スペルカード勝負に基づいた物だと理解しているのだろう。

苦笑しながらも両手を広げ、弾幕を放ち始める。

後に語られる風神録異変は、既に第一段階終盤へと状況が

ステージ

移っていた。

#

「駄犬、状況はどうだ？」

「そうッスね、負け犬。……んー、見た所山の麓でやり合つてゐたいッスね。今やり合つてるのは厄神様かな。……あ、やられた」

そして守矢神社では、本殿の屋根の上に立つた桟が目の上に手を翳して麓の方に視線を向けていた。

“千里先まで見通す程度の能力”を持つ彼女の索敵能力は幻想郷内でも上位に入る物だ。純粋な視覚のみに限定すれば最上位とすら言えるだろう。

そんな彼女は神社に居ながらにして靈夢と魔理沙の侵攻状況を確かめるモニター役として、境内前から状況を聞いて来る西宮に応じていた所だ。

諏訪子と神奈子は靈夢や魔理沙を迎える準備をするため、神社の

周囲に陣地を造りに向かった。

御柱オンバシラを突き立てて作る陣地は黒幕っぽく見せる為の演出であると

同時に、神奈子と諏訪子の神力を増強する為の即席の祭壇だ。

靈夢達がここに来る前に、二柱は迎撃の準備を済ませる心算でいるのだろう。

早苗は一通り西宮の胸で泣き终わり、今は部屋に引っ込んでいる。どうせ迎撃に出るまでに時間があるなら、身支度を整えてからにしたいとの事だ。

涙の痕が残つた顔のまま迎撃に出るわけにもいかないだろうと笑う彼女には、先程までの悲壮な様子は見受けられなかつた。

かと言つて緩んだわけでもない。纏う雰囲気は、腹を据えたとう表現が一番近いだろう。

そして紫は待機。

スキマを使えば直接間接を問わず色々な支援は可能なのだろうが、迂闊に彼女が動くと靈夢辺りにそれを悟られかねない。

そうなつてしまえばこの異変は『妖怪の山の神社が起こした物』から『八雲紫が山の神社と手を組んで起こした物』になつてしまつ。それはパワーバランスを考えて守矢を迎えた紫の意図にそぐわない。

故に既に文と桜を呼ぶと言つ手助けを行つた以上、待機と傍観が彼女の仕事だ。少なくともスキマを使った手助けはこれ以上はあり得まい。

先程までは西宮に請われて靈夢と魔理沙の戦い方を彼に伝えていたが、今は早苗の身支度を手伝つと言つて胡散臭い笑顔のままふよふよと浮遊して行つた。

「川を遡つて来てるツスね。河童辺りに引っ掛けってくれれば、もう少し時間が稼げるんスけど」

「河童ねえ。幻想郷の河童ってどんな奴らなんだ？」

「外の世界で言う『えんじにあ』つて奴ツスね。んーと、アレだ。先日幻想入りして来た外の世界の機械を修理しようとしたところ、銅線が足りなかつたからとか言つて蕎麦で代用しようとして爆発させたとか、そんな連中ツス」

「それエンジニアじゃねえよ。変態技術者か只の馬鹿だよ」

「次回は素麵でやつてみると言つてたんで、次は幾らか進歩するんじゃないツスかね？」

「何で麺類に拘るんだよ。麺類と機械の融合にどういう学術的意義を見出してんだよ。素直に銅線用意しろよ」

「そこはボクらには分からない『えんじにあ』の拘りがあるんじゃないツスか？」

突つ込む西富の言葉を意にも介さず、柾は遠く山の麓　　靈夢と魔理沙が進撃してくる地点を眺めている。

妖精などが靈夢と魔理沙に挑みかかってるのが見えるが、数秒ともたずには撃墜されていく。

「……強いツスねー。文さんは以前にも彼女達に関わった事があつたって言つてましたけど、ボク的には初見なんスが……ありやマジ強いツスよ。ボクが戦つても絶対無理ツス。西富君とかそのボクにも勝てないんだから、ぶっちゃけ論外ツスよ？」

「手はあるさ。博麗は本気でどうしようもないが、霧雨ならばまだやつようがある」

その進撃を見ながら柾が投げかけて来る言葉に、しかし西富は口の端を上げた笑いと共に応じて見せた。

境内前に立つ彼の手に持たれているのは、下つ端哨戒天狗である柾が持つていた山の地図だ。

まだ神社については書きこまれていらない古い地図は、しかしこの山の地理に関して西富に知恵を与えてくれる。

「昔、東風谷が『変な子』って言られて虚められてた時があつてな。その時に報復行為目的で神奈子様に喧嘩の仕方を教わった事がある。あの人は軍神、戦う事にかけての知識は呆れるほどにあるからな。他では微妙に抜けてるが　　ともあれその件を切っ掛けに、喧嘩の立ち回りの仕方……つまりは戦術については多少齧つた」

「あー、何か天狗の里でも座学でそれっぽい事を教えられた記憶が

あるツス。半日で全部忘れたけど

「スゲーなお前の記憶力。ちょっとした衝撃でデータ飛びまくるアミコンソフト並だ。 ともあれ、策はある。お前にボコボコにされた数日間で積んだ付け焼刃の戦闘経験と、霧雨と俺との間に出来ていた僅かな縁。そして藍様からその件の後で起こった事件についての顛末を聞いていた事と、八雲様から先程与えられた霧雨に関する情報がここで生きてくれる

そして、『この地図が最後のピースだったな』などと笑いながら、西富飛行術を使って桜の横まで飛び上がり、地図を返す。

地図を受け取つてぞんざいにポケットに仕舞いながら、桜は特に西富の言葉に疑問を浮かべるでもなく視線を麓の方に向け直す。

「何やらやつこしい考えがあるみたいツスけど、知つても忘れるんで別に良いツス。 お、どうやらにとりが見つかってなし崩しに弾幕を開始したみたいツス」

「にとり？」

「ボクの友達の河童ツス。……あ、光学迷彩壊れて涙目だ」

「……麺類で銅線の代用をしようとする割に、部分的には異常に高度な科学文明を持つてるなオイ」

外の世界でも未だ実用化されていない河童脅威の技術力に、西富が呻くように呟く。

しかし別段弾幕勝負でそれが有効活用される事も無く、涙目で応戦するにとりは徐々に追い込まれていくが

「あ？」

「……どうした？」

「いえいえ。千両役者の到着ツス」

桜の視界の隅に映つた影。千里先を見通す彼女の目ですら、ともすれば捉えられない程の速度で靈夢と魔理沙がにとりと戦っている場所へ向かう黒い影の姿に、桜が嬉しそうに笑みを浮かべて尻尾を振る。

「やつちやえ文さん！ やつつけろーツス！！」

目的を考えるとやつつけちゃ駄目なのだが、それでも桜は両手を掲げて応援の声を上げる。

直後、西宮の目からも視認できる規模の竜巻が、山の麓で巻き起こった。

#

その一撃は、靈夢にとつても魔理沙にとつてもことつことつともつまりはその戦場に居た全ての者にとつての予想外として顯

「旋符」・紅葉扇風ツ！！」

۱۷۶

「どうだ、アーヴィング？」

「つれやあああああああああああああああああああああああああああああああ

完全なる不意打ちで豪と音を立てて、二者を同時に巻き込むよつに出現する竜巻。

持ち前の理不尽なまでの勘で直前に気付いていた靈夢はある程度の余裕を持つて、魔理沙は持ち前の速度でギリギリながらそれを

回避する。

代わりと言わんばかりに悲鳴のドップラー効果付きで、天空高く
に河童が一名打ち上げられて行つたが　　靈夢も魔理沙も視線を
既にそちらに向いていない。

両者の目は既に今の竜巻を作り出した者　　高下駄の一本足のみで器用に木の枝の上に立ち、彼女達を睥睨して来ている鳥天狗の少女、射命丸文に向けられていた。

射命丸は取材用の笑顔ではなく、彼女本来のにやにやとした笑みを浮かべて場を見渡す。

「あやや……にとりが囮になつてくれてる内にやれば、片方くらいにはそれなりにダメージを与えるかと思つたんだけどね。反応が前に取材した時よりも良くなつてるじゃない。流石人間、短命故に進歩の速度は比類無し、と」

「随分な挨拶ね、文。というかいつも全く敬意を感じられない敬語はどうしたのよ？」

「アレは取材用。今は天狗の里に住まう天狗として、取材帰りに見かけた山への侵入者に攻撃を仕掛けただけ。だから敬語なんて使わないわ」

そして靈夢の言葉に余裕たっぷりに紫と相談して決めた設定を返す姿は、いつもの慇懃無礼な新聞記者の物ではない。

身に纏う妖力は千の齢を越えた大妖怪の物。更に言つなれば文は天狗の里でほぼ唯一外と関わり続け、場合によつては戦闘にも巻き込まれていた　　言つてしまえば天狗の里には極めて数少ない、『実戦を経験し続けた』天狗だ。

妖力のみならず、戦闘経験も豊富。或いは単純な妖力の過多ならともかく、総合的な戦闘能力ならば天狗の長である天魔さえ除けば天狗の里で屈指とすら言えるだろう。

慇懃無礼な新聞記者としての顔を捨て、そんな大妖怪としての片鱗を覗かせながらの文の言葉。それに応じたのは魔理沙だ。

「つまりアレか。『ここ』通りたくば私を倒してから進むのだな!』つて奴か

「そうね、そうなるわ。異変つてだいたいそういう物だし。それに天狗としてつてのもあるけど、これは古い馴染みの頼みでもあるからね」

「古い馴染み?」

「若く美しく清く正しく頭脳明晰な私だからね。ちょっとそんな眉目秀麗才色兼備な私を頼つて、頼みごとをして来た奴が居るのよ」「まあその辺の事情は興味無いんだが……おい靈夢、天狗が目を開けたまま寝言言つてるぞ。どうすれば良い?」

「憐れんあげれば良いんじゃない?」

「貴方達も大概酷いわね……」

仮にこの場に天空高く打ち上げられて飛んで行き、今はあられもない格好で遠くの森の木に引っ掛けあって氣絶しているにとりが居れば、『あんたも同類だ!』と声高に叫んだであろう言葉を文が呟く。しかしこの場に彼女はおらず、従つて誰も突つ込む事は無いまま、文はその古馴染みを思い出す。

胡散臭い笑みを浮かべ、反則臭い能力操る大妖怪。

しかしその実、自らの式神を家族同然として扱い自らの苗字を分け与え、外の世界では生きていけない幻想の者達が最後に流れ着く場としてこの地を創つた、文の知る限り最上級の御人好し。

必要であればどこまでも冷酷になれるが、本質の部分で非常に甘く情に篤い。およそ妖怪らしくない、しかし文が知る限り最強級の力を持つ大妖怪。

「」の騒がしくも穏やかで厳しくも優しい幻想の地を作り出した、

境界に住まう優しき賢者　八雲紫。

その胡散臭い笑顔を思い浮かべ、文の口元に自然と笑みが浮かんだ。

「全く……たまに頼つて来たと思えばそれは自分ではなく他人の為。しかも私に頼むにあたつて天狗の立場に配慮する始末。　もつと素直に頼れと私は言つてやりたいわ。素直に応じられない私も、大概アレだけど」

眩いた言葉と共に、文の周囲に風が集まる。

かつての取材の時とは違う、『新聞記者』としてではなく『大妖怪』としての文の力。

肌に感じるビリビリとした圧力に、靈夢と魔理沙がその文に対して戦闘態勢を取る。

「まあ、だからせめて頼られたからには十全以上の働きをしてあげましょ。私は友達思いだからね」

文にとつての勝利条件は、ここで魔理沙と靈夢に勝つ事ではない。この二人　特に靈夢相手では本気でやつて勝てるかも実際の所は微妙だが、負けたとて彼女達に出直しを考えさせるほど消耗させては本末転倒。ある程度の余力を残した状態で、この二人には守矢神社組と対峙して貰わねばならない。

その状態の靈夢と魔理沙と渡り合う事で、守矢神社は己の実力を幻想郷に示す事となり　それで紫の目的は完遂される。

ならば彼女の　射命丸文の役割は神々が準備を整えるまでの時間稼ぎをしつつ、靈夢と魔理沙にある程度の余力を残させながら、

しかし多少の消耗はさせる事。

故に彼女は本気を出してもないう、一人には本気を出して貰わねばならない。

「……ああ、手加減してあげるから

」

そして羽扇を軽く振るつと、轟といつ音と共に彼女の周囲に強く強く風が絡みつく。

先のように竜巻を飛ばすのではなく、自らの周囲に竜巻を纏う形を取つた文が、叫びと共に突撃を開始した。

「 本気でかかる来なさい！！」

かくて風神録異変は第四段階ステージに入する。

第十一話・鳥天狗の射命丸（後書き）

射命丸のあの台詞は、東方シリーズを通して一番好きな台詞かもしれません。

ともあれ駆け足氣味で1～4ステージ。

桜は4面中ボスとしては不参加です。

東方はキャラが多いので、全員に見せ場を作つていたら色々と大変な事になる為　　1～3ステージの皆様は割を食つたかもしません。

ごめん。でも穰子様も静葉様も雛もにとりも大好きです。

第十一話・信頼（前書き）

今回は少し短め。

まあ、プロットの都合上ここで切つた方が区切りが良いかなと思つただけですが、ご了承ください。

「涙の痕は……消えましたね」「うん、ちゃんと可愛いから心配しなくて良いわよ」

社務所にある早苗の部屋では、身支度を整え終わった部屋の主が手鏡を覗き込んでいた。

紫もその後ろから鏡を覗き、太鼓判を押す。目元に残る涙の痕を消す為に、早苗は彼女から借りた化粧品（しかも何故か外の世界の）を用いたのだった。ついでに紫手ずから、簡単なナチュラルメイクを施すオマケ付きだ。

くすくすと笑みを浮かべながらのその言葉に、早苗がはにかむような表情で肩越しに紫に振り返る。

「いやその、可愛いだなんて」

「あら？ だつて早苗さんはとても可愛らしきわよ。外の世界ではモテモテだったんじゃないの？」

「んー……結構告白とかはされましたけど、信仰を集める方が大事だから」遠慮してましたんで、良く分かりません

「…………あらそう」

「それに、一番身近に居た西富にはそういう事一度も言われた事ありませんでしたから、自分の姿について深く考えた事はありませんでしたね」

「彼には今度、女心についてレクチャーしてあげる必要があるわね」

やれやれとでも言いたげに、紫は部屋の入り口に向かって戸を開ける。

そして自分は戸の横へ避け、その戸をぐぐりとせせりに穂やかに微笑んだ。

「ここから先は貴方一人でお行きなさい。私がする手伝いはここまで。貴方達が靈夢と魔理沙に敵うかどうかは分からないし、私は本來なら靈夢の味方をするのが筋なんだろうけど……今回だけは貴方達を応援してあげるわ」

「はい。

「あの」

「ん？」

「紫さん、本当に申し訳ありませんでした!!」

しかし早苗は戸を潜る前に、紫に向き直ると思い切り頭を下げる。その様子に驚いたのは紫だ。

彼女としては謝罪云々は先の話で終わつたと思っていたのである。

「……頭を上げなさい。その話はもう終わった筈でしょう?」

「ですが……先程、神社の周囲に陣地を作りに行く前に、神奈子様と諏訪子様が仰っていました。紫さんにとっての博麗靈夢さんは、きっと御一柱にとっての私と西富みたいな存在だって。私は紫さんにとっての大事な人に、無作法に喧嘩を売つてしまつたんです。だからそれを聞いて、もう一度謝らなきやと……」

「……ええ、確かに靈夢は私にとって、御一柱にとっての貴方達のような相手よ。確かにそれで一度、軽く頭に血が上ったのも事実。でも今は貴方を許す心算でいるわ。御一柱のおかげもあるし、貴方自身が好ましい人物であるのも理由の一つ。貴方の相棒である西富君もね」

くすくすと笑いながら、紫は笑みを浮かべる。

相変わらず胡散臭いながらも、しかし自らの非を認めて重ねて謝る早苗に向けた視線はどこか優しい。

「だけど貴方が気にするというのなら

「そうね、この件が終わ

つたら靈夢と普通に接してあげて貰えるかしら？ 異変が終わり、この神社が幻想郷に受け入れられたら……貴方や西富君が靈夢の友人となってくれれば、それ以上に嬉しい事はありませんわ

「分かりました。微力を尽くします！」

「……いや、友人つてそんなに根性入れてなる物じやないと思つんだけど」

「いえ、何事も全力を尽くすのが私の信条ですので。それで行つて参ります！」

元気良く戸を開け、進んで行く早苗。その背を見ながら大丈夫かなあという思いが紫の胸に去来するが、同時に大丈夫だろうという根拠の無い楽觀も内心で浮かぶ。

考え無しで無鉄砲。だが根の部分で自らの非を認められる強さと家族を想える優しさがあるこの少女。そして憎まれ口を叩きながらも彼女の横に立つ少年。

彼らならば多分大丈夫だろう。

根拠の無い樂觀、しかし矛盾するようだが根拠はある。

つまりは彼女が根拠としているのは、根拠と呼べぬ程度の根拠。それは

「ン千年生きた女の勘ですわ。 なんてね」

くすりと笑つてそう『根拠』を呴き、彼女はゆつたりとした動作で床に座る。

手助けするだけの事はした。後は神々と、そして西富と早苗の奮戦を祈つておこう。

そう結論付けながら、彼女は早苗の背中を見送った。

#

「遅かったな、東風谷。こっちの準備は今しがた終わつたぞ。
これ以上遅れるようだつたら呼びに行つた所だ」

「文さんも今負けた所ツス。とはいっても大した怪我も無く、今は
迂回ルートでこっちに戻つてこようとしてる所ツスね。神様達の準
備は八割完了。少し時間を稼ぐ必要があるかと。あとにどりはバ
ンツ丸出しで樹に引っ掛けつて氣絶してるツス」

「会つた事も無いその河童、エラく不憫な事になつてるなオイ」

そして社務所にある自室から出た早苗を迎えたのは、神社の敷地
の外から戻つて来た西宮と柵だった。

何故外から戻つて来たのかと言う疑問から僅かに首を傾げる早苗。
その様子に気付いたのだろう、西宮が『ああ』と納得したような
咳きと共に話を始める。

「仕込みだよ。丁度今終わつた所だ」
「ボクも手伝つたツス。褒めろ！」
「あ、ええと……ありがとうございます？」
「褒められたツス！ 感謝の気持ちは『かつぶめん』で良いツスよ
！」

西宮の横でバタバタと尻尾と両手を振つて褒めろアピールをする
柵に、早苗は良く分かつていらないながらも礼を述べる。
その全く分かつていらない謝礼に気を良くした柵、露骨にお礼の品
まで要求するが、やはり安かつた。

「まあそれくらいで良いなら、まだまだ備蓄はありますし……とこ
ろで西宮、作戦は決まつてゐんですか？」

「一応な。お前は顔に出るから特に説明はしないでおくぞ。全部終わったらネタばらししてやるから、その時に聞いて驚くなよ？　いや、やっぱり驚け」

「どうですか？」

「聞いて驚くなと言つのが定型文だが、やっぱり驚いて欲しいという人情が混ざった」

「まあ別に良いですけど。西富がアホなのはいつもの事ですし」

「アホ言うな馬鹿東風谷」

いつも通りの馬鹿な会話。

それを交わしながら、西富は戻つて来たばかりだが再度飛行術でふわりと浮きあがり、地上に立っている桺に頭を下げる。

「桺、色々助かっただ。射命丸さんが戻つてきたら礼を言つておいてくれ。あの人人が時間を稼いでくれたから、こちらの仕込みも出来た」「了解ッス。……ボクも手伝わなくて良いんスか？」
「策を考えると、むしろ俺と東風谷だけの方がやり易い。その気持ちだけ受け取つておくよ」

「……手伝えばその貸しを盾にもつと『かつぶめん』を要求できると思つたのに……」

「お前潔いぐらい馬鹿で、いつそ好感が持てるな」

呆れながら、浮上して高度を取る西富。
早苗もそれに続いて浮き上がる。

「迎撃場所とかは決めてるんですか？」

「ああ。まずは博麗と霧雨が来る前にそこまで移動するぞ」

「分かりました。　それと……」

「ん？」

地上では桜が両手を振りながら『頑張れー』と叫んでいる。

その言葉を聞きながら、目的地　つまりは靈夢と魔理沙の想定侵攻ルート上に移動を開始する一人。

そんな中、早苗が拗ねるような表情を西宮に向ける。

「……わつき一回だけ『早苗』って呼んだのに、もう『東風谷』に戻りましたね」

「あー……そんな風に呼んだか？　意識してたわけじゃないんだけどな」

「呼びました。私は忘れません」

ぶすっとした表情になつて、早苗は西宮を追い越すように速度を上げる。

追い越された西宮は呆れたような目線を早苗に向かつゝ、ぼそりと呟く。

「お前だつて『丈一』とか呼んだだろ。お前にああ呼ばれるのも懷かし過ぎて驚いたつつの」

「元は貴方が他の子にからかわれて、私の事を名前で呼ばなくなつちやつたんじゃないですか」

「お前だつて俺の事を名前で呼ばなくなつたら」

「それは貴方が私の事を名前で呼ばなくなつたからです」

ふん、と顔を背ける早苗。

機嫌を損ねた事を確信させるその動作に、西宮は溜息を吐く。

これから巫女と魔法使いを迎撃するのにこれで大丈夫なのかと内心思つが、顔はそっぽを向いたまま、早苗は西宮に質問を投げかけて来た。

「作戦の詳細は聞きましたけど、一つ教えて下さい。勝算はどれく

らいありますか？」

「まず異変の内容を考えると、どちらかには神奈子様と諏訪子様の所まで辿り着いて貰わないと困る。博麗は多分俺達の手には負えないから、狙いは霧雨。奴を神奈子様と諏訪子様の所まで行かせなくすれば目的達成で、成功の可能性は三割つて所だな」

「ねえ、それかなり低くないですか？」

「高いぜ。少なくとも幻想入りしたばかりの俺達が、異変解決の専門家相手に出し抜ける確率としちゃ破格だろ。それに三割あたりやクリーンナップは張れるさ。そう悪い賭けじやない」

「あー、まあ確かに」

西富が告げた言葉に、早苗は控え目に肯定の声を返す。

異変の目的は勝敗に関わらず、守矢神社の力を山の内外に示す事。故に靈夢か魔理沙

神奈子と諏訪子の元まで辿り着いて貰わねばならない。それは大前提の一つだ。

しかし先程神社を出る際に梶が言っていた、『神々の準備は八割』という事を考えるとこのまま通す訳にも行かない。

つまり西富と早苗に求められる役目も、先の射命丸に近い。

『時間を稼ぎながら、可能ならば敵の力を削ぐ』というその目的。射命丸と違うのは、早苗と西富には彼女のように手加減する余裕など無いだろうし、全力をぶつけても勝利はおろか、撤退に追い込む事すら逆立ちしても不可能だろうという点だ。

ならば西富の言う成功率三割に賭けてみるのも悪くは無いだろう。神奈子と諏訪子が力を示すだけならば博麗の巫女相手で十分。魔理沙まで行かせてしまうのは、未だ本調子とは言えない神々に余計な負担を与える事となる。

故に彼女は、可能ならばここで追い返す。

「……分かりました。成功率三割に乗りましょう。大丈夫、必ず出来ます」

「その根拠の無い自信が出て来る不思議な方程式は何だよ。根拠無いだろ絶対」

「まさか。方程式と言つか、理由はあります」

早苗が西富の方に振りかえり、くすりと笑う。

それも先程までの拗ねた表情ではなく、むしろ相手を信頼し切った無垢な表情で。

「西富はさつき、『失敗した分は俺達自身で取り返す』と言いました。貴方はあんな状況で嘘を吐くような人じゃない。私は貴方との言葉を信じます」

「…………つ反則だろ、それ」

「ふふっ」

その笑顔に、今度は西富が顔を逸らす。

明らかに照れたその様子に、早苗がしてやつたりとでも言いつゝに含み笑いを漏らした。

そしてひとしきり笑い終わつた所で、飛行しながら早苗が西富に近付き声をかける。

開戦前の、最後の作戦会議だ。

「…………それじゃ、西富。信頼してますから、その作戦を成功させる為に私が何をしたらいいのか教えて下さい」

「…………ああ。お前の役割は難しいが単純だ。それは」

「勝った気がしね。あいつまだ余力残してただろ絶対」「良いじゃない。そうだとしても、私達も余力を残したまま進めたわけだもの」

そして、程無くして。

靈夢と魔理沙は妖怪の山の七合目辺りを飛行しながら、そのような言葉を交わしていた。

周囲は鬱蒼と木々が茂つており、人の立ち入らない妖怪の山らしいを醸し出している。

彼女達からすればどういうわけか、山に入れば煩いだろうと思われた天狗の姿も射命丸以外に見る事は無く、彼女相手に少々手こずつたものの他にはさしたる問題も無くここまで来る事が出来た。最も、魔理沙はその射命丸戦に少々不満が残っているようだが。

「なーんか不完全燃焼なんだよなあ。そろそろ目的の神社の関係者が来ても良い頃合いだろうし、次の相手はまだかよ」「私は楽な方が良いんだけど」

そのような会話を交わしながら飛ぶ一人。
しかし次の瞬間、

「噂をすれば、ね」「甘いぜー！」

両者は全く同時に回避行動に入る。

靈夢はゆるゆると流れるように、魔理沙は鋭く直線的に。

全く質の違う動きながらも、両者は各自自分に飛んで来た弾幕を

回避した。

靈夢の勘に従つて進んでいた彼女達の前方

即ち神社の方角

から飛んで来た弾幕。

それは共に同じ御札を媒介とした物であり、しかし別の個人の放つた物だった。

「ここから先は通しません、博麗の巫女！ 私が相手です！」

「……誰よアンタ。その格好から察するに少し色が違うけど巫女？」

……って言う事は、あのふざけた宣戦布告を出した神社の一員ね

靈夢の方へと荒削りながらも強い靈力で弾幕を放つたのは、青と白の風祝の衣装を身に纏つた少女、東風谷早苗。

大幣を手に高々と戦意を叫ぶ彼女に対し、靈夢は二白眼で睨みつけながらもお祓い棒を手に構える。

「よお、久しぶり……って程でも無いか？ “普通の魔法使い”」「そうだな。だが私としてはお前に少し用と恨みがあるぜ、西宮」

そして魔理沙の方へと靈力は弱いながらも死角を突くような嫌らしい配置の弾幕を放つたのは、ジーンズとシャツに上着を羽織ったラフな格好の少年、西宮丈一。

多少の因縁のある両者は、互いに好戦的な笑みを口元に浮かべて睨み合つ。

奇しくも大きく迂回しながらも速度と地の利で大きく靈夢達に勝る射命丸が、守矢神社で待つ柵と紫の元に辿り着いたのと同時。

風神録異変は第五段階ステージに突入する。

第十一話・信頼（後書き）

と、いうわけで今回短めに戦闘開始直前まで。
明日は忙しいので更新の可否は不明です。もしかしたらまた番外
でお茶を濁すか、一日空くかも。
ご一承ください。

第十二話・策（前書き）

今回、スペルカード戦と「」ことでオリ主がオリジナルのスペルカードを使っています。「了承ください。

まあ、名前負けの感が極めて強いんですけど。別に能力を使つてゐるわけでもなく、ノーマルの靈弾をそれっぽく発射してゐただけですしお。

あと割と今回も独自設定などのオンパレードですね。
「いらっしゃいました」承くだされば幸いです。

「“秘術”・グレイソーマタージー！」

四者の中で真っ先に戦闘の口火を切ったのは早苗だった。弾幕をバラ撒きながら靈夢に突撃。その愚直な突撃に対して、靈夢は嫌そうな顔で距離を置こうとする。

「ああもう、近付いて来ないでよね」

突撃した早苗から距離を置くように、靈夢はこれまで進んで来たルートからやや脇へそれる形で山中へ飛び込んで行った。

博麗の戦い方は元々が結界を多用する、攻か防かと言われば防の戦い方。加えて靈夢自身のスタンスが剛か柔かで言われば完全な柔だ。

初手からスペルを開けながらの突撃に、彼女はそのスペルを避け、結界で受け流しつつ距離を取る事を選択した。

これはある意味、早苗がそうさせたと言つよりも射命丸の功績と言えるだろう。

『どちらかと言えば』防であるだけで、靈夢自身は攻撃能力とて相当な物だ。

しかし彼女は田の前の相手を『それなりに出来る』と判断すると同時に、『普通にやつても負ける相手ではない』と直感していた。

弾幕ルールの第一人者としての経験、そして彼女ならではの勘で導かれたそれは、完全な正解だ。

故に彼女は相手の能力を把握し切り だからこそ後退防御を選択させられてしまったのだ。

理由は先にも言つた通り、射命丸戦　　正確に言つならば、靈夢が射命丸相手に受けた消耗が原因である。

彼女の乱入の直前まで戦っていた河童までは、靈夢にとつても魔理沙にとつても強敵と言える相手は居なかつた。

しかし射命丸は靈夢と魔理沙相手に一步も引かぬ戦いを見せ、彼女達の双方にスペルカードやアイテムの使用という消耗を強いて來たのだ。

靈夢の勘では、目の前の巫女は黒幕ではない。

とすればこの巫女の先にボスが待つてゐる事となる。故にこれ以上の消耗を抑える為にも、彼女は時間をかけてでも消耗を抑える戦い方をせざるを得ない。

故に事故の起きやすい近距離戦ではなく、見切りのし易い遠距離戦。

誘導弾といつどにに居ても相手を追尾する弾幕を多用する彼女にとつては、近距離よりも遠距離の方がやり易い為といつものもある。近距離でもやってやれない事は無いが、近すぎるると『誘導性』といつ弾幕の持ち味が殺されるのだ。

故にこの場で彼女が選択するのは遠距離戦。
安全に、確実に、面倒無く勝つ為に。

しかし

「まだまだです！　逃がしませんよ　　“奇跡”・白昼の密星

!—!

「ああもう、面倒臭いわねえ……—」

しかし、早苗はそれをさせまことに続けざまにスペルを放ちながら距離を詰める。

故に靈夢は距離を取る。

早苗は明らかにオーバーペースなスペルの連射だ。対する靈夢は引いて時間を稼ぎさえすれば、相手は長くは体力がもつまいという見方もあるのだろう。

そして結果として、彼女達は魔理沙と西宮から大きく引き離される。

そう、西宮が早苗に授けた作戦通りに。

#

そして西宮は魔理沙と対峙しながら、早苗が靈夢と共に飛び去つて行くのを横目で見ていた。

魔理沙も同様だが、こちらは初めて見る相手である早苗の能力を警戒していたので、迂闊に動こうとはしなかったというのが強いだろひ。

西宮の側は、まずは作戦通りに事が運んだ事に内心で胸を撫で下ろしている状態だ。

彼が早苗に出していた指示は単純だ。

『初手から全力を出して、博麗靈夢を引き離せ』。

それは紫から聞いた博麗靈夢という少女の戦闘スタイルと性格、そして射命丸との戦いで予想される消耗などを計算した上での言葉だった。

攻より防。剛より柔。そして無駄と面倒を嫌う怠惰者。ならば全力で弾幕を放ちながら突っ込んで来る相手に正面切つて付き合う愚を犯さず、まずは距離を取るだろうと読んだ上の指示。

靈夢自身が消耗しているなら尚更だ。

そしてその読み通り靈夢は距離を取り つまりここから離れて行つた。

博麗の巫女相手に囮をやるという難易度の高い役目だったが、早苗はどうやらその役目を十全に果たしてくれているようである。

遠くから聞こえる弾幕音に早苗の奮戦を感じながら、西富は魔理沙に声をかける。

「さて、向こうは盛り上がってるみたいだし……」いつもそれそろ始めるか

「おいおい西富。本気で私相手にやり合つ心算か？ 見た感じお前、靈夢を引き付けてつた青白巫女より弱いだろ。感じる靈力、飛行の慣れ、さつきの弾幕の威力。全てが青白以下だぜ？」

「その心算だよ、霧雨魔理沙。見た感じどころか事実としてその分析は正しい。 けどな、生憎とこっちにも理由があるんだよ。

神様の『神託』でもあるしな

「ハツ、神託ねえ」

十間ほどの距離を置いて、妖怪の山の山中で対峙する西富と魔理沙。

しかし魔理沙は眼前の敵の言葉を、鼻で笑う。

神託に従う それは即ち、この場で戦う理由を他人任せにしている事に他ならない。

同じ誰かに仕える立場でも、妖夢や咲夜や鈴仙は自分の意思で誰に言われるでもなく、主人を守る為に前に出て来ていた。それに比べると、この理由は些か興醒めだと魔理沙は思つ。

粋に華麗に美しく、人妖神靈が対等に決闘する舞台。序盤戦で巻き込まれる程度ならまだしも、この終盤戦に踏み込んでくるのにそ

の理由は、彼女の美学にはそぐわない。

「なんだそりや、そんな理由で私と弾幕り合つ心算かよ。そいつはちょっと粋じやないぜ。弾幕ごつこの何たるかが分かつてないな」「仕方ねーだろ。……なあ霧雨。俺が受けた神託つてな何だと思つ？」

「あ？…………そうだな、神社を守れだの我に従えだの、そういうのじゃないのか？ 私にや分からん感覚だが、神様直々にそう言われるつてな信者としちゃ誉れなんだろ？」

「そりや俺にも理解できねーな。だいたい当時は神も仏も信じて無かつた俺がいきなりそんな神託告げられて喜ぶかよ。そういうもんじゃねえのさ、ウチの神様達が外の世界で今にも消えそうな分際で、最初に俺にくれた『神託』はよ」

口の端を歪め、糸田を見開き好戦的に笑う西町。

両の袖口から飛び出した札がその手に握られ、ギラ、ギラとした目が実力差を覆して勝機を掴む機を逃すまいと魔理沙を睨み付ける。

それを見た彼女は半ば本能的に直感する。先程までの自分の物言いは間違いだ。

こいつは言われるがままに勝負に踏み込んで来たわけではない。確固とした自分の意思でここに立つている。

そう感じた瞬間、粋ではない理由で弾幕勝負に踏み込んで来た相手に醒めた筈だった興が、再度燃え上がるのを感じる。
成り行きでブチのめした神様やら河童とも、手加減宣言をしながらかかって来た天狗とも違う。

強い弱いの問題じやない。

面白い。

靈力も弾幕慣れも弱いが、それでも本気で勝ちに来ている田だ。
彼女はそういう田は嫌いじやない。

「……随分とまあノッてるみたいじゃないか、西宮。お前はこの先の神社に居る神様に何を言われたってんだ？ 聞かせりよ、オフレ口にしといてやる」

「『早苗を泣かすな』だとよ」

そして西宮が苦笑交じりに告げた言葉に、魔理沙がぽかんと口を開けて硬直する。

彼女からすれば、それは余りに慮外の言葉だ。

神々が告げる神託としては余りに陳腐で、しかし故にこそ

「だつたらよ、なあオイ！ 今にも消えそうな状態で、無鉄砲でガキ丸出しな風祝にしか姿を見られない分際で！ それでもその風祝を思つて告げられた言葉があつて、更にその風祝がイイ女だつてんなら、そりや叶えなきや男が廃るつてモンだろうよーー！」

故にこそ、その陳腐な神託がこの男の軸だ。

自分が傷つけて泣かせた少女を一度と泣かせるまいとする、下らなく陳腐な意地。

西宮丈一は高らかに下らない、しかし彼にとつて絶対の意地を叫ぶ。

結局の所、この幻想郷での異変など、殆どが下らない意地や我儘のぶつかり合いだ。

故にこそ そんな理由で立つ西宮の姿は、幻想郷の一員として相応しいものとして魔理沙の目に映つた。

「 良いね、痛快だ。理由があんまりにも私好み過ぎて笑えて来る。この恋色の魔法使いこと魔理沙さんをして、ちょっとばかり胸が震えたぜ。エイプキラーだの何だのフザけた呼び方しておいて、

お前の巫女大好きなんじゃねーかよ」

「正確には巫女じゃなくて風祝つてんだけどな。まあお前と最初に会った時は面倒だから巫女つて解説したけど」

「まあ何でも良いさ。アレだ、理由は知らんが彼らが行くとあの巫女……風祝だつけか？ まあ、そいつが泣くんだろ？」

「ああ。そもそもこの異変は割とあいつのミスで始まった側面が強い。だから自分のせいで神様や俺に迷惑かけたのが申し訳ないと先程までは泣いていたな。……だから、これ以上あいつを泣かせない為にも、お前はここで退場願う」

「心地良いね。痛く痺れる。 けど、異変解決は私のライフワークだ。こればっかりは譲れないな」

強気に笑む魔理沙と西宮の視線が交錯する。

これ以上の言葉は不要。今は異変のど真ん中で、両者の意見は対立中。

ならばこう言つ時にどうすれば良いのかは、幻想郷の住人ならば皆分かっている。

「どっちの意見が通るかは

「 弾幕で決めるってなあ！」

そして両者は全く同時に弾幕を展開しながら、妖怪の山の中での弾幕戦を開始した。

#

「 梶、状況はどう？」

「 そうツスねー……にとりはパンツ丸出しツス」

「そこはどうでも良いわ」

「あいっス」

守矢神社の屋根の上にて、一人の天狗が会話を交わしていた。片方は守矢神社への待機を指示された犬走柵。そしてもう片方は、幻想郷最速とすら評される飛行速度で、迂回ルートを使いながらも、靈夢達より早く神社に到着した射命丸であった。

そして射命丸文、まさかの自分が吹つ飛ばした相手の行く末をスルー。

未だにしましまパンツ丸出しで樹に引っ掛けかっているにとりの存在は、彼女達の会話から秒で省かれた。

「……んー、早苗さんは善戦してるッスね。とは言つても、弾幕もスペカも飛行もどれもこれもオーバーベースに見えるッス。長時間はもたないッスよ」

「そちらは多分、引き付け役ね。靈夢はどうにもならないのは、風祝と信者のタッグにも分かつてたでしょ。紫から話を聞いてたみたいだし。　だとしたら、何か仕掛けるとしたら本命は魔理沙の方。柵、そつちは？」

「まあ、作戦通りの展開ッスね」
「作戦通り？」

神社の上にて柵は自身の能力である千里眼を用いて、射命丸の指示でこの場から早苗と西富の各々の戦いをモニターしていた。

その柵が返した西富側の戦況についての言葉に、文が鸚鵡返しに聞き返す。

対する柵は、『仕込み』を行った時に西富から聞いていた言葉を思い出そうとして、

「やつべえ七割忘れた」

「……凄いわ貴方の記憶力。良いから覚えてる事だけ言いなさい。

あと現状」

「えーと、魔法使いさんの立場なら、弱つちい西宮君相手にスペルを放つて一気に終わらせるような無駄遣いはしないだろ?とか何とか。で、その予想通り、現状は追いまくられてるけど通常弾幕のみなんで、辛うじて逃げ回てる所ツス。逃げながら向かう場所は地図で言うと二二四四ツスね」

「へえ」

思い出し切れなかつた桜の言葉に、射命丸が頭痛を堪えるようにして返す。

しかし桜が首を傾げながら返した断片的な台詞と、地図に示された目的地に、彼女の口元が笑みの形に歪んだ。

元々が射命丸文は頭の回転がかなり早い妖怪だ。

その言葉と桜が連れて行かれずに置いて行かれた事実から、ほぼ正確に西宮の意図を読み取つていた。

桜を連れて行かなかつた理由は、彼我の戦力差が縮まり過ぎた事で靈夢や魔理沙に本気を出させない為。

個々の戦闘能力はともかく、三対二という数的不利のある状況になつたならば、流石に魔理沙や靈夢とてスペルの消耗を抑えたまま勝とうとは思つまい。

妙な話だが圧倒的に不利な状況であるからこそ、西宮と早苗は辛うじて戦闘を継続出来ていた。

遠からず負ける事が確定している相手に無駄にスペルを使う愚を魔理沙と靈夢が厭つたからであり、その結果として西宮は逃げ回り

「逃げ回った先には、面白い物があるわね。 そこまで引き込む、か」

そう、これは誘い込みだ。

窮鼠は猫を噛む為に、自らのフィールドに相手を誘い込む。ならば誘い込んだ先に待つてるのは

#

「どうしたどうした！？ 大見得切つたってのに逃げ回るばかりかよ西宮！」

「言つてろ火力馬鹿が！ 反撃して欲しけりやもつちよい加減しやがれ！！」

「お前地味に滅茶苦茶言つてるなあ！？」

桜の見る先 つまりは西宮と魔理沙の戦闘は一方的な展開だった。

地上すれすれを飛び回る、否、正確に言うならば駆け回る西宮に対し、魔理沙が上空から一方的に攻撃を加えている。そんな状況だ。

「しかしあ前、珍しい移動の仕方してるな」「そうしねえと避けられねーだろ!つが!!」

上空からの魔理沙の声に怒鳴り返した西宮がやつてるのは、弾幕勝負の定石である空中戦 ではない。

攻撃をほぼ放棄しているが故の、地面を転がるようにして逃げ回る地上戦だ。

飛行術にもタイプがある。例えば風を操って自らを飛ばす物や、

自らの身体を軽くさせて浮遊させる物が一般的だらうか。

それ以外にも色々あるが、前者は弾幕にも応用が効き、後者は体捌きの面で応用が効く。

西宮が習得しているのは後者だ。

結果として彼がこの戦闘で選択したのは、飛行術で自らの身体を軽くし、その軽くした身体で足を使って駆け回る事だった。

要所要所での加減速と方向転換を足で行うそれは、熟練した飛行技術を持つ相手から比べれば稚拙な技だ。少なくとも弾幕勝負に慣れ、飛行に習熟した人妖がそれをわざわざ行つメリットは無い。

空中ならばグレイズすればどこかへ飛んで行くだけの至近弾が、対地攻撃として放たれた場合には地面で爆ぜ、弾幕 자체の余波や飛散する飛礫などで却つて危険だと言うデメリットもある。実際、西宮は直撃弾こそ無い物の既に余波や飛礫でボロボロだ。

更には何も無い平原などならばまだしも、ここは障害物の多い山中だ。地上すれすれで戦うならば、岩なり木々なりに衝突する危険もある。

しかし飛行に不慣れな西宮にとっては、不慣れな飛行を行うよりも加減速と方向転換が急角度で行えるこの移動方法は都合が良かつた。

少なくとも不慣れな飛行で空中戦を挑んでいれば、最初の十秒で落とされてしまう。

魔理沙側としても、地上の敵を相手に戦うのは不慣れだというのは大きい。西宮にとつては移動上の障害物である木々や岩が、魔理沙にとつては射撃上の障害物になつているのだ。

霧雨魔理沙の弾幕は威力こそ高いが、レーザー系とマジックミサイルという直進弾が主体。誘導弾系の物が無く、この手の射線妨害に極めて弱い。

紫から聞いた魔理沙の戦闘スタイルから西富が得た情報だ。

元来であればスペルを使つていない状態とはいえ、魔理沙自身が元々非常に高い攻撃能力を持つ魔法使いだ。

靈夢が『柔』で『防』ならば、魔理沙は完全な『剛』で『攻』。正面切つての撃ち合いを最も得意とするタイプだ。付け焼刃の戦闘経験しか無い西富が真っ向から相手をすれば、本来であれば相手にもならない事は請け合いだろう。

そう考えた上で地上戦。

加えて西富自身が要所要所で御札や靈弾で相殺を狙い、或いは威力を削いでいる事まで含めて、彼我の実力差を考えれば脅威的な粘りと言える。

そしてその脅威的な粘りを支えるのは、ひとえにその付け焼刃の戦闘経験のおかげだつた。

たかが数日の攻防で劇的に戦闘能力が向上するわけではない。技術も体力も身に着くには圧倒的に時間が足りない。多少マシになり、幾らか慣れるのが精々だ。

或いは靈夢や、そこまで行かなくとも早苗程の才能があれば話は違うのだろうが、生憎と西富はそこまでの才はない。

だがその『多少マシになつた』こそが、西富を幾度も被弾から救つてている。

桺とて天狗。それも射命丸文に付き合つてあちこちに出向いている、見た目と言動にそぐわぬ実戦経験豊富な天狗だ。彼女相手に身に付けた技術が、僅かな差で西富の敗北を押し留めている。

「 もう少し…… ッー！」

そしてギリギリで敗北を回避しながら、西宮は山中のある一箇所を田指していた。

そこには山中にある巨木を田畠として棧と『仕込み』をした場所。即ち、窮鼠が猫を噛む為のフィールドだ。

「 こつまで追い駆けっこを続ける心算だよー。あんまり私は氣の長い方じゃないんだぜー！？」

上空から僅かに苛立ちを含んだ魔理沙の声が響く。
「 の追い駆けっこは、どうやら彼女のお気には召せなかつたらし
い。

魔理沙が遂に上空からスペルを放とうかと考え始めた瞬間
しかし、西宮は「」の戦いが始まつて初めて足を止めた。

「 そりや悪かつた。退屈させた礼だ」

飛礫、泥、至近弾で上着はボロボロ。

所々肌から血が滲んでいる西宮が、しかし満身創痍で上空の魔理沙に攻撃的に歯を剥いた笑みを向ける。

すぐ傍には樹齢千年を越えるであろう巨木。その巨木に寄りかかるようにして、西宮は懐から一枚のカードを取りだした。

それを見た魔理沙が、嬉しそうな声で地上の西宮に向けて叫ぶ。

「 スペルカード……！ ハッ、やつとやる気になつたかよ西宮ーー！
「 悪いな、ちょっと俺だけの力じや撃てないからよ。お前を
「 ここでHスコートしてやる必要があつたわけだ」

そう言いながら、彼は片手にスペルカードを持ち、もう片方の手ですぐ傍の巨木に触れる。

樹齢千年を越えて、既に靈樹となり自らが靈力を持つているその巨木に。

その意図に気付いた魔理沙の目が見開かれる。

『まさかこの男、それを狙つてここまであの撤退戦を続けていたのか』、と口にせずとも表情が語つていた。

「
　　禊祓^{みそぎはらい}・黄泉^{よもつ}返り!!」

次の瞬間、西宮自身の靈力に加えて靈樹から借りた靈力も上乗せしたスペルカードが発動。

西宮の眼前に作られた靈弾が、消滅と再生を繰り返しながら徐々にその数を増やして魔理沙へ向かう。

靈地、という概念がある。龍脈と言い換えれば、紅魔館の門番辺りが詳しいだろう。パワースポットと言つても良い。

とにかく靈的な強い力の『溜まり場』と思えば分かり易い。外の世界に残る樹齢幾千年などといふ靈樹の周辺などがそれに当たるだろう。

その『溜まり場』で修行する事で強い力を得たり、その力を借りて何らかの呪いが行われたりといった例は枚挙に暇が無いだろう。或いは古来から怪奇が頻発していた場所は、何らかの靈地であった可能性があった。などとは大和の地を古い時代から眺め続けて来た守矢の一柱の言葉だ。

そう、一怪奇が頻発していた場所。となればこの妖怪の山も、その最たる地の一つであろう。

加えて天狗は元々が修験者と関わりの深い妖怪。その修験者が篭る山々にも靈地は多かつた。

であれば、その天狗が住み怪奇が頻発している場所である妖怪の山、必ずやらかの靈地がある筈と当たりを付け、西宮が榊に見せて貰つた地図に書いてあつたのがこの靈樹だ。

後は魔理沙が来る前に大急ぎでこの樹が靈地である事を確認すると同時に、今神々が神社でやつているのと同様に、御札を使つてこの靈樹周辺に簡単に陣地を作つておいた。

そこまで込み入つた物を作る必要はない。要はここに来るまでに油断している魔理沙に向けて、靈樹の力を借りたスペルカードを全力で叩き込む。その為の下地さえできていれば良いのだ。

結果、榊の手を借りた西宮は短時間でこの場の『仕込み』を完了。

そして辛うじてここまで魔理沙を誘い込み、自らの力だけでは決して届かない筈の“普通の魔法使い”へ向け、靈樹の力を借りた渾身のスペルカードが撃ち込まれる。

かくして一連のピースは重なり合い、一つの策へと昇華される。射命丸の手による魔理沙の消耗、榊の手による西宮への特訓、魔理沙の油断、この場の地理。何れが欠けても成り立たなかつたであろう策が成つた。

黄泉^{よもつがえり}返り。

古事記曰く、かつて黄泉の国へトイザナミを連れ戻しに行つたイザナギが、しかし黄泉の住人と化したイザナミと黄泉の住人達に追いまくられて逃げ出した出来事だ。

結局イザナギは大岩で黄泉の国への道を塞ぎ、その大岩を挟んでイザナミトイザナギはこう告げた。

『私はこれから毎日、一日に千人ずつ殺そう』

『それなら私は人間が決して滅びないよう、一日に千五百人生ませよう』

それが人間の生死を現す始まりとなつたとされているその逸話。語られた人の数の如く、靈弾は再生と消滅を繰り返しながらも数を増やし、遂には膨大な数を誇る弾幕となつて魔理沙へと襲い掛かる。

「 つー！」

回避は不可能。

油断と驚きが僅かに彼女の身体を硬直させ、迫り来る弾幕への回避の機を奪う。

そして

#

「 待つているのは、恐らく策。それも二重三重に考えられた……お見事だわ」

そう呟く文は、しかし苦笑を浮かべて首を振る。

嗚呼、上出来だ。持ち得る手札を全て生かした最上とすら言える。彼は大変良く頑張った。

だが。
だが、それでも

「 それでも、たかが策の一つや二つでどうにかなるほど、霧雨魔理沙は甘くない。それで倒せるような相手ならば、彼女は博麗

靈夢と共に幾つもの異変を解決するなんて出来なかつたわ

それでも、霧雨魔理沙には届かない。

#

そして。

「“恋符”・マスタースパーク！！」

回避を諦めた魔理沙が掲げたマジックアイテム
＝ニニ八卦
炉から放たれた魔砲が、練られた策と放たれた靈弾¹と、西富丈一
を飲み込んだ。

第十二話・策（後書き）

やつぱり無理でした。

そりゃ策の一つや二つで落ちるなら、紅魔郷から先幾つもの異変を解決なんぞ出来ませんよね。

西宮、敗北。文曰く、『たいへんよくがんばりました』。

ですが、彼の策は次回に続きます。

しかし今回好き勝手やつたなー。

感想が怖い。そしてイザナギとイザナミの話は超簡略化している。詳しく知りたい人はググってみるのも良いでしょう。

第十四話・策の裏の策（前書き）

説明部分が多い気がします。

前話、『策』の答え合わせの回ですね。
ある程度以上に独自設定が含まれていますが、毎度ながらじア承
願います。

第十四話・策の裏の策

遠くから聞こえて来た轟音とそちらで解放された巨大な魔砲に、博麗靈夢は彼女にしては珍しく僅かに目を見開いた。

見覚えが無いわけではない。むしろかなり見慣れたスペルカードだ。或いは自分のスペルを除けば、最も目にする機会が多いスペルカードとも言えるだろう。

『“恋符”・マスタースパーク』。

霧雨魔理沙という少女の十八番にして代名詞にして切り札。彼女とて馬鹿ではない。これから先、恐らく神社に黒幕が待つていて、最低でももう一戦はあるのは分かつている筈。となると彼女がここで切り札を切った理由は、

「使わされた、か。やるわねアンタの相棒。雑魚に見えたのに、魔理沙に切り札一つ切らせるまで追い込んだなんて」

「……今のが何なのか、分かるんですか？」

「マスタースパーク。魔理沙の代名詞で、切り札よ」

呴いた靈夢に対し、正面方向から問いかげられる。

現在位置は空中。山中にて空に浮かび向かい合い、彼女に問い合わせかけて来るのは青白の風祝 東風谷早苗だ。

先程から靈夢と弾幕戦を行っていた彼女は、しかしこれまで靈夢相手に善戦した代償として、既に肩で息をするほど疲れ切っていた。

とにかくスペルを連射し、靈力を惜しみなくつき込み、集中力も体力も靈力も全てを短期決戦の心算でねじ込んだ。

故に博麗靈夢相手にこれまで戦えたのだが、既にそのいずれも限界。

完全な詰み。そう言える状況でありながら、早苗は僅かに笑っていた。

「……向こうは西宮に任せました。私は西宮を信じます」

「そりやまた随分な信頼ね。……けど、流石にあの靈力で魔理沙に勝てるとは思えないわよ」

「かもしれません。ですが、私には今更向こうに出来る事はありません。私にとっての今の問題は、貴方です」

魔理沙の相手をしている西宮。彼に對して、今早苗が出来る事は何も無い。

敢えて言つならば、信じる事が心配する事。彼女は前者を選んだ。

その彼女が信じる相棒が、この戦いにあたつて早苗に授けた策は一つ。

全力を出して博麗の巫女を引き付ける事だけなのだが、その役目は既に終わつたと考えて良いだろ。

魔理沙と西宮の方でも大きな動きがあつたし、そもそも早苗が限界だ。これ以上その役目を継続する事は出来ない。

そして授けられた策とは別に、策ではない助言が一つだけ。

『気になるようなら、引き付けついでにその巫女相手に言いたい事を言つてしまえ』。

それが西宮が作戦会議の終わり際、早苗に告げた言葉だった。

「……私が抱いてた博麗さんへの後ろめたさ、多分彼は分かつてたんでしょうね」

弾幕勝負故に距離を置いて対峙している靈夢には届かないような声音で、早苗は苦笑と共に呟く。

「」の異変の原因となつた自分の行動。今となつてみれば、あれがとても軽率で、相手の立場を考えない行動だったと分かる。

故にこそ彼女はハ雲紫に謝罪をしたし、博麗神社の巫女である靈夢に対しても後ろめたさを覚えていた。

それに気付いたからこそ、西宮は作戦会議の最後にあのような言葉を付け足したのだろう。

そう思考し、その気遣いに応じる為にも、早苗は靈夢に向かって声を上げた。

「博麗さん！」

「うわ。……なによ、いきなり。降参？」

「いいえ、降参はしません。ですが、私は貴方に謝らないといけません」

「謝る……？」

その言葉に靈夢がぎょとんとした様子で首を傾げる。

早苗が見る限りずっと何事にも興味無さげな表情をしていた彼女だが、それ故にこうして初めて見せたそれ以外の表情は、年頃の少女らしくとても可愛らしい物だった。

早苗はその表情に、『ああ、紫さんが母親代わりとして世話を焼きたくなるのも分かるな』という感想を内心で抱きつつも、

「貴方の神社に無作法な宣戦布告をしたのは私です」

「ああ、アレあんただつたの？」

「ええ。幻想郷に来たばかりで舞い上がっていたが故の無作法、謝罪いたします。ですがあれが守矢神社の総意ではなく、私の独断であることは御理解下さい」

「……えと、何て言うか拍子抜けね。レミリアとか幽々子とか永琳と輝夜とか、異変の原因となつた連中つて大抵もつと我儘と言うが、

我の強い連中だったんだけど。解決した後ならまだしも、こんな真つ最中に謝られたのは初めてだわ」

「悪い事をしたら謝るのです。当然の事ですよ？」

困惑した様子の靈夢に、早苗は苦笑しながら言葉を返す。

『めつ』とでも言わんばかりのその言葉に、靈夢は更に困惑を深める。

「……まあ、別に良いけど。いつまでも引き摺るのも面倒だし、実害つたら私が腹立つたくらいだし……神社を物理的に潰されでもしたら、話は別だつただろうけど」

「まさか！ そんな危険な事をするわけないじゃありませんか？」

「そうよね。幾らなんでも博麗神社にそこまで明確に喧嘩売る奴なんて居ないわよね」

例えが少し過激に過ぎたかと内心で思つ靈夢と、小さく笑う早苗。この両者がこの会話を思い出すのは、後に暇を持て余した天人が神社を破壊した後である。

ともあれ元より必要以上の面倒を嫌つ靈夢だ。早苗の言葉に、一瞬これでこの異変は解決かとお祓い棒を仕舞おうとするが 次の瞬間、疑問に気付いて首を傾げる。

「……ねえ、謝るならなんで最初に私と遭遇した時に謝らなかつたの？ それに降参しないって言つてたし」

「申し訳ありません、謝罪が遅れた事は重ねてお詫びします。

ですが私達にも、私達の都合がある。貴方には是非とも、守矢神社まで来て私達の神社の神様と戦つて頂きたいのです

そして、応じる早苗は大幣を構え直す。

息は荒く、体力靈力共に枯渴寸前だ。

しかし戦意を崩さない彼女に、靈夢は呆れたように溜息を吐いた。

「……訂正するわ。あんたもやっぱり、我儘で我が強い幻想郷の住人よ」

「褒め言葉ですね。ありがとうございます」

「褒めてないわよ。……まあ面倒だけど、ここまで来たんだしね。その神社の神様の顔を拝むついでに、弾幕勝負をしたって殆ど変わらないか。ただし思惑に乗つてあげる代わりに、今度うちの神社の素敵なお賽銭箱にお賽銭を入れて行くこと」

「なんか賄賂みたいですね」

「物事を円滑に進めるには必要な事もあるわ」

神社の巫女として言つて良いのかどうか怪しい事を堂々と宣言する靈夢。

彼女の言葉に、要求された側である早苗は『良いのだろうか』と少し迷いつつも頷いた。

先方の神は知らないが、自分の所の神はその程度で怒るような度量の狭い神ではないと。

「分かりました。後日にでも西宮と一人で訪れさせて頂きます」「だったらお賽銭は一人分で宜しく」

で

言いながら靈夢はお祓い棒を構え直し、早苗に告げる。

「この先に居る神様と戦つて欲しいってんなら、これはスペルカードを用いた異変として終わらせたいって事よね」

「ええ。だったらこの戦いも、話し合いではなくスペルカードルールに則つた弾幕戦で終わらせるべきです」

対する早苗も大幣を構え直し、枯渴寸前の体力と靈力を絞り出し

て弾幕を展開する。

つまりはこれから両者が行おうとするのは、スペルカードルールに基づいた決着だ。

応じるよつに、靈夢も博麗アリュレットと呼ばれる追尾弾を用いた弾幕を展開。

その靈夢に早苗は、疲弊で額に汗を浮かべながらも笑顔で述べる。

「付き合つてくれてありがとつぎこます、靈夢さん。貴方に感謝を」

「感謝の心は現金で。いつもニコニコ、キヤッショウでポン。博麗神社の今月の標語よ」

「また俗な」

「神様だつて結構俗よ。だつたら神社がそうでも良いじゃない。と、それじゃ行くわよ」

「ええ、来なさい！ 受けて立ちますー！」

早苗が最後の体力と靈力で弾幕を放ちながらの突撃を敢行し、靈夢が弾幕と結界でそれに応じる。

そしてその数十秒後。

「まあ、来るなら早いうちにね。魔理沙とか他の連中と違つて礼儀は出来るみたいだから、お賽銭を入れに来たらお茶くらいなら出してあげるわ。出済らしだけど」

靈夢はその言葉を残しながら、その場を飛び去る。

残されたのは満身創痍で地面に、しかしどこか楽しそうな笑みで倒れている早苗の姿だった。

かくて、この場は決着を迎える。

一方

#

「つたぐ、使わされたか。後で靈夢辺りに何を言われるか分かつた
もんじやないぜ」

「……渾身の罵をスペルカード一枚でひっくり返した分際で良く言
うぜ」

遠くで倒れている早苗以上に満身創痍で転がっている西宮に、声
をかけているのは魔理沙だ。

靈樹の根元で大の字で倒れる彼は、元々の負傷に加えて魔理沙の
マスタースパークを食らった事で見事なまでにボロボロだった。

ともあれ憎まれ口を叩く西宮の様子に、放つておいても大丈夫そ
うだと判断した魔理沙は躊躇なく跨つて再度飛び直す。

西宮の方も撃墜された　　即ちスペルカードルールに基づいた
敗北である以上、これ以上何をする心算も無い。

むしろこれ以上何かをしたら、それはスペルカードルールによる
敗北を認めないとルール違反だ。最悪の場合、ハ雲や博麗が黙
つていいまい。それは西宮としても望むところではない。

「まあ、なんだ。お前とお前の相棒に関して、悪いようにはしない
ぜ。お前のこの、その醉狂な神託を出した神様もだ。異変が終わ
ったら皆でその異変を肴に騒いで、水に流す。それも幻想郷の流儀
だからな」

「ああ、そう言つてくれるとありがたい」

そして魔理沙は倒れている西宮にそう声をかけ、西宮は返事をす

るのも億劫と/or様子で声を返す。

そんな西宮の様子に魔理沙は肩を竦め、

「さて、靈夢と向かつていたルートとは違うが……神社は山の上だつたな。だつたらこのまま真っ直ぐ頂上に向かえれば良いだろ」

そう言いながら、当初のルートとは違うルートで山を登る為に飛び去つて行く。

その様子を見送つた西宮は魔理沙が飛び去つたのを確認してから、

「悪いな霧雨。勝負には負けたが、俺の勝ちだ」

勝利を確信した笑みを浮かべ、意識を手放したのだつた。

#

「状況はどう?」

「あ、紫」

「賢者様、チイーツス」

靈夢と魔理沙が各々の相手を下し、この神社に向かい始めるとほぼ同時。

紫が神社の中から浮遊して、屋根の上の文と柵の元へ飛んで来た。文はにやり笑いで彼女を迎へ、柵は元気良く頭を下げる。

そして柵は頭を上げ、今の紫の質問に答える為に再度千里眼を山へ向ける。

「残念ながら西宮君も早苗さんも、各々やられた所ツス。巫女さん

も魔法使いさんも、もうすぐここに来るツスね

「そう。御一柱の方は？」

「陣地の構築は終わったよ」

桜が続けざまの紫の質問に答える前に、三者の頭上から声がする。鉄の輪を手に持った諏訪子が、ゆつたりとした動きで神社の屋根に降り立つ所だった。

降り立つた諏訪子は、まず屋根の上に立つ三者に頭を下げる。

「ありがとうございます、三人とも。おかげでどうにか迎撃準備は完了した」「いえいえ、私は何もしていませんわ」「ボク、『かつぶめん』を要求するツス」「一番働いたのは私だから、私も何か要求しようかしら」

対する三人は各自の反応で、しかし三人ともが笑顔で諏訪子を迎える。少なからずこの異変に協力した身として、靈夢と魔理沙が来る前に神々の準備が完了したと言う事は好ましい事なのだ。
しかしその二者のうち、真っ先に表情を引き締めたのは紫だ。

「聞いていたかもしぬませんが、もうすぐ靈夢も魔理沙もここに来ますわ。御一柱ともに準備はよろしいですね？」

「うん、大丈夫。神奈子も私もいつでも行けるよ。神奈子はいつも良いように、陣地の方で待機してる。私もこっちに少し様子見に来ただけで、すぐに向こうに戻るから。……あ、早苗と丈一は負けたみたいだけど、怪我は無い？」

「んー、少しさはあるツスけど、すぐ治る程度ツスよ。心配する程のもんじやないツス」

「西宮君は靈樹まで引き付けて、魔理沙にマスタースパークまで使わせたからね。名譽の負傷つて事でしょ」「

そして観戦していた天狗一人の言葉に、安心したように諏訪子が

『そつか』と笑みを浮かべた。

だが、その天狗一人の言葉に急激な反応を見せたのは紫だ。

「靈樹？ 精霊樹って、山の七合田くらいにある大きな樹の事よね？」

「ん？ ええ、そうよ。そこまで引き付けて靈樹の力を借りて弾幕を

どうしたの？」

はつとしたりて文に質問をした紫が、文の言葉を聞いて震えだす。

ふるふるとした震えは秒を追うごとに大きくなり、しまいには紫は声を殺して肩を震わせ笑い出した。

「ふつ……くふつ、な、なるほど……いや、見事。見事よ。諏訪子さん、ここには魔理沙は来ませんわ」

「何でよ？ 目に涙を浮かべるくらい一人で笑つてないで、私達にも分かるように説明してくれない？」

「ええ、良いわ。あと桺さんと文。貴方達は後で西宮神社にお礼を言つておきなさい」

紫が言つた言葉に言われた文と桺も、そして横で話を聞いていた諏訪子も疑問符を顔に浮かべる。

魔理沙は確かに西宮を弾幕勝負で完膚なきまでに撃破し、その場から真っ直ぐに神社へ向けて飛び立つた。

方向が間違つていいわけではない。七合田まで来れば、あとは山の高い方へ向かうだけだ。そうそう間違える筈も無い

思考した所で、文が気付いた。

彼女は驚いた表情で桺に向き直り、

「……桺」

「はい？ なんツスか文さん」

「天狗の里つて何合目にあつたつけ」

「えーと、だいたい八合目くらいツス」

「場所は？」

「えーと、ここから真つ直ぐ靈樹に向かう途中

あ

言われた言葉に榊も気付く。そして横で話を聞いていた諏訪子も、驚愕を表情に浮かべ 両者は同時に叫んだ。

「魔理沙わんは、天狗の里直撃ルートを通ってる！？」

「大正解ですわ。ええ、しかもこれ、天狗と そして文と榊さんの立場を考えると、相当な妙手ね」

両者の言葉に口元を扇子で隠し、しかし笑いは隠しきれずにプルプル震えながら紫が返す。

彼女は口元を隠したまま、

「天狗の里に魔理沙が突っ込んだ場合、流石に傍観を決め込んでいる天狗も無視はできない。或いは魔理沙の方から積極的に、黒幕へ至る障害として天狗に攻撃を仕掛けるかしら？ ともあれ天狗側は強制的に霧雨魔理沙という異変解決のプロと戦う事になる」

そう、それは以前文と紫が『天狗はそうすべきだった』と話した、異変解決の専門家と戦い、自らの力を幻想郷に示すという行為に他ならない。

「天狗達としては全く望んでない、寝耳に水の戦いでしそうけど…

…その結果として魔理沙を撃退すれば、『天狗侮るべからず』という声は確實に幻想郷内で上がるわ。無論、靈夢と相対する上に異変の主導者と見なされるこの神社には劣る事になるでしょう。けれど

それでも、文だけが力を示す事に比べると段違いに、天狗の名声は守られると言つて良い」

「撃退できなかつた場合はどうなるのさ、八雲紫？」

「天狗上層部は石頭の馬鹿の集合ですが、そこまで無能ではありますわ。特に天狗の里を統べる天魔に関しては、文以上の実力者。既に消耗している魔理沙に負ける事は十中八九無いでしょう。そもそもやる気が無かつただけで、天狗達も望めば異変を起こせるだけの実力は確かにあつたのですもの。加えて仮に負けても、魔理沙相手に十二分に戦う姿を見せれば、実力を示すには十分ですわ」

故に彼らとしては望んでいない形なのかもしぬないが、魔理沙が天狗の里に突っ込んだ場合は天狗は彼女を撃退し、その名を幻想郷に広める事が出来る。

加えてこの戦いは、石頭で現状を見ようとしている天狗上層部につても良い薬となるだろう。

幾ら石頭とはいえ、自分達の枕元まで弾幕勝負という新しい幻想郷の在り方を象徴する足音が迫つてくれば、現状への認識を変えずにはいられまい。

重ねて言つが、霧雨魔理沙は異変解決の専門家。弾幕勝負におけるその戦闘力は、博麗靈夢にこそ劣るが幻想郷でも指折りと言つて良い。

流石に天魔ならば消耗している彼女の撃退は可能だろうが、逆に言えばそれは他の天狗による撃退は難しいとも言える。

それほどの力を彼女は持つているのだ。

「天狗も今の幻想郷でスペルカードルールを破る事が、どのような意味を持っているか分からぬわけでは無い。故に彼らはスペルカード戦で魔理沙と戦い、天狗の頭領である天魔は自らの力を示す事になる。そして同時に彼らは時代の波を実感する事になるでしょう。

妙手も妙手、大正解ですわ」

「その場合、私が上層部に怒られそうな気もするんだけど。私が麓で一人と戦つたから、里に奴らが攻めて来たのだ、とか言って」「まさか。上層部には貴方を叱責するなんて出来ませんわ。何故なら幾ら天狗の里が危機感を持つたとしても、彼らだけでは今の幻想郷で有力者であり続けるのは難しい。今の幻想郷の有力者である紅魔館、白玉楼、永遠亭、そして新たにその列に加わるであろう守矢神社

そのいずれとも、天狗は友好的な関係を築けていないもの。貴方やその後輩を除いて、ね」「……成程」

紫の言葉に文が納得の頷きを返す。

今の幻想郷のルールを破る事は天狗には出来まい。行えばそれは、他の全ての人妖の怒りを買い、天狗そのものが幻想郷から排斥される原因になりかねない。

そして天狗がこのルールの中で山での指導的な地位を保とうとするならば、既にこのルールの中で高い地位を築いている他の組織との繋がりが殆ど無いのは痛い。

これまでスペルカードルールに馴染まず孤高を保とうとしていた事が完全に裏目に出ている。

故にこそ、既に外との繋がりを多く持っている文、そして柵に対しして、天狗上層部は強く出られない。

確かに妙手だと文は頷く。

守矢神社の神々は魔理沙相手に無駄な消耗を強いられる事が無くなり、天狗は自らの力を示しつつも危機意識を得、文と柵は天狗社会内での自らの立場が良くなる可能性が高い。

三者三様、各々に得る物のある結果となる。まあ天狗の里は多少被害を受けたり上層部内で内輪揉めや代替わりが発生する可能性も

あるが、それは時代の移り変わりに必要な痛みだ。

唯一、完全に利用される形になつて割を食つのは魔理沙である。彼女に関しては後日何らかのフォローが必要かもしないが、彼女自身がさばさばとした性格の持ち主であるし、組織ではなく個人であるが故にしがらみも少ない。

珍しい魔法関係の本でも一、二冊見つくりして献上すれば、機嫌も治るだろう。

となれば残る疑問は一つ。

「紫。西富君はこれを狙つたと思つ？」

「ええ、私はそう思つわ。恐らく西富君は最初から、弾幕では逆立ちしても勝ち目が無いのは分かつていた筈。如何に戦力を上手く使つて、如何に上手く策を弄してもね。だから彼は弾幕での勝利ではなく、作戦目標の達成に目的を絞つた。本当は弾幕で勝てれば一番良かつたんでしょうけどね。　故に彼の作戦目標は、靈樹まで移動して、そこで魔理沙に負ける事」

そして紫は扇子を閉じて、その閉じた扇子で中空に線を引く。

そこに引かれた線は妖力による結界を作り上げるが、それは防御の為ではない。結界上に描かれたのは、簡素な妖怪の山の地図だ。

描かれているのは靈夢と魔理沙の当初の侵攻ルート、守矢神社、靈樹、天狗の里。そして侵攻ルート上に描かれた、饅頭のようにデフォルメされた靈夢と魔理沙の顔である。

何故か見てている文と諏訪子の脳裏に、『ゆつくりしていってね！』などという幻聴が聞こえた。

ちなみに枕は饅頭みたいな顔を見て、『美味そう』などと考えていた。

「まずは靈夢と魔理沙の予想侵攻ルート上で待ち受け、靈夢と魔理沙を引き離す。靈夢は策を弄するに当たつての天敵だからね。幾重にも策を弄しても、勘の一言でそれを回避される。恐らく西宮君にとつての天敵ですわ」

言いながら、紫は結界上の地図に更に線を引く。

靈夢が侵攻ルート上から逸れ、魔理沙のみがそこに残つた。

「そして魔理沙を靈樹まで引き込む。これが最も難しい作業だったでしょうけど、西宮君はそれを達成。靈樹の元で全力で魔理沙と戦い、敗北する」

魔理沙の顔が靈樹の元まで移動する。

「『』の作戦の肝は一つ。『靈樹まで移動する目的を、有利なフィールドに誘い込む為と誤認させる』ということと、『『』ここまでやつたんだから、この後で更に何かあるわけがない』と思わせること。そういう意味で、靈樹という存在は絶妙だった。魔理沙は恐らく、有利な戦場に引き込むと言つ罷に嵌つたと思つたでしよう。強力な弾幕を靈樹を利用して放つたならば尚のこと」

そう、故に彼女は『その位置まで移動させ、そこで魔理沙に負けるのが目的だつた』などとは露とも思わない。

そこまでやつた大がかりな罠が、よもや自分にその先に待つている本当の罠　　天狗の里直撃コースご招待への布石でしかないとは、まさに想像の埒外だろう。

そもそも土地勘の無い魔理沙に対して、気付けと言つ方が無理である。靈夢辺りならば勘で気付いたのかもしけないが。

「そして靈夢を引き離したのが、ここで再び生きて来る。魔理沙は靈夢ほどの神がかり的直感力は無いから、その靈樹の元から神社へ向かうとすればルートは一つ。真っ直ぐ山を登るのみ。魔理沙のような直線的な思考の持ち主なら尚更ね」

霧雨魔理沙は決して頭の回転は悪い。むしろかなり早い部類だろう。

魔法という神秘を学び、研鑽する。それは決して頭の回転が鈍い人種には出来まい。魔法というのは頭脳を用いて覚える技術の結晶であるからだ。

しかし魔理沙は同じ魔法使いであるパチュリーやアリスに比べ、頭の良し悪しではなく心理的傾向として、直線的な力押しを好む。

そのような性向の持ち主であるからこそ、ほぼ確実に直行ルートを選ぶ筈だ。

或いはこれが、それこそパチュリーやアリスであったならば、靈夢と合流しようとするとか当初のルートに戻ろうとするかもしない。しかし直線思考故に、魔理沙はそうは考えない。

そして紫は結界を操作する。

魔理沙の顔が神社へ真っ直ぐ向かおうとして しかし天狗の里に引っ掛けた。

「後は魔理沙は天狗の里に突っ込んでしまい、天狗達となし崩しに戦闘突入。結果として彼女は神社へ到着する事は出来なくなる……大枠としてはこんな物かしら」

「成程……」

「……考えたもんだね」

紫がそう締めくくつた言葉に、文と諏訪子がそう返す。

両者ともに感心しきりといった様子で頷いており、その様子を見て解説役となつた紫も満足げに頷いた。

ちなみに柵は既に理解の努力を放棄しており、今日の夕飯を考えていた。

そして次の瞬間、山の途中　　八合目辺りで激烈な閃光と轟音が成り響く。

本日一発目となる魔砲。即ち魔理沙の弾幕だ。

「噂をすれば、ね」

その音に紫は余裕たっぷりの胡散臭い笑みを浮かべ、文と柵は音がした方、つまりは天狗の里へと視線を向ける。

とはいって、流石に文の視力ではここからの視認は不可能だが。

「柵、状況はどうなつてるの？」

「んー、今回の件に関して完全に傍観するつもりだったたらしい天狗達が、慌てた様子で迎撃に飛び出してるツス。けど皆弾幕慣れしてないツスから、上手いこと纏められて、魔砲で纏めて薙ぎ払われたみたいツスね」

そしてその文からの質問に柵が答える。

その柵が不意に『あ』と驚きの声を口に出し、

「うわ、先日宴会のジサグセで文さんの尻を撫でた大天狗様の家が吹っ飛んだツス」

「ああ、魔理沙さんなんてひどい事を。」

「ふふつ！ ちょっと、少しばかり隠しなさいよ」

台詞の前半でおざなりに建前を。そして後者で高らかに本音を叫

ぶ文に、横の紫が吹き出した。

天狗の里の頭の固い上層部にさとざん苦労させられてきた文と紫としては、やぞや胸のすぐような光景なのだろう。

樺は 苦労を苦労と認識していたどうかが怪しいので割愛する。

「丈一と早苗は良い仕事をしてくれたみたいだね」

その様子に苦笑しながらも、諭訪子は神社の屋根を蹴つて飛びあがる。

目的地は神奈子が待っている陣地である。博麗の巫女が来る前に戻つて、現状を神奈子に話しておくべきだろつと言つ判断からだ。或いは自分達の信徒一人が上げた、予想を越える戦果について話したいからかもしない。

「それじゃ、私は行くよ。三人とも、本当にありがとう。後で改めてお礼をさせて貰うよ」

「いえいえ、こんな痛快な物が見れただけでも十分よ」「ふふーー！ 見て文、あの大天狗の頭！！」

「ぶはっ！ ぶははははは！ アフロに、魔砲でやられてアフロに！ いつも嫌味ばかりのあの大天狗様が！！」

遂に隙間を開いて天狗の里の様子の観戦を始めた紫と、その隙間を通じていけ好かない上司のとんでもない姿を見て爆笑する文。

既に状況は終盤も終盤だ。今更隙間で観戦程度した所で、紫がこの件に最初から関わっていたなどと証明する事は誰にも出来ないだろう。

何か言われたら『楽しそうだから隙間で見てただけ』と答えれば良い。紫の普段の姿は、その言葉に十分な説得力を与えるだけの胡散臭さがあるのであるから。

そして楽しそうな三名に苦笑して、諏訪子は急造の陣地で待つて
いる神奈子の所へ戻るべく飛行を開始する。

さて、この話を聞いたら神奈子はどんな顔をするだろ？
にやにやと楽しそうに笑みながら。

#

「うおお！ 何だつてんだこの天狗の群れは！ くそ！」つら、
どうあっても私を神社まで行かせないつもりだな？ そうは問屋が
卸さないぜ！！」

そして魔理沙は隙間を使って観戦されている事など知る余地も無
く、天狗の里の中ほどまで切り込みながらも降り注ぐ弾幕を回避し、
次々と反撃を放つて行く。

西宮相手では対地戦の不慣れと油断故にしてやられたが、その後
だからこそ彼女には油断も慢心も無い。ましてや現状は彼女が得意
意な空対空の弾幕戦だ。

異変解決のプロとしての能力を如何無く發揮し、猛威を振るう霧

雨魔理沙。

対する天狗側は山の神社が博麗神社に宣戦布告をした事は知つて
いたが、まさか魔法使いが里に突っ込んで来るとは露とも思つてい
なかつた為に、おつとり刀での参戦だ。

加えて山の頂点に君臨している期間が長かつた分、実戦経験の豊
富な天狗は少ない。特に上層部に至つては百年単位で戦闘と呼べる
行動を行っていない者も居る。

「そら吹つ飛ベエ！ 今度は一本の大盤振る舞いだ！ “恋心”・
ダブルスパーク！！」

そして天狗達が一本の魔砲に巻き込まれ、纏めて吹つ飛んで行く。
ついでにこの騒ぎにも関わらず家中で引き籠っていた某念写が
得意な鳥天狗も家ごと吹つ飛んだ。

かくして。

「どけどけえ！ 魔理沙さんのお通りだあ！！！」

霧雨魔理沙、まさかの番外段階突入。
ハクストラステージ

天狗の里での弾幕ごつこは、天狗達にとつては望ましくない事に、
更に加熱していく事となるのだった。

第十四話・策の裏の策（後書き）

と、言つわけでこんな感じです。

西富丈一、本気の頭脳戦。ちなみに彼にとつての天敵は自分より頭が良い相手（例：紫、永琳、幽々子など）や、策を理不尽に無効化する相手（例：靈夢など）。

それと読み切れない相手（例：桜、早苗、チルノなど）も苦手です。意外と多いな天敵。

今回こうも上手く嵌ったのは、なんだかんだで彼が初見で軽視されていましたからですね。警戒されていたら、魔理沙もこうは上手く嵌つてはくれなかつたでしょう。

そして次回が第六ステージとなります。

風神録異変、そろそろ終盤に近付いて参りました。

第十五話・神遊び

靈夢が勘に従つて辿り着いたそこは、巨大な御柱が並び立ち、どこか神聖な雰囲気を持つ祭壇のような場所であった。

「……やれやれ、凄いわね。何よこの柱の山は」

強力な神氣を纏うその場所に、靈夢が思わず嘆息する。

神がかり的勘を持つ彼女とは言え、まさかこれが突貫工事で作られた即席とは思わなかつたようである。

良く見ると幾つかの御柱は製作側の慌てを示すように微妙に傾いていたりするのだが、逆にそれがまるで神さびた古戦場のような雰囲気を醸し出しているから、世の中何が幸いするか分からぬ。

「出て来なさい、居るんでしょ？」

「　　我を呼ぶのはどこの人ぞ」

そしてその神さびた古戦場（即席）の中央にまで進んだ靈夢の呼びかけに応じるように、一人の女性が御柱の上に現れる。注連縄を背負つた深い青色の髪の女性。身に纏う強い神氣は、明らかに高位の神の物だ。

八坂神奈子。かつて諏訪の地を侵略した軍神にして八百万の一柱なのだが、靈夢にはそれは分からぬ。分かるのは彼女の勘が告げる、『あ、なんかボスっぽい』という内容だけだ。

「アンタがこの神社の神様ね？」

「ああ。此度は失礼したね、博麗の巫女。八坂神奈子だ、見知り置け」

「おお偉そう。レミリアや幽々子、輝夜に萃香なんかを思い出すわ。

やつぱり異変の黒幕つてのはこんな感じじゃないと

腕を組んで御柱の上から見下ろし告げる神奈子に、しかし靈夢はどこか安心したように咳いた。

どうにも先の早苗の対応はこれまでの異変の中ではイレギュラーだったため、彼女としては些かペースを崩されていた面があつたのだろう。

「まあ何でも良いわ。神社への宣戦布告に関しては、アンタのところの風祝と話はついたしね。後はアンタをブチのめせば全部解決。アンタ達が奪つた私の神社の参拝客も増えて万々歳よ！」

「随分と酷い濡れ衣だな。場所が場所だから、人間の参拝客など幻想郷に入つてから一度も来た覚えは無いぞ」

「つるさいわね。こつちだつてここ数ヶ月真っ当な参拝客が来た覚えは無いのよ。誰かにハツ当たりでもしないとやってられないわ」

「話には聞いていたが、大概フリーダムだな博麗の巫女」

靈夢の周囲に陰陽玉が展開される。数に限りがあるが故に、早苗戦では出しもしなかつた切り札だ。

これで最終と彼女の勘が告げている。故に彼女は手加減も出し惜しみもしない。早苗戦で消耗を避けたのは、ひとえにその先にもう一戦戦闘があると予見していたから。

逆説、これが最後であれば靈夢が消耗を厭う道理はない。

しかし対する神奈子も、自らの周囲に神氣を纏つた御柱を何本も浮かせた臨戦態勢。

傲岸不遜に笑みすら浮かべて、腕を組んで仁王立つその姿は、まさしく大和の軍神。戦女神に相応しい威圧感だ。

「博麗の巫女、早苗と戦つてみてどうだった？」

「なによいきなり？……でもまあ、そうね。悪い奴じゃ無かつたわ。それにまだまだ伸びしろが大きそつたから、次に戦うと面倒そうね」

「ははっ、そうかそうか、そうだねーー。うちの早苗は多少暴走するのが玉に瑕だが、才はあるし性格も良いしでな」

「親馬鹿って奴ねえ」

呆れる靈夢は知らない。他ならぬ靈夢自身の事をハ雲紫が語る時、まるで神奈子と同じような誇らしげな笑みと言葉で語っている事に。ともあれ靈夢の言葉に気を良くした神奈子が腕を掲げ、展開された御柱がそれに応じて靈夢の方へと向けられる。

「そう言つなよ博麗靈夢。娘同然と息子同然の二人が成長を見せてくれたんだ。なれば親代わりとして誇らずにはいられまーいさ。それは神でも人でも変わらない。……………そして神を祀るのは巫女の仕事だろう？ ああ、祀つあやんでおくれよ博麗靈夢。神遊びを始めようじやないか！」

「残念、私はあんたの巫女じやないわ。樂園の素敵な巫女相手に遊ぼうつてんだから、相應程度には粘つて見せなさいよ、山の神！」

申し合わせたように同時に動いた両者の間で、御柱と陰陽玉、靈弾とアミコレットが同時に炸裂する。

乱れ飛ぶ弾幕、それに伴つて吹き荒ぶ暴風。

常人ならば回避はあるか、真つ当に視認できるか否かすらも怪しい速度と密度の弾幕がぶつかり合うそれは、例えるならば天災に等しい。

迂闊に介入できるような物ではないし、そもそも迂闊に触れようものならば微塵に碎かれる威力と密度を持つた弾幕。

それはかつて吸血鬼が亡靈の姫が、月の姫が百鬼夜行が異変の最

後で見せた弾幕に負けず劣らずの力と派手さ、そして美しさを持つ妖怪の山の頂上で咲き乱れる。即ちこれが異変の最終幕だと、それを見ている何者に対しても平等に告げるよつに。

かくて風神録異変最後の弾幕　　否、神遊びが開始された。

#

「いやあ、壯観だねえ」

そして主戦場となつてゐる神さびた古戦場（即席）から離れ、神社の縁側。

そこでは鉄の輪を仕舞つた諏訪子が、上機嫌でその弾幕を眺めていた。

神社の上からは文と桺、そして紫の歎声が聞こえてくる。先程までは天狗の里エクストラステージの観戦をしていた彼女達だが、魔理沙がどうやら天狗の里から撤退したらしい今となつては、神奈子と靈夢の弾幕を眺めているようだ。

「まあ、私の出番が無いのは少し不完全燃焼だけど、それはそれほどまでに丈一と早苗が上手くやつたって事だから、不満は無いし」

そもそも何故諏訪子が観戦に徹してゐるのかと言えば、神奈子に事情を説明した後で一人で決めた決めごとのせいだった。

魔理沙と靈夢が来る場合は二対一で丁度良いが、靈夢のみが来るとなつては、まさか一柱で一人にかかるわけにはいくまい。神としての矜持の問題もあるし、力を示すならばやはり一対一であろうといふ理由もある。

故に程無くやつて来るであらう博麗靈夢に対して挑むのは、神奈子か諏訪子のどちらか片方。

結果として軍神故にややバトルジャンキーの氣のある神奈子に、諏訪子が役目を譲つた形となる。とはいえ諏訪子としてもそれに異論は無い。

「なにせこっちも氣になつてたしね」

視線を弾幕から神社の中へ向ける。

社務所から持つて来た布団を並べて、その上に寝かされているのは西宮と早苗だ。

神奈子が迎撃に出るのが決まった時点で諏訪子は神社に戻り、天狗の里若手による『いけ好かない上司』。年間ランキング保持者であつた大天狗が、カツラをスターダストレヴァリエで吹き飛ばされたという迷場面を見たせいで、腹筋が壊れるほど笑っていた紫に頼んで隙間を通して一人を回収して貰つたのだ。

「……全く、人間は大きくなるのが早いもんだよ。つい先日までは私より小さい童だったのにね」

寄り添うように眠つている二人は、しかし双方自分の役目をやり遂げた満足げな表情を浮かべていた。

神奈子が上機嫌になる筈だと諏訪子は思う。

この異変において、早苗と西宮は各自が自らに課した役割を全力で果たし切つた。彼らは既に童ではなく、神奈子と諏訪子にとつて自慢できる風祝と神職見習いだ。

「今はゆつくり休みな。起きたら全部上手くいくからさ」

諏訪子は母性を纏つた笑みを浮かべながら、自らの血族の末であ

る少女と、その相方の少年を見やる。

そして神社の上から歓声が響くのは同時。

靈夢と神奈子の弾幕戦が、更に華麗さを増し加熱を開始したのだ。

クライマックス
最終幕だ。

「そんじやま、神奈子が勝つにしろ負けるにしろそろそろっぽいしね。だとしたら最後の締めは、どっちにしろ私の仕事だ。　　行って来るよ、早苗、丈一」

笑みを浮かべて諷訪子は神社の縁側を飛び立ち、神さびた古戦場へ向かっていく。

そちらでは今まさに、この異変を締めくくるかのように、一際鮮烈で強烈な弾幕がぶつかり合つ所だった。

#

何発避けたか。何発凌いだか。何発防いだか。或いは何発食らつたか。

食らつた回数は五指で数えられる回数を下回るが、他はいずれも百を下回るまい。

博麗靈夢は肩で息をしながら、眼前の神を睨み付けていた。

陰陽玉は既に全弾撃ち尽くしているし、お祓い棒は折れて吹つ飛んで行つた。

何故か巫女服と分離するデザインの袖は、片方だけ外れて飛んで行き、周囲に立ち並ぶ御柱の一つに引っ掛けられて所在無さげに風に吹かれている。

服や装備の被害もそうだが、数発食らったダメージも馬鹿にならない。撃墜こそされていないので弾幕ルール的にはセーフだが、撃墜は回避しても自らが受けたダメージは無視できないレベルの物だ。身体能力を靈力でありつたけ強化した上で、結界で防いでも内臓に響く威力の弾幕。そしてそれを扱う本人の能力。いずれも博麗の巫女である靈夢をここまで追い込む程の実力の持ち主だ。

眼前の神とて万能無限ではない。

速度はレミリアが上だろう。技は幽々子が上だろう。耐久力ならば輝夜が上だろう。馬力ならば萃香が上回る。

されどそれら全てのバランスとして見るならば、八坂神奈子はこれまで叩きのめして来た異変の首謀者の中でも最優の一角と靈夢は見た。

無論それはこの周囲の御柱という陣地によって強化された上での能力なのだが、それでも博麗の巫女たる彼女をここまで追い込んだ事実は変わらない。

「やるな、博麗の巫女。……ここまでは恐れ入る。人の身でここまで出来る奴など、あの平安の時代の鬼才・安倍晴明以外には初めて見たぞ」

「誰よそれ。知らない奴と比較されても嬉しくないわ」

そして対する神奈子の消耗も、既に満身創痍と言つて差し支えない。

背負つた注連縄は千切れ、途中で背負つた御柱オブショウは折れ、服も身体も傷だらけだ。

しかし第三者がこの場に居たとして、双方ボロボロのこの両者を醜いと思う者などいないだろう。

神との神遊び。互いに死力を尽くして戦う両者の姿は、傷だ

らけながらも何故か途方もなく美しく尊い印象を他者に与える。

だがその神遊びもそろそろ終幕。双方疲労も武装も、目に見える負傷も見えない消耗も、そろそろ限界だ。

「楽しかつたぞ、博麗の巫女。だがこの異変は私の勝ちで終わらせ
て貰う！」

「冗談じゃないわ。」ここで負けたら紫や魔理沙に何を言われるか分
かつたもんじゃないからね！」

故に両者が懐から取り出したスペルカードは恐らくこれが最後。
なればこそ互いにそれを必殺と定めて、二人は最後のスペルカー
ド宣言を高らかに叫ぶ。

「『風神様の神徳』！－！」

「『『大結界』・博麗弾幕結界』！－！」

直後、この異変にて最大最高の一いつの弾幕が激突する。

放つ二人の姿が見えなくなるほどの大嵐は、まさしく弾の大瀑
布と呼ぶに相応しい。

そして

「見事」

「当然よ」

両者の弾幕が消えた時、そこに見えたのは崩れ落ちるよつに地面
に落ちて行く神奈子と、辛うじて自力で空を飛んでいる靈夢の姿だ
った。

そして辛勝に靈夢が息を吐いたのも一瞬。

「つて、ちょっと… 危ないわよ、危ないって！」

靈夢が慌てて叫ぶ、その先に居るのは落下して行く神奈子だ。力の全てを使い果たしたどころか、意識すら失っているかもしれない。

頭を下に落下していく姿を見て靈夢が慌てる。しかし限界寸前は彼女も同様。

飛んで行つて拾い上げようとも、身体がその動きに追いつかない。

「ああもう、アンタに何かあつたらあの青白巫女に顔向けできないじゃない……！」

それでも神奈子へ向けて飛ぼうとした靈夢の脳裏に浮かんだのは、彼女に向けて自らの非を認めて頭を下げた酔狂な風祝だった。

幾ら神とは言え、この高さから何の防御もなく頭から落ちてはただでは済まない。

ならばあの巫女はどんな顔をするか。

思考のみが焦りを覚え、しかし身体はついて行かない。

「だああ、最後まで手間をかけさせるわねこの神社は……！」

「そいつは済まないね、博麗の巫女」

あわや神奈子が地面に激突かと思つた刹那、靈夢の苛立ち交じりの叫びに応じるように少女の声がその場に響いた。

落下した神奈子を受け止めながら靈夢の叫びに応じたのは、妙な形の帽子を被つた少女。靈夢が知るならばレミリア辺りと外見年齢は近い。つまりは十代の前半がせいぜいの幼子の姿だ。

そんな彼女が大人の女性である神奈子を受け止めた姿は些か不釣り合いだが、少女は意外にも危なげなくそれを為した。

「……誰よアンタ」

そしてその少女を見た靈夢はげんなりとした表情で、しかし油断を一切見せずに問いかける。

何故なら新たに現れたその少女も恐らく神。纏う神氣は神奈子に匹敵するが、この少女の場合はどこか禍々しい厄のような物が微量だが混ざっていた。

「神……それも祟り神辺りかしら。ええい、これで終わりだと思ってたのに！」

「祟り神で正解。私は洩矢諭訪子、この神社で祀られている一柱のうちの片割れさ。神奈子の相方と思つてくれて良い。それに、これで終わりだと思っていたのも合つているよ」

しかし警戒する靈夢に対し、諭訪子は神奈子を抱えたまま苦笑を浮かべる。

力を示すと言つ田的は十全に果たした。ならば満身創痍の巫女を打ち倒す事に、既に彼女は意味を見出さない。

故に諭訪子は、怪訝そうな表情を浮かべる靈夢へ向けて宣言する。

「守矢神社は博麗靈夢への敗北を認める。降参だよ、私達の負けだ」

「……アンタは弾幕^やらないの？」

「そっちが消耗から回復したら、楽しそうだとは思つけどね。今この状態でやる意味を私は認めない」

「……回復した後も面倒そだから嫌よ。魔理沙辺りに頼みなさい。……つて言うか魔理沙、こっちに来てないの？」

「来ないよ。天狗の里に突入して大暴れして帰つてつた

「何やつてんのよあいつは……」

呆れ果てたという様子で言いながら、靈夢が神奈子を抱える諭訪子の元へ降りて来る。

対する諏訪子は苦笑でそれを迎え、

「悪いね。今回は色々面倒をかけたと思つよ、博麗の巫女」

「靈夢よ。……そうね、悪いと思つなら

」

靈夢が言いながら、諏訪子に向けて手を掲げる。

中指を親指にひっかけて、たわめるように力を溜め

「 もつと早くその神様拾いに出て来なさいー。らしくもな
く焦つたじゃないのーー。」

「ぎやぴつー？」

放されたのは博麗の巫女渾身のテコピン。

それを額に食らつた諏訪子は神らしくも少女らしくもない悲鳴と共に、神奈子を抱えたまま地面にうずくまつて痛みに悶えた。

かくて後に風神録異変と呼ばれる異変はここで終わる。

博麗の巫女、博麗靈夢が軍神・八坂神奈子をスペルカードルールの下で撃破した事により、守矢神社側が敗北を宣言した瞬間であつた。

そして風神録異変の翌日。

射命丸文が出した文々。新聞の号外により、守矢神社側が今回の件の謝罪も兼ねて盛大な宴会を開くという情報が、幻想郷の有力者たちの元に届く事になる。

第十五話・神遊び（後書き）

と、いうわけで風神録本編は今回で終了。
諏訪子は勝つても負けてもそこで綺麗に異変を止める為の役として待機していました。

次回はエクストラステージ……といつか、幻想郷ならではの宴会ですね。
そこまで含めても風神録篇はあと一話くらいの予定。

第十六話・宴会（上）（前書き）

プロジェクトを見る限り宴会だけで上中下三回。
様々なキャラとの顔合わせがあるからだと思われます。
ちなみに宴会に全員は出しません。つていつか出せません。それ
だけで十話とか必要になります。

第十六話・宴会（上）

その日、守矢神社は時ならぬ来客で大賑わいだった。それもその筈、本日夜から開始される宴会の参加者達が押し掛けているのだ。

名目は靈夢への謝罪を兼ねた宴会だが、実質的には守矢神社が今後幻想郷に馴染んで行く為の挨拶として行われたその宴会。提案者は神奈子が靈夢相手に十二分な力を見せた事で、内心胸を撫で下ろしていた紫である。

ちなみに提案自体は、異変が終わって靈夢が博麗神社に帰った直後に行われた。

告知が翌日の朝で開始がその夕方という急な宴会であり、当初は神奈子と諏訪子は『告知から開始までもつと日を置くべきでは』と主張したのだが、紫と桜と文といふこの異変に深く関わった幻想郷組は揃つて言った。

「あら、御一柱はまだまだ幻想郷を分かつていませんわ。こここの住人、宴会には目がありませんのよ？」

「告知から開始まで6時間もあれば、絶対沢山集まるツスよね」

「ええ、大丈夫ですとも。あ、その情報は文々。新聞が出る号外のネタとして使わせて頂きますね。役得として」

結局諏訪子と神奈子は半信半疑ながらも、幻想郷住人達の言葉を採用。

号外として出す関係上、いつの間にか口調が新聞記者モードに戻っていた文は、即座に号外を書きあげて翌朝には幻想郷中に配った。

その結果として まずは開始三時間前に、竹林の住人が来た

のが皮切りだつた。

「失礼、お邪魔するわね。貴方達が新しく幻想郷に来た神々？ 私は蓬萊山輝夜、竹林の永遠亭の主と言えば分かるかしら？」

背後に長い銀髪を三つ編みにした従者を従え、挨拶代わりにと人參と筈を持参した竹林の姫。

ちなみに人參と筈の入った籠を背負っていたのは鈴仙・優曇華院・イナバである。

永遠亭に住んでいるらしき妖怪鬼達を大勢連れてやつて來た彼女達、一見すると土産を持参する辺り礼儀正しいように見えるが、開始三時間前に來る辺りで既に礼儀もクソもあつたものではない。

「ああ、宜しく頼む。八坂神奈子だ」

「洩矢諏訪子だよ。悪いけどまだ開始前だから、こっちの準備は全然できていないんだよね」

「お構い無く。こちらでも酒と料理は持参したから勝手に始めさせて貰うわ」

そして敷地の一角を占領して、勝手に酒盛りを開始する竹林の住人達。

まあ神奈子も諏訪子も祭りが大好きな大和の神だ。その手のノリは嫌いでは無いし、自分達で持つて來たのを消費する分には文句はない。

輝夜やその従者である永琳と挨拶を交わし、まあいいやと勝手な宴会スタートを見過。輝夜と永琳のペットでもある妖怪鬼の因幡てゐの指揮の元、妖怪鬼達が手早く設営作業に入つて行く。

開始三時間前にして、早くも一角に宴会場が出来上がつた。

その後鈴仙が西宮と早苗に頼まれていた置き薬をついでだから持

参したと、神々と自分の主に断りを入れて神社の社務所に入つて程無く。

やつて来たのは、日傘を差した銀髪の従者と紅い髪の大陸風の衣装を着た女性を引き連れた、幼い吸血鬼だった。

「ほつ、貴様が靈夢と互角にやり合つたと言つ神か。私はレミニリア・スカーレット。湖畔の紅魔館を統べるヴラド・ツェペシエの末裔だ。宜しく頼む」

「お嬢様、ワインを開けてしまいましょう」

「あ、うん。甘口の奴でお願い、咲夜。私辛いの嫌だから。神々よ、出来れば此度の宴では、私の前に出す料理は辛子や山葵を抜くように」

偉そうな挨拶の直後に甘口を所望する、カリスマとカリスマブレイクの境界を反復横跳びするかのような挨拶を見せた吸血口リータ。楽しそうにその世話をする、恐らく人間であろう銀髪の従者という組み合わせ。そして従者が懐から銀時計を取り出し、次の瞬間にはどういう仕掛けか庭の一隅に彼女達用のテーブルと椅子が設営されていた。

常識では考えられないその事象に、一柱が驚きでその目を見開く。

「これは……驚いたな、時間操作か」

「くくく、古き大和の神々すら驚愕させるか。全く、私の従者は出来た従者だよ。　　あ、ねえねえ美鈴ー。クッキー持つて來たでしょ、開けて良い？　ふふ、それでは失礼する、神々よ。勝手に始めさせて貰うが、あちらで竹林の連中も先に始めている事だ。文句はあるまい？　　あ、こらー！　私が行く前に始めてるんじゃないわよ！」

「別に構わんが吸血鬼。お前ちょっとカリスマを出すか引っ込めるかどうかにしろ」

一度の台詞の中でカリスマのオンオフを三度も切り替えるといつ離れ業を見せたレミリアに、呆れたような困ったような視線を向ける神奈子。

その言葉にレミリアは、

「ふつ、何を馬鹿な。私は常にカリスマたっぷりで大人の魅力マシマシな吸血鬼だぞ？」

「……ああ、何か分かった。お前は早苗と気が合いそうな気がする」「ほう、靈夢と戦った巫女……いや、風祝だったか。未熟だが才はあると聞く。後で機会があれば話させて貰おう」

そう言つたレミリアが従者　十六夜咲夜と紅美鈴を引き連れて、咲夜が設営したテーブルへ歩いて行く。

彼女達に気付いた永遠亭の住人達が声をかけ、そこからわいわいと交流が始まっている。

既に宴会は盛り上がりを始めていた。

「……これは不味いな。こちらの準備は済んでいないのに、早くも盛り上がりを始めてしまつていてる」

「いやまあ今の対応見てたら、向こうもそんな事気にしなさそうだけどねえ。いやはや、濃い連中が多いわ幻想郷。楽しそうだけどね」

困惑する神奈子と、楽しそうにころける笑う諏訪子。

とはいえたれど、さほどの準備を考えていたわけではない。外界から持ち込んで来た酒の類と、多少のつまみと料理。そして幻想郷では珍しい珍味として、カツラーメンでも面白半分で出してみようかと考えた程度だ。

幸いにしてつまみや料理の材料自体は、異変を始まる前に西宮が人里で買つて来た分があるが、

「丈一も早苗も、まだ傷が癒えていないに。準備の方は私達も手伝つた方が良いのではないか?」

「だけど私たち、面通しの為にもここに居た方が良い気がするんだよねえ。私も代表だし、今さつきみたいに他の所からの連中が来たら挨拶しないと」

そう困ったように会話を交わす一柱。

神奈子も消耗はあったのだが、人間である一人よりも流石に治りは早い。戦闘行為をするならともかく、普通に動く分には既に申しきれない程度には回復している。

対して社務所の方で料理を作っているであろう西宮と早苗は、弾幕勝負での負傷から未だに完全に回復したとは言い難い状態だ。加えて早苗は遺憾ながら料理では戦力になるまい。スクランブルエッグからスクランブルダッショを現出させる負の方向の奇跡である。出来る事と言えば、精々西宮の傍に付けて細々とした些小事を手伝わせる程度だ。

客人を待たせるわけにもいかないが、急がせるのは気が咎める。とはいえる神社にはこれ以上の人員も居ない。

さて参つたと一柱が思つた所で、しかし予想外の方向から話は動く。

く。

「すいません、御一柱……ええと、諏訪子様と神奈子様でしたか。台所と材料をお借りしても構いませんか?」

「む? エえと、竹林の……」

「鈴仙・優曇華院・イナバです」

どうしたものかと思っていた一柱に横合いから声をかけて来たのは、ブレザー姿の妖怪鬼。より正確に言うならば、一柱は知ら

ないが月兎　　である鈴仙だ。

困ったような表情をした彼女に一柱は首を傾げ、

「料理でも作りたいのか？ 私らは別に構わんが、丈一と早苗が今使つていた筈だが」

「申し訳ありませんが医者見習いとして、あの二人が怪我人だとうのにガチの喧嘩を始めようとしていたので止めさせて頂きました。どうにも見ていられないでの、私も手伝わせて頂きたいなと」

「それは……すまないね、鈴仙。迷惑をかけたみたいだ」

「いえ。……ですがあの二人、本当に協力して靈夢と魔理沙と戦つたんですか？ なんか凄い勢いで罵声が飛び交って、ファイティングポーズで向かい合つてましたけど。『情ケ無用！ 戰闘開始！』みたいなノリで」

「えーと……うん、ごめん」

呆れたように言つ鈴仙に、一柱は頭を下げるのみである。

西宮丈一、そして東風谷早苗。彼らが互いに認め合つ相棒関係なのは一柱には良く分かつてゐる事実だが、何故それでも喧嘩が尽きないのかだけは彼女達をしても分からぬ謎であった。

「では御一柱の御了承も得られたんで、私は台所をお借りします。あ、持つて来た人参と筍も使って良いですか？ 使い慣れてるんで」

「ああ、構わんよ。むしろすまない、迷惑をかける」

「お気になさらず。重篤な怪我こそ無いとはい、怪我人に料理をさせるわけにもいきませんしね」

そう言いながら肩を竦める鈴仙。

そんな彼女を遠くから見る、どこか誇らしげな竹林の医師の表情に気付いたのは、鈴仙当人ではなく諏訪子と神奈子の一柱だった。

「鈴仙は偉いね。良い医者になるよ」

「まだまだですよ。医術に関しては師匠からお叱りを受けてばかりです。ですが料理の腕は少し自信があるので、楽しみにしていて下さい」

そして鈴仙が神社の奥に向かった所で、遠くからそのやり取りを見ていた永琳が一柱の元に近付いて来た。

くすくすと笑いながら、彼女は一柱に頭を下げる。

「すいません、不肖の弟子が御迷惑を」

「とんでもない。迷惑をかけたのはこちらの方だ、却つて申し訳ないくらいだよ」

「ああ、諏訪子の言つ通りだ。良いお弟子さんじゃないか」「そつでしょ、うへー。」

お互に頭を下げあつた所で、弟子を褒められておどけた様子で胸を張る永琳。

三者は顔を見合わせて小さく笑つた。

「幻想郷か。あんた達みたいな奴らが多いなら、本当に良い場所みたいだね」

「あら、私達が善良かは保証しかねますよ？ ですが良い場所なのは事実ですね」

「来て良かつた。そつ言えるな」

諏訪子と永琳、そして神奈子は和やかに笑い合つ。

どうやら守矢神社組と永遠亭は、互いに良い関係を築けそつだつた。

一方その頃。

「やーい子供舌ー！」の日本酒の辛さの良さが分からぬなんてまだお子ちゃまね、吸血鬼！」

「まだお子ちゃまね、吸血鬼！」
「何を言うか求婚ブレイカー！　私は500の歳を重ねた偉大なる
吸血鬼だぞ！」

吸血鬼だぞ！」

「ブフー！ その程度で私と年齢を競おうなんて、ちやんちやらおかほーい！」 その程度の数、私の年齢で割てば始ビギンも一儲け・

「ババア！」

「ぬわんですってええええええ！？ 物凄い端的に抉りに来たわ

ねこの吸血鬼！」

某吸血鬼と某竹林の姫が、たかが二十年すら生きていらない西宮と早苗の喧嘩と全く同レベルの煽り合いで盛り上がっていた。

それを肴に酒を開ける始末。

開始予定時刻よりもまだ一時間も前だと言うに、既に宴会場の一角では実際に幻想郷の宴会らしい力オースが現出しつつあった。

#

そして鈴仙が料理を早苗達を調理場から追い出して料理を作り始めて少し経過した頃　　具体的には某吸血ロリータと某求婚ブレイカ―が遂に取つ組み合いの喧嘩になり、『咲夜！　懲らしめてあげなさい！』だの『永琳！　身分の差を教えてやるのよ！』だの従者に救援を請うた挙句、その従者一名から『はしゃぎ過ぎだ』と説教されている頃。

神社の中にはずるりと空間の裂け目が出来、そこから二名の女性と一人の少女が降り立つた。

「到着、と。宴会は表でやつてるのかしい」

「そつみたいね~。表の方から良い匂いがするわ~」

「……まだ開始時刻の一時間以上前なんですけど、やつぱりもう始めてるんですね」

まず裂け目 隙間から神社の廊下に降り立つたのは妖怪の賢者・ハ雲紫。

その横に立つの薄水色の着物を纏つた桃色の髪の女性は、彼女の友人である白玉楼の亡靈の姫・西行寺幽々子。そしてその背後に溜息を吐きながら立つ一本の刀を背負つた銀髪の少女は、白玉楼の庭師である魂魄妖夢である。

三者もまた既に神社の前で騒いでいる連中と同様に此度の宴会に参加する為、紫の隙間を使ってやつて来たのである。

紫がいきなり神社の中に出た理由として、まずは宴の主催者でもある一柱に挨拶して、幽々子と妖夢を紹介しておこうと考えたのがあるのだが、

「御一柱も表に居るみたいね。私達もそちらへ向かった方が良いかしら?」

「だから私は普通に表から入るつって言つたんですよ……これじゃ不法侵入じゃないですか」

紫の言葉に妖夢が溜息を吐く。

幻想郷に数少ない常識人にして苦労人でもある彼女にとつて、見知らぬお宅にいきなり侵入というのは少々気が咎める状況だったようだ。

しかし幽々子はその声に着物の袖で口元を隠しながら上品に笑い、

「いやいや妖夢。不法侵入つていつたつて廊下じゃない。ギリギリセーフよ」

「絶対にアウトですよ。ああもつ、住人の方に見つかつたら何と言えば良いか……」「

「御一柱は表のようだし、まあ西宮君も早苗さんも話は分かるわ。そんなややこしい事にはならない筈

」

そして、紫のその言葉が途絶する。

その原因是廊下に立つてゐる彼女達のすぐ横の襖、その奥から聞こえて來た声だ。

『や、やあん……！ 西宮、どい触つてるんですか！ 痛い、痛いですって』

『つれない事言つなよ。俺とお前の仲じやねーか？ なあ』

『あ、やあ……あん！ 痛い、痛いですってば！』

『すぐに良くなる。我慢しin』

沈黙が、廊下を支配した。

紫と妖夢が顔を真つ赤にして俯き、幽々子が口元を隠したまま『にやあ』としか表現しようがない邪悪な笑みを浮かべ、小声で呟いた。

「あらやだ。ややこしい事になつてるわね～。まだ口も高このに

「な、ななななな……」

「あらら、紫つたら顔を真つ赤にしちゃって。初心ね～」

「は、ははは、破廉恥な！」

「妖夢も負けじと顔が真つ赤で可愛いわ～。まあ紫から話を聞く限りだと、そう悪くない仲だつたみたいだしね～。ああ、でも風祝さんは嫌がつてるみたいかしら？」

釣られるように紫と妖夢も、顔を真つ赤にしたまま小声で喋る。

その努力が実ったのか、或いは幸か不幸か、襖の奥に気付かれた様子は無い。

それを良い事に幽々子は音も無く襖に忍び寄り、襖を小さく開けて中を覗き込むと

「つて、何してるんですか幽々子様！？」

「いやいや妖夢。もし嫌がってる少女が手籠めにされそうな場面だとしたら、ここは颯爽と助けないとね？」

「絶対興味本位でしょーーー！ デバガメ根性でしょーーー！」

小声で騒ぐという離れ業を披露する白玉楼主従。

その後ろで紫は顔を真っ赤にして、両手で頬を抑えてオロオロしていた。

妖怪の賢者・八雲紫。弱点は色事らしい。

そしてそんなどうじょうもない状況に、横から声。

「あれ？ 貴方達、何してるの？」

社務所の方から声をかけて来たのは、台所で料理をしていた鈴仙だ。

ブレザーの上からエプロンを装備し、頭に付けた三角巾からぴょこんとへにょり耳が飛び出している。

どうやら何かの用事があつて台所からこちらに来たらしい彼女に対し、しかし紫は顔を真っ赤にしてイヤイヤしているだけで、会話が成立しない。

代わりに返答したのは妖夢と幽々子だ。

「いやあの、鈴仙さん、この部屋で、その……」

「風祝さんと信者さんがね～……ほら、アレよアレ。男女の秘め事？」

「はあ～？　あいつら、私が料理引き受けたやつたのに何やつてんのよ～～！」

言ひべき言葉を探して迷つた妖夢と対照的に、直球で告げられた

幽々子の言葉。

それに鈴仙の眉がつり上がる。

それもその筈。医者見習いである彼女、両者ともに怪我をした身で喧嘩をしていた早苗と西宮を見かねて料理を買って出て、その両者には置き薬の箱を渡して治療するよつに申しつけたばかりなのだ。だと言ひに何をしているのかこいつらは、という怒りは正当な物だろ。

そしてオロオロしている紫と妖夢、そしてどこか楽しそうな幽々子の横を通り抜け、鈴仙は躊躇なく襖に手をかけ、勢いよく開いた。

「人に仕事させて、なあにを盛つてるかこのアホどもおおお～！」

「！」

「はい？」

「た、助けて下さい鈴仙さん！　西宮が痛がる私に無理やり消毒液を塗りうと～」

「そうしろつてその鈴仙さんに言われただる。ほら、消毒して傷薬塗ればすぐに良くなるつて」

「凄い楽しそうに迫つて來たじゃないですかあああ～　西宮のどつ

！　れですと～」

そこには居たのは、消毒液の滴るガーゼを手に、どこか楽しそうに早苗にじりよる西宮。そして彼から逃げるよつて鈴仙に飛びついて来た早苗だった。

飛びつかれた鈴仙、一瞬驚いたものの状況をすぐに把握する。

つまりは『ああ、勘違いか』、と。

いや、『あらあら、そういう事ね。残念残念』と嘯く幽々子の横で、紫と妖夢は沈黙。そして鈴仙は冷めた目でその両者を見つめる。早苗と西宮は状況を理解できず首を傾げるのみ。ニヤニヤ笑う幽々子と、冷たい目で見つめる鈴仙の前で、境界の賢者と庭師見習いは沈黙する。

沈黙が重い。いや、痛い。

「……あんたら、そんな勘違いをするなんて……思春期ね。うん、恥ずかしい事じゃないわ。医者見習いとして保証するから、気にしないで」

「嫌ああああ！ せめて笑ってよ、嘲ってよ……！ そういう冷徹

な反応が一番嫌ああああ！」

「違ひんです、私は、その、そういうんじゃないんです鈴仙ちゃんああん……」

そして状況を理解できない早苗と西宮、そしてにやにやと楽しそうな幽々子の前で、狂乱した紫と妖夢が鈴仙に縋り付いたのだった。

第十六話・宴会（上）（後書き）

お嬢様は紅魔郷の時のカリスマと天則の時のカリスマブレイクを見るに、絶対カリスマのオンオフスイッチがあると思う。

ところでこれ、R-15タグは必要ですかね？
「覧の通り単なるミスリードだつたんですけど。

第十七話・宴会（中）（前書き）

キャラは全員書いたら随分時間がかかるので、『来てるよ』といふ設定はあっても小説内では描写されないキャラも居ます。要は賑やかし。

今後出て来る場合もあると思われますので、『ア承ぐださー』。

第十七話・宴会（中）

「じゃあ妖夢はとにかく材料を切つてつて！ 西宮は無理しない程度に、自分の作れる料理！」

「はい、分かりました鈴仙さん！」

「別に怪我つたって、料理くらいなら不都合そこまで無いんですけどね」

そこは例えるならば戦場であった。

守矢神社の社務所に作られた台所 ちなみに早い段階で必要な物を買い揃え、幻想郷仕様の設備になつていて に立つのは陣頭指揮を取る鈴仙、そしてその補佐である妖夢と西宮だ。

表の方では紅魔館、永遠亭、白玉楼+マヨヒガという、幻想郷でも屈指の組織の長達が酒を酌み交わしている。恐らく一柱もそこに加わり、親交を深めている事だろう。

加えてぽつぽつと他の幻想郷の住人、つまりは鬼だの騒靈だの七色人形遣いだの人里の守護者だの、或いは神奈子や諭訪子以外の八百万の神や、果ては妖怪の山の住人である河童や天狗まで来る始末だ。

天狗は流石に数が少ないが、射命丸が柾を含む若手を数人連れて飲みに来たのである。

曰く、『天狗の里もこれからは徐々に外と交流を始めねばなりませんからね。まあ手始めと言つ事で』との事である。彼女は彼女なりの考えがあるのであるのだろう。

ともあれ先の騒動の後、紫が幽々子に宥められて肩を落としたまま表の宴会場に向かい、妖夢が『汚名挽回です！』と間違った言葉を叫びながら、鈴仙の手伝いを所望。

そして客人にばかり働かせては守矢神社の恥と、結局消毒して薬を塗り終わった所で料理に復帰を宣言した西宮の三名は現在、そんな徐々に規模が大きくなる宴会に対応する為、料理とつまみの作成を行っている最中なのだ。

一応参加者達が各自好き勝手に酒なりつまみなり持つて来ているが、盛り上がりがつくればそれでは足りるまい。

三者は大急ぎで料理に取り掛かる。その後ろで、

「鈴仙さん、私は何をすれば良いですか！？」

「その辺で穴掘つてそれを埋める作業を繰り返してて…！」

初手から米を洗剤で洗おうとした早苗が、戦力外通告を受けて立っていた。

#

一方、表の方ではそろそろ本来の開始時刻になろうという頃でしかし既に宴はかなりの盛り上がりを見せていた。

神奈子や諭訪子も挨拶も兼ねて様々な人妖と酒を酌み交わし、応じる側も盃を高く掲げてそれに応える。

どうやら紫の言つ通り、この宴会は守矢神社が幻想郷に対して自らの存在を自己紹介する為、非常に効果的に働いているようだ。起こした異変を肴にこうして酒を飲みかわすのが、幻想郷の流儀なのだろう。

ちなみに提案者にして功労者である八雲紫は、先の勘違いの件で落ち込んだ結果、神社の外壁に向かって三角座りをした挙句に壁に

向かつて愚痴を吐いていた。

「ふふふ……ええ、そうよ。悪い？ 大妖怪ともあらうものがあんな恥ずかしい勘違いをして悪いの？ 仕方ないじゃない、なんで消毒液を塗られるだけであんな艶っぽい声を出すのよ。ゆかりん乙女だもん、思春期だもん、勘違いしたつて仕方無いじゃない……」「咲夜ー、あのスキマは何をするの？」

「お嬢様、アレは人生の敗北者という奴です。余り直視しない方が良いですよ。視覚からスキマ菌が感染します」

負のオーラを発しながら壁に話しかける様子たるや、はっきり言って誰も近寄りがたい威容、いや、異様であった。

そしてそんな一部の例外を除いて宴が非常に盛り上がっている頃、

「……開始時刻はそろそろの筈なんだけど、何でもつ始まってるのよ。しかも主賓である筈の私とかガン無視で」

「おーおー、盛り上がりてるじゃないか。どれ、私も混ざらせて貰おつかな」

守矢神社とは別の意味での、この宴の主役。主賓である博麗靈夢の到着であった。

横には一緒について来たのだろう。魔理沙も簾に跨って飛んできている。

「……って言うか魔理沙、アンタ天狗の里に突っ込んで大暴れして帰つただけじゃない。何で来たのよ」

「おいおい靈夢、宴会に私を呼ばないなぞれ、おでんを食べに行つて卵を頼まないようなもんだぜ？」

「私、おでんの卵つてモツサリしてて好きじゃないのよね。大根のが好き」

などと会話をしながら宴会場に降り立つた一人に、周囲の酔っ払いどもから歓迎の声が上がる。

特にわざわざ立ち上がってそちらへ向かったのは、この神社の一柱である神奈子だ。

「すまないな、博麗。急な宴会だが楽しんで行つてくれ。怪我は大丈夫か？」

「なんとかね。飲んで騒ぐくらいなら問題無いでしょ」

「へえ、アンタがこの神社の神様か。私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだ。宜しくな」

「ああ、宜しく頼むよ霧雨。あと正確に言つならば、この神社で祀られているのは私だけではないのだが」

「

ちらりと神奈子が視線を向けた先では、紅魔館組と一緒に酒を飲んでいる諏訪子の姿。

より正確に言つならば、レミリアと諏訪子が互いに絡み酒を行つてている状態である。

この両者、互いに幻想郷の少女達の中でも特に外見年齢が低い部類なので、その二人が酒を酌み交わしていると中々に外界基準では背徳的な光景だ。

「祟り神ねえ。あっちの大きい方の神は靈夢とやり合つたそうだけど、貴様は何もしていなかつたそうじやないか。外見も何と言つかチビツコいし……本当に凄い神なのか？」

「んだこりミシャグジ様舐めるなよ吸血ロリータ！ チビツコいつてんならアンタだつてそうじやないか！」

「な……！ 何を言つかこの蛙娘！ 私を見て分からんのか、この立ち昇る大人の色香が……！」

「乳臭さなら立ち昇つてるけどねえ！」

「き、貴様言つちやならん事を言つたなアアアアア！　そこまで言うなら貴様の実力、この気高き夜の女王、レミリア・スカーレットが測つてやううではないか！！」

そして売り言葉に買い言葉で、神社からやや離れた空へ飛んで行く二人。

程無くして派手な弾幕が飛び交い始めた。

神さびた古戦場（即席）を舞台に、吸血ロリータ×Sケロケロロリータの対決である。酔っ払いどもが飛び交う弾幕を見て歓声を上げた。

「……まあ、もう一人の神はあんな感じだ」

「あー、まあ、元氣で良いんじゃね？ レミリアと正面切つてやり合えるなら相当なもんだ。そのうち私もお相手願いたいもんだぜ」「まあ私に面倒かけないなら何でも良いわ。それじゃ、宴会を楽しませて貰つわよ」

困ったような神奈子の言葉に、魔理沙はからからと笑つて、靈夢は興味が無さそうに答える。

そうして挨拶を終えた靈夢と魔理沙が宴会場に入ると、神社の方から元気な声が宴会場に響き渡つた。

「皆やーん、お料理の追加が出来ましたよーーー！」

そう言いながら神社の中から大きな皿と、そこに盛られた料理 鈴仙が作った筍御飯や、筍と人参のピリ辛炒め。並びに西宮が作ったブルスケッタ、冷製パスタなど を持つて来たのは東風谷早苗だ。

縁側にテーブルを置き、そこに並べられた料理に宴会参加者達が群がつて行く。

ちなみに『追加が出来た』などと書いつつも、彼女は料理自体には一切貢献していない。

ともあれ映画やゲームで良く見る生存者に群がるゾンビの如く、料理に群がる酔っ払いの群れ。

その勢いを二口二口して眺めていた早苗だが、靈夢に気付くと小走りでそちらに近付いて行く。

「靈夢さん、来ててくれたんですね！」

「タダ飯の機会は逃さないわよ、私は。……随分と宴会は盛り上がりてるみたいね」

「ええ、皆さん気の良い人ばかりで……こんなに楽しんでくれると、もてなす側も嬉しいですね！」

「そう、それは良かつたわね」

繰り返すようつであるが、彼女は料理には一切貢献していない。

「あ、そうだ。靈夢さん、異変が終わったら一つお願いしたい事が
あつたんです」

「お願いしたい事？ 面倒事じやないでしょ？」

「ええと、どう取るかは靈夢さん次第ですけど……」

そして、にべもない靈夢の言葉に早苗が苦笑。

しかしそれも一瞬で、彼女は咳払いと共に靈夢に向き直り、

「靈夢さん、私とお友達になつて下さこ……」

「……え？」

両手を胸の前で握つて、精一杯叫ばれた言葉に、珍しく

常に珍しく、靈夢が驚きを完全に顔に出して硬直した。

非

対する早苗はそのまま前進し、靈夢の手を握り締める。

「風祝と巫女という違いはありますけど、神に仕える身として靈夢さんの戦いぶりに感動したんです！ 人の身でありながら、あそこまで弾幕ごっこが上手だなんて……いつか私も靈夢さんみたいになりたいんです……それにあの短いやり取りでしたけど、靈夢さんは良い人だと思いましたし、是非とも私とお友達に…」

「え、あの、ちょっと……」

「おお、こりゃ珍しいぜ。靈夢が慌てる姿だ」

にやにやと笑った魔理沙が、横合いから『良いんじやないか？ 可愛い後輩が出来たみたいで』などとからかうような口調を靈夢に向ける。

対する靈夢はあまりにも明け透けに好意を向けて来る早苗にたじたじであった。

誤解の無いように言つておくが、元々博麗靈夢は他人に好かれ易い。

紫のように彼女を娘同然に想つている者も居るし、魔理沙やレーニアなどの彼女を大事な友人と考えている者も多い。が、いかんせん幻想郷の人妖は割と素直じゃなかつたり、持つて回つた言い回しを好んだりする。

特に歳経た人外はその傾向が強く、加えて言うならば靈夢が好かれ易いのは魔理沙のような例外を除けば何故かそういう歳経た人外が多かつた。魔理沙も素直に好意を表す方でもない。

それが何を意味するかと言えば

博麗の巫女という特殊な境遇も相まって、彼女は同世代の少女からこういった明け透けな好意を向けられる事に慣れていたのだ。

博麗靈夢、珍しく驚いて腰が引けている。

「ちよ、ちよっと落ち着きなさいよ。いきなり友達になれって……」

「駄目、ですか……？」

「いやいや、酷い奴だなあ靈夢は」

「ああもう、そんな目に見えて落ち込まないでよ……」

魔理

沙、何笑ってるのよ！ しばくわよ！？」

早苗を動物に例えるならば、間違いなく犬であろう。

叱られて尻尾を垂れる犬のように、早苗は靈夢の言葉に落ち込んだ様子を見せる。

そして笑う魔理沙に、怒る靈夢。

やはり彼女はどこか八雲紫に似た部分があるのだろうか。壁際で体育座りをしているスキマ妖怪同様、靈夢もどうやら早苗相手だとペースを崩される部分があるようだった。

そしてそんな騒ぎになっている場所に、近付いて来る姿が一人。長い黒髪を持ち上品に笑う　　ただし先程までは品を投げ捨てた罵り合いをレミリアとしていた　　その女性の名を、蓬萊山輝夜。

永遠亭の主にして、かの伝承に語られる『かぐや姫』。何人もの貴公子の求婚を断つた求婚バスターである。

「随分と慌てるわね、靈夢。貴方はこうこう相手は苦手だったのかしら」

「輝夜、あんたねえ……ややこしい時にわざわざ首突っ込んで来るんじゃないわよ」

「あら、別にややこしい事は無いじゃない。素直な後輩に懐かれて困るクールな先輩、テンプレよテンプレ」

じゅこうと笑う月の姫に、靈夢は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

その横の早苗は急に乱入して来た輝夜に目を白黒させ、

「ええと……」

「はじめまして、山の上の巫女。私は竹林の永遠亭の主、蓬萊山輝夜よ。イナバからも話は聞いていたわ」

「イナバ……あ、鈴仙さんですか。という事は、貴方が竹林のお医者様ですか？」

「それは私の従者の永琳のこと。私は姫だから……そうね、ペットを愛するのが仕事かしら?」

「非生産階級つて奴だな」

「優雅で良いじゃない」

からかうような魔理沙の言葉に、輝夜が楽しそうに笑い声を上げた。

先程までレミリアと煽り合いをしていたとは思えない泰然自若とした態度に、からかっても無駄かと判断した魔理沙が肩を竦める。

そして靈夢は未だ憮然とした様子で輝夜を指し、

「ちなみにこいつ、実は外の世界でも物凄く有名人よ。『かぐや姫』って早苗も知ってるでしょ?」

「え? ええ。えーと、『今は昔』

思い出すよひに中空を見ながら、かぐや姫の伝承を呴き始める早苗。

自分から早苗の興味が他所へ逸れた事で一息吐く靈夢に、自分の事を思い出した早苗がどんな反応をするか楽しみにしている輝夜、そして成り行きで見守っている魔理沙。

その三者の前で早苗は、

『 竹取の翁といつかぐや姫ありけり』

「 ふふつ！？」

「 ちょっと待てＨＨＨＨＨ！？ お爺さん！？ 私が竹取の翁！！？」

竹取の翁とかぐや姫を組み合わせた、全く新しい昔話を展開した。まさかの竹取の翁!! かぐや姫説。当の本人である輝夜が全力で突つ込みを入れ、横では魔理沙と靈夢が吹き出した。
それを見て自分の間違いに気付いた早苗が、慌てたように訂正する。

「 あ、えと、ごめんなさい。なんとなくの大筋は覚えてるんです。確かかぐや姫がスペースインベーダーだつたんですね」

「スペースインベーダー！？ せめて宇宙人とか月人って言ってよ！ 何その安っぽい光線銃とか持つてそいつな単語！…『光る、回る、音が出る！』みたいな！」

ばたばたと腕を振り回して訂正を要求する輝夜に、早苗は困ったように首を傾げる。

輝夜としても、なまじ早苗に悪意やからかいの意図が全く無いだけに、かなり対処に困るようであった。

「 ……どうよ。私がペース乱されるのも分かるでしょ？」

「 涙いな。靈夢に続き輝夜まで手玉に取るか……」

そしてそんな輝夜と早苗を見ながら溜息を吐く靈夢に、感心した
ように頷く魔理沙。

彼女達に構わず、周囲の酔っぱらいの殆どは遠くに見えるロリー
タVSロリータの弾幕戦に歓声を上げていた。

数少ない例外は弟子を労おうと神社の中に足を向けた月の医師と、カツプ麺を奪取する為にその医師にやや遅れて神社に向かった千里眼わんこ。そして未だに壁に話しかけている境界の賢者くらいのものであった。

#

一方、神社の台所では妖夢が必要な材料をほぼ切り終わり、皿にあけた所であった。

それを見た鈴仙が満足げに頷き、

「良し。一通り材料は切り終わったみたいね。料理の方はあんまり大人数だと却つてやり難いし、妖夢は宴会の方を楽しんで来て」「えつ。良いですよ、まだ手伝えますから」

「手伝つて貰おうにも、スペース自体が手狭なのよ。ほら、そっちの主の世話もあるでしょ。こつちは大丈夫だからさ」

「つーん……確かに幽々子様を余り放つておくわけにも……。すいません、お言葉に甘えます」

苦笑しながらも重ねて言う鈴仙の言葉に、妖夢が迷いながらも結局頷く。

彼女は立ち去り際に残つた二人に頭を下げ、台所から離れて表の宴会に向かっていく。

残されたのは鈴仙と西宮だ。

「貴方もキツいようなら戻つて休んでくれても良いわよ。もし料理が不足したら不足したで、來てる連中で勝手にどうにかするでしょ。各々持ち込みもあるみたいだし」

「いや、客人に任せきりというわけにもいかんでしょう。流石に喧嘩さえしなければ、ドクターストップかけられる程の傷でもないでしょうしね」

「まあね。つて言つかなんでその怪我あんな喧嘩に発展したのよ……」

呆れたように言つ鈴仙。その様子には、彼女らしくもなく余り他者への壁が感じられない。

それもその筈、先程の台所で喧嘩しようとしていた二人へのマジギレと、その後で調味料の場所を聞きに行つた所でのスキマ + 白玉 樓主従の勘違いなどもあって、鈴仙は早苗と西富に対する評価を『他人』から『手のかかる患者』へとランク変動させていたのだ。

……ランクアップかランクダウンかはその人の判断によるだろう。

ともあれ、医者見習いとしては強い責任感を持つ彼女。

どうやら西富と早苗に関しては医者と患者として接する事で、逆に垣根が薄れたようである。

妖夢に関しても以前の永夜異変の後で通院していた時に友人関係となつたので、彼女は割と医者として付き合つた相手には遠慮が無くフランクな性質なのかもしれない。

いや

「大体ね。小さな怪我だからとか思つたら駄目なのよ。きちんと消毒しないと化膿する場合もあるし、そもそも貴方は感染症の恐ろしさという物がね……」

「いやあの、別に甘く見ていたわけじゃ……」

「良いから黙つて聞きなさい。薬があるから大丈夫とか思つちゃ駄目なの。その薬を有効に使う為には個々人の日頃からの注意が大事で、究極的には薬は使わないに越した事が無いんだから。師匠の受け売りだけどね」

「えーと……はー」

フランクというか、それを通り越して世話焼きお姉さんへと変貌した鈴仙。

延々と続く医療知識を交えた彼女の説教に対し、しかし原因が自分の方にあるのは分かつてるので、素直に頷くしかない西宮。そして、彼女が医者を志す原因となつた女性がその場に来たのはそんな時の事だ。

「だから、怪我をした時には最初の処置が重要で」

「うどんげ、ちょっと良いかしら？」

「あ、師匠？ どうしたんですか？」

宴会を抜け出して來た八意永琳、弟子を探しに台所に來たものの、並んで料理をしながら患者に説教を続ける弟子を見て苦笑しながら声をかける。

振り返つた弟子に対して内心では微笑ましく想いながらも、殊更に厳めしい顔を作り、

「言つてる事は正論だけど、余り言い過ぎても相手が意固地になつたりして逆効果になる場合もあるわ。その彼はきちんと聞いてくれてるみたいだから良いけどね。説教も薬と同じ、用法容量は適切に。必要だつたらガツンと言わなきゃいけないのは当然だけ」

「う……はい、『ごめんなさい、師匠』」

そしてしゅんとしたように頭を下げる鈴仙。
頭の上のウサ耳も、心なしか力無く萎れた。

そんな彼女に対して援護射撃をしたのは、横に居た西宮だ。

「申し訳ありません、竹林のお医者様。元はと言えば俺が馬鹿な事

をしたせいで鈴仙さんに説教をさせてしまったのです。むしろ大変になりましたよ」

「あら、聞き分けの良い患者さんね。貴方みたいな人ばかりだった助かるんだけど」

言外に『だから、そう責めないで下さい』と告げられた言葉に、嬉しそうに永琳は頬に手を当てる。

弟子である鈴仙が医者として患者に慕われているのだ。それが悪い気になろう筈が無い。

「まあとにかく、怪我人の貴方も、うどんげも。今作っている分が終わつたら料理は切り上げなさいな。必要だつたら必要に感じた人が色々持つて来るだろうし、各々持ち込みもあるし、今作ってる分が終わつたら貴方達も楽しむ側に回りなさい」

「あ、皆さん結構持ち込んでくれたんですね。分かりました、わざわざありがとうございます」

「……そうですね。患者が無理しないなら、私が手伝う理由も薄れますし」

そして永琳の言葉に西富と鈴仙が頷く。
新たな闖入者が来たのは次の瞬間だ。

「ちわーっス！ 西富君西富君、『かつぶめん』は無いんスかー！」

「出たな駄犬」

「誰が駄犬ッスか負け犬」

永琳の後ろからぴょこんと顔を出したのは、永琳にやや遅れて宴会場を抜け出した桺だった。

目的は 先の台詞の通り、彼女がここ数日で嵌つたカツブ麺である。

宴会ついでにあれを食べられないかと思つた彼女、直接調理場に交渉にやって来たのだ。

「まああるにはある。……そうだな、幻想郷だと珍味の一種だらうし、折角だからある程度放出しちまうか」

「おお、話が分かるツスね」

「ちょっと待ちなさいよ。カップ麺つて外の世界のインスタント食品よね？　身体に悪いわよ」

カップ麺ばかりあつても仕方ないと考える西富、折角だから出してしまったかと思考し、桜がそれに嬉しそうに賛同する。

その言葉に横から噛みついたのは鈴仙だ。
対する桜は頬を膨らませ、それに反発する。

「ぶーぶー。兎さん頭が固いツスよ。たまの宴会だからそういう品が出たつて良いじゃないツスかー」

「それにまあ、身体に悪いからって捨てるよりは良いかと。むしろこういう場で消費させてくれるとありがたいですね。……」こんなもん沢山抱え込んで困るし」

「む……それは確かに。分かったわ。でも食べ過ぎなによ」

結局は桜と西富の言葉を受けて、鈴仙も納得したのだろう。
渋々と言つた様子で頷く彼女に、しかし桜はぼそりと呟いた。

「なんかその辺口煩いと、おばーちゃん思い出すツス」

「誰がお婆ちゃんよ。言つておくけど私、幻想郷の住人じやまだ若い方だと思うわよ」

「それ言つならボクもそつツスよ。まあ流石に西富君よりは上ツスけど」

「いや人間と比較すんなよ妖怪

桺の言葉に、先程とは逆に今度は鈴仙が反発。

話題が西富に飛び、しかし彼は呆れたように返すのみ。

そしてそれらの会話を聞いていた月の頭脳は、ぼそりと呟いた。

「あら、じゃあ西富君だったわね。貴方は私と同じくらいの歳かしら」

永琳が放つたその爆弾発言に、西富と鈴仙は『それはない!』と突っ込みそうになるのを全靈を費やして踏みとどまつた。

実年齢にしては無理があり過ぎるし、外見年齢にしてももう五歳程度は上に見えるのである。

付き合いが長く永琳の実年齢をある程度知っている鈴仙は特に突っ込みを入れたかったが、全靈の気合いで堪えた。

恐らくは冗談なのだろうが、笑うべきか。スルーすべきか。それともまさか突っ込むべきなのか。

攻略法の見えない『やじこじら えーりん十七歳』の言葉に、二者が同様に凍りつく。或いは天真爛漫な早苗辺りならばさらりと切り返せるのかもしれないが、なまじ世慣れしている分、西富と鈴仙は対応に困って硬直してしまう。

その状況を救つたのは、まさかの犬走桺だった。

「あれ、そうだつたんスか。じゃあお医者さんよりボクの方が年齢的に先輩ツスね!!」

訂正。更に状況をカオスに巻き込んだのは、やはり犬走桺だった。

満面の笑みで告げられた言葉。それには一切の悪意も何も見えず、

つまりは純粹に本気と書いてマジだった。

西富と鈴仙が硬直を通り越して停止し、余りに余りの発言にピタリと止まる。両者の頭脳は完全にオーバーフローする。

そして一人があわや月の頭脳のお怒りかと覚悟を決めた瞬間、

「あら、うふふ……そうね、そつなるかしら。不束な後輩ですが、御鞭撻のほどよろしくお願ひしますね、先輩」
「うんうん、良い返事ツス。山関係で困った事があつたらボクに言うツスよ！」

予想の斜め上に天元突破した桜の言葉が、却つてツボに嵌つたのだろうか。

くすくすと笑いながら『冗談めかして桜を『先輩』と呼ぶ永琳に、胸を叩いて請け負う誇らしげな桜。

その様子が面白かつたのだろう、永琳は更に楽しそうに、口元に手を当てて上品に笑う。

「ええ、お願いしますね先輩。ですがまずは、向こうで宴会を楽しみましょう。二人とも、今作ってる分が終わつたらさつきも言ったように宴会を楽しみなさいね？」

「あ、そうツスね。西富君、後でカツブ麵持つて来るんスよー。先輩命令ツスー！」

そして桜に先導されるように去つて行く月の頭脳。

去り際に聞こえて来た、『あらやだ。私つて本当にそれくらい若く見えるのかしら』という心底嬉しそうな咳きに対し、鈴仙と西富は紳士的にスルーを決め込んだ。

そして二人が去り、彼女達が来る前に火にかけていた鍋が沸騰を始めるまで硬直を続けてから、

「……鈴仙さん。実際あの人、お歳は……？」

「女性に歳を訪ねるのは止めた方が良いわよ。……まあでも多分、私の百倍は軽く超えてると思う……」

何とも言えない空気での会話。

そして鍋が沸騰を通り越して吹き零れるに至って、ようやく二人はのろのろと料理を再開したのだつた。

早苗相手にペースをかき回されて疲れた輝夜が、白狼天狗に酌をする永琳という有り得ない光景を見て仰天するのはもう少し後の話であった。

第十七話・宴会（中）（後書き）

後日、天狗の里にて比較的リベラルな立場の大天狗が文と柵を呼んで曰く。

「不本意だが、これからは徐々に我ら天狗も外との交流を始めねばなるまい。その先駆けとして射命丸、犬走。そなたの持つ人脈を、まずは教えて貰いたい」

その言葉に射命丸と柵は答えて曰く、

「そうですね、一応知人は広域に渡って居ます。何らかの口利きが出来るレベルの友人となると、マヨヒガと守矢神社と言う所でしょうね。柵はどう？」

「守矢の巫女さんは友達でー、神職見習いの西宮君はボクの弟子ツス。あと、竹林のお医者さんはボクの後輩ツス」

「えつ」

「えつ」

予想の遙か上空にあつた柵の人脈に、硬直する射命丸と大天狗だった。

#

と、いうわけで色々と人間関係篇。

早苗も西宮も人々の人間関係を作り始めています。

そして柵はある意味最強キャラだと思います。誰相手でもペースを乱されないと云つ意味において。

ダブルスポイラーで『文は桜を苦手としている』といつて、文があつたから、文が苦手そうな性格にした結果がこれだよ。

第十八話・宴会（下）（前書き）

下だけ終わりじゃ無くなりました。
次回は宴会（終）となります。今回は割とシリアス田に。
各々のスタンスについてとか。

第十八話・宴会（下）

西宮と鈴仙が料理を終え、その料理を運び出した時 既に宴会場は完全に出来上がっていた。

あちこちで人妖が酒を酌み交わし、或いは騒ぎ、或いは潰れての無礼講である。

ロリー・タ同士の弾幕バトルは引き分けに終わり、諏訪子は神奈子の隣で酒を飲んでおり、レミリアは靈夢や早苗、魔理沙の元でやはり酒を飲んでいる。両者ともに心なしかボロボロだが満足げではあった。

その代わりと言つよに、神さびた古戦場（即席）では他の人妖による弾幕が展開されていた。

先のレミリア・諏訪子戦に勝るとも劣らない絢爛豪華な弾幕。

小柄な影が放つそれは『集束』と『拡散』を軸とした力押しの弾幕で、もう片方は手にした枝のような物から放つ虹色の弾幕で対抗しているように見える。

共通するのはいずれも異変の首謀者クラスの実力者であると言つ事だ。

西宮からすれば初めて見る、幻想郷でも最上位に位置する者同士の弾幕戦。遠くに見えるそれに、思わず目を奪われる。

料理の皿を手に持つたまま、彼は思わず足を止めてその弾幕に見入っていた。

「……すっげえな」

「あれは鬼と……もう片方はウチの姫様ね。宴会ではよく誰かが弾幕やつたりするのを肴に飲んだりもするのよ」

「鬼つつーと、まあ日本妖怪の代表ですね。んじゃ、それと張り合

う鈴仙さんのところの姫様つて何つて話になるんですが

「……んー、かぐや姫つて言つて通じる?」

困ったように鈴仙が告げた言葉に、西宮が数秒中空を見るよつてして思考を巡らせる

「昔々あるといひ、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、ようづのことに使ひけり」

「そうそれ」

「ちなみに東風谷に聞くとこの辺から話がワープ進化を開始する氣もするんですね。以前あいつ近所の子供相手に桃太郎を話す際に、『お爺さんは山へ人狩りに、お婆さんは川へ干拓に行きました』とか言つてたし」

「干拓つて普通海よね。川でやるもんぢやないわよね。つて言つとかお婆さんがどうでも良くなるくらいに、お爺さんがアグレッシブといつか世纪末よね」

「ヒヤツハーノーノーとでも言つよつなお爺さんだつたのでは」「医者として言わせてもらえば、恐らくその老人には生涯介護は要らないわね。……姫様相手に変な昔話を披露しないと良いけど、あの風祝さん」

時既に遅し。後のフェステイバル。アフター・ザ・カーニバル。平たく言えば後の祭りであった。

よもや東風谷早苗が先んじてかぐや姫=竹取の翁という新説を語つていたとは夢にも思わない二人、会話しながらも料理を適当にテーブルに並べて行く。

「ウチの姫様つて、実はその話に出て来る『かぐや姫』なのよ。あの弾幕はその伝承に出て来る難題を元にしてる」

「……またブツ飛んだ話になつたなあ。神、妖怪、そしてかぐや姫

ですか。何でもありだな幻想郷」

呆れたような西宮の溜息と同時に、料理が並べ終わる。
すぐさま田端が利き、なおかつまだ食べる氣のある数名が集まつ
てきた。

「あらあら、色々持つて来たみたいだけ……煮物とチーズフォン
デュね～。兎さんは和食、そちらの信者さんは洋食派かしら
「幽々子様、がつつかないで下さこよ、はしたない」

真つ先に来た亡靈の姫、西行寺幽々子。

その後ろからついて来た妖夢が呆れたように言つたが、幽々子は構
わず料理に手を出して御満悦だ。

素手で煮物を摘まんで食べると云つ無作法に、妖夢が後ろで泣い
顔をしている。

対する鈴仙と西宮は苦笑しながら、

「他の人の分まで食べないで下さいよ」

「まあ、喜んで頂けたなら幸いですけど」

「ええ、美味しいわ～。私には妖夢の料理が一番だけ、やつぱり
たまには違うタイプの料理を食べないとね～」

さりげなく従者自慢を入れる幽々子の言葉に、褒められた妖夢が
顔を赤くする。

そんな従者を横目で見ながら幽々子は笑い、宴会場の一箇所を順
に指差した。

「まあ、貴方達もお疲れ様ね。永遠亭の薬師さんはあちいら、風祝さ
んはあちいらに居るわよ～。もう料理の追加は要らないだろ～から、
楽しんでらっしゃ～いな」

「ええ、ありがたく……って、あの。何で師匠がカツブ麵食べてる白狼天狗に酌をしてるんですか。何あの力オス。ぶつちやけ力関係おかしいでしょう。横のてゐがドン引きつてどういうレベルよアレ」

「薬師さん、若い子扱いされて舞い上がつてゐるわね～。そういう意味で、白狼天狗の子は大した策士と言えるのかしら。……愚者が転じて賢者が如き結果を引き寄せる。そういう意味では、得がたい才の持ち主とも言えるけど」

煮物を摘まんだ指を、ペラリとどこか艶めいた動作で舐めながら、幽々子が飄々と笑う。

対する鈴仙は嫌そうな顔だ。今から自分があの力オスに踏み込まれねばならない事を考へたからだろう。

或いは遠くで弾幕戦をしている輝夜も、あの力オスに巻き込まれるのを嫌がつて弾幕戦に逃げたのかもしけれない。

「……まあ、嫌ですけど私は向こうに戻ります。西富君、飲みすぎないよに」

「了解です、ドクター 鈴仙
「宜しい」

ドクターと呼ばれた鈴仙が、嬉しそうに、かつ僅かに照れたような笑みを浮かべて永遠亭のメンバー（+査）が酒盛りをしている方へ戻つて行く。

それを見送つてから、西富は白玉楼主従に一礼。

「それでは俺もこれで失礼致します。西行寺様も魂魄嬢も、どうか楽しんで行つて下さい」

「本当に礼儀正しい子ね。相手に応じて使い分けている、要領の良い子と言うべきかしら」

その一礼に対し、幽々子は僅かな笑みと共に言葉を返す。

礼儀正しさを評価している一方で、しかしその口調と表情にはさして相手を褒めるような色は含まれていない。むしろ僅かに眉根を寄せることで、否定的な感情すらその顔には浮かんでいる。

そして西宮が早苗の方へ向かうのを待つて放たれた言葉は、明らかに否定要素を含んでいた。

「……けど、その要領の良さが仇になる事もある。天狗や紫のように賢しさを美德とする相手には好かれるでしょうが、反面それを小賢しいと断じる相手からの心象は悪くなるわ。そうね、幻想郷の上位者の中では、鬼や吸血鬼、あとは花畠の妖怪辺りが危ないから」

「……幽々子様、それ本人に言つてあげましょ~よ」

「いやいや妖夢、別に私は賢しさが悪いとは言つてないわよ。今はまだ、言つた所で混乱するだけでしょうし、賢者が幻想郷で疎まれているわけでもないしね~。でも賢いのと小賢しいのは別で、彼は未だにその境界線上に立つてゐるわ~」

幽々子は呟きながらも、再度煮物を手で摘まむ。

背後の妖夢が諦めたような溜息を吐いた。

「んー、美味し。……それで、えっとね~。小賢しさと賢さの境界は曖昧だけど、私はそれはどれだけ他者を利せるかによると思ってるわ~。器の大小と言い換えても良いわね。自分を利する為だけに知恵を使う者は小賢しく、その過程で他者を想い得る器があれば賢者。故に賢者は慕われ、小賢しい者は嫌われる。……まあ、私見だけどね~」

「その論で言うならば、天狗の里・射命丸さん達、そして自分が所

属する守矢神社の三つを利する策を出した西富わんは、賢者に該当するのではありませんか？」

「だから私も断定はしていないのよ～。言つたでしょ、『境界線上』なの。幻想郷基準で見れば些か過度なくらいに田上を立てる彼の言動は、ともすれば強者に媚びる姿勢になりかねない。外の世界にありがちな処世術で、そして彼自身もそういう事は必要な事と考えている節があるわ～。それを悪い考えとは言わないけど、行き過ぎれば信を失う。彼が守矢神社の外交交渉の窓口に成り得る立場だといつのを考えると、それは好ましくないのよね～」

そのまま指を舐め、幽々子は次にチーズフォンデュに田を付ける。小さく切られたフランスパンをチーズに浸し、嬉しそうに口に運び、

「もぐ……あら、洋酒に合いそうね～。 ん、『ごほん。まあ、要はバランスよ～。靈夢や魔理沙と違い、彼は決して強くない。故にまずは他者に礼儀を以て話す姿勢は決して悪くないわ。何の力や裏付けも無いのに、いきなり慣れ慣れしく話す輩よりは好印象ね～。ただ、彼は良くも悪くも外の世界の感覚に染まり過ぎている』

「……それがつまり、彼に感じる『小賢しさ』ですか

「ええ。そこから先、幻想郷で真に信頼を得るにはもっと別の何かが必要。つまりは彼はこの幻想郷の住人達から本当の意味で友誼を築き、信頼を勝ち得るのか。一人や二人じゃなく、もっと大勢から つまりは幻想郷に受け入れられるのか。それが出来れば賢人となり得、出来なければ小才子で終わるでしょうね～」

「手厳しいですね
「でも事実よ～」

呟く幽々子の視線は宴会場の一角。

風祝たる東風谷早苗が居る場所と、そこへ向かう西富の後ろ姿を

捉えている。

「さて、どうなるのかしらね～？ 個人的にはどちらに転んでも面白いと言いたい所だけど、紫はこの神社を随分好いてるみたいだし……」

「幽々子様的にはどうですか？」

「保留ね。こんなすぐに結論なんか出せやしないわよ。ただ、悪い感じはしないわ～。少し無骨な軍神様も、幼そうに見えて割と腹黒い一面がありそうな祟り神様も、天真爛漫な風祝さんも、良くも悪くも賢しげな信者さんも」

言つて幽々子は、小さく笑う。

紫は幻想郷のバランスを考えて、外の世界から神々を引き込んで来たそうだが 隨分とまた、信者一人まで含めて面白そつな連中を引き当てるものだと思いながら。

そして彼女は背後に控える半人前の従者に声をかける。

「 妖夢」

「はい」

「貴方の判断でこの神社に関わり、必要だと思えば東風谷さんと西富君に手を貸してあげなさい。彼女達も幻想郷には色々不慣れだろうしね～」

「心得ました。ただ、その場合の幽々子様のお世話は……」

「白玉楼には他にもお手伝いの幽靈は居るから大丈夫よ～。別段こっちに付きつきりになれってわけでもないしね。要は気にかけておいてあげなさい程度の話でしかないわ～」

「そう言つ事でしたら承知いたしました。……やはり先程の基準で言つならば、幽々子様は『賢者』ですね」

『結局この神社の皆さんの方を考えてるんですから』と笑う妖夢

に、しかし幽々子は頷かない。

薄く笑うだけで答える幽々子は、先の基準で言つならば自分はあくまで『小賢しい』存在でしかないと考えている。

何故ならば守矢神社の人々と妖夢が関わることの眞の目的は、神社の手助けなどではなく

「 結局のところ、そこと関わった事で可愛い妖夢の成長の糧になるのではないか。その目的なんですものね～」

「……え？」

「なんでもないわ～。それより妖夢、この煮物、味が染みてて美味しいわよ～。貴方も食べて御覧なさいな～」

そして桜の姫は笑いながら、従者の口元に煮物を押し付ける。
慌てて『自分で食べれます！』と騒ぐ彼女を見ながら、幽々子は思う。

偉そうな事を言つてしまつたが、自分こそが『小賢しい小才子』にしか過ぎないのだと。

何故なら自分は、常に自分が本当に好きな人々の為に動き、その為に他を利用する事も辞さない悪い女なのだから そう内心で呴きながら。

#

「あ、西富一！ 料理は終わつたんですか？」
「一応な」

そして幽々子と妖夢に見送られて早苗の元にやつて来た西富。彼に一番最初に気付いたのは、当の早苗であった。歩いて来る西

宮に手を振る彼女の横には靈夢が座り、靈夢を挟んで早苗の逆隣にはレミリアが腰掛けている。

靈夢を挟んでレミリアと早苗も楽しそうに歓談している辺り、割と相性は悪くないらしい。

そして靈夢とは逆隣の早苗の横に座つて、日本酒の入ったコップを傾けていた魔理沙が西宮に声をかけた。

「おう、西宮じゃないか。やつてくれたなこの野郎、お前の作戦で私は天狗の里に突っ込まれたんだって？ 覚えてやがれよ」「明日までな。っていうか俺まだお前に撃たれた部分が痛むんだが。そつちこそ覚えてやがれよこの野郎」

「今晩までな」

互いに言い合い、シーカルな笑みを浮かべ合う魔理沙と西宮。元々サバサバした性格の魔理沙だ。恨みを引き摺るつもりは無いようだ、その笑いには恶意も敵意も見えない。そこは西宮も同様である。

そして彼は早苗の横に座つている靈夢とその横のレミリアに向き直り、丁重に礼をする。

「……失礼致しました。博麗の巫女様、紅魔館のレミリア・スカーレット様におきましては御機嫌麗しゅう「

「きもつ」

「西宮、どうしたんですか？ 頭でも打ちましたか？」

「おじお前、私に対する態度と靈夢やレミリアに対する態度が違い過ぎるだろ！」

対する反応は、概ね不評だった。

幽々子の懸念、早くも大当たりである。幻想郷きつての重要な人物

である靈夢、並びに紅魔館の主であるレミリア。その両者が相手故に、まずは礼儀正しく頭を下げた西宮。結果は「J覧の有様であった。

当の片割れである靈夢からは「きもつ」の三文字で全否定。

早苗からは真剣な目で心配され、魔理沙からはブーイングだ。

一連の反応を受けた西宮は、がっくりと肩を落としながら呟いた。

「…………いや、殆ど初対面のよーなもんですし、かの『博麗の巫女』や『紅魔館の主』相手に失礼があつたら不味いかと思つたんですけどね……」

「早苗や魔理沙から聞いてた印象と違い過ぎるわよ」

「ちゅーか私相手には初対面からタメ口だったのはどうなるんだ、オイ」

そして靈夢と魔理沙からの酷評に、西宮が顔を手で覆つて天を仰ぐ。

「…………どんな印象が話されてたんですか、博麗様。あと霧雨、お前は俺との初対面がどんな邂逅だったか忘れたとは言わせねえぞ」「様付けは要らないわよ。ぶっちゃけ慣れてないし。…………あとまあ、聞いてた内容は……口が悪くて頭が回るけど弱つちい奴？」

「殆ど忘れてたっつの、その後のエイプキラーの印象が強すぎて」

「口クな事言われてませんな。あと霧雨、その話はそこでストップだ」

『『Hイプキラーって何ですか?』』とでも言わんばかりの顔を西宮と魔理沙に向けて来た早苗^{エイプキラー}。

彼女からの追及を逸らす為に西宮は魔理沙を口止めし、魔理沙は貸しになるとでも考えたのか、肩を竦めてそれを了承した。

ちなみに靈夢は元々、エイプキラー云々の話には興味が無かつた

のだろう。会話内容に興味を示した様子は無い。

そして魔理沙が沈黙した事以上に、そのハイパーの話題を横から断ち切る声が響く。

西宮が来てから今まで沈黙を保っていた紅魔館の主、レミリア・スカーレットだ。

「つまらんな

冷めた言葉と冷めた目が西宮に向けられる。

唐突なその言葉と態度に困惑したのは、当の西宮と早苗、そして横で話を聞いていた魔理沙だ。

その中で一番復帰と反応が一番早かったのは、レミリアとの付き合いが長い魔理沙である。

「どうしたんだよレミリア。さっきまで『機嫌に靈夢に抱きついてカリスマブレイクしてウザがられていたじゃないか。何だ、何か機嫌を損ねるような事でもあったのか?』
「機嫌を損ねる事? 決まっているだろう、その男だ」

鼻を鳴らすような小馬鹿にした笑いと共に、レミリアは西宮を睨む。

『見る』ではなく『睨む』視線は、軽い怒りと失望が混ざっていた。

「正直な、私は期待していたのだよ。早苗は興味深い奴だ。好ましいと言つても良い。未だ未熟でありながらも靈夢に正面から立ち向かう胆力、勝てぬまでも足止めを為す実力、そして飾らず正面から相手と向かい合ひ心根。いずれも私からすれば好ましいと言える」

だが、と一拍を置き、レミリアは西宮を指し示す。

「その相棒という男がどのようなものかと思えば、私がここに来る前に外の世界で散々見て来た人種と同様の対応だ。露骨に強者に媚びるその姿勢、実にくだらん」

「おい、止めるよレミリア。確かに幻想郷じゃ少ない対応だが、別に礼儀正しいのが悪いわけじゃないだろ」

「かもな。だが咲夜は外の世界で、そういう強者に媚び、しかし弱者に強く出る人種のせいで紅魔館まで流れ着いたのだ。時間を操る能力以外は単なる幼子にしか過ぎなかつた人間が、その能力のせいだけで吸血鬼の館にだ。その男の対応は、そういう人種を思い出させる」

「あんた意外と従者想いよね」

「つるさい黙れ。今ちょっと真面目な話をしてるんだ」

靈夢が横から呟いた言葉に、レミリアが顔を赤くして反論を返す。
そんな彼女に横から食つてかかつたのは早苗だ。

「レミリアさん、訂正して下さい。西宮はそんな事はしません！」

「そうか？ 言葉だけなら何とでも言える。或いはそいつがお前やその主である神に従つているのも、それが奴にとつて都合が良いからに過ぎないかも知れんぞ？」

「違います。だって、外の世界では守矢神社への信仰も潰える寸前で、諏訪子様も神奈子様も殆どの力を失つておられました。私も靈力を使う事も空を飛ぶ事も出来ない、ただの小娘でしかなかつたんです。だというのに西宮は私と一緒に御一柱の為に尽力してくれていました」

レミリアに反論する早苗の言葉に熱が入る。
自らの相棒を貶された事に、強い憤りを感じているのだろう。

強い視線と共に身を乗り出すようにして語る早苗に、彼女とレミリアの間に挟まれる形になつてゐる靈夢がのけぞつた。

「私が失敗したら、一緒に謝ってくれました。私が変な子だと虐められていたら、私を守つてくれました。私が泣いている時には、泣き止むまで手を握つてくれました！　　外では空回つてばかりで何の取り柄も無かつた私と、ずっと一緒に居てくれました！　　訂正して下さい、レミリアさん！」

肩を怒らせ叫ばれたその言葉に、レミリアは一瞬だけきょとんとした表情を返した後、肩を竦めて『降参』とでも言つよう両手を上げた。

「……分かつた分かつた、そこまで言つたか。悪かつたよ、確かに第一印象だけで悪く言い過ぎた。気高き夜の王のやるべき事では無かつたな。外の世界での嫌な事を思い出して、少々頭に血が上つていたようだ。早苗にもそこの男にも謝罪しよう」

「つていうか私を挟んでそんな面倒そうな会話しないでよ。レミリア、あんた従者大事なのも良いけど初対面の相手に食つてかかるんじゃない。あと早苗、私に乗りかかるようにして惚氣ないでつてば」

未だのけぞつたポーズのままの博麗の巫女が言つた言葉に、レミリアと早苗が『あつ』とでも言つような表情を浮かべ、慌てて初期位置に座り直す。

その両者を見て靈夢は溜息を吐き、言われた当人ながらも横で傍観していた西宮に向き直る。

「んで、言われた当人としてはどう？　今のは正直、レミリアが悪かつたと思うけど」

「お構い無く。どうやらレミリア様の従者が外で色々あつたみたい

ですしね。……つか、これが原因で関係こじれるのは嫌なんで、無かつた事で

「分かつた、私に非がある。無かつた事にしてくれるならば、それはそれで助かる。

だが」

そしてレミリアは自らの非を認める発言をしながらも、西宮を鋭い目で睨みつける。

「やはり私は外の人間は好かん。私達のような幻想の住人を追いやるのはまだ理解できる。だが同じ人間を排斥する思考は理解できん。早苗は外の人間のような雰囲気は薄いが、お前は外の雰囲気を未だに色濃く纏っている。良くも悪くもだ。それを好く者も居るし、私のように嫌う者も居る。それは覚えておけ」「……みたいですね。気をつけます」

そして睨まれた西宮は、賢しげな態度がレミリアの怒りに触れた事を自覚しているのだろう。

崩した敬語で肩を竦めるように応じ、それを見たレミリアが鼻を鳴らす。

「ふん、やはり賢しげだな。だが、もう一つ謝罪だ。私の睨みに法まなかつた点は評価する。少なくとも、臆病者ではないようだ」「だろーな。それにレミリア。こいつ賢しげなのは表面だけで、根っここの行動理念は馬鹿丸出しだぞ。今回の異変で私と対峙した時に切つた啖呵がだなあ

」

「オフレコつつつてたろ霧雨エーーー？」

横合いから魔理沙が言つた言葉に、西宮が思わず叫んだ。

それもその筈、魔理沙相手に今回の異変で西宮が切つた啖呵

それは即ち、かつて一柱と出会つた時に受けた最初の神託であり、

『早苗を泣かせない』という彼の行動の軸だ。

異変でテンショングが上がっていたとはいえ、自分を鼓舞する意味もあつたとはいえ、迂闊に吼えるべきでは無かつたと内心で思つ西宮。

しかし魔理沙は、これが先の異変で嵌められた反撃の好機とでも思ったのだろう。にやりと邪悪な笑みを浮かべてそれに返す。

「良いじゃないか、レミリア相手に誤解解いてやろうってんだ。むしろ感謝しろよ、なあ西宮」

「何だ魔理沙。この男、何かそんな言ひのを抱むほどの恥ずかしい理由で戦つてたのか？」

「ああ、それはだな……つと、ここで話すと煩そうだ。少し離れて話をしよう。安心しろ、西宮。流石に話題に出すのは今回が最初で最後だ。まあ仕返しと思え」

「分かつた。ではな、三人とも」

「ちよ、おま……待て……！」

止める西宮に構わず、幕に跨つて飛び去る魔理沙。そして魔理沙に追従するレミリア。

流石に両者ともに射命丸には劣るが、幻想郷の中でもトップクラスの飛行速度を持つ一人だ。

西宮が追い掛けようにも、その姿は瞬く間に遠くに離れて行つてしまつた。

「なによ、なんか恥ずかしい理由でもあつたの？」

「……何も聞かないで下さい、俺の心が折れます」

「あつそ」

がつくりと肩を落とす西宮。

一応聞いたものの、特に興味は無かつたらしくあつさり引き下が

つた靈夢。

その両者の横で、早苗が小さく首を傾げていた。

いずれ彼女が西宮と魔理沙の会話内容を知る事があるのか否か。
それは魔理沙の気分次第であった。

第十八話・宴会（下）（後書き）

ちなみに魔理沙から話を聞いた後のレミリアの感想。

「ごめん、私が悪かつた。あの男、凄い馬鹿なのかもしない」

と、まあこんな感じで。マイナス印象は未だありますが、大分打ち消されたかもしれません。

今後の幻想郷での彼らを書くにあたって、各々の組織の長のスタンスを全員分出そうとしたらこんな感じに。話が長く&説明臭くて申し訳ありません。

ですが、今後に向けた問題点を示す話は必要かなーと。

この小説の幽々子様は、仲の良い友人や大好きな従者を最優先して、他には割と淡泊な人です。なまじ自己評価が低い分、一番策謀家としては怖いタイプかもしれません。

レミリアはやや子供っぽい感情論な部分が大きいですが、従者や家族・友人を大事にしている印象が。

西宮のスタンスって、レミリアや萃香や勇儀、幽香などには受けが悪いと思うんですよね。

特にフラグ建築スキルがあるわけでもないので、相性が悪い相手には嫌われます。そこから先で友人になれるかどうかは今後次第。それこそ幽々子が言つたように、それでも信頼を得て友誼を築けるかどうかが、西宮にとつての今後のターニングポイントとなるのではないでしょうか。

第十九話・西宮と早苗と射命丸（前書き）

タイトルはやはり『宴會（終）』に近いが、Lの形に。
タイトル通りの三者について。

嗚呼、宴會長かつた。

第十九話・西富と早苗と射命丸

さて、レーリアと西富や早苗の間に諍いじみ起らったものの、それはさしたる禍根を残さず終わった。

それ以外には酔いどれ同士の喧嘩から弾幕じりこへのコンボなどは何度か発生したもの、大きな問題は起こらずに宴会は進み、神奈子や諏訪子は多くの人妖と酒を酌み交わし、親交を得る事に成功していた。

ちなみに来ている比率は少女や女性が多いが、河童や天狗や他の妖怪・八百万の神の中には男性も含まれていた。そうでない場合即ち宴会場が外見上うら若き女性ばかりだった場合、西富は宴会場に出る前に逃げ帰つていただらつ。

誰も好んでガールズトークオンラインのど真ん中に突っ込んで行こうとは思つまい。

ともあれ、これは宴会だ。

宴会である以上、主要な飲み物は酒である。

そして紅魔館組がワインを持ちこんでいたが、宴会で消費される酒の基本は日本酒。つまりは度数の強い酒だ。

「東風谷って酒に弱いですからね。間違つても日本酒とか飲ませないで下さい」

「へえ」

故に西富は前もつて早苗の横に座る靈夢に警告しておいた。

東風谷早苗はいわゆる下戸だ。外の世界で父が戯れ半分で飲ませたビールを一缶も消費しないうちに酔っぱらつ彼女、間違つても日本酒など飲ませられまい。

しかし、先んじて警告しておいたのが間違いだった。

「うへへ……じょうこちー、飲んでまふか?」

「誰だアアアア！ ここに酒飲ませた馬鹿はアアアアーー！」

宴会の途中で抜け出し、廁に向かつた西宮。しかし廁から戻った彼が見たのは、赤ら顔で彼に絡んで来る風祝の姿だった。

そして西宮の呟びを聞いた靈夢が小さく頷き、

「『めん、酒に弱いって言つからぢんくらいのもんか試してみよ』
と、酒入ったコップ渡したらこんなんなったわ」

「試すな！ 僕は何のためにあんたに警告したんだ！？」

「あんたも話し方が崩れて来たわね。まあそっちの方が気楽でいいけど」

叫ぶ西宮。しかし靈夢相手に力押しで詰め寄つた所で柳に風だ。

『それじゃあ面倒事は任せる』とでも言つたげに、軽く席を立つ
博麗の巫女。

「んじゃ私、適当に誰か他の奴と飲んで来るから後よろしく。……あれ？ 紫じゃない、あいつ壁に向かつて体育座りして何やつてるの？」

「おおおおおー！ 全放置ですか！？ この酔っ払い放置して俺に押し付けて行くの！？」

「元々あんたの管轄のよつなもんでしょ。頑張りなさー」

そしてふよふよと浮いて紫の方へ向かつ靈夢。

行かせるまいと西富が慌てて手を伸ばすが、

「うへー……にやんか氣分がいいれすねえ」

「掴むなあああ！　あ、クソ、完全に逃げられた！　博麗、博麗
ちよつとお前無視すんな！！」

既に敬語も完全に抜けた罵声を飛ばす西富だが、腰に抱きつくよ
うにして彼をホールドする早苗が彼の靈夢への追走、或いは離脱を
許さなかつた。

その手には空になつたコップ。即ち、コップ一杯の日本酒を飲ん
だと言つ事だらう。

「……急性アル中とか大丈夫なんだろうな。いざとなつたら鈴仙さ
んやそのお師匠様に頼むか。鈴仙さんのお師匠様は相当な名医だつ
て聞くし、どうにかなる……か？」

内心で靈夢に向かつて中指を立てながら、呻くよつて呟く。

無論永琳は名医どころか不死の妙薬まで作り得るレベルの医師で
あるのだが、流石に彼はそこまでは知らないので、彼女への信頼も
疑問形である。

ともあれ逃げた靈夢に内心で悪罵を向けながらも、腰に抱きつい
て来ている早苗が少々暑苦しいので引き剥がす事にする西富。
剥がされた早苗は『うへー』という些か少女としてどうかと思つ
声と共に、力の抜けた笑みを浮かべている。

「……お前普段からアホ面晒して生きてるのに、今は更に二割増し
でアホ面だな」

「だれがアホ面でふか！」

「つうむ、反撃も力が無いし。どうしたエイプキラー、必殺のコン

グパンチは何処行つた

腕をぐるぐる振り回してパンチして来る早苗に対し、その頭を掴んで押しのける事で対処する。

早苗は別段背が低いというわけでもないが、特別長身でもない。対する西宮は現代男子高校生にしてもそれなりの長身だ。リーチが違う。

結果として頭を抑えられれば、早苗の腕は西宮に届かなくなる。

少し知恵を絞ればもっと攻撃手段がある氣もあるのだが、どうやら現状の酔いどれ早苗さんには攻撃手段変更という概念は無いらしい。

頭を抑えられながらぶんぶんと腕を振り回す御姿。これが現人神と言わられて信じる人は少数派だろう。

「……もうこれ、社務所の布団に放り込んだ方が良いんじゃねーかなあ。普段から残念な奴が、酔っぱらつていつも以上に残念になつてるよ」

「あやや、風祝さんは潰れるのがお早い事で。もしかして酒が駄目な人でしたか？」

そしてその駄風祝と化した早苗の頭を掴んで押しのけている彼に、横合いから声がかかる。

一本足の高下駄に、鳥の濡れ羽色の漆黒の髪。文花帖という表紙が付いた取材メモを胸ポケットに入れたまま歩いて来るのは、鳥天狗の新聞記者にて今回の一連の事件の功労者の一人でもある射命丸文だ。

横合いから声をかけて来た彼女に西宮は視線を向け、頷き、

「ええ、こいつ所謂下戸でして。ついでに言つと外の世界では二十

歳未満の飲酒は違法なんですよね。俺がこいつの親父さんの晩酌相手をしてたのも、実は違法です」

「なつ！？ なんという悪法……！ 外の世界はそこまで腐り切つていたのですか……！」

驚愕し、身を震わせる射命丸。恐らく本人的には義憤なのだろう。天狗は鬼ほどではないが酒好きで知られる妖怪あり、彼女もその例外ではないらしい。そんな彼女には二十歳未満の飲酒を禁ずる法律など、信じられない悪法だつたようだ。

胸ポケットから文花帖を取り出し、羽ペンで何事かを書き綴り始める。特集でも組む心算なのだろうか。

西富の内心では、これでこの反応をするならば、かつてアメリカで行われた禁酒法についての話をしたら彼女がどんな反応をするのかという興味が湧く。流石に今は早苗が眼前で腕を振り回している状況をどうにかする方が先決なので、放置したが。

「分かりますよ、西富さん。外の世界は悪しき帝国が酒を独占する為にそのような法を作り、民衆は酒を求めるレジスタンスとなつているんですね……！」

「…………ええと、まあ、御想像にお任せします」

しかし敢えて訂正まではしない西富である。

内心で彼女がこの問題について書く記事がどうなるのかに興味があつたからであつた。

ともあれ熱くなつっていた事に気付いたのだろう、射命丸がそこで咳払いを挟む。

「失礼しました。……西富さんはその悪法の中で敢然と酒を嗜む正義の体現者だつたんですね」

「別にそんな大層なものでもありませんでしたが。こいつの親父さんと飲む程度で、ここまで大規模な宴会も初めてですしね。……飲みながら将棋とかも良くやつた物です」

「将棋ですか。河童のにとりと、その親友であるウチの梶が良く対戦してますね。確か先日は……梶の桂馬が命を賭けた特攻戦術で自爆を敢行。愛する香車への最後の台詞を呴きながら、敵の角と金を巻き添えに閃光の中に消えたとか。結果的に桂馬に仕込まれていた炸薬のせいで、盤面壊れてドローゲームだったそうですが」

「色々おかしいですよね。絶対それ色々おかしいですよね」

「梶どにとりですよ？ おかしくならないわけがないじゃないですか。マップ兵器が将棋に搭載される魔改造ルールですよ、彼女たち以外には理解不能です」

胸を張つて射命丸が言った言葉に、西宮が早苗を抑えていない方の手で軽く自らの顔を覆つた。

川城にとりという河童については彼は知らなかつたが、梶の親友とこう時点でお察しである。

「……じょういちは、お父さんと良くのんびりましたよね」

そして西宮に頭を抑えられていた早苗が、彼と射命丸の会話を聞いてぽつりと呴く。

いつの間にか腕を振り回すのを止めて、俯きがちに呴かれた言葉。俯いたまま、瞳にじわりと涙が浮かぶ。

「お父さん、お母さん、げんきかなあ……」

「あ……すまん、無神経な会話だつた」

酒の力もあるのだろう。外の家族を思い出してぐすぐすとしゃくり上げる彼女に、西宮は困ったように言葉を返す。

射命丸は溜息を吐いて、西宮の背を後ろから押した。

「うわー？」

「ほら、謝るより先に慰め方があるでしょ。女の子の扱いについて分かつてないわね」

記者ではなく個人としての口調で咳かれた言葉を受けながら、押された西宮はたたらを踏みながら僅かに前進。

しゃくり上げる早苗と至近距離で向かい合つ事になる。

早苗はそのまま何も言わず、彼の服を掴み、胸に顔を埋めるようにしてぐずり始めた。

「……あー……俺が泣かしてりや世話無えよ、つたく」

「泣かせた自覚があるなら、泣き止むまで付き合つてあげなさいよ

ぐずる早苗の背中を撫でる西宮に、呆れたように言つ射命丸。

しかし彼女の言とは裏腹に、背中を撫でられて安心したのか、早苗の身体からすぐにくにやりと力が抜けた。

慌てて支える西宮の胸で、早苗はすうすうと寝息を立てていた。

「……寝ましたが

「あら無防備」

涙の痕が残る寝顔を見ながら、残った二人は言葉を交わす。

このまま放置するわけにもいかないので、西宮は早苗の背と膝裏に手を回し、抱き上げた。

「射命丸さん、神社の社務所に続く扉開けて貰えません?」

「ええ、分かりました。 すいません、風祝さんが寝ちゃったので寝室に放り込んできますねー！」

射命丸が宴会の中心部の方へ声をあげる。

聞いているのかどうか怪しい酔っ払い達の声がそれに応じるが、少なくとも諏訪子と神奈子という責任者一人はこちらを見て頷いていたので、途中退席も問題あるまいと二人は判断。

射命丸が先行して戸を開け、早苗を抱きかかえた西富がそれに続く。

そして神社に入り、入つて来た戸を閉めた辺りで射命丸が呟いた。

「貴方達は外の世界に家族を残して來たの？」

「そうなりますね。以前御一柱に話を聞いた時に、どの辺まで事情を理解していますか？」

「貴方達の外での事情にはその時は興味無かつたからね。早苗さんが風祝で、貴方が平信者にして神職見習い。一人して御一柱について來たつて事くらいしか」

大荷物を運ぶ西富のペースに合わせるようにして、並んで歩きながら射命丸が眠る早苗の頬をつつく。

早苗は一瞬寝苦しそうに眉を顰めるが、目覚める様子は無い。それを確認した上で、西富は内心で思考を整理する。

レミリアは彼が外の世界の空氣を色濃く纏っていると言ひ、早苗はその空気が薄いと言つていた。

しかし外への未練はその逆だ。早苗が色濃く、西富は薄い。

そもそも早苗は外に残した両親を忘れて生きられるほど、情が薄い人間ではない。

幻想郷に来てからの狂騒のような毎日で押し流されていたが、心のどこかで引っ掛かっていたのだろう。

故に外の話題、特に家族の話は早苗が居れば出来るまい。

外の話題は彼女の心に郷愁を引き起こす。先の会話で迂闊にも西宮が口に出し、彼女を泣かせてしまったようだ。

だが深く寝入っている今ならば問題無いと西宮は判断。

話す相手を選ぶ内容ではあるが、横を歩く鳥天狗は信頼できる。

いや、信頼したいという気持ちも西宮の中にはあった。

八雲紫が多く天狗の中から彼女を呼び、彼女に請い、彼女はそれに応じた。

つまりはこの神社の為に骨を折ってくれた八雲紫が信頼している人物であると同時に、彼女自身もこの神社の為に尽力してくれたのだ。

無論各自の目的はあつたのだろうが、それでも彼女達が行つた行為に対しても矢側が恩を感じないで良いという理屈にはなるまい。

それらが西宮が彼女を信頼したいと思つた所以だ。
或いは彼自身、誰かに話を聞いて貰いたいという意図も無自覚に持つていたのかもしれない。

「正確に言つならば、御二柱は俺も東風谷も連れて来る心算は無かつたようです。ただ、東風谷に関しては外の世界からこちらへ来る過程で力を借りる必要があつたため、御二柱は東風谷にだけ事情を語つて協力を求めた」

角を曲がり、足を止める。

射命丸がその動きから察して、西宮が足を止めたすぐ横の襖を開けた。

「しかし東風谷は、幼い頃から自身の両親と同様に慕つていた御二

柱を、力を失いかけている御一柱だけで幻想の地に送り出すのを良しとしなかつた。故に自分もついて行くと宣言し　後事、つまりは奴の家族と外の神社については俺に託す心算だつたそうです

「だけど、貴方はここに来てるわよね?」

「それが事故だつたんです。御一柱とこいつが幻想郷に来る為、外の世界で最後と呼べる奇跡行使した瞬間　俺は偶然、その範囲内に踏み込んでしまつていた」

襖の奥にあつたのは、早苗の部屋だ。

パジャマと下着が敷きっぱなしの蒲団の上に脱ぎ捨てられているのを見て、西宮と射命丸が双方共に顔を顰める。

「結果として俺までこっちに来てしまい、逆に向こつの神社は東風谷の両親は、俺も東風谷も居ない状態で残されてしまった」「だからこの子は外の世界の御両親が心配つてわけね」

「恐いくは」

射命丸が下着とパジャマを拾い集め、丁寧に畳んで部屋の隅に置く。

この辺り、彼女は意外と几帳面なようだ。

そして西宮はそれで空いた布団の上に、早苗を寝かせた。

「その件については八雲様が、守矢神社が異変を起こす際の交換条件として、『外の世界に残された神社と東風谷の両親へのケア』を出して下さいました。しかし異変において逆に八雲様や射命丸さんにも迷惑をかける結果になつた以上、その条件をこちらから再度お願いしても良いのかどうか……

「貴方、この子　早苗ちゃんは大事?」

「ええ」

「だったら頼めば良いじゃない。私や紫への迷惑よりも、この子の

事を優先しなさいよ

そして両者は、眠る早苗を見るようにその横に座る。

西宮は正座、射命丸は足を崩した女の子座り。

両者ともに会話を継続しながら、しかし互いの顔は見ずに早苗の寝顔を眺めている。

「外面の関係もあるから、あんまり気軽に外の世界と繋ぎを取ることはできない。余り気軽にこの子の為に外と行き来してしまうと、『こいつばかりする』という意見も出かねないからね。でも、あの御人好しなら無碍にはしない筈よ。元はと言えばあいつが御一柱を誘わなければ、貴方もこの子も幻想郷に来る事は無かつただろうしね」

寝顔を見て小さく笑いながら、そこまで言つた所で不意に何かに気付いたように射命丸が横目で視線を西宮に向ける。

「そういえば、貴方の家族は？」

「東風谷の家が俺の家族のようなもんでしたね」

「……そう

心なしか強い語調で言われた言葉。

それに対し、射命丸は追求せずに言葉を噤んだ。

西宮は思わず強い口調で言つてしまつた言葉に、しかし恐らく分かつていて追求を止めた彼女に感謝する。

「この子を見ると信じられないわ。何でこの子、貴方を置いて行こうとしたのかしら。どう見ても、お互憎からず思つているじゃない。それが恋慕か友誼か家族の情かは、私には分からないいえ、多分貴方達も分かっていないんだろうけど」

「そうですね、実際どうなんでしょうか？」

そして詩歌でも歌うかのような口調で、どこか期待するように告げられた言葉に、しかし西宮は照れるでも怒るでもなく、静かに首を傾げる。

「まあ、友誼はあります。家族の情も確実にあります。加えてライバル関係みたいな物も互いに持っていますし、恋慕も　こっちに来てから気付きましたけど、多分、無いとは言いません」

「あら意外。最後の部分、自覚はあるんだ」

「薄つすらですけどね」

苦笑する西宮に対し、射命丸も僅かに笑いを返して早苗を見やる。目の端に涙の痕を残す風祝は、蒲団の上で安らかな寝息を立てていた。

「多分この子も似たような物よ。千年生きた女の勘だけどね」

「下手な根拠よりも説得力があつて怖いですね。　それで、早

苗が俺を置いて行つた理由ですけど

「何か推測でも？」

「推測というか、こいつは御一柱と同じくらい御両親が好きだつたつてだけですよ。だから御一柱の方は自分が行き、俺の自意識過剰で無ければ相棒と呼べる程度には信頼してくれていた俺に、後事を託そうとした」

「成程、自分の感情は全て無視して　　か。損な子ね」

「ええ」

ともすれば、半身とも言える存在を欠いたままこちらへ来た彼女は、早い段階で精神的に潰れていた可能性すらある。

そう危惧しながら呟く射命丸に対し、頷いた西宮が早苗の目の端

に浮かぶ涙の痕を指で拭う。

むずがるようすに早苗が身じろぎした。

「…………ですが、だからこそ。俺はこいつを放つておけないんだと思います」

「おお熱い熱い……とでも言ひべきかしらね。あんまりにも熱いんで、焼き鳥になる前に退散しましょう」

その両者の姿を見た射命丸が、いつもの韜晦するような口調で言いながら立ち上がる。

音も立てずに身を翻し、襖を開けてそれを潜り、去り際に彼女は肩越しに西面に笑いかけた。

「レミリアには絡まれてたみたいだけどね。確かに貴方は思考や行動に外の世界の色が濃い。だけど反面、根の部分で妖怪相手にすら怯まずに、弱いながらも持てる力の限りを尽くそうとする姿は、遥か昔の大和の人間を思い出させる姿もある。そう、私達妖怪を退治してくれようと来た、愚かしくも愛おしい人間を」

「…………褒めているんですか？」

「褒めているのよ。好ましいと、愛おしいとすり言つて良い。ああ、別に惚れた腫れたって意味じゃないわよ？」 ん、もしかしたら期待した？

「無いとは言いませんけどね。美人にそう言われて悪い気はしません」

「あら、ありがとう。御世辞でも嬉しいわ……って、話が逸れたわね」

肩越しに振り向いたまま咳払いを一つして、

「…………故に、私は今回少しだけ世話を焼いてあげる。紫に後で話

を振つておいてあげるし、会話次第じゃ早苗ちゃんの御両親へのケアを急ぐようになにかかけても良い」

「……それは」

破格だ。故に西宮は思わず口くもむ。

射命丸文は好ましい人種であるとこれまでの会話で感じていた西宮だが、しかし半面非常に計算高い相手であるとも見ている。故に悩む。果たして素直に受けて良いのかと。
しかしそんな彼に対し、しかし彼女は笑つて曰く、

「乙女の涙は条理と計算を覆すのが必定よ。泣いてる女の子とそれを助けたい男の子が居たら、横から世話を焼いてあげるのも年長者の権利つものでしょ」

「申し訳ありません。そして、感謝いたします」

「宜しい」

その言葉を最後に、射命丸はそのまま襖の向こうに消えて行つた。それを見送つた西宮が思うのは、今の部分で悩んでしまう辺り、確かに自身は外の世界のレミリアが嫌うような人種に近い面があると言つ事。それは今後、幻想郷で生きようと思つならば最優先で直さねばならない点だろう。

そして

「役者が違つた、か」

桜が先輩と慕う鳥天狗が、自分が思つていたよりもずっと懐の深い人物だと言つ事。

自分も要精進かと苦笑しながら、寝ている早苗の髪を撫でる。

しかしそんな西宮へ向けて、襖の向こうへ恐らく少し進んだ

廊下の先から、鳥天狗が声を張り上げて來た。

「あつ、そつだ。早苗ちゃんと行くとこまで行つたら特集組むから教えてね！ 何なら今襲つても、私の新聞的には全然OKだから」「最後に落とさないで下さい！！」

しかし結局のところ、彼女の根っこは自由奔放で「ゴシップ」好きな鳥天狗なのがもしかれなかつた。

第十九話・西富と早苗と射命丸（後書き）

宴会篇は今回で終了。

そして次回、今回の文や西富の会話からつながる、風神錄篇のラストエピソードです。

立場的に射命丸はこんな感じに。

西富と早苗からすれば、良い姉貴分になつてくれるような気もします。気を抜くとスッパ抜かれそうですが。

第一十話・東方西風遊戯、これにて開幕し候（前書き）

早苗の両親に対する描写が薄く、台詞も殆ど無いのはわざとです。どのような外見と口調の御両親かは、読者の方の想像にお任せというわけで。

ちなみに藍様に関しての過去設定は捏造。割と一次では良く見る設定ですけどね。

第一十話・東方西風遊戯、これにて開幕し候

結論から言つと、八雲紫もまた西宮とは役者が違つたと言つてしまつて良いだろ。」

彼女は西宮が気にしていた今回の異変において彼つた迷惑など露ほども気にする事無く、既に外の守矢神社に対する対処を始めたのだ。

「まあ正確には異変が始まるもつと前からだけど 黙つていたのは申し訳ありませんでしたわ。射命丸から聞いたけど、早苗さんがそこまで気にしていたなんてね」

と、言つのは宴会の翌朝、守矢神社を改めて訪れた紫の言葉だ。守矢神社の本殿にて守矢勢と向かい合つように座り、彼女の訪問を受けて集まつた守矢の住人である一柱と一人を前に軽く頭を下げる。

それを受け一柱もまた紫に、そして早苗に頭を下げる。

「いや、すまない。私達も日先の事に手一杯で、そちらにて飯を回す余裕が無かつた。 いや、言い訳にしかならんな。早苗の内心に氣付くべきは、私達であるべきだつたろうに」

「力を取り戻して浮かれてたのかもねえ。『ごめんよ、早苗』

「そんな……御一柱も紫さんも、気にしないで下さい。私がそう振る舞つてただけなんですから……」

「御三方が下手を打つたといつより、今回に限つては早苗が上手く内心を外に見せなかつた、といつべきかも知れませんね」

そして早苗の言葉を補強するように西宮が肩を竦め、しかし一瞬後には表情を正して紫に向き直る。

彼がこの会談用に全員分用意した最高級の玉露に、横の早苗が気持ちを落ち着けるように口を付けた。

「それで 大変申し訳ありませんが、八雲様。早速ですが外の現状はどうなつていいか伺つても宜しいですか？」

「ええ、勿論ですわ。平たく言えば」

そして早苗が茶を口に含んだ直後、紫が満面の笑みと共に舌葉の水素爆弾を投下する。

「こちらに飛んだ筈の神社は向こうでは現存しており、早苗さんと西宮君は駆け落ちした事になつております」

「ぶふう！？」

次の瞬間、早苗が口に含んだ玉露は緑色の噴霧と化し、レスラーの毒霧もかくやという勢いで八雲紫の顔面に襲い掛かった。
西宮は正座の状態から前に崩れ落ちるように、形容し難いポーズを晒す。

頭が地面にぶつかった時、『ゴン』という大変良い音が響き渡つた。

#

「『めんなさい』… 本っ当に申し訳ありませんでした紫さん…」「い、いえ… 大丈夫よ、うん」

数分後。

玉露まみれになつた紫の顔を蛙と蛇の絵の付いたハンカチで拭き

ながら、早苗は全力で頭を下げていた。

紫側も非が無いわけではない。面白い反応が返ってくるだらうと言つ理由で結論から伝えたのがこの結果と考えると、早苗が茶を口に含む前に言つべきだつたとも言えるだらう。

いや、まさか花の女子高生が悪役レスラーのように口からジエット噴射をカマすという事態がそもそも想定外だつたか。ともあれ

「八雲様、何がどうなつてそんな話になつたかをお教え願えますか？ 願えますね？」

正座のまま眉間に皺をよせて、西富が紫にじり寄る。対する紫は頬をヒクつかせながら頷き、

「え、ええ。勿論よ。だから落ち着きなさい？ いいえ、落ち着いて」

「大丈夫です紫様。俺は今、かつてポンペイを粉碎したヴェスヴィオ火山の火碎流と同じくらい冷静です」

「例えの意図が良く分からないけど、混乱していると落ち着いてないのだけは伝わって来たわ……というかね、神社に関しては藍に頑張つて貰つたのよ」

詰め寄る西富の顔の前に指を一本立てて制し、紫は語る。

残つた片手で隙間から扇子を取り出し、それで口元を隠してにやりと笑う姿は、胡散臭い隙間妖怪そのものだ。

「そもそも、何故先の異変の中で私は式神である藍を使わなかつたと思う？ まあ、靈夢や魔理沙に私の関与を知られたくないというのはあつたけど、それ以上に藍は外の世界で一つ仕事をさせていたの。狐らしく ね」

「……ああ、なるほど！ 化かしたわけだね」

「その通りですわ」

そして守矢勢の中で、真っ先に納得したように頷いたのは諏訪子だ。

他の二名は困惑の表情を浮かべ、諏訪子と紫を交互に見る。

頷いた拍子に落ちそうになつた奇抜なデザインの帽子を手で押さえながら、彼女は紫の解説を引き継ぐように語り出す。

「要はや。こつちに持つて来ちゃつた神社を幻術とかで『ある』ように見せかけているんじやないの？ その間に、偽の守矢神社を作り上げるとかかな。後は幻術で作つた神社と偽の神社を入れ替えれば、神社の消失に関しては誤魔化しが効くんじやない？ 幻術って言つたら狐の十八番でしょ」

「中正解ですわ。流石に入れ換える心算の神社を一から作るのは骨が折れますので、外の世界の廃棄された神社を元に改造中ですわね。藍が」

「何でも藍様ですか。大丈夫ですかそれ」

式任せな紫に、流石に西宮が突つ込みを入れる。
しかし紫はどこ吹く風で、

「大丈夫よ。あの子はかつては大陸で人間騙して傾国の悪女を二、三回やらかした拳句、流石に向こうに居られなくなつて、日本に來た後も似たような事をやつて殺生石に封じられた筋金入りよ？ 騙しは御手の物。最近は随分丸くなつたけど、昔はそりやもうお転婆だつたわよ」

「今凄く知りたくもない歴史の隠された事実を知つた気がします。

中国史と日本史的な意味で」

「殺生石？ 何でしたつけそれ。なんか三丁目の田島さんの御婆さ

んが、強盗相手に投げ付けて危うく息の根止めそうになつた漬物石でしたつけ

「殺生するのに使う石つて意味じやないからな。つか、御歳八十で漬物石投擲とか、あの婆さん絶対介護要らんな」「なにそれこわい。ゆかりんこわい」

仮に外の世界に出ても、三丁目の田島さんとやらには絶対に近付かないようにしよう。そう決意した境界の賢者だつた。

ともあれ話の筋は単純だ。

まず外で事件に対するケアをするに当たつて最大の問題になるのは、『神社が消失した』という事。

西宮と早苗が行方不明になつた程度ならば、一、二日程度は家出程度の言い訳で誤魔化せる。しかし神社はそつはいかない。確実に大騒ぎだ。

故に紫は真っ先に藍を派遣し、神社が『在る』という幻をその場に訪れた人間に見せる為の結界を張つた。視覚のみならず触角まで騙す特別製だ。

幻想入り一日目に西宮が人里で藍と遭遇した段階で、実はその処置は既に終わつていたと言うのだから、藍の有能さが伺い知れる。

「ん、ごほん。それでまあ、神社に対するケアはそれで良いとして、次は貴方達の友人など　つまりは貴方達二人を知る人達へのケアなんだけど」

「ああ、何か凄い説を漫透させてくれたそうですね、八雲様」「本当ですよ。私と西宮が駆け落ちだなんて

呆れたように言つ西宮と早苗。彼らは外の世界では行方不明扱いになるだろう。

しかし彼らに對しての一般人の反応だが　これに關しては紫も藍も予想外の結論が、既に外の世界の彼らの友人の間で囁かれていたのだ。

それは即ち

「私も藍も、殆ど何もしていないわよ？」

「え？」

「へ？」

「貴方達二人が同時に行方不明ってだけで、既に貴方達の友人の間で駆け落ち説が圧倒的な支持を集めてたし」

「……何故にッ！？」

「ど、どうしてですか！」

「いや、何故って言わわれても私は貴方達の外の世界での言動とか知らないし……」

即ち、駆け落ち説。

神社に対するケアは初日は藍が行つた為、『西宮と早苗がいきなり行方不明になつた』とだけしか認識されなくなつた守矢神社の幻想入り。

それは即ち、駆け落ちとして周囲の人々に受け入れられていたのだ。

これに關しては、彼ら一人の自業自得と言うしかあるまい。

登下校は一緒。西宮は早苗の実家である神社に入り浸り。弁当は二人分西宮が用意する。早苗から西宮への無防備な対応。西宮から早苗への時々見せる優しさ。

彼らと付き合いのある学友達が駆け落ち説を唱えるのも無理もあるまい。

藍と紫がやつたのは、その噂を補強するような証拠を一、二用意した程度だ。

「まあとにかくそんな感じで、外の世界での神社と貴方達に関する扱いは概ねそなつてるわ。一般人相手には、ね」

「となると、例外が居るわけだ」

そして胡散臭い笑みを浮かべながらの紫の言葉に、神奈子がどこか神妙に頷きながら呟いた。

対する紫は早苗に目線を送り、ゆっくりと頷きを返す。

「ええ、その通りですわハ坂さん。早苗さんの御両親には、眞実を伝えてあります」

「……っ！」

紫の言葉に早苗の身体がビクリと震える。
それを横目で見ながら、西富が呟いた。

「親不孝をした自覚はあるみてーだな」
「……ええ」

その言葉にはオブラーートに包むような婉曲さは無い。

ある意味そういう面では、彼は彼女に甘くは無い。失敗は失敗として認めた上で、そこから先へ進むフォローをするのが早苗の相棒としての彼の在り方だ。

対する早苗の返答は、彼女らしくなく静かだった。

「紫さん……お父さんとお母さんは、なんて言つてましたか？」

「そうねえ。物凄く心配していたわよ？　あとまあ、実際に力を使つて見せたのが大きいだろうけど　私達のような幻想の存在を受け入れる度量は、流石に貴方の親で、西富君の親同然の存在ね」

胡散臭い笑みを浮かべたまま、紫が扇子を持った手を水平に伸ばす。

扇子の軌道に沿つよつて、空間に線が引かれ そこにありとあらゆる物理法則を無視して、空間が『開く』。

無数の瞳を内包する謎の空間、『隙間』。それを操作する事が隙間妖怪と呼ばれる彼女の能力であり、その能力は彼女以外の何者も為し得ない事を可能とする物もある。

「まあ、そこから先は 」

そう。

幻想郷で唯一、彼女だけが幻想郷の外と中とを容易く往来する事を可能とさせる。

それは彼女自身であつとも、他の誰かであつとも。

「 本人達で話し合つてみたらい？」
「 ……え？」

そして満面の笑みで告げられた言葉と共に、隙間の中から出て来たのは一組の中年の男女。
神職らしき服装をした男性と、彼に寄り添つように立つていてる女性。

彼らを見た早苗は呆然とした声を発し、対する一人は隙間から出るや否や、早苗の姿を見て感極まつたように声を上擦らせる。

「 早苗……」
「 早苗、良かつた……」

そしてその言葉を 自らを呼ぶ両親の声を聞いた早苗は、呆然とした表情からくしゃりと顔を歪ませる。

堪えるよつに涙を噛み締め、しかし堪え切れずに瞳に涙が浮かび、

零れて行く。

その背を、不意に後ろから諭訪子が押した。

「行つてきな、早苗」

「あ……」

押された早苗が座つていた状態から、のろのろと前に進みながら立ち上がる。

同じように彼女の両親も、ゆっくりと彼女へ向けて歩き始めた。
一息に駆け寄らなければ、まるでこれが夢か幻か　　それこそ幻想ではないかと疑つてゐるからか。

しかしそれも数秒。

そう遠くもない距離を両者は詰め終わり、早苗とその両親の手が互いに触れ合つた瞬間、

「　　お父さん、お母さんつーーー。」

「早苗ーーー。」

「『めんね、』『めんね早苗……ーーー。」

三人は弾かれたように抱き合つて、涙を零しながら再会を喜び合つ。紫は首を立てないようゆうつくりと立ち上がり、一柱と西園田に配せ。それを受けた三名も、各自苦笑したり肩を竦めたり、あるいは嘆い泣きをしそうになりながら席を立つ。
ちなみに順に諭訪子、西園、神奈子であった。

そして紫とその三名は抱き合つ家族を残し、本殿を出る。
すぐさまぐすっと鼻を啜つて、神奈子が紫の手を取つて頭を下げた。

「すまない、八雲……！」ここまでして貰うとは、最早どう感謝して良いのか分からぬ程だ」

「大した事ではありません、とは言いませんわ。幻想郷の存在を外に知られたくない以上、外の人間に幻想郷の存在を知らせるのは好ましくありませんからね。早苗さんの御両親に関しても、本当はここまでする心算はありませんでした」

「記憶の境界でも操つて、早苗の事を忘れさせる心算だった？」

「ええ、その辺りが落とし所だと思つていましたわ。ですが流石、守矢の神主とその妻と言うべきかしら。記憶を消す前に一度、早苗さんの親がどのような人か話してみたかった。故に私は彼らの前に隙間を使って現れたのですが」

その時の事を思い出して、紫は小さく笑う。

突如現れた不気味な力を使う謎の人物相手に、守矢神社の神主夫妻がまず聞いたのは『お前は誰だ』でも『何をしに来た』でもない。

『早苗と丈一を知っているか』である。

恐らく早苗と西宮が行方不明になつて程無くのタイミングで現れた紫に、事件との何らかの関連性を感じ取つたのだろうが、だとしても、怪しいどころの騒ぎではない相手にいきなりそれだ。肝の太さは流石に早苗の両親である。

そして娘と息子同然の相手を何よりも想うその対応は、紫にとつて好みい物だった。

故に彼女は彼らに事情を説明し、自らの存在と幻想郷、そして早苗と西宮がそこに居る事実を語つて聞かせた。

かくて東風谷夫妻は事情を聞き終わり、紫に告げる。

『自分達は親として失格である』、と。

目を丸くする紫に対し、彼らが告げた事は『早苗が幼い頃に語つ

た一柱の存在を、子供の絵空事と決めつけ、笑い飛ばしてしまった』
という事実だつた。

或いは自分達がそれを信じる努力をしていれば、早苗は幻想郷に行く前に自分達に相談を持ちかけてくれたのではないか。

或いは自分達が早苗の様子に気付いていれば。或いは自分達がもつと真剣に彼女に向かい合つていれば。

東風谷夫妻が語つた内容はそのような後悔であり、故に彼らは紫に懇願した。

早苗に会わせて欲しい、と。

「なんというか、情にほだされたのかもしれませんね。無論、外の世界で幻想郷の存在を話さないようにする事など、幾つも条件は付けましたわ。藍が得意な妖術で、幻想郷について話を出来ないよう強制をかける事も条件の内。そこまですれば、まあ彼ら自身の人柄も信用に値する物に思えましたし、幻想郷の存在が外に漏れるとは考えられないでしょ?」

無論それは面倒な事である。

紫からすれば、さつさと記憶の境界を弄つてしまつのが一番手っ取り早い。

だが、その面倒を享受しても早苗と両親を再会させてあげても良いかと、紫は思つてしまつた。

彼らは紫や幻想郷といつ、幻想の存在を認めた。

一柱について幻想郷に行くという娘の決断をも、紫から事情を聞いた上で認めていた。

しかし娘に対して真剣に向き合いきれなかつた自分達を、娘の事情を察しきれなかつた自分達を、娘が幻想郷に行く前に気付けなかつた自分達を、ただ悔やむ。

結局のところ、そんな彼らと そして幻想郷で両親を想つて泣いた早苗の姿を見て、情にほだされた。

この件に関する紫の行動理由は、そこに集約されるのだろう。

「……八雲。後で私達も、早苗の両親と話す機会を貰えるか？」

「ええ。丸一日程度は許しましよう。流石にそれ以上の滞在は、幻想郷の管理者として許せませんけどね。それに、今回は特別サービス。あんまりこのような事を繰り返してては、他への示しが付きません。それは分かった上でお願いします」

「分かってるよ。ただ、早苗を巻き込んだのは私達の事情だからね。やつぱり一度、両親に謝つておくのが筋でしょ」

「まあ確かに、そうですわね。でもそこら辺は貴方達に任せますわ。私は明日のこの時間にでも、もう一度やつて来ます。その時に東風谷夫妻を境界の外へお返ししますが」

「

ちらりと紫が西富に手を向ける。

「自らの意思で来た早苗さんはともかく、西富君は事故で巻き込まれたような物。望むならば、ついでに外の世界にお帰ししても構わないわ。無論、その場合は東風谷夫妻と同じ程度の処置は取らせて貰うけど」

「東風谷はこっちに残るんでしょう?」

「ええ。彼女は自分の意思でこちらに来るのを選んだ。そういう以上、そう易々と向こうに帰すわけにはいかない。境界の管理者としての、それはルールよ」

「成程。ならば俺の返答は決まってるような物でしょう?」

「そうね。愚問だったかしら」

西富の返答に対し、紫は小さく笑つてそれに応じる。

そのまま自らの眼前に境界を開き、彼女は西宮達の眼前から去つて行つた。

それを見送り、諏訪子が呟く。

「大きな借りが出来ちゃつたねえ」

「そうだな。或いはそこまで計算の上なのかもしれないが、だとしてもこれは大きな借りだ。そういう返し切れないほどに、な」

本殿の中から漏れ聞こえる会話は、早苗と両親が互いに詫び合つてゐる事を伝えて来る。

早苗は自らの短慮と親不孝を。両親は自分達が早苗を理解し切れていなかつた事を。

それを聞きながら、彼らは足を社務所に向けた。

「まあ、まずは親子水入らずで話をせてあげましょ。俺や御一柱が東風谷の御両親に話をするのはその後で」

「私なら、まずは『誰だお前ら』とか言われそうだけどね。向こうじや見えてなかつたし」

「俺が言いましたよね、それ。あの時は本当に失礼しました。しかしぶつちやけ誰かと思いました、マジで」

「まあ流石に、今回はあるの時と比べて事情の説明が出来ている分は楽だろう。丈一の事は完全突発事故だったしな……」

思い出して苦笑する三人。

そして

#

「…………では、皆様。これが最後ですので、心残りの無いようお願いしますわ」

そして、翌日 守矢神社の前。

そう宣言する紫が開いた隙間の前に、東風谷夫妻と早苗、そして西富と一柱が立っていた。

東風谷夫妻と、幻想郷の守矢神社に残る者達の別れの時だ。

昨日は多くの事を話したと、西富は思つ。

神奈子と諏訪子は早苗を連れて来てしまった事を夫妻に詫び、しかし夫妻も神を祀る身でありながら神に気付かずしなかつた自らの不甲斐なさを詫びた。

西富自身は夫妻から、娘をくれぐれも宜しく頼むと念を押された。まるで娘を嫁に出す両親である。否、或いは本人達は殆どその心算だったのかもしれない。外では駆け落ち説が流れている事でもあるし。

早苗の父は晩酌相手にして将棋の相手でもあつた西富が居なくなる事を残念がつても居た。

『娘と息子が一度に離れて行くのは寂しいものだ』 という言葉に、不覚にも涙腺が緩みかけたのは彼だけの秘密である。

早苗と両親は一番長く語り合ひ、そして昨晩は三人そろつて同じ布団で語り明かしていた。

そして今、或いはこれが今生の別れである可能性が高いのも気付いているのだろう。

「お父さん、お母さん……今まで本当にありがとうございました」

隙間に入らんとする両親に、早苗は涙を堪えながら、必死に笑み

を向けていた。

これが今生の別れになるなら、故にこそ笑顔で。
それが彼女が出した結論のよつだ。

「不甲斐ない神で済まなかつた。早苗の事は任せてくれ」
「早苗に不自由させないよう、私達も頑張るからさ」

一柱は夫妻へと安心させるように言葉をかけている。
無論それは言葉だけの物ではなく、紛れもない本音で本氣だらう。
彼女達にとつても早苗は娘のようなものなのだから。

「今まで本当にありがとうございました。俺にとつては貴方
達が本当の両親のようなものでした」

そして西宮は、夫妻へ深々と頭を下げた。

それら一連の言葉を受け、夫妻は一柱へ重ねて娘と息子を頼むと
頭を下げる。早苗と西宮を最後にもう一度だけ強く抱きしめ
して別れの言葉と共に、外の世界へと続く隙間へ入つて行き、程無
くしてその隙間が消え去つた。

「…………う、ああ…………ぐずつ…………！」

「ああ、クソ……行つちまつたか」

そこが限界だったのだろう。早苗が嗚咽と共に涙を流し、崩れ落
ちる。

西宮もその横で「じじ」と袖で目拭い、空を見上げる。

「…………諏訪子。私達は本当に、神失格かもしけんな」
「ああ、全くだよ。自分らを信じてくれた信者、その親子の間を割
くなんて神様失格どころの騒ぎじゃない。だけど、だからこそ……」

幻想郷でのこれから的生活で、あの一人にこっちに来て良かったと思わせるほどに幸せにしてやるひじやないか」

一柱がその一人の姿を見て、これからの幻想郷での暮らしへ決意を新たにする。

そして

「ええ。八坂神奈子さん、洩矢諏訪子さん。東風谷早苗さん、西富丈一君。幻想郷は貴方達を受け入れましょっ」

そして守矢一家のその姿を、優しく微笑みながら見守る賢者がそう告げる。

両手を広げ、温かく微笑み、境界を司る優しき賢者は宣言する。まるでこれが始まりだとでも言つよう。

「改めまして、忘れ去られし者達が集う地へよつこやいりつしゃいました。私は境界の管理者として貴方達を歓迎します。まあ

」

そう。これにて開幕は終幕。
プロローグ おわり

「ようこそ幻想の地へ。幻想郷は全てを受け入れますわ

東方西風遊戯。正しくこれより、開幕し候。

第一十話・東方西風遊戯、これにて開幕し候（後書き）

長かった　　そして難産だつた風神録篇のエピローグ。
そしてこれがプロローグの終わりとなります。

次は緋想天　　の前に、彼らの幻想郷での生活を描く日常篇で
すね。

長いプロローグでしたが、今後もお付き合いの程宜しくお願ひ致
します。

とりあえず今回までシリアル書き[疲れたんで、次回はギャグを
書こうつ……。

第一十一話・愉快過ぎる忘れ傘（上）（前書き）

日常篇スタート。一発目の題材は題名の通りのお方です。星蓮船組の中で数少ない、星蓮船開始前から幻想郷に居るっぽいお方。

早苗とは一次創作での絡みも多いですよね。
小傘は人を驚かして空腹を満たす事も出来るけど、普通のご飯で空腹を満たす事も出来る感じで。

第一十一話・愉快過ぎる忘れ傘（上）

後に風神録異変と語られる異変 より正確に言つならば、異変といふよりも守矢神社が博麗神社に吹つ掛けた喧嘩が終了し、数日が経過した。

早苗と西宮は各々が布教活動をしたり、それぞれに出来た友人と交友関係を深めたりといった日々を送る中、とある一つの事件に遭遇する。

それは一人の少女が守矢神社を訪れた事が始まりだった。

「うう……おなか空いたよ」

へろへろと力無い様子で浮遊しながら守矢神社へ向かうは、水色の髪とオッドアイ、そして紫色の大きな唐傘を持つ一人の少女だ。ただし、持っている唐傘はただの唐傘ではなく、無論それを持つ少女もただの少女ではない。

唐傘に付属しているのは一つ目と口、そしてべろんと飛び出す長い舌。その唐傘を持つこの少女、名を多々良小傘と言い、いわゆる付喪神の一種『からかさお化け』であった。

そして人を食う妖怪ではないものの、人を驚かす妖怪ではある彼女。

人食い妖怪が人を食べて腹を満たすように、彼女は人を驚かす事で空腹を満たすという特性を持っていた。

便利であろう。食料要らずである。しかし彼女はここしばらく、人の驚きではなく山で拾った木の実を齧る事で空腹を紛らわせていた。

それもその筈。彼女は致命的なまでに人を驚かすのが下手な妖怪であった。

大昔ならば良いかもしない。しかし現代、それも妖怪が平然と闊歩するこの幻想郷で、昼間に真正面から近付いて『うらめしや～！おどろけ～！』と元気に叫ぶ少女に驚く輩が、果たしてどれほどいるであろうか？ 正直言うと昔でもあんまり居なかつた。

故に彼女は随分と長い事、人間を驚かして腹を満たした事は無い。驚かそうとした人間に何故か食料を恵まれたり、特に御老人などには人気が高い小傘であるが、そうやって人に頼つてばかりでは仮にも妖怪としての矜持が廃る。

なればこそ、彼女は今日もこつして人を驚かそうと努力を続けているのだ。

努力の前に『無駄な』という三文字を幻視する者も多かろうが。

「……山の上の神社には、外から来たばかりの人間がいるって聞いたし……きっと驚いてくれる筈。わちき頑張れっ！！」

えいえいおーと拳を振り上げ、小傘は未だに先の魔理沙による天狗の里襲撃事件の被害から復旧が終わつておらず、警備がザルな妖怪の山を上つて行くのだった。

#

その日も山の頂上の守矢神社では、弾幕戦が繰り広げられていた。

「少しかマシになつたツスねえ。でもまだまだ！ 無駄無駄無駄無駄アつて所ツス！！」

「くつそ、この駄犬が……！」

神社の前で戦り合っているのは一つの影。

『の』の字に形成された弾幕をバラ撒きながら接近する桺と、近接しようとする彼女を突き離そうと靈弾で抵抗する西宮だ。互いに放つ弾幕の数比は、桺が七とすれば西宮は三^{パワ}がせいぜいだ。それが即ち、両者の間に存在する純然たる馬力の差である。

これでも来た当初に比べれば随分抗戦出来るようになつたのだが、それでも勝負の天秤は常に桺の方に傾いている。

魔理沙を相手にした時と違い、『勝負に負けても大局的に勝てばいい』とかいう話ではなく、純粹な訓練だ。変に策を巡らす余裕も意味も無い分、勝負は純然たる地力の勝負。

そこでは未だ、西宮が桺に勝てる日は存在していない。

結局弾幕に気を取られて西宮が桺の姿を見失つた次の瞬間に、彼女は弾幕の影に隠れて地を這うような超低空から懐に飛び込み、

「必殺う！ 天狗剣の字斬りッス！！」
「げぶはつー？」

訓練用の木刀を、早苗から借りた漫画を見て覚えた技名を叫びつつ容赦の欠片も無く西宮の身体に叩き込んだ事で、この日の訓練は終了と相成った。

縁側に座つて眺めていた、今日の分の布教活動を終えて帰つて来ていた早苗が手を上げて宣言する。

「勝負あり！ 勝者桺さん！」
「あいあーむ あ ちゃんぴょーん！ ……ん？」「どうかしましたか？」

そして両手を上げ、発音がおかしい外来語を叫ぶ山の千里眼。^{テレグノシス}

しかしその喜びの動作が不意に止まる。

鳩尾を強打されてのたうち回る西宮の苦悶の声をBGMに、早苗の疑問の声を聞きながら桜は麓の方角を向いて目を細める。

「勝負に気を取られて氣付いてなかつたツスけど、誰かがこっちに向かつて来てるツスね。紫色のでつかい傘を持った女の子ツス。もう随分近いツスよ」

「女の子？ 参拝客の人かなあ」

桜の言葉に早苗が小さく首を傾げながら、西宮の苦悶の声をBGMに思考する。

果たして人里で布教活動をした時にそのような少女は居ただろうか。

或いは一柱が妖怪の山付近で勧誘した信者かもしれない。

そしてそうやつて彼女が思考していると、確かに桜が言つ通り大きな唐傘を手にした少女が、変にふらふらとした飛び方で守矢神社の前に西宮の苦悶の声をBGMに到着した。

そのまま彼女はふらふらと早苗に近付いて来て、

「う、うらめしやー！ 妖怪だぞー、おどろけーーー！」

顔を真っ赤にして必死な様子で両手を掲げ、威嚇のようなポーズと共にそう告げたのだった。

『なにこれかわいい』。

東風谷早苗、多々良小傘と初遭遇時の第一印象はそれであつた。

#

「……成程。人を驚かす妖怪なのに、なかなか人を齎かせないと
「難儀なもんッスね」

「うう……幻想入りしたばかりの外の人間にすら驚いて貰えないな
んて、わちきつて駄目な子なんだ。……あ、この雑炊美味しい」

「お前らその会話の前に俺に言う事あるよな？ ガチ放置した挙句
に強制復活させてメシ作らせた俺に対して何か言う事あるよな？」

そして数十分後。

西宮も含めて彼ら四人は、神社の縁側で並んでいた。

小傘の前には西宮が作った雑炊があり、彼女は会話をしながらぱ
くぱくとそれを食べている。

早苗が驚かないと気付き、空きつ腹を抱えて泣きそうになつてしまつた小傘を見て、桜と早苗が慌てて西宮を叩き起こして対処をさせようとしたのが始まりだ。

鳩尾が痛いままに左右の手を掴まれて、NASAに連行されるリトルグレイのような感じで小傘の前に引っ立てられた西宮。

早苗曰く、『な、何かお困りだつたら守矢神社の代表として話を
聞きましょう！』 西宮が『である。

事情を理解する努力すらせらず、全力で解決を瀕死の相方に投げた
早苗の姿は、いつそ神々しいまでに潔かつた。

そしてぐすぐすとぐずりながら小傘が言つた、『おなか空いた』
の言葉を聞き、西宮がふらふらしながら昨日の夕飯の余りで雑炊を作つて提供。今に至る。

ちなみにその過程で彼は小傘に事情を問い合わせ、左右の榎と早苗も含めて、彼らは小傘の名前と悩みを聞くに至った次第である。

「そうスね……西富君」

「おう」

そして『お前ら俺に何か言つ事あるだり』アピールをする西富で、榎が向き直つて一言。

「ボクの分は無いんスか?」

「帰れよ駄犬。むしろ家に帰るんじゃなくて土に還れ」

西富は中指を立てたハンドサインでそれに応じ、榎は何か間違つたかと首を傾げる。

そんな心温まる言葉の弾幕を聞きながら、早苗はふと思いついた事を小傘に聞いていた。

「小傘さん」

「……なに?」この雑炊はわちきのだよ?」

「いえ、そうじゃなくて。もし私が貴方の悩みを解決する事が出来たら、貴方は守矢神社を信仰して下さいますか?」

「え……」

そして言われた言葉に小傘が雑炊を食べながら思考する。数秒の思考を経て『雑炊が美味しい』といつ結論に至った小傘、力強く頷いて、

「この雑炊美味しいね」

「そうでしょうか? 西富の料理は絶品ですよ」

「お前ら放置しておいたら光の速さで脱線を始めるな」

いきなり話をすつ飛ばした小傘と、即座に流されかけた早苗。その二人に横合いから西宮の突っ込みが入る。

彼は大きくこれ見よがしに溜息を吐き、

「多々良だつたか。見ての通りウチは神社で、しかも外から来たばかりで信仰を集めている真つ最中だ。こいつはお前の手助けをする事で信仰を集めたいらしい」

「手助けって……わちきでも人を驚かせるようになるの？」

「生憎そこまでは保証しかねる。俺はそこの駄犬にボコられた挙句に料理まで作らされたんで、体力的に限界なんどりあえず休みたいから手助けはしかねるが……」

「西宮、貴方は外道ですか！」「こんな可愛らしい子の悩みを聞いておきながら、寝るのを優先で放置するなんて」

「手伝つても良いけど、その場合俺は今日の夕飯を作るのを放棄するからな」

「…………小傘さん、西宮は疲れているので今は休ませてあげましょう。大丈夫、私が貴方の力になります！」

胸を叩いて請け負う早苗。

直前までの西宮との会話を見ていくと、間違つても頼もしくは映らないであろうその姿が、しかし

「さ、早苗……！ わちきの為に、ありがとうございます……！」

しかし、天然系唐傘お化けである多々良小傘には、どういう脳内化学反応の結果かは知らないが、とても頼もしそうに見えた模様である。

拳を胸の前で握つて早苗を見つめるその視線は、まるで神を見るような視線だった。

いや、早苗は一応現人神なので間違つては居ないのだが。

「ふつ、早苗さんだけに良いカツコはさせないッスよ。ぶつちやけ今、魔理沙さんの襲撃の影響で山の警備隊が実質機能してないツスからね。ボクも今は暇ツスから、手を貸すッス」

「桺さん、貴方は……貴方こそ天狗の鑑です！」

「ふふ、そんなに褒められると照れるッスよ」

「あ、ありがとう！ 二人とも、本当にありがとうございます……！」

「いける……このメンバーならやれる！ 友情、努力、勝利……今なら負ける気がしません！ もう何も怖くない……！」

そして明らかに暇つぶしの為に手を貸す事を宣言する桺。

早苗と小傘はそんな駄犬の手を握り、感激もあらわに叫ぶ三馬鹿娘。

そんな三人を見ながら

「とりあえず夕飯時には全員戻つてこいよ。人数分作つておくから」

西宮は既に突っ込みの努力を放棄し、桺との模擬戦でダメージを受けた身体を癒す為に自室に戻つて眠りに向かうのだった。或いはこの時、彼がもう少し真剣に事態を受け止めていれば後にあるような悲劇は起こらなかつたのかも知れない。

多々良小傘改造計画。

彼女が人を驚かせるようになる為に、早苗、桺、小傘の三馬鹿娘の出陣であった。

第一十一話・愉快過わる忘れ傘(上)(後書き)

後書き短期連載計画：

早苗さんが外の世界の学校で受けたテストに對して、西宮とじで
クター鈴仙がコメントを返すだけの企画です。

基本的に一話一問。

後書きで企画を行う事に対し、何か問題点などあれば書いて下さ
い。

問1・化学

Q・硫化鉄は何と何が化合してできる物質ですか？

西宮回答・Fe(鉄)とS(硫黄)

早苗回答・一步を引ける余裕と決して引かぬ志

西宮「どう考へても反物質です。本当にありがとうございました」

鈴仙「硫化鉄なのに鉄すら出て来ないのね……」

西宮「あいつを高校に入れるのに、俺がどれだけ苦労したか……」

第一十一話・愉快過ごしの忘れ傘(下)

「まず認めなくてはいけないのは、小傘さんには単独で状況を打破する程の戦力が無いという事です。戦術論の話になりますが、戦力的に劣る状況で目的を達するには奇襲と罷なのです」

「うん。良く分からぬけど早苗って頭良いんだね」

トリオ・DE・馬鹿もとい早苗、小傘、桜の三人は神社の縁側に腰掛け、西富が寝る前に置いて行つてくれたお茶と煎餅を肴に作戦会議を開いていた。

司会進行役は早苗。外の世界でPC版三国志をやらせたところ、まさかの袁術に敗北する曹操という奇跡を披露した、常識に囚われない戦術家である彼女の見識に期待が集まる。

分からぬ人の為に平易に例えると雑魚妖精に敗北する靈夢でも想像して貰えれば分かり易かるつ。或いはドラキーに敗北する魔王バラモスか。

ちなみにその手のゲームは性格が出る。

他の守矢勢がやつた場合は、西富は内政を重視して自領土の内政値をマックスまで上げて黄金樂土を築き上げ、神奈子は軍勢を整えモンゴル騎馬民族の如き侵略国家を作り出し、諏訪子は謀略戦で他の国を陥れる有様であった。

そして奇跡の軍略家、東風谷早苗。彼女が思い出したのはゲームをしながらの自らの相棒と、仕える軍神の会話である。

『聞け、丈一。本来であれば敵より圧倒的な大軍を擁し、装備と兵站を整え、指揮を系統立て、情報を十分に集めた上で戦うのが常道である。しかしそれが出来ぬならば、罷と奇襲が少ない戦力で目的

を達成する為の有効な手段になると心得よ』

『神奈子様つてRPGやらせると、確実にレベルを上げまくつてから戦うタイプですよね』

『軍神に負けは許されん。勝てる状況を作り出してから戦うのが仕事である』

重々しく頷く神奈子の前で、しかし西宮がコントローラーを握っているゲームは三国志ではなく早苗が持っていたスパロボだった。あのゲームに限つて言えば戦争に重要なのは神奈子が言ったような事よりも、気合と勇気と愛と友情である。精神論は物理を凌駕するのだ。

それはともかく
閑話休題。

早苗は奇襲と罠とこう言葉を思い出しながら、自らの所見を眼前の一人に述べた。

「つまりは、相手を驚かすとこう事も奇襲と罠と何かあると聞われます。奇襲も罠も相手の裏を突いたら勝ちだつて西宮と神奈子様も言つてました」

「あー、あの一人だつたら言つそつシスね。んじゃ具体案は?」「私に考えられる罠と言えば、落とし穴の底に竹槍を置くくらいですが……」

「や、止めよつよー。驚く前に死んじゃつよーーー!」

物騒極まりない早苗の言葉に、流石に小笠が慌てた様子で訂正を要求する。

その言葉に桜も頷き、

「竹槍には糞尿をまぶしておぐと、傷口の治療が難しくなつて殺傷性が上がるツスよ」

「追求するのはそこじゃないよ。意外性を考えよつよ！…」

「じゃあ竹槍抜いて糞尿残して、落とし穴の底に糞尿を敷き詰める

感じでどうですか？」

「それ、単なる肥溜じゃないかな……」

突つ込みながら小傘は考える。

糞尿と竹槍はともかくとして、一理はあると。

正面から勝負を挑むばかりが戦術ではない。奇襲 そう、正面から声をかける以外にも脅かす手段はあるのではないか。

そう、時代は意外性。まさに田から鱗である。

忘れ傘の付喪神、多々良小傘。この結論に辿り着くまで、妖怪としての発生から軽く百年程度を必要としていた。

「殺傷性は可能な限りページするとして、意外性を重視するのは良いかも」

「ではその方向で。後は小傘さん、今時『つらめしゃー』は無いですよ。些か古典的に過ぎると言わざるを得ません。古典を否定するわけではありませんが、時代は常に先へと進む潮流のような物。過去の常識に拘り過ぎてはいけませんよ？」

「う……じゃあ早苗、どんな掛け声が良いと思う？」

「そうですね……新たな必殺の脅かし方を考えるためにあたって、必殺技ならば愛を叫ぶのは必須でしょう。とりあえずアモーレと叫んでおけば」

「アモーレ……！」

イタリア語で『愛』を意味する単語を力強く呴く純和製の唐傘お化け。

既にこの時点でもう予感がする光景だが、そこに桟が更に一石を投じる。

「ボクは古典を大事にしたいッスねー。折角小笠さんは唐傘お化けなんスから、古典を大事にしたワビサビも欲しい所ッス」「じゃあ実際の驚かし方の古典という事で、こんなにやくでも使いますか」

「それだよ……！」

「流石ッス、早苗さん！　その発想力……！」

お化け屋敷の古典、こんなにやく。

相手の首筋にひとりとくつつける事で、敵の驚愕の感情を引き出す魔法のアイテムである。食べると美味しい。

「あっ。でも、わちきは昔にこんなにやくで人間を驚かそうとしたけど上手くいかなかつたよ？」

「使い方次第ですよ。古典的にこんなにやくをペタリと付けて驚かそうとするから上手くいかないのです。そう、古典のあるこんなにやくを用いて、新たなる地平の開闢を目指すのです」

「具体的には」

「全力でぶつければ相手驚くんじやないですかね？」

「それッス！」

「その発想は無かつたよ！　それならきっと相手も驚くねー！」

確かに驚くだらうが、その使用法でこんなにやくである必要性はあるのか。

そのような真つ当な突つ込みをする人材は、現在社務所の奥でブツ倒れるように眠りに落ちていた。

かくしてアモーレの雄叫びと共にこんなにやくをぶつけて来る、全く新しい唐傘お化けの誕生である。

境界の賢者や月の医師ですら想像の埒外であるう生命体が、今こ

ここに生まれたのだ。

トリオ・DE・バカはやり遂げたような表情で互いに頷き合ひ、

「じゃあ早速、ここにやくを相手にぶつける特訓を開始しないといけないッスね」

「そうだね。弾幕とはわけが違つて、手で投げる必要性があるから……上手いくかなあ」

「大丈夫ですよ、私が教えます。私、学校……こちらで言う所の寺小屋で行われたソフトボール大会で、一年C組を優勝に導いた女です。全弾デッドボールで敵チームが居なくなつたため、繰り上げ優勝つて感じでしたが」

当てるのは得意なんですよねー、などと笑う早苗。

未だに彼らが居なくなつた高校で語り継がれる、『東風谷七伝説』の一つである『曲がる死球』である。

逃げるバッターを追尾するカーブ、フォーク、シンカーなどなど。狙つてもこつちはいくまいという精度と角度を以て存分に人体急所に突き刺さるボールは、翌年以降の女子球技大会からソフトボールの項目を消し去るだけの破壊力を持つていた。

そしてそんな早苗に残りの一名は尊敬の目を向ける。

「早苗！ わちきはこの神社に来て、早苗と桜に相談して本当に良かったよ……！ 絶対この神社を信仰するから……！」

「恐るべしは守矢の巫女つて所ッスね……ふつ、このボクともあるものが、心の底から尊敬してしまうとは……」

「ふふ、大したことはありません」

ぽよんと胸を張る早苗。ちなみに胸部戦闘力では早苗>桜>小傘

である。

しかしそうして胸を張る早苗に対して、小傘がしょぼんとした様子で呟いた。

「……あ、でも……食べ物を粗末にしちゃいけないって、昔言われた事があるよ」

「あー……確かに食べ物を使い捨ての投げ武器にするのは不味いかもしれませんか」

「ボクに考えがあるツス」

浮上した新たな問題に、ビリしたものかと悩む小傘と早苗。そこに桺が手を掲げる。

彼女は『私に考えがある』といつ台詞が失敗フラグであるビリヤの司令官のようだ、自信ありげに声を上げた。

「紐でも手元と繋いで、回収可能にしようとばいいんじやないツスかね?」「「それだつ!」」

かくて方向性を完全に決めた三人は行動を開始する。

文の家の氷室から勝手にこんにゃくを押借し、河童のにとりの手を借りてこんにゃくと小傘の手元を結ぶ強靱なワイヤーを用意し、桺がコネを持つ竹林の天才医師からこんにゃくの腐敗を防ぐための防腐剤を仕入れ、早苗の指導の元で大昔のスポーツ根漫画もかくやとうノリで小傘がこんにゃく投擲の練習をする。

そしてその一週間後

その日、上白沢慧音は人里と竹林を結ぶ道を歩いていた。時刻は黄昏を過ぎうす暗くなつて来た夜道を、灯りの入った提灯を片手に足早に人里へ向かう。

「いかんな、遅くなつてしまつたか」

彼女は今、竹林にある友人 藤原妹紅という少女の家に行つて来た帰りであつた。

本来であれば日が落ちる前に人里に帰る心算であつたが、生憎と話しこんだ結果、少々予定の時刻をオーバーしてしまつたようである。

しかし彼女に焦りは無い。元より半人半獣、正確に言うなれば半ばが神獣の血を引いている彼女は、それなりには腕が立つし、夜目も利く。野良妖怪程度に襲われた所で怖くは無い。

故に彼女は、道行く先に佇む妖怪少女の事もさして気にはしなかつた。

紫色の大きな唐傘を持つた妖怪 正確に言うならば付喪神。人里にて人を驚かそうと頑張つていたものの、結局成功せずに泣いて帰るような無害な少女だつた筈だと慧音の優秀な頭脳は記憶している。

「やあ。確か人里でたまに見る付喪神だつたな。また人里で人を驚かすのに失敗したのか？」

「ううん。今からわちきは貴方を驚かすの。覚悟して貰うよ、人里の守護者」

「……なんだと？」

そして距離が近づいた所で、慧音は自分から少女 多々良小

傘に声をかけた。

しかし返ってきたのは爛々と輝く戦意の瞳
慧音へ向き直った小傘の表情は決意に燃え、明確な戦意を伝えて
来ていた。

どういう心算かと、慧音は内心で首を傾げる。

目の前の少女は決して好戦的な妖怪ではない。むしろ臆病で、尚且つ他人を脅かそうと頑張るが、それ以上の危害を加える事を積極的に嫌がるような人物だった筈だ。

だが彼女も妖怪。

何か思う所があったのかと、慧音は内心で小傘への警戒ランクを一段階上げる。

距離を保つたまま、いつでも動けるような半身の姿勢を取り、彼女は小傘に向かい合った。

「……何の心算かは知らんが、それは私と戦う心算だといつ事で良いのか？」

「うん。 人里の守護者、つまりは人里で一番厄介な貴方を驚かす事で、わちきはきっと人を脅かす唐傘お化けとして真に生まれ変われるんだ……！！」

そして小傘が懐から取り出したスペルカードを宣言する。

「 “傘符” こんにゃく特急ナイトカー二バル！－」
「 ……は？」

そして湖畔の吸血鬼もかくやという狂った命名のスペルカードを叫ぶと同時に

小傘は弾幕を放つでもなく、一本足から高々と振りかぶり、

「アモーレ！！」

愛を叫びながらその手に握ったこんにゃくを全力で投擲した。

さて。

多々良小傘は華奢な少女であるが、妖怪である。

そして妖怪は総じて単純な身体能力ならば人間よりも遙か格上だ。靈力や魔力で強化すれば靈夢や早苗、魔理沙などの人間でも一時的にその身体能力を手に入れる事は出来るが、この場合の問題は小傘が一般的な外の世界の人間よりも高い身体能力を持つていた事。

豪快なオーバースローから放たれた長方形のこんにゃくは、風を切る轟音と共に外の世界で言うプロ野球選手が放つストレート並の速度で慧音の顔面に迫ったのだ。

「ン何イイイイイー！ー？」

しかし慧音もまた、半分は人外。

顔面に迫つたこんにゃくを、投げられたブツが慮外の物体であつたが故に一瞬硬直したが、辛うじて回避する。

これが弾幕であればもう少し余裕を持って回避したのだろうが、流石にこんにゃくが弾幕ごっこで投げられるとは、知識と歴史の半獸を以てしても予想外であった。

そしてこんにゃくの全力投擲 자체が予想外ならば、続く事象もまた予想の埒外。

辛うじて回避に成功した彼女の目線の先で、こんにゃくを投げた小傘が何かを全力で引き絞るような動作をした次の瞬間、慧音の後

頭部に湿つた柔らかい何かが高速でぶつかる強烈な衝撃が走ったのだ。

「なん、だと………？」

ボクシングで言つラビットパンチ。

後頭部を直撃する衝撃で脳が揺られ、慧音の身体がぐらりと傾く。

その瞬間、時刻が時刻の薄暗闇故に見え辛かつた物 慧音
の顔の横を走る、こんにゃくに繋がつたワイヤーが目にに入る。

避けられた直後にこんにゃくに繋がるワイヤーを全力で引き寄せて、慧音の後頭部にこんにゃくを直撃させた。

くらくらと揺れ、暗闇に落ちて行く意識の中 慧音はその事実に驚愕していた。

別に弾幕勝負に使う弾幕の規定は無い。

それこそ陰陽玉から靈弾、レーザー、果ては投石ですら弾幕として認められるだろう。

しかしだからと言つてこんにゃくを投げ、更にそれをワイヤーで繋いで疑似的に誘導弾にするとは、完全に思考の埒外。斜め上だ。

といふか。

「何故、こんにゃく……」

その言葉を最後に、上白沢慧音の意識は闇に沈んだ。
そして

「や、やつた！」の人大驚いてたよ！ やつた、わちきやつた

んだ！ わちきでも人を驚かせるんだーーー！」

この瞬間、多々良小傘は『アモーレと呼びながらこんにやくを投げて直撃させれば人は驚く』という勝利の方程式を確信した。後に更にこんにやく投擲を極めて猛威を振るう、『アモーレからかさこんにやくお化け』多々良小傘の誕生の瞬間だった。

或いは西富が寝ずに話に付き合つていれば、こうはならなかつたのかもしねり。

東風谷早苗 “奇跡を起こす程度の能力”を持つ、山の上の巫女。

彼女の能力が巻き起こした、傍迷惑な負の方向の奇跡であった。

第一十一話・愉快過わる忘れ傘(下)(後書き)

アモーレ。

小傘まさかのワープ進化。きっと星蓮船では弾幕の中にここにやくが混ざつて飛んできます。

ちなみに予想外過ぎて硬直してしまっただけで、本氣でやり合えば慧音VS小傘は九割以上が慧音の勝ちです。満月なら十割。

#

早苗さんテスト問題

感想で頂いた問題は次回以降に。面白い回答が中々出て来ませんでした。

問2・数学

$Q \cdot 2x + y = 5 \quad x + 2y = 4$ これを満たす x と y を求めなさい

西富回答 $\cdot x = 2 \quad y = 1$

早苗回答・西富の回答と一緒にお願いします

西富「当人曰く、『何も思い付かなかつた時の最後の手段』」

鈴仙「最後でもやらないわよ」

西富「流石に先生も愕然としたらしい。常識に囚われない辺りは流石だが」

鈴仙「テスト回答は常識で考えましょう...」

第一二三話・河童と携帯電話（前書き）

忙しかったため、数日間が空きました。
まあ流石に毎日更新は厳しくなつてきたので、ペースは少し落と
そつかと考えています。
「」
ご承ください。

第一二三話・河童と携帯電話

「河童が好きかもしないわね、そういうの」

「……この携帯ですか？ 型落ちですか？」

「こちちじや十分に凄い技術の固まりよ」

「河童とか光学迷彩まで作ってるのに、なんで携帯が珍重されるのが分からねえ……」

話の始まりは、神社の社務所で家計簿を付けていた西宮からであった。

正確にはその作業を襖を開けたままやっていたので、廊下を通りかかった射命丸が、西宮が置きっぱなしにしていた携帯電話を見かけたのが始まりだった。

殆ど着の身着のままで幻想入りした西宮丈一。数少ない私物の一つがこの携帯電話であった。

とはいえてつぶくに充電が切れた以上、完全なる無用の長物と化しているのだが。

「んじゃー河童にでもあげた方が喜ばれますかね。社務所に置きっぱなしの電子機器、可能なら動かせるようにしたいですし、そもそもこの携帯は仮に充電出来たとしても、大したモノ入ってませんし……アプリも何も入れてない上に、学友からのメールも口クな内容無いしなあ」

「めえる？ ……ああ、その小箱でやり取りできる手紙の事よね？ 私が来た件とかまで含めて、そういう道具があれば便利なんだけど」

やれやれと肩を竦める射命丸。

明らかに新聞記者モードではない口調からも分かる通り、彼女が

今回ここに来たのは記者としてではなく天狗としての仕事の為である。

山の妖怪以外の守矢神社の信者が、妖怪の山の山頂にある神社に参拝に来た場合の対応についてだ。

なるべく山に他所者を入れたくない天狗と、参拝者は欲しい守矢。結局交渉は諏訪子＆神奈子VS天狗連合という、幻想入り初日に近い構図で行われた。

知恵で見れば諏訪子や神奈子にも認められる西富だが、力は弱く経験も浅い。実力主義者で弱者を見下す傾向のある老練な天狗上層部に対する交渉は向いた役ではないと判断され、そちらの対応には関わっていなかつた。

ちなみに今回射命丸が来たのは、纏まつた交渉内容を元に天狗の里で作成された契約書類を渡しに来ただけである。

先の一件で発言力は上がつたが、天狗の中では未だ非主流派である彼女。

流石に山の方向性を決めるような大型交渉には関わっていなかつたらしい。本人自身、関わろうとする性向ではないのもあるだろう。「まあ、そういうやり取りではメールは便利ですね。送るのは一瞬ですし、文章としても保存される。あ、お聞きしますが交渉内容はどうなりました?」
「参拝用のルートを作つて、そこから外れたら容赦なく排除。ただし、参拝ルートを通る限りは天狗や他の山の妖怪は参拝者に手出しをしないって所ね。まあこんなもんでしょ」

肩を竦めて言う射命丸には、特に悪感情も感じられない。

天狗の里側からは苦い譲歩と見られているのだろうが、彼女自身は先の異変の結果を見るに、必要な変化と断じている

とでも

言つ所か。

「まあ、射命丸さんにそう言つて頂けたならば助かります。所でこの携帯なんですけど、河童に持つて行けば幾許かの貸しにはなりますかね？ そうでなくとも、河童との繫がりは持つておきたいので」「ん？ まあ喜んでくれるとは思うわ。けど良いの？ 友人からの、何だっけ。『めえる』も入ってるんじゃないの？」

「まあ、口クでもない話ばつかりしてましたけどね。それはそれで楽しい思い出ではありました」 ペットボトルロケットによる生徒指導室狙撃計画とか

「何か良く分からぬけど、物騒な話なのは直感で察したわ。何やつてんのよあんたら」

「いえまあ、色々と」

肩を竦める西宮丈一。外の世界にて、セクハラやら何やらで生徒の評判が最悪だった生徒指導の教師に対し、各クラスの代表で共謀して西宮を参謀長として行われた一大反攻作戦だった。

文化祭の出し物として行われたペットボトルロケットを利用して、生徒指導室に撃ち込むその作戦。

責任分散の目的で発射をたまたま来賓で來ていたお偉いさんにやらせ、尚且つ片付けの為に生徒が生徒指導室内に入る事で『何故か』その教師のセクハラの証拠物件が見つかるといつ、中々に大掛かりな策謀 もとい、不幸な事件であった。

「平たく言つてしまえば…… そうですね。天狗の里で例えると、立場を利用して女の子に卑猥な事をしようとする大天狗様の家に、事故に見せかけて天魔様の手で弾幕ブチ込ませて、片付けといつ名田で押し入つて失脚の証拠物件を押収するような」

「その作戦貰つた」

「……ええと、詳しくは効かないであります」

口の端を上げてにやりと笑う射命丸に、西富がそつと皿を逸らした。

そしてその一週間後、とある大天狗が天狗の里内部で失脚する騒動が発生する事となるのだが、西富はそんな事については全く知らない。知らないのだ。知らないってば。

ともあれ西富は気を取り直して笑みを浮かべ、

「まあ色々と思いつ出はありますけど、この携帯に入っているのが全てではありません。それにこのままでは、どの道中身に入ってる思い出を見れもしませんし、河童の所に持つて行くという選択自体は悪くないかと」

「成程ね。……うーん、良い作戦を教えて貰った礼として、紹介くらいはしてあげますか」

「……その作戦を何に使うのかは俺の前では言わないで下さいね。巻き込まれたくないんで」

「はいはい。……作戦に使うのは十尺玉で良いかな。天魔様辺りの行動が何かのきっかけとなつて奴の家で炸裂するように色々と練らないと。彼奴の誅殺なら、天狗や河童でも沢山協力してくれる女の子居るだろうし」

「何そのテロ。どうやつて十尺玉を用意するんですか」

「昨今の天狗の緩みぶりを考え、避難訓練とかどう？ 十尺玉地上爆破避難訓練。花火と避難訓練を組み合わせた全く新しい出し物なんだけど、花火の保管中にうつかり天魔様が着火させてドカンとか。よしこの方向性で行こう」

まさかの十尺玉地上爆破避難訓練フラグである。

余程恨みを買つてているのだろうか。いきなり家に十尺玉を叩き込まれ、その惨状から生き残つても恐らくセクハラの証拠が出て来て失脚するのであろうその天狗には、西富も流石に同情を禁じ得なか

つた。

ともあれそんな会話の後、西富は射命丸が知っている河童の住処を紹介して貰い、翌日の朝からその河童の元へと出向いて行く事になつた。

手土産は分解して貰つても構わない携帯電話。そして念の為、紹介があるとはいえ失礼にならないように、人里で買い置きして置いた煎餅である。

そして翌日。

そうしてその河童の家を訪れた西富の前に広がつていた光景は

「へぐう……」

「……死んでるぅウウウウウ！－？」

『河城にとりの機械工房』と書かれた、河の支流の先にある庵。その前で壊れた人形のようなポーズで地面に転がる、作業着のようないい服を着てリュックサックを背負つた河童の少女 河城にとりの姿だった。

#

結論から言つと、当然だがにとりは死んでいなかつた。

「やー、助かったよ盟友。いやいや、研究に夢中になつちやつてて

ね。二日ぶりに食事してなかつたから、なんか家の外に出た途端にクラッつて来てさー」

「はあ……まあとつあえず、これでも食つて落ち着いてトマセー」

じうやら機械弄りに夢中になつていたらじこどり。

寝食を削つて没頭していたのは良いが、ちょっと氣分転換に家を出た瞬間に疲労と空腹でぶつ倒れてしまつたらしい。

あの後慌てた西畠が助け起こして事情を聞き、今は彼女の家の一室にて、ベッドに寝かされたにとつに西畠が勝手に台所を使って作ったお粥を差し出してくる状況だ。

差し出された梅粥にてとつま類を綻ばせぬ。

「おお！ ありがとう盟友、気が利くな。良こそ嫁さんになれるよ
「……まず俺は男なので嫁に行くのはまず無理です。あと、台所が
中々悲惨な有様でしたので、河童殿自身もお嫁に行けるように料理
修業などを積むべきかと」

「ありや、いりや一本取られたね

西畠が皮肉を返すも、元とつは快活に笑うのみ。

元より彼女は多少臆病な面はあるが、明るく好奇心の強い気性の持ち主だ。明るさと臆病さは矛盾せず同時に両面するものである。

そして美味そうに梅粥をかき込むこと、西畠は溜息。

河童に繫ぎを作る目的での訪問であったのだが、それは成功したのかどうなのか。

少なくとも研究のために二日断食を決行するような相手だ。迂闊に携帯を渡したならば、今度はもう一度倒れるまで研究を続行しかねない。

仕方ないから携帯を渡すのは取り止めて、とりあえずは顔の繫ぎ

と、後々に外の道具を提供する用意があると告げる程度で良いだろうと、内心で思考を取りまとめる。

「さて、河童殿」

「にとりで良いよ、盟友。私は河城にとり。敬語も要らない。私別に偉くないしね」

「……ではにとつと。俺は西宮丈一、知つてゐかもしれないけど山の上の神社の人間だ」

「ああ、うん。話には聞いてるよ。天狗様は色々大慌てみたいだね」

あの時は私もエラい目にあつたなあと、一瞬だけにとりがハイライトの消えた瞳で遠くを見る。

「……何があつたのか？」

「えーと、巫女と魔法使いに襲われて文さんに吹っ飛ばされて、パンツ丸出しで木の枝に引っかかる羽目になつた。六時間くらい」

「異変の原因だつた神社の者として、心から謝罪します」

流石に（実年齢はともかくとして）年若い少女には過酷な事件だつたと判断した西宮が、即座に土下座の勢いで頭を下げた。
パンツ丸出しで六時間とか、厳しいにも程があつた。

しかしここが会話の切り込み所か。

そう判断して、お粥を啜るにとりに向けて西宮は重ねて言葉をかける。

「その面も含めて、まあ河童に話を通しておきたい。今後も同じ山の住人になる事だし、技術職相手に繋がりがあつて困る事は無いしな」

「ふーむ？ あ、盟友……えと、丈一で良いかな？ 丈一がここに

来たのつて、その辺が目当て？

「ああ。まあ他にも手土産があるつちやあるんだが、今この状況で渡すのは俺の倫理観の問題もあるんで止めておく。……所で盟友つて何だ？」

「河童は人間を昔から見守つて来たのさ。影ながらこいつそりと、ずっとね。だから河童は人間を盟友だと思つてる」

「へえ……」

胸を張るにとりだが、西富は内心で『それつてストーカーじゃね？』などと身も蓋も無い思考をしていた。

ともあれそこは置くとしても、技術職との繋がりは西富としても本当に悪くない。

西富丈一、東風谷早苗の二名は完全な現代っ子だ。江戸時代が、良くても明治初期レベルが精々の幻想郷の文化に辟易する事もある。特に顕著なのが、家電製品の有無だ。

テレビなどの娯楽用品は無視するにしても、現代では当然の如く家にある洗濯機、給湯器、冷蔵庫などが、こちらの世界には存在しない。

そして洗濯機と給湯器、冷蔵庫を含め、外の世界時代に社務所に置かれていた幾つかの電化製品は、完全沈黙状態で幻想郷にまで持ち込まれているのだ。

毎日の家事を担当する身としては、可能ならば使えるようにしたい。使えないなら使えないで、早々に処分したいのが西富の考えだ。

「では盟友にとり。少し機械関係で河童のお前さんに聞きたい事があつたんだが、大丈夫か？」

「ん、特に問題は無いよ」

「OK。実は山の神社には外の世界から持ち込まれた機械が幾つか

あるわけだが、幻想郷では使えないんでな。可能ならばそれを使えるようにしたい。或いは無理なら無理で、相応の対価で引き取つて貰いたい」

「外の機械？……完品でかい！？ 壊れかけとか、バラでとか、古い奴とかなら時々魔法の森近くの古道具屋に売つてゐて話だけど……」

反応は上々。

食いついて来たにとりに、西宮は笑みを浮かべて、

「完品だ。それに加えて、冷蔵庫に至つては前のが壊れて、外の世界で最新のに買い替えたばかりだつたからなー……その辺の管理は概ね俺の仕事だつたし」

「最新式……！！」

「仕切り板を外せば人が入れるくらいの大きさだが、開発チームの間で中に入つて涼むのが流行つて危うく凍死者が出そうになり、人が入ると軽快にオクラホマミニキサーの警告音を鳴らしてくれる謎機能が付与されている点まで含めて色々と新し過ぎるがな」

「いや、素晴らしい。素晴らしいよ。その開発チームの気持ちは私にはよく分かる。それじゃあ早速その機械類を　　」「
　　「はいストップ」

うんうんと頷いたにとりが素早くベッドから立ち上がり　　もうとした所で、西宮の手が肩を抑えて、立ち上がるのを止めた。止められたにとりは不満そうな表情だ。

「何するのさ丈一。私に機械類を見て欲しくて来たんじゃなかつたの？」

「その心算だつたんだが、ぶつ倒れるまで研究してた直後の奴にそんなもん見せてみる。またぶつ倒れるまで続けるに決まつてゐるから

な。とりあえず一回ゆっくり休んで貰つて、話はそれからだ

「……むう」

言われて頬を膨らませることつは、まるで西宮よつもー、三歳下の少女のようだ。

少なくとも年上の妖怪には見えまい。

可愛らしく頬を膨らませて拗ねる彼女の頭を西宮は微笑ましげに撫で、

「まあギブ・アンド・テイクだ。俺としても調べてる最中に倒れられたら面倒だし、ある程度体調を復帰してから来て貰いたい」「拷問だよー……調べたい機械があるのが分かつてゐるに足止めとか

「そう言つなよ。ひやんと休んでから来てくれるなら、ボーナスを上げても良い」

「ボーナス?」

「神社にある機械は神社の所有だけど、それとは別に俺が持つてる機械があつてな。体調を整えてから来てくれるならば、そつちは完全に研究用として進呈しそう」

「マジで!?

そして自身の携帯電話を研究用として提供する事に決定した西宮。その言葉を聞いたにどつは田を輝かせて、

「だつたうじいぢぢやいらねいや! 今日はじつかり休んで、明日にでも神社に行けばいいんだよね?」

「ああ。神社の風祝と御一一柱には俺から話を通しておぐ「おつけー。それじゃ丈一、私は寝るからお粥の食器は片付けてね」

「……良い根性してると、お前

図々しい要求に半眼で返す西富だが、にとりは言われた通り身体を休ませようと、既に布団を被つてしまつてい。

程無く聞こえて来た寝息に彼は溜息を吐き、

「……まあ、ついでだ。今日の予定は何も無かつたし、軽く片付けでもしてやりますか」

散らかつた台所などの片づけをする事に決め、その部屋を後にしたのだった。

神社にこまめに出入りするよつになつたにとり。

彼女の話を聞き、一柱が山のエネルギー革命などという事を思い付くのは、しばし先の話である。

それよりも先に出て来た変化は、どちらかと言えば早苗と西富に大きな影響を及ぼした。

#

にとりがはその後、頻繁に神社に出入りするようになつた。

当初の彼女は社務所の機械類をキラキラとした目で眺めており、それらを調べられる喜びに天に上らんばかりであつたが、今は流石に大分落ち着いている。

最新式 つまりは色々と難しい機械の詰まつているオクラホマミニキサー機能付きの冷蔵庫を後回しに、今は他の機械の分析調査を行つてている段階だ。

元々出入りが多かつた桜とは親友と呼べる間柄であつたし、早苗

とも随分仲が良くなつたらしい。

時々機械に夢中になつて帰りが遅くなると、早苗の部屋に泊まつてガールズトークに花を咲かせているようだ。

そして西宮の携帯電話は彼女用の研究資料として提供されたのが

「おーい、丈一。」Jの『ケイタイデンワ』だけ？ 少しだけだけど復旧できたよー」

「マジでか！？ すげえな河童」

「いや、以前魔法の森近くの古道具屋で売つてた『デンチ』っていう外の世界の道具を繋いで、電力を少し供給してみただけなんだけどね。まあ一回動いてる状態を見た方が私としても今後いろいろやり易いから」

そして彼女が神社に入りするようになつてから一週間後の夕方。西宮と早苗が休憩がてら縁側で並んで茶を啜つていると、にとりが携帯を手に飛んできた。

それを聞いた早苗が目を丸くし、

「え、携帯使えるようになつたんですか？ メールや通話もできます？」

「いや、基地局も何も無いから無理だろ」

「ちえつ。また寝る前に西宮に電話をかける事が出来るようになると思つたのにー」

「お前携帯買つたばかりの時に毎晩のように俺にかけて来て、電話代で御両親にめっちゃや説教食らつたの覚えてるか？」

「覚えてますよ。だから無料通話が出来るような契約に変えたんじゃないですか」

「あはは、仲が良いねー一人とも。といひで

「

ところで。

西宮が射命丸に言っていたのは誇張でも韻晦でもなんでもない。本当に友人との「口クでもない話」がメールとして多くやり取りされており、携帯の復旧作業をしたにどりはそれを曰にする機会があつたというだけの事。

故に彼女は、無自覚に爆弾発言を投下する。

「　丈一のメールの中にあつた、『研修旅行女湯遠隔望遠作戦
つていつたい何?』

「……あ

「へえ……

結局西宮と早苗は行く事もなく幻想郷に来たのだが、高校の研修旅行の折に女湯を覗く作戦を彼の友人が立て、西宮に作戦面での助力を請うメールを送つて来ていたのだ。

削除されずに残つていたそれをにとりが発見してしまい、それを今この場で口に出してしまつた。

話にすればそれだけなのだが、効果は観面であつた。

西宮が転がるよつにして早苗から距離を取り、早苗は西宮の頭が一瞬前まであつた場所を狙つてノーモーションからの掌底を叩き込む。

「あつぶね……！」

「チツ……避けましたか」

そして冷や汗を流しながら立ち上がる西宮へ、早苗は満面の笑みを向ける。

無論それは親愛の情から来た物などではない。笑みとは本来攻撃的な物とどこかの誰かが言つていたように、早苗のこの笑みもまた

攻撃的な意図で作られたものである。

「……西宮。私、ちょっと貴方にお話をしなければいけないついです」

「待て、落ち着け東風谷。これは罷だ。俺にそんなメールを送つて来やがつたパンツ奉行（渾名）の罷だ」

「でも丈一、このメールの返信で早苗が入ってない時間なら、で事で協力と参加を了承してるよね」

携帯電話を操作しながら無自覚に自分を売ったにとりに対して、西富が叫びをあげる。

対する早苗は笑顔のまま、

「.....西側、選んで下さい。Please select die or dead.」

「何で英語！？ それどっちにしろ死んでるよね！？」
「 畏答無用！！」

そして始まる弾幕『』。

西宮か逃げ、早苗か追う、

それを見送る形となつた元凶はその様子にきよとんとした表情を浮かべ、

「……まあ、仲が良いのは良い事だよね」

そう結論付けて肩を竦めた。

後に天狗の里で十尺玉が炸裂して、大天狗が罷免される一週間ほ

二〇

そして地底と地上の間で起る『地靈殿異変』に向けた、最も広

義の意味での『始まり』が起つた頃の話であった。

第一二三話・河童と携帯電話（後書き）

後の地靈殿　　正確には一柱がその裏で暗躍をする切つ掛けの
切つ掛けのお話です。書いておかねばと思つたので。
そして大天狗様南無。

パンツ奉行は以前の番外編で出て来た西富のモブ友人です。

……それと地靈殿の前に緋想天で悩んでいるのですが。
西富の「氣質」って何でしょうね？
良い案が出なくて出なくて。何か面白い案があれば教えて下さい。

#

早苗さんテスト問題

問3・音楽

Q・次の符号の読みを答えなさい。「f f」

西富回答・フォルティシモ

早苗回答・ファイナルファンタジー

パンツ奉行（仮名）回答・ファイナルファイト

西富「ファイナルファンタジーって、『ファイナル』ってついてる
くせに既に13まで行つたよな。14? ははは、何を言つてるん
だお前は」

鈴仙「……いや、私が聞きたいわよ。何を言つてるのよあんたは」

西宮「ちなみにファイナルファイトは俺も良くなつたな。ドラム缶から黄金を鍊金する裏技から、コーディーの鍊金術師などと呼んだものだ」

鈴仙「ごめん、話の半分も理解できない…………」

第一十四話・魔界の紅魔館（上）（前編）

今回から上中下で紅魔館篇。
とはいえ、まだ紅魔館に到着すらせんけど。

第一十四話・湖畔の紅魔館（上）

図書とは知識の塊である。

「んー、だからさ。悪いけど少しばかり、使いぱしりを頼まれてくれないかな？」

「俺が？まあ良いけど、どこに何の用でだ？」「にとり」

そこに内包された先人の知識は、人や妖怪が何かを為す時に大きな助けとなるだろう。

少なくとも無からの試行錯誤に比べ、格段に段階を飛ばせることは間違いない。

「紅魔館にさ、大図書館があるんだよ。そこで工学関係の本があれば……ほら、水力発電つたって丈一や早苗の知識だと、水車作る程度が関の山だつたじやん。そこから何がどうなつて電氣になるかとかはさつぱりだつたでしょ」

「一応俺の場合、抵抗とか色々までは言えるんで東風谷よりは少しかもシだけどな。そこだけは主張しておく」

「まあそんなんだけどさ。五十歩百歩だよね」

故にこの時、河城にとりが選んだのは先人の知識に頼る事だった。紅魔館にあるという大図書館。そこにならば技術的な側面から自分のやうひつとしている事　当座の機械を動かし得る電力を得る為に、まず試みようとしている水力発電　　の為の情報を集める為、西宮にそこへの出向を願つたのだ。

だが西宮としては、紅魔館は余り相性が良い場所とは思えない。当主であるレミリアと少ながらも諍いがあつたのが最大の要因

だ。

「……つーか五十歩百歩つって言つなら、俺じゃなくて東風谷行かせ
ればいいじゃねーか」

「本を借りて来れればそれでも良いんだけど、持ち出し禁止だつた
場合を考えるとね。丈一、早苗に『専門書を読んで、必要な情報を
吟味し、メモして持ち帰る』って作業が出来るとと思つ?」

「すまん俺が悪かつた」

しかしレミリアに気に入られていた早苗を送り込むという案は、
この段階で完全に却下と相成つた。

にとりも友人相手に地味に酷い。技術職である分、その辺に關し
ては現実的なようだ。

「参考までにお前さんの親友である桜は?」

「ある意味早苗より酷く、途中で全く別の方向に走り出すと思うな。
水車建設や水力発電についての資料を求める筈が、明日からできる
ブートキャンプとかについて調べて來ても私は驚かない」

そして親友相手の評価はもつと辛かつた。

或いは実体験に基づいた評価かもしれない。

お互い斜め上の思考形態を持つ極上の天然を相棒・親友として持
つ関係だ。

互いにその辺の苦労で感じる所でもあつたのか、同時に『お前も
大変だな』とでも言つような視線を交わして溜息を吐く。

両者の差は、にとりの方は技術面が絡めば暴走して、桜以上の大
惨事を引き起こすという事くらいか。

将棋盤爆破事件は西宮も射命丸から聞いており、記憶に新しい。

「まあ何にせよ、俺以外に適材が居ないってのは分かつた。まさか射命丸さんや御一柱に頼むわけにもいかんしな」

「そだね。私はこれでも人見知りする方だから……」こは頼むよ、

丈一

「へーい」

かくして。

湖畔の紅魔館。そう呼ばれる館に向けて西宮丈一が出向く事になつたのは、そろそろ幻想入りから三週間余りが経過しようという頃。天狗の里にて十尺玉が炸裂し、大天狗が一名罷免される直前の出来事だつた。

#

紅魔館 レミリア・スカーレットが統べる館であり、スペルカードルールの導入後に最も早く異変を起こした勢力もある。運命操る吸血鬼、全ての物を破壊する能力を持つ妹吸血鬼。七曜を統べる魔女に、時操るメイド。東洋武術とその流れを汲む氣を使う門番に、魔女の使い魔である小悪魔、更には多くの妖精メイドを擁することは、幻想郷でも有数の勢力の一つと言えるだろう。

その中の魔女と使い魔が棲む図書館を目的に神社を出た西宮。自分がレミリアに好かれていらない事も鑑みて、事によれば多少面倒な交渉になる可能性もあると考えての出立だつた。

だが世の中はままならぬ物。

相応の苦難を覚悟して出立した西宮は、しかし最悪の予想を越える事態に遭遇していた。

「ふはははーー！　！」はサイキョーの妖精であるアタイの縄張りだ

ー！　えーと、ここを通りたくば……なんだっけ、大ちゃん」「

「えー？　知らないよ、決めごとか何も無かつたでしょ……」

「えーと、うーんと、それじゃあ……」

そひ、まさかの現地到着前のトラブルである。が、これに關しては西宮の読みが甘かつたと言えるだろ？

そもそも紅魔館は、またの名を“湖畔の館”などとも呼ばれ、妖怪が多く生息する霧の湖に面した立地をしている。

その霧の湖についての対策を何も考えずに来た西宮の方が、この場合迂闊と言えば迂闊だ。

そして現在、霧の湖の上を飛ぶ彼の前に居るのは、一組の妖精だ。背中に氷の翼を生やした十歳程度の外見の青髪の少女と、その横でおろおろしている透明な羽根を生やした緑の髪の少女。

紅魔館に向かおうとした西宮の前に、恐らく妨害の意図で飛び出して来た二人の妖精なのだが

「えーと、アレだよ。ここを通りたくば、西の塔に居る賢者オゲレツから一つに折れた勇者の剣の片割れを貰つて来て、伝説の鍛冶屋の元を訪ねて家出した息子を探してあげて、勇者の剣を修理して貰え！」

「難易度たけーなオイ。つてこいつか賢者の名前もう少し考えりよ」

何が誇りしいのかビシッと指を指して来る青髪少女に呆れ顔を向ける西宮。

しかし彼に対応して応じたのは、青髪ではなくその影に隠れるようにして浮遊している緑髪の少女だ。

「すいません……私達、霧の湖付近に住んでる妖精なんんですけど……。貴方が飛んでるのを発見したチルノちゃんが少しテンション上がっちゃったみたいで……」

「ああいや、御丁寧にどうも。って、チルノ……？ 氷精チルノか！！」

「ふつ、アタイの名前も知られるようになつたわね。流石はサイキヨーのアタイ」

「まあな。幻想郷縁起は見せて貰つてるし」

そして緑髪の妖精の言葉から、西宮は眼前の少女の正体を確信する。

西宮は元々この手の情報収集には熱心な方だ。自身の力量が然程ではないのも弁えている。

故に幻想郷内で危険な場所・危険な人妖を書き記している幻想郷縁起を、人里に出向いた時に阿求に頼んで見せて貰つていたのだ。阿求側も自身が書いた物が役立つならと、喜んで西宮を迎え入れた。

ちなみにその喜びの約半分が、西宮がまた外界のお菓子を持つて行つた事に依るものだというのは、阿求当人だけの秘密であった。

ともあれチルノという名前の眼前の妖精に関しては、西宮は幻想郷縁起からその知識だけは既に得ていた。

頭が少々残念ながらも、妖精としては破格 異常とすら言つて良い程の力を持つ妖精。

しかしその力に対して、彼女と遭遇した時の対処方法として幻想郷縁起に書かれていたのは、何かしらのなぞなぞ等の問題を出して注意を逸らせばいいという単純な物だった。

「それじゃ、最強の妖精に聞くぞ」

故に西宮が選択するのは、マニュアルに従つた出題とその後の迷走。

チルノの隣の縁髪の妖精が、『またか』とでも言つような呆れと安堵の混ざった表情を見せた。

妖精にしては珍しく気弱で常識的らしい彼女。チルノが他者に無駄に喧嘩をふつかけるよりは、してやられる形でも穩便に終わればそれが一番とでも考へてゐるのだろう。

だが、しかし。

「 n が3以上の自然数の時、 x の n 乗 + y の n 乗 = z の n 乗となる三つの自然数が存在しない事を証明、あるいは反証せよ」

「……？ 何だか良く分からぬけど、賢者マルコメの所に行かずにはいきを通りたくば、アタイと勝負して貰うよ！」

「……え？ あの、それって……なぜなぜなんですか？ あとチルノちゃん、賢者の名前変わつてる」

西宮の出した質問を完全スルーして話を進めようとするチルノ。

横の縁髪の妖精 大妖精は困惑した様子で目を彷徨わせている。

対する西宮は幻想郷縁起に載つていた対処法が間違つていたかと眉を顰めるが これは明らかに西宮が悪かつた。何を血迷つて妖精相手にフェルマーの最終定理を問つたのか。

フェルマーの最終定理とは、フランスの数学者ピエール・ド・フェルマーが残した一つの定理の事だ。その後360年間もの長きに渡り証明も反証も出来なかつた、数学史上に残る難問である。

或いは八雲藍や八雲紫、八意永琳辺りの理系頭脳派ならば分かり易く纏めた上で解説などをしれくれそうな氣もするが、相手はチルノである。

平たく言えば、そう。チルノは『これが問題である』と認識できなかつたのだ。

「チツ……なぞなぞを出せば考えに手一杯になつて、その間に逃げられるつて聞いてたんだけどな」

重ねて言つが間違つても『なぞなぞ』の範疇ではない。360年間解き明かされなかつた人類史に残る難問である。
ちなみに西宮は分かるのかと言われば、実はあんまり分からなかつたりする。

ともあれ斯様なすれ違いの結果

「それじゃ、行くよ！ アタイが勝つたらあんたを子分にしてやる！」

「やれやれ、自分勝手な子供理論だな。妖精らしいっぢやらしいけどよ」

困つた時は弾幕で決める。

幻想郷では最も一般的な決闘あそびかた方法にて、両者は湖上で対峙する事と相成つたのだった。

「……が、がーんばれー……。一人とも怪我しないでねー」

……ここと離れて応援を開始した大妖精をギャラリーとして。

#

「ぶえっくしー！」

「あ、大丈夫ですか？　一うちに来て焚き火に当たつて下さい。今温かいお茶も淹れますね」

「……お願ひします」

そしてその一時間後。

西宮は人生の敗者へと華麗なクラスチエンジを遂げ、湖畔にて大妖精が熾した焚き火に当たつていた。

友達が迷惑をかけたとでも思つてゐるのだろう。大妖精は甲斐甲斐しく西宮の世話を焼いてゐる。

悪くは無かつた。

本来の勝率を語るならば、そう言つてしまつて良いだろう。

チルノは確かに妖精としては破格の能力を持つてゐるが、さりとて弾幕勝負での実力は幻想郷内で見ると決して高い方ではない。西宮の身近に居る相手で言えば、査の方が恐らく上。

西宮自身が先の異変とその後に積んだ経験まで含めて考えれば、そう悪くない勝負になる筈だつたのだ。

「やはりアタイの弾幕は最強だつたわね……まさかこんな心理効果があるなんて、このアタイの目をしても見切れなかつたわ」

「くつそ、騙された……あんな、あんな馬鹿な弾幕に……」

しかし終わつてみれば、焚き火から離れて無傷で胸を張るチルノと焚き火の前で凍えている西宮という、完全にチルノの圧勝と呼べる結果となつていた。

その原因は一つ。

チルノが放つた必勝の弾幕と、それに対する西宮の対応だ。

彼女の代名詞とも言える『アイシクルフォール・easy』。

それは左右に放つた氷弾を中央に向けて集束させるような形で飛ばすスペルカードなのだが　　その実態は何故か眼前ががら空きの安全地帯となる、何を考えて作ったのか小一時間かけて聞きたいスペルなのである。

だが、それを見た西宮の思考は少し違った。

「絶対さー、あの正面安置は罠だと思ったんだよ。あそこに飛び込んだ瞬間、重ねて弾幕が飛んで来ると思ってたんだよ。クソ、ありもしねえ罠を警戒し過ぎた……」

がくりと落ち込む西宮はその言葉の通り、その露骨すぎる安全地帯を、露骨すぎるが故に罠と判断してしまったのだ。

結果として安全地帯を危険と判断してしまった西宮は、安全地帯に入らないよう注意しながら弾幕勝負に挑み、一瞬安全地帯に入りそうになつて慌てて危険地帯に離脱しようとして撃墜されたのだ。そして霧の湖に墜落した彼を慌てて大妖精が拾い、今に至る。

「西宮さんでしたつけ。……考えすぎちゃいましたね」

「恥ずかしくて死ねるレベルでな。……幻想郷縁起に書いてあるチルノの情報を考えれば、そんな策など無いと分かりそうなもんなのに」

「地味に酷い事言つてますね……」

会話しながら濡れた服の裾を絞り、水を落とす。

霧の湖は透明度が高く、そのまま飲めそうな質である事が幸いか。生活污水などで汚染された外の湖だった場合、大分辛い事になつていただろう。精神的に。

「チルノと……大妖精だったよな。お前ら普段から、この湖を通る

相手に喧嘩売つてゐるのか？」

「え？ いや別に。今日はたまたま」

「いつもは友達と遊んだり、色々ですね。……以前私もチルノちゃんも、ここを通つて紅魔館に行こうとした巫女さんに撃墜されて痛い目を見てますし、普段はあんまりこういう事はしません。

あ、お茶淹れましたよ」

「どうも。……はあ、俺が運悪かつただけつて事かよコンチクショウ」

「

溜息を吐いた西宮が、大妖精から受け取つたお茶に手を付ける。恐らく花を使ったのであるつ、香味の強い茶だが、しかし中々に彼好みの味だった。

「……美味しい」

「気に入つて頂けたようで何よりです。まあ、『迷惑をおかけしたお詫びですね』

「ふつ、流石大ちゃん。子分への慰労も欠かさないなんて。子分、大ちゃんと感謝しなさいよ。あとアタイにも！」

「はつはつは。あんまり舐めた口利いてると泣かすぞ親分」

焚き火を囲んで笑顔のまま言葉を交わす親分^{チルノ}と子分^{にしみや}。苦笑しながら大妖精が冷やしたお茶をチルノに渡し、西宮に目を向ける。

「（）を通るつて事は、西宮さんもいつぞやの巫女さんと同じく紅魔館に御用事ですか？」

「ああ。正確には紅魔館にあるつていう図書館にだな」

「……うーん」

そして西宮の用事・目的を聞いた大妖精が困つたように首を傾げ、

「今日は止めておいた方が良いんじゃないかと思います」

「……湖渡つてる途中でケチがついたからか？」

「それに関しては本当にいいめんなさい。でも、そういうじやなくて」

思い出すように大妖精は目を瞑る。

数秒の間を置き、何かあるのかといふかしむ西面に対して、彼女は告げた。

「……今、紅魔館は非常警戒態勢にある。先程門番の美鈴さんがそう言っていたんです」

それは事態の混迷を告げる言葉だった。

第一十四話・潮畔の紅魔館（上）（後書き）

アイシクルフォール - easy - の正面安置を眼と判断したのは、作者後輩にやらせた時の実話だつたりします。

閑話其の弐：一方その頃（前書き）

友人からの要望で書かれる事になった、早苗サイドからの西宮への感情についての番外編です。

西宮が紅魔館に行っている頃の話とお考えください。

「」短め。3500文字くらいですね。

閑話其の弐：一方その頃

さて、西宮が紅魔館に向かっていた頃。正確には紅魔館に向かう途中にチルノに撃墜されていた頃。彼の相棒であるところの東風谷早苗は人里で分社の建設に勤しんでいた。

守矢神社の信仰が広まつた結果、人里に分社を建設してくれないかという意見が、人里の側から出た結果である。嬉々として里に来た早苗は、早速里の広場に守矢の分社を建設していた。

持ち込んだ材料を使って小さな社を作り上げ、何故か服本体とは分離するデザインである袖で額の汗を拭う早苗。

それを見て横で広場に設置された長椅子(ベンチ)に腰掛けながら見学していた阿求が、くすくすと笑いながら早苗に冷えた水の入ったコップを差しだした。

「お疲れ様です。これ、よければどうぞ」

「わあ、ありがとうございます。……こいつ作業つて本当は西宮の方が上手いんですけどね」

「西宮さんですか。先日も幻想郷縁起を読みにいらしてましたけど……お二人は幼馴染なんですよね？」

「ええ、そうですよ?」

作業が終わり、一息ついた早苗も阿求が座るベンチへ移動する。コップの中の水を一息で飲み干し、『ふはあー』と親父臭い声を上げ、

「付き合い自体はそろそろ十年ですね。……あ、十年越えたかな?」「成程。……しかし今回の異変を幻想郷縁起に書こうにも、お二人

に関する情報はかなり錯綜しているんですね。正確にはお一人の間柄に関する情報が、ですけど

「今回の件も書かれるんですか？」

「ええ。守矢神社は間違いなく幻想郷のパワーバランスの一角を担う事になる立場にありますからね。その神社が表舞台に立つたあの異変については、当然知る限りを書き記しておくべきでしょう。それで最近は可能な限り多くの人に、あの異変 そうですね、風神録異変とでも名付けましょうか」

「今決めるんですか？」

「割とそんな物ですよ。異変の名称は分かり易ければ特に制約もりませんしね。 ともあれ、その風神録異変について多くの人妖に聞いてはいるのですが、貴方達の間柄に関しては意見がバラバラなのです」

溜息を吐いて、阿求は横に座る早苗を見やる。

幻想郷縁起 それは幻想郷に住まう人々が安全に暮らせるようになると書かれている、歴史書にして注意書きだ。

幻想郷の危険な場所、危険な相手について記して注意を促すのと同時に、幻想郷で起こった大きな異変についても調査の上で記されることになる。

当然、今回の風神録異変も調査対象だ。

結果、異変の経緯やその目的、そして神社に住まう神々と信者達の人となりについてはある程度の情報が既に阿求の元に集まっていた。

人里によく来る早苗と、稗田家に丁重に挨拶に来ていた西宮に関しては、実際に会った事もあるから尚更だ。

しかしその過程で阿求を悩ませたのが、その一名の間柄である。人によつては『最悪に仲が悪いように見えた』という人も居たし、

かと言つて人によつては『ただのバカツプル』と呼ぶ人も居る。

果たしてどちらが正しいのか。

稗田の当主として幻想郷縁起に正しい情報を記すという理由が四割。その四割で建前をコーティングし、残り六割は乙女らしき恋話コイバナへの好奇心で、阿求は早苗に問いかける。

「実際のところ、お一人はどのよだんな関係なのですか？」

「そりや私も興味があるな」

そして同時に、上から一人に声がかかる。

見上げた二人の目に映つたのは、白と黒のエプロンドレスのよう

な衣装に身を包んだ白黒の魔女

霧雨魔理沙だ。

幕に跨り飛んでいる彼女が、頭上から声をかけて来たのだ。

「魔理沙さん、こんにちは。どうしたんですか？」

「んや、何か見慣れないもんが広場に作られていて、その横で見知つた顔が話し合つてるもんだからな。何の話をしているのかと思って近寄つてみたら、また面白い話をしてるじゃないか。聞かせりよ、早苗。実際どうなんだ？」

「……うーん……相棒、という表現が一番しつくり来ると思ひます。毎日のように喧嘩もしますけど」

しかし阿求に続いて魔理沙にも同様に問われながら、早苗は困つたように眉根に皺を寄せるのみ。

嘘や照れから来る誤魔化しではない。ただ西宮との間の関係を表現する明確な定義を、これまで考えて來なかつたという事だろう。故に続いて悩みながら語られたのは関係の定義というより、現状に対する再確認だ。

「仲は……悪いのかな？ 悪くないと思いたいですけど。……今日

もお弁当作つてくれましたし」

「……思いのほか、家庭的ですね」

「早苗が出来ないから俺が出来るよになつたとかボヤいてたけどな」

「私だけやればできるんですよ。やうないだけです」

阿求と魔理沙の言葉に少し拗ねたように早苗が言いながら、分社建設用の道具と一緒に持つてきていた鞄から弁当箱を取り出した。どこか慧音の帽子に似たデザインのそれを開けると、中は鳥そぼろ御飯を軸とした彩り豊かな和風弁当だ。

「あら美味しだわ」

「あげませんよ。西富のお弁当は私のです」

「あーはーはー。……その反応見るに、お前は西富の事は嫌つてないんだな」

「そりゃまあ。嫌いだつたら、」こんなに長く組んでませんよ。……なんですかそこにやにや笑い」

物欲しげに指を咥えて弁当をガン見する阿求から、弁当を庇つようにする早苗。

その様子を見ながら魔理沙が笑う。

彼女としては風神録異変の折に西富といつ少年の「軸」を彼自身の口から聞いていたのもあり、その粗棒である早苗側の感情に興味があつたのだろう。

にやにやとした笑みは非常に楽しそうであり、それを見た早苗が不本意そうに頬を膨らませる。

「外の世界に居た時にも、そういう笑いをする友達と似たような話をした記憶があります。私達に何を期待してるんですか、貴方達は」

「何つて、そりゃ、なあ？」

「私に振るんですか。私は幻想郷縁起の編纂者として、必要な情報を
を得たいだけですよ」

「阿求お前そりや卑怯だろ」

「最初に私に振ったのは魔理沙さんじゃないですか」

責任の押し付け合いを開始する阿求と魔理沙。

その醜い争いを横目で見ながら、早苗はぽつりと呟くように、「本
人すら意識せずに言葉を零した。

「……どうであろうと、私は西富が居てくれてほっとしているんで
す」

「……早苗？」

「あ、ごめんなさい。……いえ、関係を無理に定義しなくても、私
はあいつが居てくれて助かってるんだという、それだけです。友人
とか、相棒とか、その……仮に恋人とか。そういう定義のあるなし
に関わらず、私はあいつが居てくれて嬉しいんです」

呟きに反応した魔理沙に、早苗は苦笑しながら言葉を続ける。

「本当は外の世界に居て貢つて、外の神社と私の両親を頼む筈だっ
たんですけどね。色々あって、外の両親と神社の心配も無くなつて、
そしたらやっぱりあいつが居てくれて良かつたなあって思うんです。
私が色々と好きに動けるのは、あいつが後ろで支えてくれてるって
安心感があるからですし」

「…………な、なるほど」

「先日の異変の時にも、私が責任を感じていた時に背中を押してくれたのは西富でした。……結局魔理沙さん相手に取つた作戦を考えたのもあいつでしたね」

「…………してやられたよな。御馳走様つてところだぜ」

「でも、不安になる時もあるんですね。私はほら、今言った通り

頼つてばかりで……私から何か返せたことのあるのかなー、って

本人としては色恋沙汰の話という意図はないのだろう。

苦笑しながら語る早苗の表情に、その手の話題ゆえの高揚や照れは見受けられない。

どちらかと言えば聞いている阿求の方がドキドキと胸を高鳴らせており、魔理沙は内心で『ああ、こいつらやっぱり似た者同士かも』という結論をほぼ確定していた。

「……まあ、私から西富への感情と言えば、こんな感じでしようかね。阿求さんや魔理沙さんが望んでるような、色恋沙汰の甘い関係つてわけじゃなくて申し訳ないんですけど」

「ああ、本気で言つてる辺りお前凄いよ……無自覚なんだな

「へ？」

乾いた笑いを浮かべる魔理沙。

そして阿求は良い笑顔でベンチから立ち上がった。

「大変ためになる話が聞けました、ありがとうございます」

「あ、いえ。少しでも幻想郷縁起のお役に立てたなら嬉しいんですが……役に立つたんですか？」

「ええ、個人的には。それでは気分が乗つてるので、うちに幻想郷縁起の編纂を始めますので、これにて！」

早苗と魔理沙に一礼し、鼻歌を歌いながら白黒へ道を歩き始める阿求。

それを見送りながら、白黒は青白へ投げ遣りに言葉を放つた。

「……私は知らないからな

「へ？ 何がですか？」

「幻想郷縁起に何を書かれてもってことだ。……警告はしたぞ」

幻想郷縁起。

それは稗田家代々から伝わる知識から作り上げられた、知識と知恵の結晶である。

唯一の難点は、割と編纂者の主觀が強く混入している事だろう。
後に脳内の乙女回路を暴走させた阿求が、早苗と西面の関係について割と有る事無い事を想像で書いてしまい、早苗にとつちめられる。

後について『稗田・東風谷の乱』の序章であった。

閑話其の弐：一方その頃（後書き）

ちなみに『稗田・東風谷の乱』についてストーリー【さくらの氣は】
ざいません。

早苗さん、自分の感情がどうこいつ種類の物なのか割と無血算。

第一十五話・湖畔の紅魔館（中）（前編）

紅魔館篇中編。

ヒロイン空気回とも言います。

レーリアとフランの関係については、一次界隈の仲良し姉妹的なイメージ先行で決めさせて頂きました。ご了承ください。

第一一十五話・湖畔の紅魔館（中）

「紅い」。

それが第一印象であり、第二印象は「デカい」とでも言つ所か。即ちそれが西宮丈一が湖畔の紅魔館に抱いた印象だった。

「へー、ここのが紅魔館か。この距離からでも分かるデカさと紅さだな」

「そうよー、凄いでしょ」

「何でチルノちゃんが偉そうにしているのか、私分からないよ」

先の敗北から暫し後。

チルノと大妖精によつて成り行きで案内されながら、西宮は紅魔館に到着していた。

正確には湖を抜け、紅魔館を視認する位置に到着したといつべきか。

湖上空を飛行する三名の視線の先には紅魔館。
そして

「……あれ？ なんか紅魔館の前に何か無いか？」

「あれは……テントみたいですね。その周りに大勢のメイド妖精が居ます。紅魔館の住人の皆さんじゃないでしょうか？」

紅魔館の前には難民キャンプよりもしくテントが張られ、その周囲には多くの妖精メイド達がたむろしていた。

いや、正確には妖精メイドの数が多いだけで、妖精メイドじゃない者も見受けられる。

西宮の知つてゐる限りではレリリアアラしき小柄な影と、その横に

日傘を持つて立つ十六夜咲夜。

そして宝石のような羽根を持つ金髪の少女が、レミリアと寄り添うようにして日傘の影に隠れて日光を凌いでいる。

その近くには中国の人民服に近い衣装を着た長い赤髪の女性、そして紫色の髪にローブとパジャマの中間のような衣服を着た小柄な少女、司書服を纏い悪魔の羽根を持つ赤毛の女性などが集まっている。

「……知らん顔ばっかだなー」

「私達はある程度は知っていますけど……珍しいなあ。紅霧異変の後から多少は出歩くようになつたって聞いていたけど、フランさんがこんな昼間から外に出てるなんて」

「フラン?」

「フランドール・スカーレットさん。レミリアさんの妹様で、キラ

キラした羽根を持った女の子です」

「ああ、幻想郷縁起で見たけど……かなり怖い子なんじやないのか?

「情緒不安定だつたつて話ですけど、紅霧異変後は大分落ち着いているみたいですし……変に挑発しなければ大丈夫だと思いますよ」

フランドール・スカーレット。悪魔の妹とも呼ばれ、『ありとあらゆるもの破壊する能力』といつ、こと『火力』の一点で見れば幻想郷でも一、二を争う程の能力を持つ少女である。

紅霧異変までは紅魔館の地下で過ごしていたが、異変を機に外の世界に興味を持つて、最近は少しづつながら出歩くようになったといつ。

噂では紅霧異変事態がレミリアがフランに外の世界に興味を持たせ、精神的な成長を促す為に仕組んだ異変という噂もあるがそれについては本人含め、関係者全員が肯定も否定もしていないため、断言は憚られる。

ただ一つ確かなのは、レミリアがフランを溺愛している事。そして情緒不安定だったフランが紅霧異変後は随分と落ち着き、紅魔館から外に出るようになり始めたという事だ。

ともあれそんな彼女達の元へ、西宮と妖精一人は降りて行く。途中で彼らに気付いたのだろう。日傘の影でレミリアが嫌そうな顔を見せ、その横のフランがきょとんとした表情を浮かべた。そのレミリアの元へ降りた西宮は懇懃に一礼し、

「失礼。御機嫌麗しゆう、レミリアお嬢様」
「これが麗しく見えるならお前の目は節穴だな。抉つてやろうか?」
「社交辞令ですよ。察して下さい」

そのやり取りに周囲の面々も敵ではないと判断したのだろう。チャイナドレスの女性 紅美鈴は目線だけで咲夜に『誰?』と尋ね、咲夜が小声で応答している。美鈴は宴会の場で西宮を目にする機会が無かつたらしい。

紫髪の少女、パチュリー・ノーレッジは無関心。その横の小悪魔は、こてんと首を傾げている。

そしてレミリアの横のフランはとこつと無邪氣な表情で、

「お姉様、この人誰? あ、チルノと大ちゃん、こんにちは!」
「うん、こんにちはフラン!」
「こんにちは!」

和やかに挨拶を交わすフラン＆妖精二人。どうやら友人関係であるらしい。

それを横目で見つつ、レミリアが肩を竦める。

「フラン、この男は山の上の神社の住人だ。少しばかり外の世界の匂いが濃いから、余り関わらないように」

「山の上の神社？ 灵夢の神社じゃなくて？」

「ああ。閑古鳥が絶賛大ファーバー中の博麗神社に比べると信仰を集めているみたいだな」

靈夢が聞いたら夢想封印確実な評価である。
ともあれレミリアのその評価を聞いたフランは興味深げに西宮に視線を向け、

「はじめまして！ 私、フランドール・スカーレット。お姉様の妹やっています！」

「お初にお目にかかります、フランドール様。西宮丈一、守矢神社の神職見習いです」

「おい誰に断つてフランにコナかけてるんだ殺すぞ。お前には早苗が居るだろうが。泣かせないように頑張るんだろう？」

「挨拶しただけでこれですか、レミリア様。つーかやっぱ霧雨から聞いてたのかコンチクショウ」

ガクリと肩を落とす西宮に、レミリアは勝ち誇った表情を向ける。横で話を聞いていたフランや咲夜にも理解不能なやり取り。両者は互いに顔を見合わせる。

しかし実態は何の事は無い、魔理沙が風神録異変の中で聞いた西宮の言葉をレミリアに伝えただけの事である。

そしてにやにやと笑いながら、レミリアは更に西宮を追い込みにかかる。

「早苗を放つておいて良いのか？ あれほどの器量良しだ。人里の人間どもも黙つていまい」

「良いんですよ、あいつは性格残念だから大抵の男はその後逃げて

行きますし。……つか、この話題止めませんかレミリア様。俺の負けで良いですから」

「ふふふ、そうかそうか私の勝ちだな。……あれ、勝つたら何か良い事あるんだつけ？」

「レミリア様のカリスマが大変上がりました」「やつたー！」

適當極まりない西宮の賞賛に両手を挙げてレミリアが喜ぶ。

咲夜やフランは嬉しそうなレミリアの様子に顔を綻ばせているが、大妖精や美鈴は少し可哀そうな物を見る目でレミリアを見ており、パチュリーに至っては視線すら向けていなかつた。

チルノは知り合いがメイド妖精の中に居るらしく、メイド妖精の中にいつの間にか紛れ込んでしまつてゐる。

「…………」

そして、周囲の反応を一通り見た所で、西宮は最大の疑問を口にする。

即ち今のこの状況そのものについて、だ。

「今はまだ脅だと言うのに、吸血鬼のお一人まで含めて皆さんここで何をなさっているんですか？」

「ええと、それは……」

その言葉に言い淀んだのは美鈴だ。

レミリアと西宮のやり取りを黙つて聞いていた彼女だが、困ったよつに進み出て西宮に一礼する。

「つと、すいません。私は紅魔館の門番、紅美鈴と申します。西宮

さんですね、以後お見知りおきを「

「あ、はい。紅さん……で宜しいですか？」

「そつちは呼ばれ慣れていないので美鈴でお願いします」

苦笑した美鈴だが、すぐに表情を引き締める。

横目で見るのは紅魔館の門　否、その先にある紅魔館そのものだ。

「今、この紅魔館は未曾有の危機に立たされています。強大な敵が館内に侵入し、辛うじて一人も欠ける事無く脱出できましたが……ここから先どうしようかと悩んでいた所でして」

「ちょっと美鈴、こいつにそんな事を教えなくても良いじゃない」「外の世界の方なのでしょう？ 私達が知らない良い解決策を持っているかもしないじゃないですか」

「本当ですか！？」

事情を説明しようとする美鈴に対し、嫌そうな顔をしてレミリアが止めようとする。

しかし反論をする美鈴の言葉に、激しい反応を見せたのは日傘を持つていた咲夜だ。

叫びながら日傘を放り出して、西宮の両手を握る有様である。慌ててフランが日傘をキャッチして、彼女とレミリアは事無きを得た。流石に即死はしないものの、吸血鬼が日光を浴びるととても痛いのである。

だが咲夜は自分が引き起こしかけた大惨事に気付きもせずに、

「貴方はあの悪魔を退治する方法を知っているのですか！？」

「あの悪魔ってどの悪魔ですか！？ というかメイドさん必死すぎます近い近い！ レミリア様こっち睨まないで！ 僕から近付いてるわけじゃないから！…」

身を押し付ける程の勢いで迫る咲夜に、彼女を従者として溺愛しているレミリアが鋭い視線を西宮に向ける。

無論彼が言う通り、思い切り冤罪である。この場合責められるべきは、身を押し付けるようにしている咲夜であろう。

冷静で瀟洒な彼女らしくない振る舞いに、周囲の皆が　これまで無関心であつたパチュリーまでもが何事かと視線を向ける。

しかし咲夜はそれらの視線に気付かず、必死の形相で西宮に縋り付く。

「お願いします、どうか紅魔館を、私達を助けて下さい……！！」

「いしめや」

「出たつて何がですか、美鈴さん？」

そして困り果てた西宮へと、美鈴が再度説明の言葉を向ける。

刹那

絹を裂くような少女の悲鳴が、屋敷の方から聞こえて来た。

その場の全員が視線を向けた先、テントの周辺

紅魔館に近い場所から、慌てて妖精メイド達が逃げ出すのが見えた
何事かと思った西宮の目に映つたのは、屋敷から出て来てテント
に向かつて飛んで来る一匹の黒光りする掌より小さいサイズの蟲

「 つて、『キブリ？』

「いやああああーーー？」

西富が『それ』の名前を口に出した瞬間、咲夜が絶叫と共に逃げ出した。

時を止めるのも忘れての完全な敗走である。

レミリアとフランは抱き合いつようにしてしゃがみガード。『フラン、私がついてるから……！』『お姉様……！』などといつた寸劇が聞こえてくる。

パチュリーは自分と小悪魔の周囲にガチで魔法の障壁を張り、妖精メイドの中に混ざつて大妖精も慌てて逃げ出し そんな中で動いたのは三姫。

「 てい」

「 ちょいな」

「 ほいっと」

西富がゴキブリに手を向けて靈弾を発射し、それを避けて飛んだゴキブリをチルノが氷漬けにし、氷漬けになつたゴキブリを美鈴が軽く弾き飛ばしたのだ。

あつさりと撃退された『悪魔』に、周囲で怯えていた面々が『もう大丈夫なのか』とでも言うよつな視線を向けて来る。

それらの視線を受け、チルノは胸を張り、西富と美鈴が溜息を吐いた。

「あたいつたらサイキョーね！」

「 ……あの、美鈴さん。もしかしてこの『キブリ』が屋敷から幽さん が退去した原因ですか？」

「ええ。……妖精メイドが何かの卵だと思って持ち込んで孵化させ ようとしたのが、『キブリ』の卵だつたらしくて」

「うわあ……」

事情

を聞いた西宮の表情が嫌そうな物になる。

どうやら紅魔館の面々は黒光りする油虫に嫌悪感を隠せない面々ばかりだったらしい、この結果と相成ったようだ。

「……つーか、たかがゴキブリじゃないですか。多少気持ち悪くても危険は然程無いじゃないですか。何でほぼ全滅なんですか。もう少し対処できる人は居るでしょうに」

「無理よー。あれが羽根を広げて顔面めがけて飛んで来る恐怖って言つたら……」

「弾幕よりマシでしようが」

「一回慌てて弾幕で迎撃したら、慣性の法則で残骸が顔に飛んで来て『べちょつ』ってなったのよー。私はもう一度と『ゴキブリとなんて戦わない!』！」

「わ、私は能力で破壊したら色々飛び散つて……うつ、思い出したら氣分が……」

吸血鬼姉妹は抱きしめ合ひながらゴキブリへの恐怖を語り、

「『あんなさい』『あんなさい』などしてやだやだやだ」

完全で瀟洒なメイド長はレースのパンティ丸出しで地面にしゃがみ込んで、完全も瀟洒も投げ捨てる勢いで頭を抱えて許しを請い、

「……私は嫌よ?」

「パチュリー様、実は虫とか駄目ですよね。クールそうな対応しますけど、さつきの障壁とか思わず引くくらいにガチでしたし」「小悪魔、余計な事を言わないの」

図書館組も戦力にならないらしい。

ゴキブリ相手に真っ当な対処能力を持つのは、紅魔館の住人では美鈴だけ。

その美鈴は頭を搔きながら苦笑する。

「と、いう状況でして。まあ非常事態というか何というか……

「あー……理解しました」

平和な ただし概ねの紅魔館住人にとっては必死な 事
情に溜息を吐く西宮。

脳内で考え得る対処法を検討しつつ、目線を向けるのはレミリアに対してだ。

見られたレミリアが何事かと首を傾げるのに対して、彼は苦笑交じりに言葉を投げる。

苦笑の原因は単純至極。馬鹿にしたわけでも何でもなく、平和だと思つ的同时に、自分を遥かに越えた能力を持つ筈の吸血鬼の意外な弱点を可愛らしいと思つたに過ぎない。

……恐らくレミリアが聞いたら、問答無用で殴られるだろう感想だが。

「確かに美鈴さんの言つ通り、案はあります

「本當か！？」

「ええ。ただし、紅魔館の大きさが大きさです。多少永遠亭に借りを作る可能性もありますが」

「……詳しく述べて貰おうか。可否はそれから考える」

「外の世界の道具で、こういう虫対策のがあるんですね。家屋全体を殺虫する強烈な奴なんですが、通常の一軒家で使う奴しか無いので数が足りません。薬剤関係の物となるので、永遠亭に持つて行けば複製して貰えるのではないかと」

「確かにあのスペース薬師ならば、サンプルさえあれば鼻歌交じりにやつてのけるだらうが……」「ひむ」

懊惱するレミコア。どうやら西宮の言葉に光を見出しつつも、紅魔館の主として他所に借りを作る事を厭つていよいよつだ。

しかしそれも数秒。パンツ丸出しで震える従者と、このままでは本だけ持つて家を出て行きかねない親友と、怯える妹と自分が虫に感じる恐怖心。これらの要素を勘案して、レミリアは西宮へと嫌そな視線を向け直した。

「……分かつた、案があるならそれで頼もう。それで何が望みだ?」「おや、永遠亭に対してもなく俺ですか」

「どうせここに来たのも何か目的があつての事だらう」

「良くお分かりで」

彼女としては永遠亭に対するのと同様に、西宮へも借りを作りたくないのだろう。彼に関しては外の世界の匂いが濃い人間と断じているから尚更だ。

なるべく早くに借りを完済しておきたい。その意図が見え隠れする質問に、しかし彼は対して悪感情も抱かずに領きを返す。

少なくともレミコア・スカーレットは陰湿な性質の持ち主ではない。

嫌いなら嫌いと真正面から告げる、良くも悪くも直線的な性向の持ち主だ。裏でこそ動かれるより余程好感が持てる。

「図書館の入館許可と、可能ならば持ち出し許可を」「それは私の領分では無いな……パチエ、どう?」「物に依るわ。……何の本を探しているの?」

そして話を振られたパチュリーが、西富へと視線を向ける。

眠そうな半眼で上目遣いに見るそれは、人によれば睨まれている
ようにも感じるだろ？

しかし彼女にとつてはそれが普通の視線である事は、多少なりとも付き合いのある相手ならば誰もが知っている。

つまりは知らない西富は睨まれているのかと思い僅かに怯んだわけだが、それを見て溜飲を下げたらしくレミリアが喉を鳴らすような笑い声を上げた。

「くくく……そう構えるな。あれがパチエの普通の視線だ。別に睨んでいるわけではない」

「…………ひるさいわね、レミイ」

「あー……失礼しました。えーと、パチエ様……ですか？」

「パチエは愛称。それで私を呼んで良いのはレミイだけよ。……私はパチュリー・ノーレッジ。魔法使いね」

「あ、それは重ね重ね失礼しました、ノーレッジ様」

「気を付けてくれれば別に良いわ。……それで、西富丈一だったかしら。何の本を探しているの？」

「実は

「

西富はにとりから頼まれ、技術関連の書物を探している事を説明した。

それを聞いたパチュリーは横の小悪魔に確認を取り、些少ながらそれに関連すると思われる蔵書がある事を確認し、西富へと返事を返す。

「魔導書とかなら持ち出しは許可しなかつたけど、それなら良いわ。屋敷の中に蔓延っている黒い悪魔をどうにかしてくれるなら、今後も入館と……魔法に関わらない本の貸し出しは許可してあげる」

「随分と譲歩したわね、パチエ」

「ユリイには寝て起きたら眼前に黒い悪魔が居た恐怖は分からぬわ……」

どうやら彼女も彼女で色々あつたらしい。無表情に近い表情ながらも、頬には一筋の汗が流れている。

ともあれ目的達成の為の約束を得られた西富は満足げに頷いた。

「交渉は成立ですね。それでは一旦神社に戻つて、その後に一度永遠亭に向かいます。暫しお待たせしますが、ご容赦を」

「ああ。なるべく早く頼む」

「後は……美鈴さん、下準備として食料類は外に運び出しておいて貰えますか？ その中にゴキブリが混ざってないかは確認を……必要ならばチルノに一度凍らせて貰つて下さい。凍らせればゴキブリは流石に死にます」

「分かりました。……ねえチルノ、飴ちゃんあげるから少し手伝つて貰つて良い？」

「良いよー。あ、でも大ちゃんの分も頂戴」

最強の妖精は値崩れレベルの格安報酬で手伝いに同意した。余りの安さに横で見ていたパチュリーが溜息を吐く。

「……所で、どんな手段を用いるんですか？」
「私も気になるわね」

そして作戦実行の為に紅魔館前のキャンプ地を飛び立とつとした西富にかけられた、美鈴とレミリアの声。

それに応じるように、彼女達以外の面々も気になる感じで、周囲から視線が向けられる。

それらの視線を受けながら、西富は少しだけ得意げに指を立てて見せた。

「バルサンです」

#

バルサンという道具がある。

くん煙剤と呼ばれるタイプの殺虫剤であり、殺虫成分の強い煙を噴き上げ、それを部屋の隅々まで行き渡らせる事によつて虫を退治するという物だ。

外の世界では良く使われる道具であり、それは守矢神社でも例外ではなかつた。

早苗は「ゴキブリを見かけたら伝家の宝刀」という名の丸めた新聞紙で撃墜する程度には平氣なのだが、いかんせん彼女の父親が虫が駄目な人だったため、よくバルサンのお世話になつていたのだ。

社務所の棚にも2・3の在庫があつたのを確認していた西宮、それを永遠亭に持ち込んで紅魔館で使う分だけ複製して貰う心算である。

「帰つたぞー」

「おー、盟友。どうだつた?」

「交渉は成立したけど、少しゴタゴタしててな。図書館に入れるようになるまで最悪数日かかるから、適当に機械でも弄りながら待つてくれ」

そして神社の縁側に着地した西宮に、縁側で携帯電話を分解していくにとりが声をかけてくる。

それに軽く応じながら社務所に入り、棚にあつたバルサンを全部持つて行こうとした所で、早苗の部屋から声が聞こえて来た。

「良いですか小傘さん。『うらめしやー』が時代遅れになつたように、『アモーレ』もまたいづれ時代の波に飲まれていくでしょう。それを防ぐためには、アモーレに続く新たな言葉を今のうちから考えておくことです」

「なるほど！ 早苗つて凄いね。今から先を見据えてるんだ」

「ふふふ、幾ら本当のこととはいえ、そんなに褒められると照れますね。……さて、それではアモーレはイタリア語ですので、次は英語を勉強してみましょうか。……一緒に英語の勉強を……いえ、トウギヤザーに英語のスタディーをするのです」

「と、トウギヤザーに英語のスタディー！？」

「イエス。小傘さんにマイセルフの英語フォースをティーチしてあげます！」

そして西富は何も聞かなかつた事にしてその場を通り過ぎた。誰だつて見えている地雷を自分から踏みには行きたくないのである。

いや、彼の友人であるパンツ奉行などは、外の世界で『見えている地雷』と呼ばれるゲームへ向けて嬉々として特攻するクソゲーマイスターであつたが。

「さて、チルノと美鈴さんが向こうの準備を整えてくれてる間に出来るかね」

バルサンは殺虫成分をバラ撒く関係上、食料や食器、人が口に入れる物などを置いたまま行うのは好ましくない。

その辺に対する対応を虫が平気な二人に頼んで来たのだが、果たしてその間に西富の用事が終わるのかどうか。

「……流石にあの難民キャンプで向田も生活を送るような事はしつくねーな。ちょっと急ぐか」

そして西富はバルサンの複製化を目指し、一路永遠亭へと足を向けたのだった。

第一十五話・潮畔の紅魔館（中）（後編）

早苗わんの英語の成績は、赤点の1～5点上を平行飛行といつ素晴らしい点数だったようだ。

華扇が可愛らしくて仕方ありません。

あと東方ちえむぶれむが面白すぎます。早苗わんは弱いけどなー！

(、 、 、)

番外・幻想郷縁起のあるページ（前書き）

阿求が幻想郷縁起に書いたと、西宮の頃田について。ちょっととネタが出たので思わず。

ちなみにこれに関しては、空ノ鎌さんの『とある神主の幻想録』の「欄外、『幻想郷縁起』とある頃」を参考にさせていただきました。

番外・幻想郷縁起のあるページ

賢しい平神職

西宮丈一 Joichi Nishimiya

職業

能力

神職見習い (* 1)

無し

住んでいる場所

守矢神社

? ? ?

外の世界から幻想郷に来た守矢神社の神職見習い。

どうやら正確には来る予定は無かつたらしいが、偶発的ミスで神社の神々が連れて来てしまつたらしい。 (* 2)

本人は帰る意思は無いらしく、神社の一員としてよくあちこちに出向いている。

神社においては山の中の事は神々が、山の外の事は彼と風祝がと
いうように役割分担されているようで、主に山の外への対外折衝は
彼が担当している。

風祝の東風谷早苗とは仲が良いやら悪いやら、周囲の人々はその
関係に多くの注目を払っている。 (* 3)

幻想郷には珍しい程に礼儀正しく田上を立てるが、地の部分は口が悪く他者をからかう事を好む。(*4)

また、妖怪の賢者や竹林の薬師には劣るもの、人間にしてはかなりの切れ者である。風神録異変では“あの”霧雨魔理沙を出し抜き、脱落させるという快挙を為した。

良くも悪くも賢しい性格であり、本人の力は然程強くない事と相まって、『小賢しい』と評される事もある。(*5)
賢しさを美德とする相手には受けがいいが、そうでない相手には受けが悪い。

中々に面倒そうな御仁である。

§ 能力 §

幻想郷縁起に書かれる人妖としては非常に珍しく、能力らしい能力は無い。

妖怪の賢者や他の智者に聞いても無いとの証言だったので、隠しているところも無く、本当に固有の能力は無いのだろう。

敢えて言うならば良く回る頭が武器か。

巫女や風祝には劣るが人間にしては基礎靈力が高く、良い妖怪退治屋になれる可能性はある。(*6)

基本的には神社の雑務をこなしているので、あちこちに出向いて

いる事が多い。

ただ、神社の家事については彼が取り仕切っているので、夕方にも行けば会う事は出来るだろつ。

攻撃的な性格ではないので、用事があれば順を追つて話せば聞いてくれる筈だ。

人里に買い物に来る事も多いので、里で見かけた人も多いだろつ。

(* 7)

風祝が料理が駄目な分得意になつたと言つだけあって、料理の腕はかなりの物。

紅魔館のメイドには劣るが、それでも家庭料理としてはかなりの水準を保つているらしい。(* 8)

§ 風祝との関係 §

どうやら外の世界時代から、十年来の幼馴染であつたらしい。

事あるごとに喧嘩をする光景が見られるので一見すると非常に仲が悪いが、その実互いに憎からず思つてしているのではないかというのが大勢の意見だ。(* 9)

文々、新聞では彼らの関係についての特集を組んでおり、こういった話が大好きな少女達を中心に飛躍的に部数を伸ばしている。(* 10)

基本的には暴走気味の風祝を彼が止めるといった事が多いようだが、風祝曰く『西宮が居るから私は安心して突っ走れるんです』との事なので、彼の存在自体が彼女の暴走を後押ししている側面が強い気がする。(* 11)

また、風祝側も彼を全面的に信頼しており、異変の折などは彼の

指示を受けて動いていたようだ。

ただし彼女側は頼つてばかりだといふ事にコンプレックスがあるらしく、聞き取り調査中に筆者はどうすれば彼に何かを返せるのかとこう甘酸っぱい相談を受けた。（＊1-2）

総じて言えば幻想郷の少女達の格好の娯楽であり、今後のさらなる進展が望まれる。（＊1-3）

（＊1）『あるば』と『言つら』といふ。丁稚奉公のような物だったのだろうか。

（＊2）当人は巻き込まれて良かつたと語つている。

（＊3）当然私もである。

（＊4）私は見た事が無い。一度見てみたい気もする。

（＊5）吸血鬼や鬼など、強さを至上とする種族からの評判。

（＊6）でもまだまだ哨戒天狗にも負けるらしい。

（＊7）巫女や魔法使いと違つて、ちゃんとした社会生活を送っている。

（＊8）外の世界の料理も作ってくれるらしい。

（＊9）私含む。

（＊10）私も購読を始めた。

（＊11）でも頼らされている彼もまんざらでない様子である。

（＊12）接吻でもしてあげれば良いのではないだろうか。

（＊13）当然私も望んでいる。

番外・幻想郷縁起のあるページ（後書き）

「」の後、阿求は顔を真っ赤にした早苗に襲撃をされました。

第一十六話・湖畔の紅魔館（下）（前書き）

遅くなりました、申し訳ありません。
緋想天開始前に、『氣質』の扱いについて多少オリジナルといつ
か独自解釈な部分があると思います。
今のうちにお詫び申し上げておきます。

第一十六話・湖畔の紅魔館（下）

「全く、面倒事ね……こりゃ私も紅魔館の図書館に入る許可を貰わないと、流石に割に合わないわ」

「医学書田当てですか？」

「そつちも無いでもないけど、医学関係に関しては多分こっちのが紅魔館より充実してると思うわ。師匠つていう最高の教師も居るしね。どちらかというと、田関係の書物田当てかな」

西宮が神社を飛び立つてから数時間後。

日も沈みかけた黄昏時に、西宮は鈴仙と連れ立つて紅魔館へと飛んでいた。

両者が持つのは大きな風呂敷。西宮が永遠亭に持ち込んだバルサンの薬剤を解析し、僅か數十分で永琳が処方してくれた簡易型バルサンセットだ。

曰く、『御免なさいね。珍しい物だったから、ついついじっくり調べちゃって処方が遅くなつたわ』との事。

どうやら月にはその手の害虫は生息しておらず、それゆえにこの手の殺虫剤が生まれる事も無かつたのだろう。

しかし僅か数十分で解析・処方を終えて遅いとは何事か。

西宮、囁らざして永琳の底知れない能力の一端を感じた時だった。

ちなみに永琳は薬は専門だが、工学的な事は恐らく出来ない事はないだろうが 専門外なので、バルサンの缶の機構の再現は早々に諦められた。

薬剤を現地で容器に叩き込んで反応させ、煙が出る前に速攻で避難という原始的な手法が採用される事と相成っている。

そして使う対象はただでさえ大きい上に、内部が咲夜の能力によつて拡張されている紅魔館だ。

その為、永琳が処方した薬の量はかなり多く、平たく言えば西宮一人では持ち切れない量になつたため、鈴仙も彼に同行する事になつた というのが現状だ。

「師匠も何で私にこんな仕事を命じたのかなあ」

「永遠亭としても紅魔館に貸しを作つておくのは悪くないと判断したんじゃないですかね」

「あー、政治的判断つて奴？ 私そういうの駄目なのよね」

「或いは自分の弟子に経験を積ませたかつたとか」

「……ゴキブリ退治の経験と医者つて関係あるの？」

鈴仙は不満たらたらという様子で頬を膨らませながら飛んでいる。医者を目指して勉強しているだけあって、基本的には理知的な彼女のそんな珍しい様子に、西宮の口から思わず笑い声が漏れた。それに対して横を飛ぶ鈴仙が睨むような目を向けて来たので、やや慌てて西宮は話題を変える。

「ところで鈴仙さんは虫とか平氣なんですか？ このバルサン設置する段になつて、実は駄目ですと言われても困るんですが」

「まあ普通つて所ぢやない？ いきなり飛んで来たら驚くけど、悲鳴上げて逃げ出す程じゃないわ」

「それは重畠。頼りにさせて貰います」

最悪のパターンはこのまま鈴仙を連れて行つて、鈴仙も虫が駄目だという事だらう。

その場合、バルサンの設置において戦力となるのは実質的に美鈴と西宮だけになる。

チルノも虫は平氣だが、彼女に危険な薬剤の扱いを任せたいと思

う者はそう多くはあるまい。

大惨事への特急券に成り得るバッドエンドへの一本道である。

一応一番の最適解として、咲夜に時を止めて設置作業を行つて貰え巴と思わなくもないが、紅魔館で最も「ゴキブリを怖がっていたのは彼女であった。

最悪の場合は時が止まつた中で「ゴキブリを見た瞬間『きゅう』と可愛らしい悲鳴と共に氣絶しかねない。

「しかし」「ゴキブリで大騒ぎつて事を考えると、幻想郷つて平和ですよね」

「そうは言つけどね。あの手の病原菌を媒介にする生き物は医者見習いとしては馬鹿にならないんだけどね。マラリアだつて蚊が媒介でしょ？」

「……成程、確かに」

「そういう意味で、ゴキブリ大発生は私としても放つておけないわけよ。……面倒だけどね」

そんな会話をしながら飛ぶ事暫し。

一人の目線の先に紅魔館と、その前にあるキャンプ地が見えてくる。

相変わらず陣幕よろしく張られたテントの周辺に、わらわらと妖精メイドが群がっている状態だ。

中に混ざつてレミリアや美鈴、チルノの姿も確認出来る。

「……ホントに難民キャンプ状態ね」

「あれ、何人か居ねえ。テントの中か？……まあ何にせよ、あのまま何日も待たせるのも気が引けますしね。永琳さんが早急に処方してくれて、本当に助かりました」

「まあそれは確かに。それじゃ、実際に設置をするのは美鈴と私と

貴方よね。美鈴に説明お願ひ。私はレミリアに注意事項を説明して

来るから「

「あいわ」

飛びながら役割分担を決め、西宮は上空から見えた美鈴の元に、
鈴仙はレミリアの元へ飛んで行く。

気付いたレミリアが鈴仙に対応を開始するのを遠目に見ながら、
西宮は美鈴の横へ降り立つた。

「どうも、美鈴さん。お待たせしました」

「いえいえ。その様子だと永遠亭で薬は出して貰えたようですね」「一応は。実際に仕掛けるのは俺と美鈴さんと鈴仙さんになると思
います。本来であれば時間を止められるという十六夜さんが適任な
んでしょうが……」

「あ、駄目です。時間停止中に咲夜さんがゴキブリを見た瞬間、シ
ヨックで時間停止が解けます」

「……存外簡単に攻略できるな、時間停止」

果たしてどこまで苦手なのか。

この問題に關して言えば完全と瀟洒を投げ捨てているメイド長に
溜息が止まらない西宮だった。

「つていうかその十六夜さん含め、結構居ない人がいますね。テン
トの中ですか?」

「いえ……妹様とパチュリー様、そして咲夜さんと小悪魔ちゃんは、
大ちゃんの家に集団疎開しています」

「集団疎開て。……つか妖精ってそんな大勢訪れられる家とか持つ
てるもんなんですか?」

「光の三妖精とか大ちゃんとか、持つてる人は持つてるみたいで
すね。まあ珍しい部類でしょうね。まあ珍しい部類でしそうけど」

「どうやらレミコアを除き、紅魔館の住人は殆ど避難したらいい。居ても役に立たないどいつもか、却つて邪魔なので彼的には別に良いのだが。

例外は意外と冷静だった小悪魔くらいだらうか。

「ちなみにレミコア様はなんで残ってるんですか？」

「部外者相手に当主である自分が弱味を見せたら舐められるからだそうですよ。それに、部下に嫌な事を押し付けるのに安全な場所に逃げるのが嫌だとも」

「……へえ」

美鈴の言葉を聞き、西宮は鈴仙から説明を受けていたレミコアに視線を向ける。

几帳面な鈴仙から化学薬品についての詳細な説明をしていくようだが

「……ああ、もつ。小難しいな。とりあえず奴らを殲滅する効果があるなら私はそれで良いよ」

「あのねえ？ 自分の屋敷で使うもんでしょう。どんな化学薬品でどのような効能があつてどのような成分なのかくらい覚えておきなさいよ！」

「覚えた覚えた。だからもう良いだろ？」「…

「……じゃあ言つてみなさい。バルサンは何と何を貯蔵せらるの？」「…

「……決して引かぬ志と、一步を引ける余裕」「…

「ビ」をどう考へても反物質じやない」

きやんきやんと声を上げる鈴仙に対し、煩そつこまじりなうどするレミア。

その様子を見ながら門番と平信者の一人は苦笑する。

「あれでも良い主君なんですよ。ちょっと子供っぽいですけどね」「楽しそうな職場で何よりですよ。さて、それじゃあこっちも説明を開始しますか」

そして西富は美鈴へとバルサンの使い方の説明を開始する。
その向こうで鈴仙が覚える氣の無いレミリア相手にきゃんきゃんと説教を続けていた。

#

「……紅魔館が燃えている……。悪は滅んだのね、流石あたい」「燃えてねえよ。ただの煙だよ。お前何もしてねえよ親分」「でも実際、凄い光景ねコレ……」

数時間後、夜半になつた紅魔館の前。

意外とバイタリティのあるメイド妖精たちが組み上げたキャンプファイアーの灯りに照らされながら、チルノと西富、そしてレミリアは煙を上げる紅魔館を眺めていた。

無論西富が突っ込んだ通り、燃えているわけではない。

内部に充满したバルサンの煙が漏れ出て来ているだけ　なのだが、『これでもか、これでもか、えいえい』というくらい大量のバルサンを投入したが為に傍目にはかなりの煙が紅魔館から噴き上がっているように見える。

まるで『長く苦しい戦いだった……』とでも言いたげに腕を組みながら仁王立ちで紅魔館を眺めるチルノ。

ちなみに彼女はバルサン設置の間は警戒要員として外に残つていた為、仕事らしい仕事はしていなかつた。

どちらかと言つて長く苦しい戦いだつたのは西宮と美鈴と鈴仙である。

「……奇襲の如く頭上から降つて来た時には驚いたなあ

「止める想像させるなあ！…！」

その西宮が呟いた言葉に、横のレミリアが耳を抑えてしゃがみガードする。

だが何にせよ、この分ならば今日中に淨化は完了するだろ。中で朽ちているだろう黒い惡魔の遺体の処理、並びにバルサンの薬剤が気になるようならば雑巾がけなどの対応は必要かもしねりが、最大の問題は終わつたと言つて良い。

鈴仙などは少し遠くで、全然説明を聞く気が無かつたレミリアについての愚痴を美鈴に漏らしている。

とはいえた世界からバルサンを持ちこんだ西宮も鈴仙ほどの知識を持つて運用していたわけではなく、これに関してはレミリアが注意事項を聞く義務を怠つたのが半分、鈴仙が過度に細かい所まで説明しようとしたのが半分と言えるだろ。

「にとりももう家に帰つてるだろ。俺の用事は明日以降で良いかもしませんね。つーか疲れた。この状態から本とか探したくな

い

「ああ、帰れ帰れ。私も何が悲しくてお前と一緒に並んで煙を吐く紅魔館を眺めてるのかと、500年に及ぶ人生に疑問を抱いてた所だ

なんですね」

「ですか吸血ロリータ。500年生きてる割にゴキブリは駄目

「つるさい黙れ。たかが一十年も生きていなければ、あれが平気な人間の方が私からすれば分からん」

そして嫌そうな表情をしたレミリアが西宮の方を振り向く驚きに目を見開いた。

「……ん？ おこ西宮丈一。お前どうした。なんか氣化してないか？」

「氣化？ 何を言つてるんですかレミリア様」

「いや、なんか良く見たらお前から変な霧みたいのが立ち昇つているように見えるんだが」

「霧……？ つて、何かレミリア様からもそれっぽい物が見えますよ？」 割とつきりと

「マジでか。……何だこれは。今現在向こうで毒ガスで虐殺されているゴキブリの呪いか？ なあ西宮丈一、お前の神社はお祓いとかしてるのだろうか。マジ怖い」

「吸血鬼が神社にお祓い頼みに来るとか超シユールう……」

呆れ顔で言いながらも、西宮とレミリアは周囲に視線を彷徨わせる。

見れば 夜間で視覚が悪かつた上にバルサンで大騒ぎしていて気付かなかつたが、美鈴やチルノに鈴仙をはじめ、妖精メイドまで含む全ての人妖の身体から薄らとした霧が立ち昇つている。

今日の昼までは確実に無かつた現象だ。

「……見た所一番出てるのがレミリア様。続いて鈴仙さんか美鈴さん。その下が親分と俺で……妖精メイドは集まつてゐるから見える程度で、バラバラ歩いてたら見えないほどにしか出ていない？」

「それは私が一番ゴキブリに呪われているという事か。どうしよう怖い一人でトイレに行けない」

「ゴキブリから離れて下さい吸血ロリータ。……これは純粹に力が強い人妖ほど大きな『何か』を立ち昇らせている……のか？」

首を傾げながら疑問を口に出す西宮。

ゴキブリの呪いに怯えてしゃがみガードを開始したレミリアを放置し、少し離れた場所に居る美鈴と鈴仙の元へ歩いて行く。

「だからね、薬剤という物は使い方次第で」

「あの、ちょっと良いですかねお二人とも。……何かこの辺の人妖から、妙な霧みたいなのが立ち昇つてません?」

「霧? ……あ、ホントだ。何よ?」

「これは……」

かけられた言葉に愚痴を中断した鈴仙が気持ち悪そうに自分から立ち昇る『何か』を見て呻く。

しかし美鈴はそれを見た瞬間、僅かに目を見開いた。

明らかに何か知っている反応。それに対して西宮と鈴仙の二人が視線を向ける。

「何か心当たりもあるの?」

「心当たりと言うか……これは『氣質』ですね。直接の害のあるような物じゃないですか……」

「『氣質』?」

「ええ」

西宮と鈴仙の疑問符に美鈴が頷く。

「氣質とは本来その人妖が持っている『属性』のような物です。その人物の在り方や思考などで変わるので必ずしも一生固定ではありますけどね。私は気を使う程度の能力を持っていますから、多少

は知識があるので……何なんでしょうね、これ。気質が立ち昇るような事つて普段はまず無いような」

「……ちなみにその気質が立ち昇る事による不具合とかは?」

「気質はしばしば天候に影響を与えます。今はまだ影響が無いようですが、ある程度以上に気質が立ち昇ると……その立ち昇った気質の影響を受けて天候が変わる危険がありますね。よくその人が居ると雨ばかり降る『雨男』とか居るでしょう? それは気質の影響ですよ」

「天候、ねえ? ……あ、その気質が立ち昇った事によって、元となる人妖に対する影響とかは?」

「んー……これくらいなら影響無さそうですけどね。……何か立ち昇ってるせいでかくれんぼの時に見つかり易くなるとか」

「妖精や子供以外は困らないわね。天候が変わる事が問題でしょ」

そして三者は色々と意見を戦わせるが、生憎との時点では彼らの持つている情報が少な過ぎた。

結局のところ現状では直接的な問題には発展せず、また具体的な実害が出るまでに対策を考えれば良いやと言わんばかりに、西宮が疲れから、美鈴が生来の呑氣さから、鈴仙が興味の無さからそう決定したのも大きい。

天界でとある天人が起こしたこの異変が異変と認知され、状況が動き出すには今しばらくの時間が必要であった。

しかしこの時、既に後に言つ緯想天異変は始まっていたのだ。

第一十六話・湖畔の紅魔館（下）（後書き）

紅魔館イベントはあつたり氣味で終了。

どちらかと言つて西宮と紅魔組の接点を作ると、緋想天の前振りが目的でした。ゴキブリでいつまでも引っ張つても仕方ないというより、似てるエピソードを別所で見かけてしまったので早めに「ゴキブリ篇は打ち切り。

緋想天ストーリーは皆好き勝手に各自の目的の為に動いてる群像劇っぽくて好きですが、それが西宮と言つ異分子の介入でどうなるのかは、もう少々お待ち下さい。

第一一十七話・震源地は博麗神社（前書き）

大変お待たせいたしました、申し訳ありません。
……え、誰も待つてない?
(・・・)シヨボーン

第一一十七話・震源地は博麗神社

平たく言えばタイミングを逃していったと言えるだろ。だからしても義理を欠いていたのには変わらぬ。

「中々行くタイミングが掴めなかつたよな」「靈夢さんには悪い事してしまいましたね」

西富丈一と東風谷早苗の二人は、並んで幻想郷の空を飛んでいた。この二人が一緒に行動する事はさほど珍しくは無い。

風神録異変後は早苗が布教を、西富が对外折衝をという形で役割が分化してきた為に以前ほどではないが、それでも三、四回出掛けるとすればその中の一回くらいは一人一緒に外に出る。

珍しいのはどちらかと言えば、この二人の行く先だろう。
二人が飛んで行く先にあるのは、幻想郷と外の世界の境界
博麗神社だ。

先の風神録異変からこれまで約二十日、早苗は人里などで靈夢とは幾度も顔を合わせる機会はあったものの、中々博麗神社へ挨拶に行く機会が無かつたのだ。

『一度一人で来て賽銭を入れろ』とは靈夢が風神録異変の最中に早苗に言つた言葉だつたが、それの履行までにこれほど時間がかかるのは、不義理と言わっても已むを得まい。

そう結論付けた二人は、早苗が賽銭を、西富が食料を差し入れとして持つて来ていた。

要は遅れた分はオマケを付けるから許して貰おう精神だ。

ちなみに先の紅魔館の折から、未だに気質の流出は続いている。

飛んでいる一人の姿を良く見れば、確かに両者の身体から薄い靄のようなものが立ち昇っているのが見えるだろう。流れ出る気質は早苗の方がやや強く、西宮の方がやや弱い。

西宮はある程度この件に注意を払っており、行く先々で話を聞き回っているが、解決に繋がる情報が無いのが現状だ。

だがその調査とて無駄ではない。少なくとも、恐らくこの異変の最初期から真っ当な調査を地道に続けていた西宮は、幻想郷の住人の中でもかなりこの異変に関する情報を持っていると言えるだろう。その結果 美鈴の言う通り、気質の流出によって体調を崩した人が居るなどと言つ話は未だ出ていない。

では彼や美鈴、鈴仙が懸念していたように農作物に被害が出るかと言えば、幻想郷の住人は彼らが考えていたよりも遙かにしぶとく、図太かつた。

何と彼ら、人里に話を聞きに行つた西宮が気質に関する情報を伝えるや否や集会を開き、作物の育成に良さそうな気質を立ち昇らせている人間を可能な限り農業地付近で仕事させるように手配してしまったのだ。

その結果、ほどよい雨と朗らかな晴天に恵まれた田畠は、例年よりもすくすくと育つっていた。

農家の方々大感謝である。幻想郷の住人は流石であった。

「……さて、博麗ならこの異変について何か知つてるかな」

「んー、望み薄だと思いますけど。紫さんが靈夢さんは基本的に尻を蹴飛ばされるまで動かないって言つてましたし

「あの性格だしなあ」

異変解決のスペシャリストである靈夢だが、初動が激烈に遅いのが最大の欠点である。

加えて深刻さの欠片も無い異変だ。彼女の気質がどんなものかは分からぬが、余程変な天候でもない限り平然と過ごしている可能性が高い。

「ま、話を聞ければ儲けもんとだけ考えておくか」

「私的には好きですけどね、この異変。私の気質、神奈子様や諏訪子様に言わせれば『廻』らしいですよ。なかなか快適な気質です」

「いいねお前は。俺の場合はどうにも方向が安定しない風が吹くつてだけでなあ」

他愛も無い会話を交わしながら空を飛ぶ一人。

それに気付いたのは早苗だった。

「……ん？」

「どうした、東風谷。拾い食いでもしたのが今になつて効いて来たか？」

「失敬な。ちゃんと3秒ルールは守つてます」

「否定する所が違うぞ馬鹿野郎」

「いや、そんな事はどうでも良いんですよ。それより今、揺れませんでした？」

「あ？ 揺れ？」

早苗の言葉に西宮は周囲を見回す。

「揺れ…………つまりは地震だろう。しかし、それを示すような様子は周囲に無い。」

空中に飛んでいるのだから、地震が起きたとてそれを身体で感じられる筈は無いのだが、それを差し引いても周囲に地震の痕跡のようない物は無い。

より正確に言つならば、地面を見下ろしてみても木々が倒れているだの何だのと言つた分かり易い痕跡が見えなかつたのだ。

「……いや、周り見てみろよ。そういう事があつたって光景じゃなくね?」

「うーん……なんか向かう先の方が一瞬揺れたように見えたんですけど」

「向かう先ってーと、博麗神社か? 摆れたつつーより、誰かが変なスペカでも使つた余波がそれっぽく見えたんじゃねえかね」

「そうですかね……?」

分かり易い痕跡が無い故に、早苗の論を『勘違い』と切り捨てる西宮。

しかし彼はすぐにその切り捨てを撤回する事になる。

何故ならばそれから僅か数分後。彼らが到着した晴天の博麗神社で、凄まじい光景を見たからだ。

「私の、私の神社と素敵な御賽銭箱……」

そこには楽園の素敵な巫女などは既におらず、例えるならば「〇」「×」の三文字で表現する事が出来る紅白の少女と、完全に倒壊した恐らく神社であったのだろう建物だけがあつたのだから。

#

「どうなつてんだこりや……」
「地震が来たのよ。大きな地震が……」

無闇やたらに燐々と照る太陽の下で、崩壊した博麗神社前に降り立つた早苗と西宮。

西宮が呆然とした様子で呟いた言葉に、振り向くもしないまま靈夢が答えた。

そしてその言葉に早苗が反応する。

「やつぱり地震があつたんじゃないですか、西宮」

「いや待てよ。さつき俺らが居た地点は間違いなく揺れてなかつた。少なくともこんな、建物が倒壊するレベルの揺れは無かつた筈だ。なのになんだつて博麗神社だけ つて、原因究明は後回しだ。博麗、立てるか？」

「え、あ、うん……あれ、あんた達いつ来たの？」

「さつきの返事は無意識かよ……重症だな。まあ無理もないが」

西宮が近付いて肩を叩くと、漸くのろのろと靈夢が振り向いた。元々があまり感情を表に出せない靈夢だが、それを考慮しても彼女の表情はまるで能面だ。

さしもの博麗の巫女と言えど、自分が長年暮らした家が倒壊したショックといつのは大きいのだろう。

さう判断した西宮は、靈夢の腕を掴んでやや強引に立ち上がりさせる。

「とにかく事情は分からんが、第一波などがある危険もある。とにかく少し移動する。神社の中に、どうしても持つて行かないとならないような貴重品は？」

「あ、え、無い……と、思つ。博麗の巫女に受け継がれてるのは、技術と神社と陰陽玉くらいだし……」

「陰陽玉は？」

「……持つてる」

「良し、分かった。とりあえずこの場を離れるぞ」

地震とはマントル対流とプレート運動によって起かる、地球の表面を覆う岩板^{プレート}の動きとその反発運動などで起かる大地の揺れだ。

地震大国日本に生まれただけあって、西富はその仕組みと怖さ、並びに地震が起きた時に為さねばならないことを、外の世界基準の知識とは言え、ある程度正確に把握していた。

だが、それに従つて速やかに安全な場所へ移動しようとしたのが

「ちよ、ちよっと待つてよ！」

靈夢が西富の腕を振り払う。

そう、西富の行動自体は知識としては正しかったが、田の前で住む家を失った少女に対しても少々配慮に欠けていたとも言えるだろう。

結果として無機的とも言えるマニコアルに沿つた判断は、当の被災者である靈夢の反発と言つ結果を招いてしまつ。

呆然としていた靈夢の表情に、崩れた我が家から遠ざけられる事に対する感情的な反感が浮かび上がる。

彼女は強かに振り払われた腕に走つた痛みに眉を顰める西富へと指を突き付け、声を荒げる。

「何でそんな事をあんたに指示されないといけないのよ！」「これは

私の神社よ！」

「……そうだな」

「巫女が神社から離れてどうするのよ！ 馬鹿じやないの…？」

「……おい、落ち着け博麗

「神社が、な、無くなっちゃつたって……私の神社なんだから……」

しかしその威勢も、一分と持たずに露と消える。

指した指はフルプルと震え、何かを堪えるように口元は強く引き締められている。

博麗靈夢は、およそ人としては異端の人間性の持ち主だ。人や物への執着が薄く、全てに対しても平等。それゆえの人と妖怪の間に立つ調律者としての、博麗の巫女である。

しかしそれとて、完全に全てへ執着が無いわけではない。そうだとすれば、人でも妖怪でもないただの機械だ。

他者と比べて極端に薄いが、彼女にも執着はある。長く付き合えば人にも物にも愛着を持つ。だからこそ友人関係などという物も成り立つし、彼女はなんだかんだ言いつつも紫を慕い、魔理沙を親友と認めてているのだ。

そして感情とて無論ある。表に出すのが苦手だが、意外と年相応に甘い物が好きだったり、勝手に先代から受け継いだ巫女服を可愛く改造したりという少女らしさも持っている。

前言を繰り返そう。

博麗靈夢はおよそ人としては異端の人間性の持ち主だ。その能力も、ただの人が持つには大きすぎる。

しかしそれでも、確かに彼女はまだ十代の半ばを過ぎたばかりの少女なのだ。

「……私の、神社あ……」

長年住んだ 彼女にとつては友人や先代の巫女、親代わりであつた紫などとの思い出の詰まった神社。
それが目の前で、しかもいきなり倒壊した事のショックたるや如何ほどか。

口元から言葉が零れるのと同時に、田の端から涙が零れる。後はもつ言葉にならず。

ぐすぐすと年相応の泣き顔を見せる靈夢を前に、狼狽したのは西宮だ。

「あ、えーと……お、おい、博麗？」

博麗靈夢 博麗の巫女。

およそ西宮の知る限り、超然と泰然が服を着て歩いているような少女であった。

故に神社が無くなつた事に対しても過度の執着は示すまいと、まずはこの場からの避難を主張した西宮だったが、生憎それは悪手だったと言えるだろう。配慮が足りなかつたとも言える。

過度に冷静な西宮の対応は靈夢の勘気を誘い、図らずも彼女が滅多に見せない少女らしさが悪い形で表に出た形になってしまったのだから。

しかし狼狽する彼に対する救いの手は、意外にもすぐ後ろから差しのべられた。

「ああもう、昔から貴方は女の子を慰めるスキルが全く上達していませんね」

「……東風谷？」

「……大丈夫、大丈夫ですよ靈夢さん。私がついていますから」

狼狽するだけの西宮の横を通り過ぎ、靈夢に近付いた早苗が、泣きじやくる彼女を抱きしめたのだ。

外と幻想郷との生活習慣の差か、歳はそう変わらないだろうに早苗の方がやや背が高く、結果として小柄な靈夢は早苗に抱きすくめ

られる形となる。

「靈夢さん、まずはここから離れましょ。また地震が来るかもしされません。それで靈夢さんが怪我をしちやつたりしたら大変ですもの。大丈夫です、後で一緒に戻つて来ましょ」

「…………」

「神社が直るまで、私の神社に住んでくれて構いませんから。それに、紫様も靈夢さんが困っているのを知つたらすぐに駆け付けて来てくれます。……ね？」

「…………うん」

感情的になつてゐる相手に対し、理性論は時として反発を呼ぶ。そういう意味では全く無力どころか足手まといな西宮とは対照的な早苗の言葉に、意外にも素直に靈夢は頷いた。

その様子を見ていた西宮が、大きく溜息を吐いた。

「すまん、東風谷。助かつた。……博麗も、すまん。配慮が欠けていた」

「……良いわよ。ああもつ、恥ずかしい所を見られたわ」

早苗の胸で泣いて、ある程度冷静さも戻つたか。

抱きすくめられたまま、『ぐすり』と鼻を啜りあげながらの言葉ではあるが、靈夢の言葉はいつもの彼女の空気を取り戻しつつあつた。

「とにかく東風谷が言つ通り、まずはうちの神社に移動するぞ。この不自然な地震については、これから考える」

「……分かったわ。不自然だつたつて言つけど、これ自然現象じやないの？」

「違うな。明らかに範囲がおかしい」

西宮が言いながら地面を蹴つて空に飛び上がり、早苗と靈夢もそれに続く。

これまで早苗と西宮が飛んで来たルートを逆走し、向かう先は守矢神社だ。

「……出来そうな奴、やつそうな奴。どちらにしろ知っている限りでもそう多くはないな。特に後者は皆無に等しい」

「私に恨みを持つてる妖怪とかって線は?」

「無いとは言わんが、やらかした後に幻想郷中から報復を受ける事が確定しているからな。これだけの力がありながら、それが分からんアホがそういう居るとは思えないし、思いたくない」

頭の中で考え得る可能性をシミュレートしながら、西宮は溜息を吐く。

不確定要素が多くはある。現状で結論を出すのは危険だ。

そう判断しながら、横田で靈夢の方へと振り返る。

「まあ、その辺はどうにか調べてみる。そつちはどうにかするから、お前は神社に着いたら休めよ。精神的に結構きてるだろ」

「…………まあね。みつともないとこ見せたわ、ホント。私の泣き顔知ってる奴なんて、紫と魔理沙くらいしか居なかつた筈なのに」

「それも西宮がトドメ刺した形ですからね。ああいう場面での気遣いが足りてないですよ、西宮」

「言葉も無えよ。あれは本氣で悪かった」

「いや、その一言で済むと思つてゐんですか。昔から貴方はですねえ……」

「昔からひつだつたの? 苦労するわね、早苗」

降参とでも言つよつに両手を上げる西富の後方で、靈夢と早苗が
きやいきやいとガールズトークに移行し始める。

それを後ろに聞きながら、西富はふと自分の身体から漏れ出る『
氣質』に目をやっていた。

「『氣質』の異変と、この妙な地震。……関連性はあるのかね」

彼が呟いたその言葉の正誤が分かるまでも、この異変は今しがらく
の時間を必要とする事となる。

第一十八話・動きだす人々（前書き）

群像劇つて難しいですね。

第二十八話・動きだす人々

「妖夢、妖夢。見て御覧なさい、美味しそうだと思わない？」

「幽々子様……一体何をなさっているんですか」

「何つて、雪の有効活用よ~」

博麗神社が倒壊して少し経過した、冥界の白玉楼。
恐らく地震で家が倒壊した靈夢を除けば、最もこの異変で苦労している人物がそこに居た。

名を魂魄妖夢。気質が天候に現れるという異変の結果、主が降らせ続ける雪を延々とスコップで雪かきし続けるといつ、剣士の本質とは程遠い業務を続けていた少女であった。

幸か不幸か紅魔館黒い魔襲撃事件^{ゴキブリ}以降に人里で西宮と会う機会があり、聞き取り調査をされたついでに気質の異変については聞き及んでいた妖夢だが、原因が分かつたからとて何の慰めにもなりはない。

雪にも負けないほど白いおやかな手で、雪を集めてお椀に盛つてシロップをかけている主を意識的に視界に入れないようにしつつ、妖夢はいつもの刀は部屋に置き、その代わりにスコップでざくざくと雪を排除していく。

「んー、甘~い。甘くて冷たくて美味しいわあ。氷精か紫にでも頼まないと、中々こういうのは食べられないものねえ。妖夢もどうかしら~?」

「結構です。私はここ数日朝から晩まで雪かきをしている関係上、雪はもう見るだけで嫌になつて来ています」

幸いにして冥界に咲いている植物は、普通の生きている植物とは

一味違う植物の幽霊だ。

西行妖 については幽霊なのかそうでないのか、そもそも真っ当な植物と呼んで良いのかすら怪しいレベルの存在なので除外するが。

ともあれそれ故に庭の植物もたかが数日の雪¹」ときでどうにかなるほどヤワではないが、だからといって雪に埋もれさせていて良いとも思えない。

そんな生真面目な妖夢の性格も相まって、先の言葉通り彼女はこ¹最近毎日毎日雪かきを続けていた。

或いは途中からは单なる意地になつてているのかもしれないが。

「よよよ、私の気質が降らせた雪をそんなに嫌うなんて……。妖夢は私が嫌いなのね~」

「誰もそつは言つていませんつてば。雪もこんなに纏めて降らなければ嫌いじゃないです……ああ、でもそろそろ本気で嫌になつてきた」

スコップを雪に刺して、彼女は深々と溜息を吐いた。

嘆泣している主に関してはいつもの事なので別に良いのだが、終わりの見えない作業と言うのはなかなかに精神的にキツい物がある。

或いは精神鍛錬としては良いのかもしれないが、だからといってこの状況を喜べるほどには彼女はマゾヒスティックでも前向きでもない。

そして本気で嫌氣がさしたという様子の妖夢に対し、幽々子が可愛らしく小首を傾げ、

「そんなに嫌なら止めれば良いのに」

「止めねばって……嫌ですよ、確かに幽々子様を斬り捨てれば止まるんでしょうけど、流石に私も雪を止める為だけに幽々子様を斬り捨てよつとは思いません」

真顔で従者が告げた言葉に、流石の幽々子もがくりと肩を落とす。流石は魂魄妖夢。基本的に物事の解決手段は『斬る』から始まる、幻想郷が誇る脳筋系サムライガールである。

「…………」めん、今の発言は流石に私でも予想外だつたわ～。いやいや妖夢、そうじゃなくてね？ これが異変なら、異変の黒幕が居る筈でしょ？」

「…………はつ！？」

「かなり考えないと分からぬ事なの……？」ねえ妖夢、私、真面目に時々貴方が心配になるわ～……」

予想以上に現状に対する思考が足りていなかつた妖夢に、少し眞面目に心配そうな視線を送る幽々子。

そんな幽々子へ、妖夢は強い尊敬を宿した視線を向けて来る。

「幽々子様、その慧眼感服致しました。成程、確かにこれが異変ならば、首謀者がどこかに居る筈……！」

「うん、まあ、いつ気付くかと思つて言わなかつた私も悪かつたわ

」

「しかし、残念ですが私がここを離れてはこの雪は誰が……」

「でもこのまま雪かきしてばかりつて言つのも、無限ループみたいで不毛よねえ。異変の黒幕さえどうにかすれば、今は夏なんだから雪くらゐ勝手に溶けるんぢやないの？」

「なるほど。つまり黒幕を切つて捨てれば全ては解決するんですね！」

そしてこの苦行からの脱出口を見出した妖夢が、幽々子へと頭を下げ臣下の礼の形を取る。

「幽々子様！　ここの魂魄妖夢、早急に異変の首謀者を斬り捨て、この異変を解決して来たいと思います！」

「ええ、そうしないさいな。ただ、少し急いだ方がいいかもしねいわね～」

「……どうですか？」

「いえいえ、こっちの話よ」

臣下の礼から発された妖夢の言葉に鷹揚に頷く幽々子。

その顔に浮かぶのは苦笑の形だが、『急いだ方がいい』と言つた幽々子の真意を察せないまま、妖夢は首を傾げる。

対する幽々子も別に詳しく説明するつもりは無いようすで、蝶の文様が描かれた扇子を開くと、それで優雅に口元を隠し、

「それじゃ、妖夢。気を付けて行つてらっしゃいな。吉報を期待してるわよ～」

「はっ！　畏まりました、幽々子様！」

そして妖夢が傍らの地面に刺した長物を抜き、それを手にして空へと飛び立つていく。

目的地は地上だろう。冥界よりもそちらの方が格段に情報は集めやすい。

が

「いやいや妖夢？　ちょっと妖夢。待ちなさい妖夢。貴方、スコップで何をしに行く心算なの？」

こつもの刀を部屋に置きっぱなしのを忘れ、横にあつた

スコップを片手に力々飛んで行く従者サムライガールへ向けて、幽々子は珍しくなり本気で呆れた声をかけたのだった。

#

「ふう」

妖夢が改めていつもの一刀を手に飛び立ったのを見送つてから、幽々子は縁側で軽く溜息を吐いていた。

彼女の愛しい半人前従者は、眞面目なのが時々致命的なボケをかますのが玉に瑕だ。

故にこそその半人前なのだろうが、時々可愛らしいを通り越して心配になる。

そして雪：が止んだ白玉楼にて、幽々子は先程まで妖夢が頑張って雪かきをしていた辺りを見やつた。

「……ちょっと遊び過ぎたかしらね~？」

そう、妖夢が出て行くまで深々と降り注いでいた雪は、既に完全に振る事を止めていた。

これが意味する事は何か。

雪は幽々子の気質ではなく、妖夢の気質だった？

否だ。そうであるならば人里に出向いた時などに、妖夢の周囲には雪が降っていた筈。

彼女の気質は蒼天であり、この雪は幽々子の気質である。否、あつたと言つべきだろう。先程までは雪の気質だった彼女の気質は、今は既に別の物に変わっていたのだ。

「んー、次はどんな天候にしてみようかしら。もつあまり長く遊べ
そうにないしね~」

『氣質はあくまで『氣』の質だ。

それは生まれてから死ぬまで不变ではなく、当人の性格の変化などから氣質もまた変化する。

とはいえる『不变ではない』程度の話であり、『三つ子の魂百まで』という言葉もあるくらいに、身に付けた氣質はそつそつ変化する物ではない。

故にこの場合、自らの心境一つで氣質を変えられる幽々子が慮外であり例外、つまりは規格外と言つべきである。

固有の能力も無しに自らの精神一つでそのような荒業を鼻歌交じりにやつてのけた彼女は、しかし反省の意を込めて誰も聞いていい独り言を紡いでいく。

「まさか神社に直接攻撃とはねえ。今は寝てるみたいだけど、紫が起きたら速攻で終わらせられるわ。ブチ切れって奴かしらねえ。あらやだ、怖い怖い」

本来であれば幽々子は妖夢が自らの意思でこの異変を解決に行くのを望んでいた。

妖夢にとっては良い成長の機会になるだろうといふ考えからだ。雪という氣質も、妖夢がこの天気を嫌つてさつさと異変を解決しに行きたくなるように仕向ける為に選んだに過ぎない。

まあ妖夢が真面目といふか、一度方向性を決めたら他に考えが行かない思考の持ち主だったため、彼女は延々と雪かきをしているだけに終始していたのだが。

しかし妖夢が自発的に動くのを待つていられなくなつたのは、つい数時間前。

地上で妙な氣質の動きがあつたと思ったら、博麗神社が地震で潰されたのだ。

こうなればハ雲紫が黙つて居まい。妖夢に聞わらせる間も無く、靈夢を娘のように溺愛している大賢者が異変を解決してしまうだろう。

故に幽々子は妖夢に完全に自発的に行かせるというのを諦め、自らの言葉で異変の解決に行くよつに誘導したわけなのだが

「まあ、流石に博麗神社を潰すのは洒落になつてないわねえ。どうするのかしら、あの子。古い馴染みとはいえ、流石に紫が黙つていいわよ」

そう言って眉を顰める幽々子の目には、神社が潰れるまでは楽しむだけだった状況を憂う光が僅かながらに浮かんでいた。

#

一方その頃、神社の倒壊について知っていたのは幽々子だけではない。

鳥天狗の射命丸もまた、早期に神社の倒壊について知った人物である。

「……と、言つ事は靈夢は山の神社の方に避難したわけね」「そつツスねー。早苗さんと西富君が連れて來たのを見たツスよ」「……そう。まずは良かつた、と言つべきかしらね」

彼女は現在、天狗の里のはずれにある自宅にて、哨戒天狗である樅から情報を得ていた。

情報内容は神社倒壊後の巫女の動向であり、たまたま早苗と西宮が靈夢を連れて来た所を目撃していた樅から得た靈夢の安否の情報に、安堵の溜息を吐く射命丸。

博麗神社は幻想郷の要の一つだが、神社の崩壊だけで速攻でどうにかなる程度に甘い結界を組むようなハ雲紫ではない。

故に神社の崩壊は致命傷ではない。そもそも博麗の巫女は仕事柄妖怪に狙われる事も多く、その関係で神社が破壊された事も靈夢以前の博麗の巫女の時代には稀にあった。

問題は、この地震と神社倒壊が原因で博麗靈夢が亡くなつた場合。心情的にも実務的にも、色々な面で不味い。不味過ぎる。

実務面では次の巫女が選ばれるまでの、調律者の不在による幻想郷のパワーバランスの不安定化。並びにスペルカードルールが巫女が居なくとも定着するか否かといった不安だ。

紅魔郷異変がスペルカードルールを用いた初めての異変であつた事からも分かるように、スペルカードルールが制定されたのは「ごく最近」というより、靈夢の代になつてからの話であり、その制定には靈夢と紫が非常に大きく関わっている。

制定者にして第一人者。

そんな靈夢がスペルカードルールの制定から然程時間が経過していないというのに死去してしまつのはかなり不味い。

幻想郷といふごく狭いこの世界で力を持つた妖怪たちが好き勝手に暴れても、幻想郷はすぐに荒廃してしまうだろう。しかし何もせずに茫茫と生きているだけでは、妖怪としての本分は満たせ

ない。それは生きているのではなく、死んでいないだけだ。

その点スペルカードルールは、ある程度の制限が加わった事で幻想郷と言つ世界自体を危険に晒す事なく妖怪が暴れられ、そして暴れる妖怪相手に人間が対等の立場で戦いを挑める。

バランス調整とガス抜き、二重の意味で非常に上手いルールだ。

故にこそ、その定着前に第一人者が死んでしまうというのは何より痛い。

昨今の普及ぶりを見るにすぐ廢れる物とも思えないが、スペルカードルールに対して痛い打撃になるのは間違いないだろう。

そして心情面として言えば、今代の博麗の巫女である靈夢はなんだかんだで慕われる娘だ。

彼女が死んでしまうのは、射命丸としても非常に悲しい。

「……まあとりあえず、無事なら無事で良かった……」という所から。紫がどういう反応するのか、今からちょっと楽しみなような怖いようなって所だけど

「文さんはこの異変には動かないんスか？」

「あー、私はあんまり好みな天候にならなかつたから、嫌といえば嫌なんだけどね。わざわざ解決に動くほどでもなかつたし、こうなつたら紫が動くだろうから、別に自分から動かなくても良いかなって。まあ、情報があれば確かに嬉しいし、新聞用に倒壊した博麗神社の写真は撮りに行くけどね」

そしてその上で、靈夢が無事ならば後はどつにでもなるかと射命丸は結論。

とりあえずは外に出る度に風雨になる自らの気質に陰鬱とした気分になりつつも、大スクープなのは確かなので写真を撮る為に博麗

神社に向かう事にする。

その背に向かって、ぱたぱたと尻尾を振りながら柵が声をかけた。

「情報があれば嬉しいってんなら、西宮君が元々結構調べ回つてたみたいシスね。ちょっと文さんが博麗神社行つてる間に、ボクが聞いたくツスか?」

「んー、そうね。お願ひするわ」

かくて鳥天狗の射命丸文と、その部下の犬走柵も動き出す。

最終的に自分達がこの異変に対し、どのような立場になるかも知らないまま。

#

「はあ……」

そしてこちらも同刻。

晴れた空に強い風と雨という、いわゆる『晴嵐』の天候に晒されながら、竹林をとぼとぼと歩いている兎兎が一人いた。

へにより耳が風になびき、ブレザーのスカートが手で抑えて居なければ大変けしからん事になってしまつ事に溜息を吐く少女、鈴仙・優暉華院・イナバ。

本来であればこの竹林の奥にある永遠亭にて師の元で薬学の勉強をしている時間の筈の彼女が、何故明らかにしょぼくれた様子で歩いているのか。

その理由は単純にして、酷く馬鹿馬鹿しい理由だ。

「姫の我儘。気まぐれ。引き籠り。求婚バスター。他には、ええと……」

「……」

愚痴愚痴と永遠亭の主の事を罵りながら歩いている鈴仙。

その原因はその罵詈雑言の一一番田と二番田の通り、主の我儘が原因であった。

曰く、『この妙な氣質の異変について、暇だから調べて来て』とのこと。

師匠に渡された薬学の本を読んでいた鈴仙、暇なのは貴方であつて私じやないと叫びたかったのだが、そこで世慣れしている性格が災いしたのだらう。

田上の要請を断れず苦労するという、日本産どころか地球産ではない月兎なのに現代日本のサラリーマンを彷彿とさせる優柔不断さで、結局その話に頷いてしまった鈴仙。

師匠であるハ意永琳に『姫から仕事を申しつけられたので出掛け来ます』と泣く泣く告げ、全く調査のアテどころかノウハウすら無く、それどころか雨具や弁当も無いまま出掛けた鈴仙。手荷物は出がけに師匠に渡された栄養剤の瓶が数本だけだった。

「効き田は保証するけど強すぎるから、何本も飲むと最悪爆発する……。何を入れたらそんなトンデモな栄養剤が出来上がるんですか、師匠……」

ジョリー・ロジャーの如き髑髏が描かれた、見るだに健康に悪い栄養ドリンクの瓶を見て、更に溜息を吐く鈴仙。

優しくも厳しい理想の師匠の最大の欠点は、時々知的好奇心の赴くままに妙な物を作る癖だった。

「それに調査つて言つても、靈夢や魔理沙みたいにノウハウがある

わけじゃないし……どうせ姫様だつて本氣で期待しているわけでもないだろ？……。どつか風雨を凌げる場所に少しお邪魔させて貰おつかなあ。」「

そして鈴仙・優曇華院・イナバ。この時点では異変調査に対する熱意はゼロどころかマイナスに突入していた。

調査を開始する前から全力でサボる方向に思考を傾け、しかし財布すら持つて来ていない自分の現状に気付いて頭を抱える。

「……人里の茶屋とか考えたけど、お金が無いから世知辛いわね、全く」

彼女はどうしたものかと思考を開始する。

そもそも鈴仙は人付き合いが得意なタイプでも、交友関係が広いタイプでもない。

神社の宴会などから顔見知りはそこそこいるが、こういう時に休ませると言って上がり込めるレベルの友人の心当たりは多くは無いのだ。

「あつ、そうだ。守矢神社なら……」

そして思い付いたのは、彼女にとつて手のかかる患者でもある山の上の神社の人間二人。

宴会の時には色々世話を焼いたり手伝いもした身であるので、雨宿りに上がり込んでも気の咎めは少ない。

まあ、貸しを返してもらうと思って雨宿りに行かせて貰おう。

「そうと決まれば、早速行動ね。いつまでも雨風に当たつてると、流石に身体に良くないし……」

今が夏だという事、人間よりは格段に丈夫な月兎である事がある
ても、無駄に風雨に身体を晒すのは医学上とてもじゃないが褒めら
れた事ではない。

そう結論付け、鈴仙は晴風の天候を引き連れて、守矢神社へと飛
び立つて行つたのだつた。

第二十八話・動きだす人々（後書き）

作中で鈴仙が言つてる栄養ドリンク＝國士無双の薬です。知つてゐる人が多いとは思ひますが、緋想天で使えるスペルカードであり、自身の攻撃力・防御力を強化する効果があります。効果は三本目まで累積しますが、四本目を飲むと何故か爆発します（自分はダメージ無し。敵にぶつけると大ダメージ）。本当に永琳は何を入れてこの薬を作ったのでしょうか。謎です。

第二十九話・守矢組+、出撃（前書き）

神奈子様の気質は捏造です。

永琳や輝夜、フランなど天則出演しない勢は、基本的に気質に関してはボカして書くか捏造させて頂く事になると思います。大人の事情とお思い下さい。

輝夜辺りは『天候：永夜（常に夜になる）』とかそれっぽい気しますけどね。あ、その場合永遠亭の人参畑が大変だ。

第一十九話・守矢組+、出撃

「……鈴仙さん？ 置き薬の売上回収はまだ先じゃなかつたでしたつけ？」

「別件よ。少し上がらせて貰つても つて、珍しいわね。靈夢、何でここに来たの？」

「私からすれば、あんたが一人で永遠亭から外に出向く方が珍しいけどね。どうしたのよ、鈴仙」

西宮と早苗が靈夢を連れて守矢神社に戻ってきたのと、とある来客の到来は奇しくも同時だつた。

びしょ濡れになつた鈴仙・優曇華院・イナバその人と、西宮・早苗・靈夢のトリオがほぼ同時に神社の前に到着したのである。

はて何用かと首を傾げる西宮へと鈴仙が返し、その鈴仙と靈夢は互いに歩くのが珍しい人種である相手が守矢神社に来た事を訝しがる。

元来からして鈴仙は非アクティブ派であるし、靈夢も用事も無いのに神社の外に出向くような性格はしていない。

「私は姫様から無理難題を押し付けられて、避難場所にここに来て貰つたの。割と個人的な付き合いがあるしね。そつちは？」

「……私は 」

そして溜息交じりに鈴仙が言つた言葉に対し、靈夢が倒壊した神社を思い出したのか言い淀む。

無関心で冷静な靈夢らしからぬ反応に鈴仙が首を傾げるが、彼女が何か言つ前に西宮が割り込んだ。

「鈴仙さん、申し訳ないんですがその件に関しては俺が説明します。

……東風谷、博麗を客用の寝室に案内してくれ」

「あ、はい。分かりました。鈴仙さん、すいませんが急ぎますので。御挨拶も満足にできず申し訳ありませんが、御用向きは西宮にお願いします」

「……悪いわね」

「なんの。まあとりあえず休めよ、博麗。話はそれからだ」

そして早苗は鈴仙に一礼して、靈夢を連れて社務所に入つていく。去つていぐ一人を見送り、守矢神社の前に残されたのは西宮と鈴仙だ。

「こんと首を傾げ、一拍遅れてへによりとウサ耳も垂れさせながら、鈴仙が西宮に声をかける。

「……何があつたの？」

「博麗神社が局所的な地震で潰れました。俺と東風谷は潰れた神社の前で呆然としてた博麗を保護して連れ帰つて来た所です」

「へえ、神社が　　つて、ええ！？」

その言葉に鈴仙が驚愕、愕然といった面持ちで声を上げる。

無理もあるまい。博麗神社は幻想郷の要の一つだ。それが潰れるなど、穏やかな話とは言い難い。

「流石に博麗もかなり参つたみたいで、少し揉めた結果ですがとりあえず東風谷についていて貰つて、ウチの神社で休んで貰う事にしました。八雲様がいればもう少し話が早かつたのでしょうけど」「紫は……うん、まあ能力的には比類無いだろうけど、眠りが深いのがねえ」

八雲紫。幻想郷においても最強格の能力・妖力・知力を兼ね備え

る妖怪の賢者。

一見すると酷く胡散臭いが、その実は律義で優しく情に篤い人柄の持ち主だ。

幻想郷の大物達からの信頼も厚く、風神録異変では反目に近い状態であつた天狗も、八雲だけは敵に回すべきではないと判断している程だ。

およそ考え得る限りで万能と言える彼女の問題点は二つ。
一つ目は話し方や態度の胡散臭さも比類無く、非常に誤解され易い事。

二つ目は非常に眠りが深く、冬季には冬眠と称して余程の事例が無い限り月単位で引き籠り、そうでない時期も一度眠ると非常に長時間起きて来ない事である。

橙の住処でもあるマヨヒガに居れば話は早いのだが、そうじやない場所で寝ていた場合、式神である藍を発見する以外に接触の仕様が無いのだ。

「それで、鈴仙さんは避難場所と言つてましたか」

「まあねー。姫から無理難題を押し付けられたんだけど、私の気質つて外出に向いてないから嫌になっちゃって。ここで休ませて貰えないかなー、つて」

「ああ、成程……。確かにウチの神社はそういう面で楽ですよ。神奈子様と諏訪子様の気質が相殺しあつて、非常に過ごし易いです」

この異変、気質は基本的に靈力・妖力の強い者の気質ほど表に出やすい。

例えば永遠亭では永琳や輝夜の気質が天候に現れる事が大半になつてゐるし、白玉楼は幽々子の影響で雪景色だった。

そして守矢神社はどうかと言えば、諏訪子の気質である『梅雨』と神奈子の氣質である『日照り』が相殺して、適度な日光と適度な

雨といつ実に過(い)し易い気候になつてゐるのだ。

鈴仙も決して弱い妖怪ではないが、一柱を相手として比較するには流石に弱い。

彼女の氣質である『晴嵐』が表に出る事は、ここに居る限り然程無いだろつ。

そう判断して安堵の声を上げる鈴仙だつたが、

「じゃあ、俺は少し出で来ますから、滞在云々に関しては神奈子様か諏訪子様に言つて下さ。本殿にいらっしゃると思つますので」「……え」

続く西宮の言葉に顔を青くする。

そう、彼女としては西宮と早苗に貸しがあるから休憩場所に選んだというのであって、守矢神社そのもの、より正確に言つならば神奈子と諏訪子に貸しがあるわけではない。

ある意味西宮よりも現代日本人らしい精神性を持つ鈴仙が、貸しがあるわけでもない別の組織のトップ相手に『ちよいと休憩場所にさせて貰えますか』といつ、一種図々しい要求を出来るかどうか。

答えは否だ。

「ちよ、ちよつと待つてよ！ 取り次いで頂戴よ、私は御一柱相手にツテとか全然無いのに！」

「大丈夫ですよ、別に『休ませてくれ』程度で腹を立てる方々でもありませんし、宴会で顔合わせくらいはしたんでしょう？」

「無理、絶対無理！ 何かやらかして姫や師匠に迷惑かけたらと思うと、今から胃に穴があきそうになるのよ！」

「……胃腸薬をお勧めします。ウチの薬箱にありますので、勝手に探して飲んで下さいね。場所は分かります？」

「私が設置したんだもん、分かるに決まつてるでしょうが…？ つ

ていうかそれウチの薬じゃない！」

「効き目抜群でしょう？　じゃあこれで解決ですね、俺はもう行きますんで」

「効き目？　当然じゃない、師匠の薬だからね！……って、違う違う！」

敬愛する師匠の薬を引き合いで出されて胸を張る鈴仙だったが、一瞬後に我に返つて慌てて西宮に向き直る。

飛び去ろうとしていた西宮の腕を引っ掴む彼女は地味に必死だ。

『兎は寂しいと死ぬ』と良く言われるが、彼女の場合目上の人妖の前に放り出されても死ぬらしい。主に胃が。

「そんなに急いでどこに行くのよ。神社が潰れたって言ってたけど、それと関係があるの？」

「ええ、まあ犯人探しに。少々腹が立ちましたんで」

「腹が立つたって……」

「あー、いや。少し愚痴になりますけど聞いて貢えます？」

「……良いわ。カウンセリングも医者の役割か」

腕を掴まれたまま地を蹴つて飛び始めた西宮に、遂に鈴仙も観念したのだろう。

溜息を吐きながら、彼に追従するように神社から離れるルートで飛び始める。

先行する西宮は振り向かず、平坦な調子で言葉を紡ぐ。

「俺、博麗つてぶっちゃけ化物の一種だと思ってたんですね。人の身で神奈子様と渡り合い、人間と妖怪の調停という役割をこなし、これまでに数多の異変を解決して来た、人にして人にあらざるモノみたいな物だと」

「その割にはタメ口だつたじゃない」

「……何ででしょうね。奴の雰囲気見ると、敬語で話すのも馬鹿らしくなったからかもしませんけど」

溜息を吐きながら、飛行速度は緩めずに言葉を続ける。
対する鈴仙は要領を得ない彼の言葉に首を傾げながら、腕を掴んだまま追従する。

「まあとにかく、俺は博麗の事をそう見ていたんですよ。だから、今回神社を無くして呆然としている博麗に、配慮の欠片も無い実務最優先の言葉とか吐いちゃって……泣かれました」「泣いた……って、あの靈夢が！？」

「ええ。泣かせちまつたんですね、あの博麗を。だから」

そして振り返る西宮の表情は、いつもの温厚そうな糸田ではなく、両目を開いた据わった表情だ。

早苗がいれば苦笑交じりに断言しだろう。

彼は今、確実に怒っている。しかもその対象は事件を起こした黒幕もそうだが、

「何よりもまず泣かせた自分に腹が立つから、この件に関してはとにかく、やれる事からやつて行きます。まずはこの事件を起こした黒幕を探す。そこから先は……まあ、その時考えましょう」「……危険じゃない？ 博麗神社に喧嘩売るような相手が黒幕よ？」「勝ち目が無い相手に喧嘩売るのが嫌なら、俺は先の異変で霧雨相手に立ち回つてませんよ」

そして一切の躊躇無くそう返した西宮に対し、鈴仙は一人の少女の面影を幻視した。

男女の別こそあれ、彼の雰囲気は彼女が良く知る一人の少女に良くなっていたのだ。

「……成程。あー、紫や文が貴方を実力以上に評価してる理由がよく分かつたわ。貴方つて表面上は今の大和の人間に近いけど、根っこは昔の外の人間ね、こりや。頑固で負けず嫌いで肝の太い、大昔の大和の人間　　私はその時代の大和知らないけど、姫や師匠が嬉しそうに妹紅の事をそう話していたっけ」

魔理沙と風神録異変で対峙した時に近いだろう、据わった目で返す西富の言葉に、ここに至つて鈴仙は完全に説得を諦めた。
と、言うより彼女が感じた今の西富に良く似た雰囲気を持つ少女を思い出したと言つた方が正解か。

藤原妹紅。

蓬莱山輝夜の宿敵、と一言で表現して良いのかも良く分からぬ少女。

大昔に蓬莱の薬を飲んでから、それこそ千年以上輝夜を探し続けて来た筋金入りの頑固者だ。

となれば説得は無理。

かと言つて神々に『ヨリーッス、ちょっと永遠亭追い出されて来たのでここで休ませて下さい。ウイッシュユー』などと言える度胸は無い以上、現状での鈴仙の選択肢は西富に付き合つ事の一択となる。

「……まあ、元々姫様から与えられた仕事も異変の犯人探しだったしなあ。あーあ、結局眞面目に仕事する事になるなんて…」「ついて来てくれるんですか？まあ俺としては助かりますけど」「早苗は靈夢についてるみたいだし、神々二柱相手に話を通すとか私の胃が死ぬわ。だつたらこっちの方がなんばかマシよ」

そして諦めた鈴仙が西宮に追従するのを止め、速度を上げて横に並ぶ。

「それで？ まずはどこに向かうの？」

「恐らくあの地震は、この気質の異変の延長線上にあります。ならば

「

すつ、と西宮が前方を指し示す。

まだ遙か遠いが、うつすらと霧に覆われた湖の遠景が確認できた。

“氣質”のプロフェッショナル、美鈴さんに話を聞きに行つてみましょう。駄目なら駄目で、図書館の蔵書から何か知識が得られるかもしません

「なるほど、まずは紅魔館か。妥当な線ね、付き合いましょう」

かくて、鈴仙と西宮の一人は紅魔館へと進路を取る。

理詰めで物事を考えるこの行動が、実は本命から遠ざかっている事に、彼らはまだ気付いていない。

紅魔館へ向けて空を飛ぶ彼らから立ち上った氣質は、上へ向かっている。

妖怪の山の頂上にある守矢神社、その更に上 “天界”と呼ばれる天人の住まう領域へ。

#

「どうだった、早苗？ 霊夢の様子は」「はー、どうやら落ち着いた様子で……今は客間の布団でお休みに

なっています」

「そうか。……八雲に安定した連絡手段があれば良いのだがな」

「まあ無い物ねだりだね。まずは博麗の巫女を保護できただけで良しとしようよ」「みう

そして西宮と鈴仙が飛び去つて暫し。

守矢神社の本殿に入つて来た早苗は、そこで待つていた神奈子と諏訪子に現状を報告していた。

流石に博麗の巫女も、目の前で神社が潰れたショックは大きかつたのだろう。

早苗の言葉通り、靈夢は今は守矢神社の社務所にある客間で、布団に包まって眠っている。

「狙いは神社だったのか靈夢だったのか……まあ、どちらでも構わん。八雲には借りがあるからな。もし次の攻撃対象にこの神社が選ばれたとしても、私が居る限り靈夢に手出しあらせんよ」

そして神奈子は早苗からの報告を聞き、鼻を鳴らして胡坐をかく。どこからでも来るが良いとでも言わんばかりの態度は、流石に数多の戦を潜りぬけた軍神だ。

しかしその横の諏訪子は懸念がある様子で、自信満々といった様子の神奈子の態度に口を挟む。

「けどその場合、神奈子と　　念の為、私も神社に残る事になるね。幻想郷の住人、それも異変の首謀者クラスには私達と同格程度の実力者も居る。万全を期すなら私も残るべきだ」

「そうだな。……丈一は異変について調べに行つてしまつたが……」

「私も調査に行きます！　靈夢さんの神社を壊すような人は、私自

らお説教してあげます！」

「……やっぱりそうなるよねえ」

諏訪子が懸念が当たつたとばかりに肩を竦める。

眼前の風祝、そして見習い神職の少年は、積極的にこの件に対して関わる姿勢だ。

弾幕ルールに則つた異変ならばそれでも良いのかもしないが、相手は神社への直接攻撃なんぞをやらかすような手合いである。スペルカード・弾幕に則つて行動してくれるかどうか、そしてそんな相手に対する調査をやらせて良いのか。

それを懸念する諏訪子であつたが、しかし今度は諏訪子に対して神奈子が横から口を挟む。

「……早苗が行きたいならば行かせてやるのも親心だらう。少なくとも、早苗と丈一は前の異変では我らの予想を越えた働きを見せた。既に一人前の風祝と神職だ。そして一人前の相手に過保護になるのは、褒められた事ではないだらう？」

「……むう。まあ確かにそうなんだけどさ」

諏訪子はやや納得がいかない様子でありながらも、神奈子の言葉に理を認める。

確かに過保護に過ぎてもまた、早苗や西面の為にはなるまい。

「けど、このまま一人で送り出すのもね。誰かあと一人くらい供があれば」

「チイーツス！ 神奈子様諏訪子様風祝さんあと負け犬居るツスかーー？」

そして一人で早苗を送り出す事に対する懸念を重ねて口に出す諏

訪子の言葉に、今度は横の諏訪子からではなく、神社の前の方から横やりが入った。

元気な、ただし冷静に考えるとかなり無礼な声。

このような言葉を満面の笑顔と共に言いながら、入室の許可も待たずに飛び込んで来て床を転げ回り、檜の床を堪能するよつなおバカさんは幻想郷広しとはいえ一人しか居ない。

「ヒヤツハー！ 檜の香りっス、癒されるッスー」

「……犬走か。どうした？」

「あ、神奈子様チイーツス。えっと、今現在起きている異変に関して、西宮君が結構情報を集めてた筈ッスから聞きに来た所ッス」

呆れた様子の神奈子の言葉に、転げ回りながら器用に顔だけを神奈子に向けて桺が返事を返す。

その桺を見て、早苗がこてんと首を傾げた。

「えっと、諏訪子様。誰かと一緒に行けば問題無いんですね？」「……いや、まあ、確かにそう言つたけど……」

「じゃあ桺さん、西宮は今出掛けていますけど、後でお話させますんで少し私に付き合つて貰えません？」

「『かつぶめん』一個で手を打つッス」

『オイ、幾らなんでもコイツはねーだる』とでも言いたげな表情の諏訪子の前で、値崩れレベルの格安で交渉が纏まつた。

用事の内容を聞く前に快諾した桺をお供に、やる気満々の早苗は早くも本殿を飛び出さんばかりの状態だ。

「それでは諏訪子様、神奈子様。風祝の早苗、出撃いたします！」

「……まあ、なんだ。調査に行くのは構わんが無理はするなよ、早苗、犬走」

「調査？ 何の調査ツスか？ 大天狗様の禪の色？」

「いいえ、違います。実は――」

そして言つべき言葉が見当たらないまま一人を見送る形となつた諏訪子。

本殿の前で、飛び立ちながら会話をしている一人の声が徐々に遠ざかっていく。

がつくりと肩を落とす諏訪子に対して、神奈子が鷹揚に笑いながら声をかけた。

「過保護だな、諏訪子」

「神奈子がこういう問題に関しては放任主義過ぎるんだよ！」

そして、意外と苦労性な祟り神の叫びが、守矢神社の本殿に響き渡つたのだった。

#

そして、そんな叫びなど露知らず。

「ふむふむ、事情は分かったツス。それではまばどこへ向かうんスか？」

「人里、永遠亭、紅魔館、白玉楼……そこら辺は西宮に任せておけば、情報収集に抜かりは無いと思うんです。だから私は、それらではない場所で、ある程度事情通そうな方が居る場所を巡つてみようかと」

「事情通そうな……となると、ある程度以上の年月を経た大妖怪つて事ツスか？」

「そうなりますね。どこか心当たりはあります？」

「だったら多少危ないツスけど　　『太陽の烟』なんてどうツス

かね？ 文さんの話ではアルティメット・サディスティック・クリ

ーチャーが居る危険地帯って話なんスけど」

「アルティメット・サディスティック……？ なんですかそれ？」

「さあ？ 文さんは昔にも何度か会つたことのある妖怪らしくて、

花の異変の時も色々と愚痴つてたツスけど。それによると

早苗と桜の体当たり情報収集は、いきなりハードモードな場所への特攻を開始しようとしていた。

#

太陽の烟。

幻想郷の中でも『風光明媚』という点においては最上位に入るであろう、向日葵の花が咲き乱れる草原であるそこは、同時に危険度でも最上位の一角として数えられていた。

結果としてそういう人も妖怪も足を踏み入れないその場所が、幻想郷でも最上位の危険地帯とされる理由は一つ。そこに住む一人の妖怪の力と性質故の物である。

風見幽香。

肩にかかる程度の長さの緑の髪と、白いブラウスによく映える赤いチェックのベストとスカート、そして大きな日傘が特徴である花の妖怪。

幻想郷縁起で唯一無二の『人間友好度：最悪』と表記された妖怪であるも、人里などに顔を出した際の彼女は極めて紳士的だ。

長く生きた大妖怪である彼女は基本的に落ち着いた性格をしており、若い妖怪に比べると余程人間に友好的とも言える。

そんな彼女が『人間友好度：最悪』と表記される理由が、この太陽の畠だ。

さて、向日葵と言うのは人間にとつて極めて有用な植物だ。種は食用になり、種から精製すれば油も取れる。特に基本的な生活技術が江戸時代レベルの幻想郷において、油は有効な商売源だ。つまりは上手くすれば非常に金になる可能性を秘めた花なのだ。

そして以前、とある人間がそんな『金の成る花』である向日葵が咲き乱れるこの地に目を付けた。

要は自らの金銭欲を満たす為にこの地を手に入れようと、妖怪退治屋などを連れてこの地を制圧しようとしたその男は…………しかし自らが愛する花をそのような事に使おうとされた事に激怒した幽香によつて血祭りにあげられた。

彼が太陽の畠に住む妖怪、つまりは幽香を退治する為に雇つた妖怪退治屋も同様だ。

更に怒りの赴くままに幽香が人里に逆侵攻をかけようとして、当時の博麗の巫女、並びに八雲紫と激突。人的被害こそ件の男と妖怪退治屋以外には無かつたものの、人里付近で繰り広げられた激戦は、人里の人間に『太陽の畠の大妖怪』の存在を恐怖と共に強く刻みつけた。

その一件以来、風見幽香の存在は幻想郷の人間に恐れられる妖怪となつたわけだ。

また、それ以来人間がこの太陽の畠に近付く事を嫌つた幽香は、殊更に人間に恐れられるような態度を取る事が多くなり、その結果が『人間友好度：最悪』と書かれた幻想郷縁起というわけだ。

しかし先にも書いたとおり、この地に踏み入らなければ風見幽香はむしろ紳士的な妖怪だ。そして長年彼女がここに居座っていることから、周囲もそれを概ね理解している。

件の一件以来積極的に太陽の畠に踏み込もうといふ愚か者は極端に減りそれでも花の異変の折には何人かやつて来たが彼女はおおむね平穏な日々を送っていた。

今日もまた、気質の異変などお構いなしに花に水をやつていた幽香は、何に煩わされる事も無くご機嫌であつた。晴れの気質を持つ彼女にとって、水やりさえどうにかすれば、この異変はむしろ歓迎すべき物だ。

「……あら？」

『助けて！』

しかしその平穏は不意に破られる。

この地に咲く向日葵が、彼女にSOSを送つて来たのだ。

風見幽香の能力は『花を操る程度の能力』であり、その内容には花との意思疎通も含まれる。

それは基本的に戦闘に向かない、純粹な戦闘に於いてはオマケ程度にしかならない能力だが、索敵に関してはかなり有用な能力だ。特にこの太陽の畠に侵入者があつた場合、向日葵の花がすぐに彼女に侵入者の存在を知らせてくれる。

そして今、幽香に向けて放たれているSOSもまた太陽の畠への侵入者を知らせる物であったが、しかしその内容は今までに無いくらい切羽詰まっていた。

それこそ、これほどまでに切羽詰まつたSOSを聞くのは件の人間による太陽の畠侵攻事件以来である。

『助けて！ 变な人がいる！ 变な人が何かしている！』

「落ち着きなさい。何をしているか分かる？」

『分からぬ！ 分からぬ！ 怖い！ 怖い！』

「その人は貴方達に危害を加えて来てる？」

『そうじやない、けど何をされてるのか分からぬ。怖い！』

別段妖怪化したわけでもない草花との意思疎通は、単語主体の極めてたどたどしい物だ。

しかしその送られて来る言葉から、幽香は太陽の畠に侵入した何者かが、これまで向日葵の花々が見た事も無い『何か』をしていると判断する。

「……何の心算か分からぬけど、私の花に手を出したらタダじゃ済まぬわよ……！」

そして地を蹴り、そのSOSがあつた方向へ飛翔する幽香。握り締めた日傘の柄が、みしりと音を立てる。

彼女は基本的には紳士的なのだが、花に関する事となると沸点が低いというのが、彼女を古くから知る人妖の共通見解だ。

そしてほぼ戦闘態勢で現地に到着した幽香が見た物は、しかし、
「良いですよー！ 超良いですよー！ もうちょっといい、艶をイ
メージした感じで、ハイこっち向いて微笑んでー！」

様々な角度から向日葵を携帯電話のカメラ機能で激写する

青白巫女、もとい東風谷早苗。

キレキレの動きで向日葵の周囲を回り、マジンガーZのストラップが付いた女子高生らしからぬ無骨な携帯で、地べたを這うような

といふか実際這いながら ローアングルからや、スタイルッシュなポーズで横顔（早苗談）を写すようなアングルで。

パシャパシャと撮影音を響かせながら、ありもしない向日葵の『腰のぐびれ』や『はにかむ笑顔』、拳句の果てに『悩殺ポーズ』などを要求しながら『真をとりまくつ』ている。

「桜ちゃんちょっと5cm横に移動して下さい。レフ板ちょっと掲げてー」

「ういーっス！　はい、モデルさんもカメラマンさんもノッてるツスねー。はい、モデルさんちょっと胸の谷間を寄せて上げるよついー！」

「お、良いですねー。ちょっと過激な夏の魅力って奴ですね！」

更にその情景の力オスを加速するかのようにレフ板を両手で掲げ、光量補正で撮影をサポートする白狼天狗の姿。

一体彼女達の田には何が映っているのだろうかと心配になる妄言を吐きながら、キレキレの動きで立ち回りつつ激写を続ける巫女と天狗。

大妖怪、風見幽香。

まさかの未知との遭遇であった。

「……なんなの、これ……」

向日葵は何をされているのか分からないとSOSを送つて來いたが、幽香をしても何をしているのかが全く分からない。

悪意は無いように見えるが、それ以外の人としても妖怪としても失つちやいけない何かも一緒に無くなっている気がする光景である。見えもない夏の砂浜にて、架空の水着を脳内で捏造しながら、^{モデル}向日葵のはにかむ顔を幻視しつつ激写を続ける馬鹿A、そして馬鹿

B。

なまじ悪意じやないのが透けて見えるだけにそれが力オスを助長し、幽香の腰も若干引けている。

太陽の畠への侵入者に対して『あの』風見幽香が怯むという、有り得ない光景が続く事暫し。

ようやく我に帰った幽香が馬鹿一人に対して声をかけたのは、十分の長きの後となつたのだった。

#

「やー、どなたかは知りませんが、驚かせたようで本当に申し訳ありませんでした。別用で来たんですけどあんまりにも綺麗な向日葵だつたんで、写真だけでも西富や御二柱に撮つて行つてあげようと思つたんですが……」

「どうせなら可能な限り綺麗に撮つていこうって話になつたんスよねー。そしたらなんかテンション上がっちゃつたんスよ。文々。新闇の撮影用に持たされてたまんまの折りたたみのレフ板とか出しちやつたぐらいにして

「でもおかげで良い写真が撮れました。お騒がせして申し訳ありませんでした、美人のお姉さん」

「あ、いえ、うん……せめて次からはもう少し、その、何をしているか分かる感じでお願い」

さて、声をかけた幽香に対する、馬鹿Aと馬鹿Bの反応は上記のとおりである。

何をしているのかと声をかけたところ、あまりにもあつけらかんとした反応が返つて来た物だから、幽香側としては最初から崩れて

いたペースが更に崩壊させられた状態だ。

がつくりと肩を落としながら、しかし幽香は眼前の馬鹿一人に対し、精一杯の抵抗として嫌味を返す。

「全く、お騒がせだ」と。放つておいたらテンション上がり過ぎて、向日葵を引っこ抜いて持ち帰りそうな勢いだったわね

まあそんな事をしたら殺すけど、などと口の中だけで呟いた幽香。

或いは少しでも肯定するような事を眼前の一人が言つた瞬間、そこから脅して追い返す心算だったのかもしれない。

しかしそんな彼女に対し、早苗はビシリと指を突き付ける。

「何て事を言つんですか！ 確かに綺麗な向日葵ですが、故にこそそのような事は無作法です！」

「……」

ふんすかという擬音が付きそうに頬を膨らませた彼女は、思わずきょとんとする幽香へと指を突き付けたまま前進。

相対的に、幽香がやや身をのけぞらせるよつた形になる。

「美しいから、愛してるからこそ手を出さない。そんな愛し方もあるのです！ えーと、なんでしたつけ花さん…」

「『イエス、ロリータ。ノータッチ』？」

「そう、それです！」

「いやいやいやいや」

早苗が熱く語る花の愛で方が途端に胡散臭くなりかけた所で、慌てて幽香が口を挟む。

しかし口を挟んだ彼女の表情は、完全に毒気が抜かれていた。

初手で崩壊させられたペースが、崩壊どころか完璧に消滅させられた形だ。

溜息を吐きながら両手を上げ、幽香は口では田の前の一人には敵わない事を認めるように頃垂れた。

「確かに私が悪かつたわ。冗談よ、うん。つていうかそれをされたら私が怒るわ」

「そうでしたか、失礼しました。貴方も『イエス、ロリータ。ノーツッチ』の心が分かる人なんですね！」

「それは違うから。絶対に違うから。って言つた貴方達、何しに来たの？ ここは太陽の畠と言つて……」

「はい。風見幽香さん……という、怖い妖怪の方がいらっしゃるんですね？ ですが大妖怪の方なので、物知りな方でもあると伺っています」

幽香が先程から抱いていた疑問を口に出すと、それに答えたのは早苗だ。

確かに歳経た大妖怪は大抵は世の中の事に詳しく、知識が多い。幽香もまた、率先して知識を溜めこむような、所謂知者・賢者型の性格ではないものの、長年の経験からそれなりの知識はある。

そしてぎゅっと握りしめた大幣を胸に、早苗は強い意志を秘めた目で幽香に向きあう。

「私達はこの異変に関する情報を集めているんです。人里、紅魔館、永遠亭、白玉楼 そういうた『行き易い』場所に関しては私の相棒が既に行っている筈ですから……。だから私は情報収集が難しそうですが、大妖怪の方に話が聞けるかも知れないここにやつて来たんですよ」

「成程、この異変について、ねえ」

そして恐らく自分が風見幽香だと気付いていないのであらう少女の言葉に、幽香は納得したように頷いた。

氣質と天候の異変。下手すれば農耕などに大被害が出る異変ではあるものの、強かな幻想郷の住人の立ち回りもあり、誰もこれまで解決に動いていなかつた異変だ。

動くのはてつきり靈夢辺りかと思つていたのだが、それより先に動いた目の前の少女　　青と白の巫女に、幽香は苦笑を顔に浮かべる。

情報を聞く相手に関する情報を持たずに飛び込んで来る。馬鹿と紙一重の無謀さだが、といふか先の言動を考えると紛れも無い紙一重の向こう側にブツ飛んだ特級の馬鹿だが　　裏表の無い真つ直ぐさと、花を大事に思つ心は幽香にとつて好ましい物だった。

「貴方、その格好から察するに……巫女よね？　博麗神社以外の神社が山の上に来たつて話だけど、そこの巫女　　か」

「えーと、正確には風祝と言つんですけど」

「要は巫女の亞種でしょ？　あ、そう言えば名前をまだ名乗つてなかつたわね」

そして幽香は、にこりと笑みを浮かべて目の前の少女に告げる。

「はじめまして、猪突猛進な巫女さん。私は風見幽香。貴方達が探していた、花の妖怪よ」

その言葉に桜と早苗は驚愕の表情を浮かべ、同時に叫ぶ。

「貴方が文さんの言つていた、アルティメット・マジック・アーツ究極加虐生命体！？」

「うつそ！？　文さん酒の席で『ゴリラみたいな腕力馬鹿』って言つてたッスから、もつとこゝう、世紀末霸者的な人かと！？」

「詐欺ですよ！　私、この花畠にラオウが居る事を^{きたい}覚悟して来てた

のに！「黒王号は！？ 黒王号だけでも居ませんか！？」

ベキリと音をたてて、幽香の手に握られた日傘の柄が折れたのは次の瞬間だった。

同時に射命丸文の身に、死亡フラグが立つた瞬間である。

『あのカラス、次に会つたら殺す。』

言葉には出さずとも、全身から旧知の鳥天狗への殺意を立ち昇らせる花の大妖怪だった。

第二十九話・守矢組+、出撃（後書き）

鈴仙・西宮組。とりあえず紅魔館へ情報収集に出向く。
早苗・桜組。西宮がこれまで情報収集をしていない場所を探そうとして、まずは太陽の畠へ。

原作緋想天とは違うルートになりますが、色々と考え中。
ちなみに前回の幽々子の発言から察している方もいらっしゃるでしょうが、ボスは天子『だけ』ではない予定です。

あと、妖夢が持ち出したスコップは先端がプラスティック製の雪かきスコップですので、あのまま出撃していたら斬れる物など何も無い有様だったと思われます。

閑話其の参・彼と彼女の外の世界時代（前書き）

オチ無し、ヤマ無しの日常話です。

短めに4000字ほど。

なんとなく思い付いたので、彼と彼女の外の世界でのストーリー。
まあ閑話つてやつです。彼らの高校がフリーダムなのは氣にしない
い方向で。

閑話其の參・彼と彼女の外の世界時代

外の世界時代の守矢神社において、家事全般・それに伴う設備関係全般に関する決定権を持つているのは、早苗の母であった。

これは大抵の世帯でそうであろう。家の中の事、特に家事に関しては男女平等が叫ばれる現代においても、女性の立場が圧倒的に強い。

外でブイブイ言わせている大企業の重役であるお父さんが、休日には『掃除の邪魔だから出てけ』と掃除機持った嫁さんに追い出されるような物である。

しかし守矢神社の場合、決定権一位は早苗の母であるも、第二位に関しては他と事情が違つた。

守矢神社における家事全般の決定権第二位を持つのは、何故か神社の住人ですらない西宮丈一だったのだ。

「……と、いうわけでおばさんに頼まれたんで、神社の社務所に設置するエアコン買いに行くぞ」

「……何でその用件のメールが私の携帯じゃなくて西宮の携帯に入るんでしょう……？」

「家事に関する信頼度の差だな」

そしてその結果、早苗の母から全権委任を受けた西宮丈一は、とある秋の日の学校帰りに家電量販店へ向かう事となつた。

やや着崩した学校指定の制服の西宮の横で、女子の学校指定ブレザーをきつちりと着た早苗が釈然としない様子で首を傾げている。

しかし十年来の付き合いから、早苗の母は既に家事全般に関しては浮世離れした実の娘より、現実的でかつ器用な娘の相棒を頼る事

になっていた。

そもそもが西宮の料理た家事の師匠が早苗の母である。

幼い頃から守矢神社に通い詰める中で、諏訪子や神奈子を祀る本殿をもつとしつかりと掃除したくて早苗の母に効率的な掃除の方法を聞いたのが始まりだった。

余談だが、その時には諏訪子と神奈子が感動の余りに涙を流したとか流していないとか。ちなみに早苗は今でも掃除とかは苦手だ。料理とかはもつと苦手である。スクランブルエッグからスクランブルダッシュを作り出す、負の方向の奇跡の巫女だ。

ともあれその件を切っ掛けに家事全般に関して早苗の母から手ほどきを受けた西宮を、師である早苗の母は全面的に信頼していた。その結果、今回家電製品の買い替えにあたって、全権委任役として家電量販店に向かう事になった西宮である。

早苗はその横でふーたれた表情で、学生鞄を手に歩いている。

「私だつて色々選びたいのに……。某社の最新型全天候工アコソンとか、広告で見て欲しくなつてたんですよ。冷房、暖房、湿気取りなどの基本機能に加えて、簡易型AIによる『お任せ』という完全ランダムによる突発的空調機能。素敵だと思いません?」

「それって確か、本当に任せ過ぎて冬に冷房ガンガンかけたり夏場にヒーター爆熱させたりするアホ機能だろ。勢いだけで開発部が付けた機能がオミットされないまま製品化されてしまったってのが丸見えだぞ」

「いやいや、その自分勝手さがまるで生きてるようだとかで、ペットを飼えない家庭の方や一人暮らしの方に好評なんだとか」

「電化製品に人格を見出してどうする……今回は燃費が良くて安い商品を探すのが目的だからな。余り変な事するなよ」

トンデモな家電製品を欲しがる早苗の言葉に、呆れたように西宮が溜息を吐く。

「」の一人が買い物に行くと、概ねこんな感じの会話がいつだらうと交わされるのだ。

目的から逸れて変な物を買おうとする早苗と、ブレー キ役の西宮といつ構図である。

かなり後の話となるのだが、幻想入りした後もそれは変わらない。

早苗の母が、諏訪子が、神奈子が早苗に財布を握らせない理由であつた。

しかし当の早苗は納得いかないようで、『ふんふん』とでも擬音が付きそうな顔で、

「ふんふん！」

マジで言つた。

女子高生がする動作としては如何な物かと、横の西宮が顔を抑えて天を仰ぐ。

「……家電量販店での用事が終わつたら、クレープ奢つてやるから。駅前に出来たクレープ屋、行きたいって言つてたる」

「良いんですかっ！？ やつたあー！」

そして食い物で一瞬で機嫌が直る。

安定のチョロさである。横を歩く西宮が、『コイツ食い物に釣られて誘拐されたりしねーだらうな』と不安になるレベルだ。

「西宮は何を食べますか？ 私、アイスとかカスタードとか生クリームとか全部盛りの奴にするつもりですけど」

「俺の金だから遠慮しないよ馬鹿野郎。……そうだな、チョコクリー
ム辺りで良いか」

「一口食べさせて下せこみゅ。私も一口あげますか」

「お前それで毎回大口開けて思い切り食つからな……」

肩を竦め、しかし言葉とは裏腹に嫌そうな様子はまるで無い西富
が歩いて行き、その後ろを小走りに早苗が追つ。

何の事は無い、いつもの光景。

幻想入りする前の彼らにとつての外の世界の日常の一コマである

#

筈だった。

女心と秋の空。秋の天気は変わり易い。

西富と早苗が会話を交わしていた段階では綺麗な秋晴れだった空
は、彼らが家電量販店で買い物を済ませて配達を頼み終わった段階
で、『これでもか、これでもか、えいえい』と言わんばかりの豪雨
に姿をえていた。

生憎と天気予報が『大雨注意報』を出したのは毎過ぎの話。

早苗と西富が学校に向かつた段階で、傘を用意しようとこいつのは酷
な話であった。

天気予報をしてもイマイチ予測しきれなかった、女心もびっくり
の変わりようを見せる秋の天気である。

「……あーあー、ビーすんだコレ。傘無えよ

「西宮、気合いで突破しましょ。ここからクレープ屋まで走れば10分とかかりません」

「帰る事を考えろよ。何でこの天氣でクレープ優先なんだよ。どんなだけ食いたいんだよお前」

家電量販店の中から、一人は窓越しに外の天氣を眺めている。

夕方の家電量販店は、彼らのように学校や仕事の帰りに寄つたまま大雨に見舞われた人々が多く見受けられた。

売り物のテレビから流れているニュースを見ると、この急な豪雨で浸水した建物などについての話題が出ていた。

地方局のニュースが映しているのは早苗と西宮にとって見覚えのある学校であり、

『 ×市立第一高校では、浸水に対して生徒達が独自にポンプ排水、土嚢を築く、バケツリレー、泳ぐ、飲むなどの対策を取つております』

「……浸水か。こりゃ学校、明日は休みかねえ？」

「だつたら良いんですけどね」

「まーな

興味なさげな西宮の言葉に、早苗が返し、彼もまたそれを否定する事無く頷いた。

守矢神社の風祝と神職見習いだ。彼らにとつて、学校もまあ大切な日常ではあるが、守矢神社関係の事柄の方が優先度が高い。

その神社に関しては高台の上にある立地だ。浸水の心配はあるまい。

「とりあえずおばさんにメール打つておくぞ。天候見て行動するか

「とりあえずおばさんにメール打つておくぞ。天候見て行動するか

ら、いつ帰れるかは分からなってな

「まあ神社も開店休業でしょうけどね、この天気だと」

やや型落ちの携帯電話　　後に河童のことつの手に渡るそれで早苗の母にメールを打つ西宮。

その横で、早苗は見るとも無しに地方局の一コースを続けて見ていた。

水泳部の連中が増水したプールで楽しそうに泳いでいる、彼らの高校の一コースは既に終わりだ。

続いて画面に映っているのは駅周辺の情景で

「……あ」

「どうした？　メールはもう打ったが、何かおばさんにおく事でもあつたか？」

「西宮、大変です！　今一コースの画面にちりりと映つたんですけど、件のクレープ屋の閉店時間まであと30分くらいしかありませんよ！――」

「あー、じゃあ諦める。傘も無いしこの天気だし、明日以降にでもするんだな」

この世の終わりとも言いたげな顔で主張する彼女に対し、やれやれとも言いたげに窓の外を見ている西宮。

やる気の見られないその彼の腕を、しかし早苗はガシリと掴む。

「……おい？」

「西宮、駄目なんです。私、もう耐えられません。我慢できないんです」

胡乱げに早苗を見る西宮に対し、彼女は西宮を掴んでいない方の手を胸の前で握り、切なげに頬を赤らめ主張する。

これがベッドの上などであればR-18突入へのフラグとなる台詞なのだろうが、ここは家電量販店であり、尚且つ言っている当人が極上の天然である東風谷早苗その人だ。

間違つても、そのよつに色氣のある話ではない。

その証拠に彼女は良く育つた胸の前で手を握つたまま、西宮へと熱く主張する。

「私は
私の舌と胃はもうクレープを食べるモードに入つて

「俺が知るか！？ そんなに食いたければ向かいのコンビニでクレ

「ハイ、でも買つて食え！」

いした。我慢できませんでした。自分のケーブルを食べ、西園のケーブルを一口頂く所までが今日の私の予定であり、その履行は絶対です。

「ンな俗な神託があるかボケ東風谷！？」

そして真っ当な突っ込みは当然の如く聞きいれられず。

「軍神、建御名方命を祀る風祝、東風谷早苗の名に於いて！ 突撃です、西宮！ クレープ屋の閉店まであと30分！ うおおおお

西宮の手を引いたまま家電量販店を飛び出した東風谷早苗は、そのまま雨の中を突破してクレープ屋へと走り出す。

猛々しく突撃を吼えるその姿はまさに軍神に仕える風祝として相応しい物だつたが、年頃の女子高生としてはちょっと不適切なくらい雄々しかつた。

そして結局びしょ濡れになりながらも目的地にたどり着き、自らが注文した全部盛りのクレープを食べ、西富の分のクレープも美味しそうに一口頂戴した早苗は翌日

#

「……せ、折角学校が休みなのに、こんな、こんな……！」

「雨の中走り回った上に、殊更冷たいアイス入りのクレープなんか食つからせうなるんだよ。ほら、口開ける。お粥出来たぞ」

学校が休校となり、多くの学生が喜ぶ中。

東風谷早苗は前日のヤンチャっぷりが祟り、見事に風邪を引いて寝込んでいた。

熱を出して布団の中で寝込んでいる早苗の横で、西富は呆れ顔で世話を焼き、それを見た神々が人知れず苦笑をする。

「これもまた、外の世界でも守矢神社の日常の一部なのだつた。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1133u/>

東方西風遊戯

2011年9月26日18時39分発行